

京都府遺跡調査報告集

第175冊

1. 月出遺跡
2. 東光寺跡
3. 伏見城跡
4. 北大塚古墳・大塚遺跡
5. 金堀遺跡
6. 天神山古墳群第2次

2018

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



北大塚古墳・大塚遺跡調査地全景（東から）



(1) 2トレンチ 1号墳全景(南から)



(2) 2トレンチ 1号墳墳丘上出土土器

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、37年間にわたって京都府内の各地域に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

これらの調査成果を広く府民の皆様方にお伝えし、我々の祖先の歩んできた跡を多くの方々に知っていただくよう努めることが責務だと考えております。

本書は、平成28・29年度に国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所・京都国道事務所、京都府健康福祉部、京都府教育委員会、京都府建設交通部の依頼をそれぞれ受けて実施した、東光寺跡、天神山古墳群、金堀遺跡、伏見城跡、北大塚古墳、月出遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また、地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会、京都市文化市民局、井手町教育委員会、木津川市教育委員会、精華町教育委員会、京丹後市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

- (1)平成29年度月出遺跡
- (2)平成28年度東光寺跡
- (3)平成28年度伏見城跡
- (4)平成28・29年度北大塚古墳・大塚遺跡
- (5)平成29年度金堀遺跡
- (6)平成28年度天神山古墳第2次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1	月出遺跡	京都府京丹後市網野町浜詰月出	平成29年10月17日～12月22日	京都府丹後土木事務所	福山博章
2	東光寺跡	京都府舞鶴市宇京田小字東光寺766他	平成28年5月26日～11月2日	国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所	石井清司
3	伏見城跡	京都府京都市伏見区村上町395他	平成28年9月27日～12月15日	京都府健康福祉部	中川和哉・岡崎研一
4	北大塚古墳・大塚遺跡	京都府綴喜郡井手町井手大塚他	平成28年7月21日～10月28日 平成29年1月5日～1月31日 平成29年4月5日～5月30日	京都府教育委員会	竹村亮仁
5	金堀遺跡	京都府相楽郡精華町山田金堀	平成29年4月20日～5月18日	国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所	中川和哉・竹原一彦
6	天神山古墳第2次	京都府木津川市木津天神山	平成28年8月1日～9月9日	国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所	福山博章・藤井陽輔

3. 上記6事業6遺跡は本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。

4. 本書で使用している座標は、世界測地系国土地院第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。土層断面図の粒径区分は粒度標準を用いた。

6. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係主査田中 彰が行った。

本文目次

1. 平成29年度月出遺跡発掘調査報告	1
2. 平成28年度東光寺跡発掘調査報告	7
3. 平成28年度伏見城跡発掘調査報告	57
4. 平成28・29年度北大塚古墳・大塚遺跡発掘調査報告	79
5. 平成29年度金堀遺跡発掘調査報告	133
6. 平成28年度天神山古墳群第2次発掘調査報告	137

挿図目次

1. 月出遺跡

第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図	2
第2図 調査トレンチ配置図	2
第3図 調査トレンチ土層断面柱状図	3
第4図 調査トレンチ平面図	4

2. 東光寺跡

第1図 調査地及び主要遺跡分布図	9
第2図 トレンチ配置図と調査前の地形図	12
第3図 トレンチ配置図と地区割図	13
第4図 1・2トレンチ平面図	14
第5図 1・2トレンチ西壁・南壁土層断面図	15
第6図 3トレンチ平面図	16
第7図 平坦面B・C 平・断面図	18
第8図 平坦面C・D 平・断面図	19
第9図 平坦面E 平・断面図	20
第10図 平坦面C 平・断面図	21
第11図 平坦面C・D 平・断面図	22
第12図 平坦面C SX03・SD05平面及び土層断面図	23
第13図 平坦面C SX04ほか平面図	24
第14図 平坦面C 東西土層(SK29・SK30)土層断面図	25
第15図 平坦面C 東壁土層(SX04・SD35)土層断面図	26

第16図	平坦面C	整地層東西土層断面図	26
第17図	平坦面C	整地層除去後の平面図	27
第18図	平坦面C	東壁土層断面図	28
第19図	平坦面C	S D05南北土層断面図	29
第20図	平坦面D	裾部の柱穴群及び市道北拡張区平面図	30
第21図	3トレンチ北壁及び平坦面D裾部東壁土層断面図	31	
第22図	平坦面E	平面図及び東壁土層断面図	32
第23図	平坦面E	東拡張区南壁土層断面図	33
第24図	平坦面E	下層遺構平面図及び東西土層断面図	34
第25図	市道南拡張区	平面図及び北壁土層断面図	36
第26図	平坦面C東拡張区	東壁土層断面図	37
第27図	東光寺古墳	石室上層の石材散布状況及び床面上層の土層断面図	38
第28図	東光寺古墳	床面上層の土層断面図	39
第29図	東光寺古墳墳丘及び東壁土層断面図	40	
第30図	東光寺古墳	石室及び石室内遺物出土状況図	42
第31図	東光寺跡	出土土器実測図	46
第32図	東光寺跡	出土五輪塔実測図	48
第33図	東光寺古墳	出土遺物実測図	50

3. 伏見城跡

第1図	調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図	58
第2図	第4期伏見城(徳川期木幡山城)城下町推定復原図	59
第3図	第1トレンチ南壁断面図	60
第4図	第1トレンチ平面図・杭列断面図	61
第5図	第2トレンチ東壁断面図	63
第6図	第2トレンチ平面図	64
第7図	出土遺物実測図(1)	65
第8図	出土遺物実測図(2)	66
第9図	出土木製品赤外線写真と積文(1)	68
第10図	出土木製品赤外線写真と積文(2)	69
第11図	出土木製品赤外線写真と積文(3)	70
第12図	出土木製品実測図	71
第13図	役職在籍年及び氏名	73
第14図	調査地周辺地図及び絵図	74
第15図	岡山藩伏見屋敷推定復原図	75

4. 北大塚古墳・大塚遺跡

第1図	周辺遺跡分布図	81
第2図	北大塚古墳・大塚遺跡調査トレンチ配置図	83
第3図	1トレンチ実測図	86
第4図	2トレンチ実測図	87
第5図	2トレンチ土層図	88
第6図	3・4・15トレンチ土層図	89
第7図	16トレンチ実測図	90
第8図	17トレンチ実測図	91
第9図	大塚遺跡調査トレンチ配置図	92
第10図	5・6トレンチ土層図	93
第11図	7～12トレンチ土層図	95
第12図	13・14トレンチ土層図	96
第13図	平成28年度調査 出土遺物実測図	97
第14図	北大塚古墳群 古墳配置図	98
第15図	北大塚1号墳 平面実測図	99
第16図	北大塚1号墳 墳丘・石室実測図	100
第17図	北大塚1号墳 墳丘・周溝土層実測図	101
第18図	北大塚1号墳 石室実測図	102
第19図	北大塚1号墳 石室閉塞石・左側壁実測図	103
第20図	北大塚1号墳 出土遺物実測図1	104
第21図	北大塚1号墳 出土遺物実測図2	105
第22図	北大塚1号墳 出土遺物実測図3	106
第23図	北大塚1号墳 出土遺物実測図4	107
第24図	北大塚2号墳 平面実測図	108
第25図	北大塚2号墳 墳丘・石室実測図	109
第26図	北大塚2号墳 墳丘土層図	110
第27図	北大塚2号墳 石室実測図	111
第28図	北大塚2号墳 遺物出土状況図	112
第29図	北大塚2号墳 石材採取及び石室再利用	113
第30図	北大塚2号墳 出土遺物実測図1	114
第31図	北大塚2号墳 出土遺物実測図2	115
第32図	北大塚3・4号墳 配置図	116
第33図	北大塚3号墳 石室実測図	117
第34図	北大塚3号墳 出土遺物実測図	117

第35図	北大塚4号墳 平面実測図	118
第36図	北大塚4号墳 石室実測図	119
第37図	北大塚4号墳 出土遺物実測図	120
第38図	18~22トレンチ配置図	120
第39図	18~22トレンチ土層実測図	121
第40図	北大塚古墳群石室比較図	123
第41図	平山古墳石室実測図	124
第42図	平山古墳・北大塚古墳出土須恵器	125

5. 金堀遺跡

第1図	調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図	134
第2図	調査トレンチ配置図	134
第3図	金堀遺跡トレンチ平面図及び土層断面図	135

6. 天神山古墳群第2次

第1図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図	138
第2図	天神山古墳群第2次調査 トレンチ配置図	139
第3図	1・2トレンチ平面図と1トレンチ土層柱状図	140
第4図	3トレンチ平面図と土層柱状図	141
第5図	4トレンチ平面図と土層柱状図	142
第6図	5トレンチ平面図と土層柱状図	143
第7図	6トレンチ平面図と土層柱状図	144
第8図	出土遺物実測図	145

付 表 目 次

2. 東光寺跡

付表1	柱穴群規模一覧	31
付表2	東光寺跡・東光寺古墳 土器観察表	54
付表3	東光寺跡 石造物(五輪塔)観察表	56
付表4	東光寺古墳 鉄器観察表	56

3. 伏見城跡

付表1	出土遺物観察表	72
-----	---------	----

4. 北大塚古墳・大塚遺跡

付表1	北大塚古墳群 番号対照表	84
付表2	北大塚古墳群石室規模等一覧	122
付表3	北大塚古墳・大塚遺跡 土器一覧	128
付表4	北大塚古墳・大塚遺跡 鉄器一覧	132
付表5	北大塚古墳・大塚遺跡 耳環一覧	132
付表6	北大塚古墳・大塚遺跡 石器一覧	132

図版目次

巻頭図版1	北大塚古墳・大塚遺跡 北大塚古墳・大塚遺跡調査地全景(東から)
巻頭図版2	北大塚古墳・大塚遺跡 (1) 2トレンチ 1号墳全景(南から) (2) 2トレンチ 1号墳墳丘上出土土器

1. 月出遺跡

図版第1	(1) 調査区遠景(南西から) (2) 調査区遠景(南東から)
図版第2	(1) 1トレンチ全景(東から) (2) 1トレンチ全景(北西から) (3) 1トレンチ西壁(東から)
図版第3	(1) 2トレンチ全景(東から) (2) 2トレンチ全景(南西から) (3) 2トレンチ西壁(東から)
図版第4	(1) 3トレンチ全景(西から) (2) 3トレンチ全景(東から) (3) 3トレンチ東壁(西から)
図版第5	(1) 4トレンチ全景(北西から) (2) 4トレンチ全景(南から) (3) 4トレンチ西壁(東から)
図版第6	(1) 5トレンチ全景(北西から) (2) 5トレンチ全景(南から) (3) 5トレンチ西壁(東から)

2. 東光寺跡

- 図版第1 (1)調査地遠景(南から)
(2)調査地遠景(北から)
(3)3トレンチ 完掘状況(西から)
- 図版第2 (1)3トレンチ 完掘状況遠景(南から)
(2)3トレンチ 完掘状況(北西から)
- 図版第3 (1)1トレンチ 重機掘削状況(南から)
(2)1トレンチ 完掘状況(南から)
(3)1トレンチ 西壁土層堆積状況(東から)
- 図版第4 (1)2トレンチ 完掘状況(北から)
(2)2トレンチ 西壁土層堆積状況(東から)
(3)3トレンチ 市道北拡張区完掘状況(西から)
- 図版第5 (1)3トレンチ 南拡張区完掘状況(西から)
(2)3トレンチ 西拡張区北壁土層堆積状況(南から)
(3)市道表土での五輪塔出土状況(西から)
- 図版第6 (1)3トレンチ平坦面C 東光寺跡遺構面の完掘状況(西から)
(2)3トレンチ平坦面C 整地層除去後の完掘状況(西から)
(3)3トレンチ平坦面C 整地層下の東西方向堆積状況(北から)
- 図版第7 (1)3トレンチ平坦面C S X03検出状況(南東から)
(2)3トレンチ平坦面C S X03完掘状況(西から)
(3)3トレンチ平坦面C S X03・S D 05 完掘状況(北から)
- 図版第8 (1)3トレンチ平坦面C S X03・S D05完掘状況(南西から)
(2)3トレンチ平坦面C S D05完掘状況(南東から)
(3)3トレンチ平坦面C S D05・5 J 区東壁土層堆積状況(西から)
- 図版第9 (1)3トレンチ平坦面C S X04崩落石検出状況(南西から)
(2)3トレンチ平坦面C S X04崩落石検出状況(北西から)
(3)3トレンチ平坦面C S X04地輪出土状況(北東から)
- 図版第10 (1)3トレンチ平坦面D 柱穴群検出状況(北西から)
(2)3トレンチ平坦面D 柱穴群完掘状況(西から)
(3)3トレンチ平坦面C・D 裾部完掘状況(南西から)
- 図版第11 (1)3トレンチ平坦面E 東光寺跡面完掘状況(南西から)
(2)3トレンチ平坦面E 下層遺構完掘状況(西から)
(3)3トレンチ平坦面E S X02遺物出土状況(西から)
- 図版第12 (1)東光寺古墳 石室全景(西から)
(2)東光寺古墳 石室全景(南から)

- 図版第13 (1) 東光寺古墳 石室上面検出状況(南から)
 (2) 東光寺古墳 石室床面上層の東西畔堆積状況(北から)
 (3) 東光寺古墳 石室内床面上層の崩落石の状況(西から)
- 図版第14 (1) 東光寺古墳 崩落石の除去後の状況(西から)
 (2) 東光寺古墳 崩落石の除去後の状況(北から)
 (3) 東光寺古墳 左裾部の掘削状況(北から)
- 図版第15 (1) 東光寺古墳 北半部東壁の土層堆積状況(西から)
 (2) 東光寺古墳 南半部東壁の土層堆積状況(西から)
 (3) 東光寺古墳 奥壁の石材及び掘形断面(西から)
- 図版第16 (1) 東光寺古墳 石室床面直上の東西畦(南から)
 (2) 東光寺古墳 石室床面直上の南北畦北半部(西から)
 (3) 東光寺古墳 石室床面直上の南北畦南半部(西から)
- 図版第17 (1) 東光寺古墳 玄室内奥壁(A群)出土状況(南から)
 (2) 東光寺古墳 石室内裾部(B群)遺物出土状況(北西から)
 (3) 東光寺古墳 石室内袖部(B群)遺物出土状況(西から)
- 図版第18 (1) 東光寺古墳 羨道部崩落石除去後の状況(西から)
 (2) 東光寺古墳 羨道部床面の排水溝(南から)
 (3) 東光寺古墳 石室東側の土層堆積状況(南から)
- 図版第19 (1) 東光寺古墳 玄室床面下面の状況(南から)
 (2) 東光寺古墳 玄室床面下面の状況(西から)
 (3) 東光寺古墳 羨道部床面下面の状況(北西から)
- 図版第20 (1) 東光寺古墳 石室養生の作業状況(西から)
 (2) 東光寺古墳 石室養生の状況(南西から)
 (3) 東光寺古墳 石室養生の状況(北西から)
- 図版第21 出土遺物 1
 図版第22 出土遺物 2
 図版第23 出土遺物 3
 図版第24 出土遺物 4

3. 伏見城跡

- 図版第 1 (1) 第 1 トレンチ全景(南東から)
 (2) 第 1 トレンチ西部近景(北東から)
- 図版第 2 (1) 第 1 トレンチ近景(西から)
 (2) 第 1 トレンチ全景(東から)
- 図版第 3 (1) 第 1 トレンチ西部近景(西から)

- (2) 第1トレンチ杭列近景(西から)
- 図版第4 (1) 第1トレンチ杭列近景(北から)
(2) 第1トレンチ杭列断ち割り断面(東から)
- 図版第5 (1) 第1トレンチ杭列断ち割り断面(東から)
(2) 第1トレンチ遺物出土状況(南から)
- 図版第6 (1) 第1トレンチ南壁断面(北東から)
(2) 第1トレンチ南壁断面(北東から)
- 図版第7 (1) 第2トレンチ全景(北から)
(2) 第2トレンチ全景(南から)
- 図版第8 (1) 第2トレンチ東壁断面(西から)
(2) 第2トレンチ東壁断面(南西から)
- 図版第9 (1) 土坑4遺物出土状況(南から)
(2) 第2トレンチ断ち割り状況(西から)
- 図版第10 出土遺物

4. 北大塚古墳・大塚遺跡

- 図版第1 (1) 1トレンチ全景1(南から)
(2) 1トレンチ全景2(北から)
(3) 1トレンチ東側拡張前全景(西から)
- 図版第2 (1) 1トレンチ東側拡張後全景(北西から)
(2) 1トレンチ東側拡張区包含層断面(北から)
(3) 1トレンチ東側拡張区遺物出土状況(北東から)
- 図版第3 (1) 2トレンチ全景(北西から)
(2) 2トレンチ西部全景(北西から)
(3) 2トレンチ南部全景(西から)
- 図版第4 (1) 2トレンチ北部全景(南から)
(2) 2トレンチ東部全景(東から)
(3) 2トレンチSX01検出状況(北東から)
- 図版第5 (1) 2トレンチSX01範囲確認状況(北西から)
(2) 2トレンチSX01掘削状況(北東から)
(3) 3トレンチ全景(南から)
- 図版第6 (1) 4トレンチ全景(南から)
(2) 5トレンチ全景(南西から)
(3) 6トレンチ全景(南から)
- 図版第7 (1) 7トレンチ全景(西から)

- (2) 8 トレンチ全景(東から)
 (3) 9 トレンチ全景(東から)
- 図版第 8 (1) 9 トレンチ遺物出土状況遠景(北西から)
 (2) 9 トレンチ遺物出土状況近景(北から)
 (3) 10 トレンチ全景(西から)
- 図版第 9 (1) 11 トレンチ全景(東から)
 (2) 12 トレンチ全景(西から)
 (3) 13 トレンチ全景(西から)
- 図版第 10 (1) 14 トレンチ全景(南から)
 (2) 15 トレンチ全景(南西から)
 (3) 15 トレンチ全景(南東から)
- 図版第 11 (1) 2 トレンチ 1 号墳全景(南から)
 (2) 2 トレンチ 1 号墳石室全景(南から)
- 図版第 12 (1) 2 トレンチ 1 号墳墳丘残存状況(北西から)
 (2) 2 トレンチ 1 号墳全景(南から)
- 図版第 13 (1) 2 トレンチ 1 号墳検出状況(南から)
 (2) 2 トレンチ 1 号墳羨道縦断面(南東から)
 (3) 2 トレンチ 2 号墳玄門部横断面(南から)
- 図版第 14 (1) 2 トレンチ 1 号墳羨道完掘状況(南から)
 (2) 2 トレンチ 1 号墳閉塞石検出状況(南東から)
 (3) 2 トレンチ 1 号墳羨道側壁石材残存状況(北東から)
- 図版第 15 (1) 2 トレンチ 1 号墳石室内横断面(北から)
 (2) 2 トレンチ 1 号墳石室全景(南から)
 (3) 2 トレンチ 1 号墳排水溝完掘全景(南東から)
- 図版第 16 (1) 2 トレンチ 1 号墳石材据付痕完掘全景(北から)
 (2) 2 トレンチ 1 号墳墳丘断面(南西から)
 (3) 2 トレンチ 1 号墳周溝断面(南東から)
- 図版第 17 (1) 2 トレンチ 1 号墳石材投棄状況(南西から)
 (2) 2 トレンチ 1 号墳遺物出土状況(北東から)
 (3) 2 トレンチ S X31 遺物出土状況(南から)
- 図版第 18 (1) 16 トレンチ 2 号墳石室全景(南から)
 (2) 16 トレンチ 2 号墳墳丘断ち割り全景(南から)
- 図版第 19 (1) 16 トレンチ 2 号墳石室内断ち割り全景(南から)
 (2) 16 トレンチ 2 号墳石材設置状況全景(南西から)
- 図版第 20 (1) 16 トレンチ 2 号墳検出状況全景(南から)

- (2) 16トレンチ 2号墳石室石材採取状況全景(南から)
 (3) 16トレンチ 2号墳石室内中世再利用面検出状況(南から)
- 図版第21 (1) 16トレンチ 2号墳石室石材採取痕横断面(南西から)
 (2) 16トレンチ 2号墳石室石材採取痕北半横断面(東から)
 (3) 16トレンチ 2号墳石室石材採取痕南半横断面(西から)
- 図版第22 (1) 16トレンチ 2号墳石室内中世再利用面横断面(北から)
 (2) 16トレンチ 2号墳石室内中世再利用面縦断面全景(西から)
 (3) 16トレンチ 2号墳石室内中世再利用面縦断面北半検出状況(南東から)
- 図版第23 (1) 16トレンチ 2号墳石室内中世再利用面礫敷状況(南から)
 (2) 16トレンチ 石材採取坑 S K51 石材検出状況(南から)
 (3) 16トレンチ 2号墳石室内遺物出土状況遠景(南西から)
- 図版第24 (1) 16トレンチ 2号墳石室内遺物出土状況近景(西から)
 (2) 16トレンチ 2号墳石室完掘状況(南から)
 (3) 16トレンチ 2号墳石室石材据付穴完掘状況(南から)
- 図版第25 (1) 16トレンチ 2号墳石室北側墳丘断面(北西から)
 (2) 16トレンチ 2号墳石室西側墳丘断面(南から)
 (3) 16トレンチ 2号墳石室東側墳丘断面(南東から)
- 図版第26 (1) 16トレンチ 2号墳周溝 S D05断面(東から)
 (2) 16トレンチ 2号墳周溝 S D05断面(東から)
 (3) 16トレンチ 2号墳石材除去状況全景(南から)
- 図版第27 (1) 16トレンチ 2号墳奥壁側壁組合せ状況(南から)
 (2) 16トレンチ 2号墳奥壁右側壁組合せ状況(南東から)
 (3) 16トレンチ 2号墳奥壁左側壁組合せ状況(北東から)
- 図版第28 (1) 16トレンチ 2号墳右側壁組合せ状況(西から)
 (2) 16トレンチ 2号墳奥壁背面状況(北から)
 (3) 16トレンチ 2号墳右側壁組合せ背面状況(東から)
- 図版第29 (1) 17トレンチ 3号墳・4号墳立地状況(南東から)
 (2) 17トレンチ 3号墳石室全景(南から)
- 図版第30 (1) 17トレンチ 4号墳全景(南東から)
 (2) 17トレンチ 4号墳全景(南東から)
- 図版第31 (1) 17トレンチ 4号墳断ち割り状況全景(南東から)
 (2) 17トレンチ 4号墳完掘全景(南東から)
- 図版第32 (1) 17トレンチ 着手前状況(南西から)
 (2) 17トレンチ 3号墳検出状況(南から)
 (3) 17トレンチ 3号墳掘削状況(南から)

- 図版第33 (1)17トレンチ3号墳石室S X01石材残存状況(南東から)
 (2)17トレンチ3号墳石室S X01石材据付穴検出状況(南から)
 (3)17トレンチ3号墳遺物出土状況(西から)
- 図版第34 (1)17トレンチ3号墳石室内攪乱S X01断面(西から)
 (2)17トレンチ4号墳調査状況(南東から)
 (3)17トレンチ4号墳石室内セクション設置状況(南東から)
- 図版第35 (1)17トレンチ4号墳石室S X02石室内南北セクション断面(東から)
 (2)17トレンチ4号墳石室S X02石室内完掘状況(南から)
 (3)17トレンチ4号墳石室S X02石室内完掘状況(北西から)
- 図版第36 (1)17トレンチ4号墳周溝S D03断面B-B'(東から)
 (2)17トレンチ4号墳周溝S D03断面C-C'(東から)
 (3)17トレンチ4号墳周溝S D03断面D-D'(西から)
- 図版第37 (1)17トレンチ4号墳遺物出土状況(北東から)
 (2)17トレンチ4号墳右側壁据付穴内整地土検出状況(南東から)
 (3)17トレンチ4号墳完掘状況(南東から)
- 図版第38 (1)18トレンチ全景(南西から)
 (2)19トレンチ全景(東から)
 (3)20トレンチ全景(東から)
- 図版第39 (1)21トレンチ全景(東から)
 (2)22トレンチ全景(東から)
 (3)現地説明会風景
- 図版第40 出土遺物 1
- 図版第41 出土遺物 2
- 図版第42 出土遺物 3
- 図版第43 出土遺物 4
- 図版第44 (1)出土遺物 5
 (2)出土遺物 6

5. 全堀遺跡

- 図版第1 (1)調査前遠景(南から)
 (2)1トレンチ全景(南西から)
 (3)1トレンチ土層断面(南から)
- 図版第2 (1)1トレンチ深掘状況(東から)
 (2)2トレンチ全景(西から)
 (3)2トレンチ土層断面(南西から)

6. 天神山古墳群第2次

- 図版第1 (1) 1トレンチ全景(北から)
(2) 1トレンチ全景(西から)
(3) 1トレンチ全景(北西から)
- 図版第2 (1) 2トレンチ全景(北から)
(2) 2トレンチ全景(西から)
(3) 2トレンチ全景(南から)
- 図版第3 (1) 3トレンチ全景(南から)
(2) 3トレンチ全景(南から)
(3) 3トレンチ東壁断面(西から)
- 図版第4 (1) 4トレンチ全景(東から)
(2) 4トレンチ全景(西から)
(3) 4トレンチ北壁断面(南から)
- 図版第5 (1) 5トレンチ全景(北から)
(2) 5トレンチ全景(南から)
(3) 5トレンチ西壁断面(東から)
- 図版第6 (1) 6トレンチ全景(北から)
(2) 6トレンチ全景(東から)
(3) 出土遺物

1. 平成29年度月出遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は国道178号防災・安全交付金業務委託に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施したものである。

月出遺跡は京丹後市網野町浜詰月出に所在する。遺跡範囲内に石造物の散布が確認されており、中世以降の墳墓と考えられている。過去に調査例はなく、本調査が初めての調査となる。今回の調査地は遺跡範囲の北側に位置する。

現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会をはじめ、各関係機関、地元自治会、近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。また、現地調査については増田富士雄氏、松田順一郎氏よりご指導、ご助言を受けた。記して感謝したい。

なお、調査にかかる経費は全額、京都府丹後土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長	中川和哉
	同 主 任	福山博章
調 査 場 所	京丹後市網野町浜詰月出	
調 査 期 間	平成29年10月17日～平成29年12月22日	
調 査 面 積	500㎡	

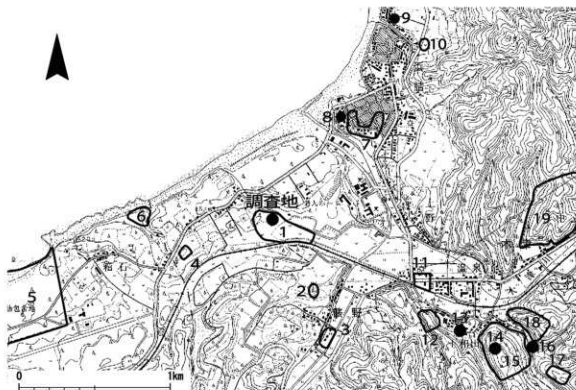
2. 位置と環境

月出遺跡は京都府京丹後市網野町に位置する。京丹後市は京都府北部に位置する丹後半島の大部分を占めており、平成16年4月に峰山町・大宮町・網野町・久美浜町・丹後町・弥栄町の6町が合併して誕生した。旧網野町は日本海に面した丹後半島西部に位置しており、山間部が大部分を占めるが、東部の福田川と西部の木津川により沖積地が形成される。これらの河川が形成する沖積地の海岸部には砂丘があり、木津川の河口付近から久美浜湾にかけて大規模な砂丘が認められ、月出遺跡も砂丘上に立地している。

調査地周辺では木津川流域の沖積地と山間部、海岸部の砂丘地帯に主に遺跡が分布している。

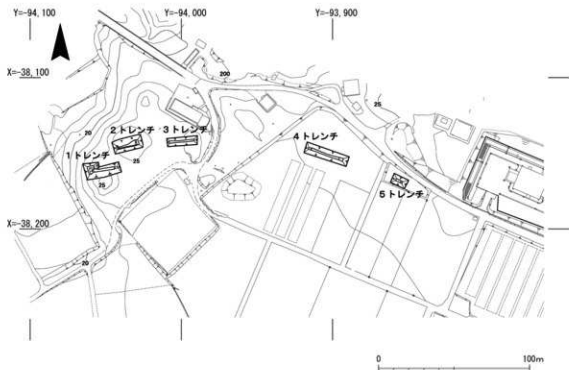
浜詰遺跡は木津川河口部左岸の砂丘上に位置する縄文時代の集落遺跡である。方形の竪穴建物2基、貝塚が検出され、縄文時代前期から後期の土器、石鏃、石匙などの石器、貝類、哺乳類の骨が出土している。

松ヶ崎遺跡は木津川の沖積地に位置する縄文から奈良時代の遺跡である。縄文時代では石囲い

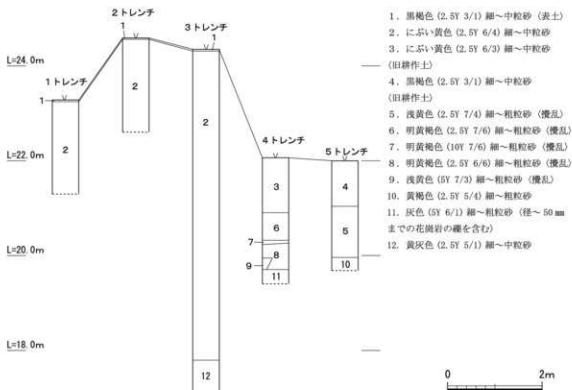


第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000 久美浜)

1. 月出遺跡 2. 丹ノ谷古墳群 3. 依野廃寺 4. 柴古遺跡 5. 大良古墳群
 6. 両石浜遺跡 7. 浜詰経塚 8. 浜詰遺跡 9. はやし古墳 10. 浜詰古墳群
 11. 松ヶ崎遺跡 12. 大森城跡 13. 下和田古墳 14. 女布谷西古墳 15. 下和田A城跡
 16. 売布神社経塚 17. 女布谷古墳群 18. 下和田B城跡 19. 中館城跡



第2図 調査トレンチ配置図(1/2,500)



第3図 調査トレンチ土層断面柱状図(1/80)

郊が検出されている。縄文時代前期から後期の土器、魚類の骨、堅果類が出土している。弥生時代では前期から中期の溝が検出されており、土器や石器が出土している。古墳時代では前期の井戸が検出されており、桶形容器を転用した井戸枠を使用していた。奈良時代では護岸施設を有する流路が検出されている。

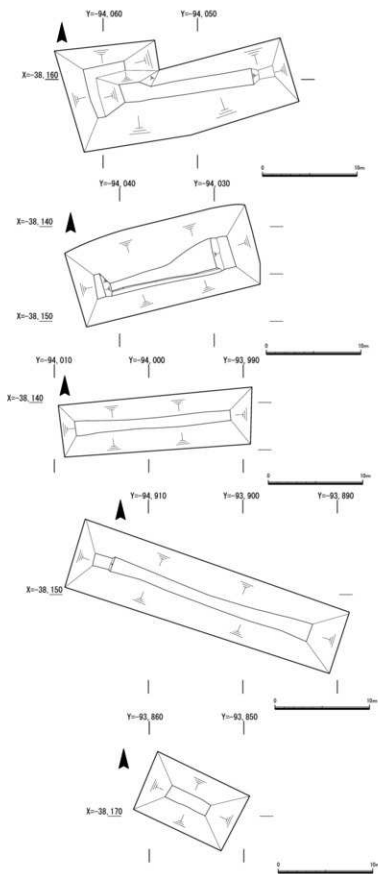
国史跡両石浜遺跡は海岸部の砂丘上に位置する。両石浜遺跡は縄文時代から室町時代にかけての遺物が採集されており、縄文時代後期の土器、弥生時代前期から中期の土器の他に、鉄鍬、銅鍬、貨泉が採集されており、大陸との交流が考えられる遺物として注目されている。その他、平安時代の皇朝十二銭が出土しており、港湾関係の公的施設の存在が推定されている。

依野廃寺は木津川支流の依野川左岸に位置する、7世紀末葉に創建された古代寺院である。塔心礎と考えられる礎石が発見されたほか、瓦の堆積や礎敷遺構が検出されている。鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦、墨書土器、建築部材が出土している。丹後地域における7世紀に創建された唯一の古代寺院である。

調査地南部の砂丘上には依野地藏群が位置する。依野地藏群は砂によって埋まった村があったという「おこう野」伝説にまつわる石造物群で、室町時代の板碑、一石五輪塔が所在しており、現在も地藏祭りが行われ、おこう野村の祖先供養を行っている。

3. 調査の概要

現地調査は平成29年10月17日より調査予定地の森林伐採作業を開始し、伐採作業終了後に重機による掘削と人力による掘削と遺構精査を行った。平成29年12月22日に各トレンチの埋め戻しを



第4図 調査トレンチ平面図(1/400)

完了し、資機材の撤収作業を行い現地の作業を終了した。

今回の調査は、月出遺跡の北側部分に当たる。路線工事の予定地内に5か所のトレンチを設定した。調査トレンチは西側の丘陵部に1トレンチから3トレンチ、東側の旧耕作地に4トレンチと5トレンチの5か所を設定し、総面積500㎡を調査した。

① 1トレンチ(第4図)

調査地西側の高まりに設定したL字形の調査区である。現地表面の標高は22.8mから25.3mで比高差は2.5mを測る。

表土直下よりにぶい黄色砂層(第3図2層)を検出した。砂層は細～中粒砂であり、微細な貝殻片が混じる。水平、斜め方向の1～3mmの薄い葉理の重なりが確認できるが、堆積環境の変化しない単層の砂層である。標高21.2mまで掘削したが、土層の堆積状況に変化はなく、遺構、遺物は認められなかった。

② 2トレンチ(第4図)

調査地西側の高まりに設定した調査区である。現地表面の標高は25.3mから23.3mで比高差は2.0mを測る。表土直下よりにぶい黄色砂層(第3図2層)を検出した。標高21.2mまで掘削したが、土層の堆積状況に変化はなく、遺構、遺物は認められなかった。

③ 3 トレンチ (第 4 図)

調査地西側の平坦面に設定した調査区である。現地表面の標高は24.5mから23.1mで比高差は1.4mを測る。表土直下よりふい黄色砂層(第3図2層)を検出した。調査区西側で重機による深掘りを行ったところ、標高17.8m付近で砂層の土色変化が認められた。2層の砂層は細粒砂から中粒砂であり、水平、斜め方向の薄い葉理の重なりが確認できるが、堆積環境に変化のない単層の砂層である。3層の上層との層理面付近は黒褐色を呈しており、植物の根跡、虫痕が確認できるため、地表面であったと考えられる。標高17.1m付近まで重機による掘削を行ったが、安全に作業可能な深さを越えたため、掘削を終了した。いずれの層位からも遺構、遺物は認められなかった。

④ 4 トレンチ (第 4 図)

調査地東側の旧耕作地である平坦地に設定した調査区である。現地表面の標高は22.0mから21.9mで比高差は0.1mを測る。

表土直下より旧耕作土であるふい黄色砂層(第3図3層)を検出した。標高20.9mから20.3mまでは明黄褐色砂層(第3図6層)が水平に堆積する。標高20.3mから標高20.7mでは西側から東側に向かう斜めの砂層の不整合な堆積(第3図7・8・9層)を検出した。

6層から下層の全層位には径0.5～12cm程度の凝灰岩などの亜円礫、亜角礫が混じるが、堆積構造を形成せずに不特定に混入している。また、斜めの不整合堆積層(8・9層)は礫の他に粗粒砂から細粒砂がブロック状や縞状に混じる。このような堆積状況から、一方向から営力を受けたと考えられ、連続する不整合の層位と凝灰岩が混じる層位は人為的な改変が考えられる。

調査区東側で重機による深掘りを行ったところ、標高19m付近で花崗岩の礫が混じる固く締まった灰色砂層(第3図11層)を検出した。灰色砂層は調査区西壁でも検出しており、調査地は西側から東側に向けて低くなり、緩やかに傾斜している堆積状況を呈する。灰色砂層は調査地西側の地山であると考えられる。標高17.5m付近まで重機による掘削を行ったが、安全に作業可能な深さを越えたため、掘削を終了した。いずれの層位からも遺構、遺物は認められなかった。

⑤ 5 トレンチ (第 4 図)

調査地東側の旧耕作地に位置するテラス状の高まりに設定した調査区である。現地表面の標高は21.7mから22.0mで比高差は0.3mを測る。

表土直下から標高21.9mまで旧耕作土(第3図4層)を検出した。また、旧耕作土の下層である浅黄色砂層(第3図5層)の最下層である標高19.8mより焼けた板状のプラスチック片と土嚢袋の破片を検出した。標高19.6mまで掘削したが、遺構、遺物は認められなかった。

現地表面で確認されたテラス状の高まりは旧耕作土による人工的な盛土であると判明し、さらに、標高19.8m付近までは現代の人為的な改変が加わっていることが判明した。

4. まとめ

今回の調査では全調査区において遺構、遺物を検出することはできなかった。調査地東側の1～3トレンチの調査の結果、調査地西側は近隣の海浜からの飛砂による風成堆積により形成された砂丘であることが判明した。砂丘の土層断面は細粒砂から中粒砂の薄い葉理の重なりが確認できるが、堆積環境に変化のない単層の砂層で、短期間に堆積し、形成された砂丘であると考えられる。

調査地西側の4、5トレンチでは人為的な改変を受けた堆積状況を確認した。調査地西側周辺は過去に大規模な土取りが行われており、今回の調査区で確認した堆積状況は土取り後の埋め戻しによるものであると考えられる。

いずれの調査地においても重機によって深掘りを行ったが、砂層の堆積を確認したのみで、遺構、遺物は検出できなかった。

また、今回の調査地は月出遺跡の北側に当たるが、月出遺跡の南側は丘陵から海岸へ向かう緩やかな傾斜地に砂丘が形成されている、丘陵付近や砂丘の下層に集落などの遺跡が展開している可能性が考えられる。

(福山博章)

参考文献

- 京丹後市史編さん委員会編「京丹後市史本文編 図説京丹後市の自然環境」京丹後市 2015
京丹後市史編さん委員会編「京丹後市史資料編 京丹後市の考古資料」京丹後市 2010
村田和弘・肥後弘幸「俵野廃寺第2・3次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告書集」第132冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
村田和弘「俵野廃寺発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第122冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
戸原和人「松ヶ崎遺跡第5次」(「京都府遺跡調査概報」第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
村田和弘「松ヶ崎遺跡発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
網野町誌編さん委員会編「網野町誌」下巻 網野町 1996
網野町誌編さん委員会編「網野町誌」上巻 網野町 1992
網野町教育委員会「浜詰遺跡発掘調査概要」網野町教育委員会 1993

2. 平成28年度東光寺跡発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、舞鶴市上安から京田を結ぶ西舞鶴道路(国道27号バイパス延長約4.9km)事業に伴う京都府舞鶴市京田小字東光寺に所在する東光寺跡の発掘調査である。発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。

東光寺跡は西舞鶴道路事業地内の南端にあたり、綾部市弥仙山を源とし西舞鶴市域を南北に流れる伊佐津川(二級河川)の右岸にあり、山間部を北流してきた伊佐津川が西舞鶴市街域で平野部へと広がるが、その山間部から平野部への境にある狹隘な位置に立地している。

当該遺跡は舞鶴市教育委員会による遺跡分布調査で遺物(須恵器)^(註1)が採取された地点であり、地名が東光寺とあることと地方の伝承から、東光寺跡として周知されていた。また、調査区の丘陵裾部には南北へ続く市道(七日市真倉線)がある。この市道は舞鶴城(田辺城)から京へ向かう「京街道」を踏襲しており、田辺藩主の参勤交代の道筋^(註2)として知られている。その名残りとして、今回の調査区の北方約100mには「田邊大橋ヨリ一里」と刻まれた石碑が残る一里塚がある。今回の発掘調査は、周知されている東光寺跡の実態を知るため、地名に残っているような寺院が存在するかどうか、寺院であった場合、その寺院の造営時期や廃絶の時期などを明らかにする目的で実施した。

発掘調査は、平成28年度西舞鶴道路事業に係る東光寺跡の発掘調査として平成28年4月1日に発掘調査の着手準備を行い、同年5月19日より丘陵部(3トレンチ)の樹木伐採を開始し、同年5月26日より丘陵部に先行して東光寺跡の西端の範囲確認のために休耕田部分に2か所のトレンチを設定して発掘調査を開始した。

現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会をはじめ、関係機関、地元自治会や住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、全額国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が負担した。

【調査体制等】

平成28年度東光寺跡現地調査

現地調査責任者	調査課長	森 正
現地調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 総括主査	石井清司
	同 調査員	藤井陽輔
	同 調査員	橋本 稔
調査場所	京都府舞鶴市京田小字東光寺766他	
調査期間	平成28年5月26日～平成28年11月2日	

調査面積 1,600㎡

平成29年度東光寺跡整理

整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼第2係長	中川和哉
	同	総括主査 石井清司
整理期間	平成29年7月3日～平成30年3月31日	

2. 位置と環境

1) 地理的環境

舞鶴湾は中央部に舵島・戸島を挟んで東港と西港がある。舞鶴湾の西港にはJR西舞鶴駅があり、東港にはJR東舞鶴駅がある。この舞鶴西港には戦国大名の長岡藤孝(のちの細川幽斎)の築城した田辺城跡を中心に城下町が広がり、現在も市の中心地の一つとして栄えている。

舞鶴市は東西約29.7km、南北約37.0kmの規模を持つ日本海に面した都市であり、舞鶴市史による地形区分では1:若狭湾岸地区(大浦半島北半と神崎)、2:舞鶴湾奥地区(東西舞鶴湾岸)、3:由良川沿岸地区(注3)に分けられており、さらに舞鶴湾奥地区は佐武ヶ岳・五老ヶ岳に連なる山稜を境に東舞鶴地域と西舞鶴地域に細分されている。

西舞鶴地域では弥仙山(標高664m)を水源とする伊佐津川が中央を貫くように南北方向に流れている。この伊佐津川は、万願寺・七日市付近で岸谷から東流する池内川と合流し舞鶴湾に注ぎ込む二級河川である。この伊佐津川と池内川に挟まれた標高140mから197mの南北方向に舌状に延びる丘陵の東側斜面の伊佐津川と池内川の合流地点から南方約1kmの地点に東光寺跡がある。

東光寺跡の面している谷は、現在も幹線道路の国道27号及びJR舞鶴線が通っている交通の要衝となっている。江戸時代には藩主の参勤交代の時、田辺城から京を経て江戸へ向かう京街道が整備されており、田辺御発城から真倉までは一里半で、その間の七日市から真倉の間に山崎渡り所があり、伊佐津川を渡って真倉村に入ったと想定(注4)されている。この山崎渡り所の位置は特定できないが、東光寺跡周辺に存在していた可能性が高く、今回の調査区の1・2トレンチでは湿地帯を思わせる地形を確認している。

2) 歴史的環境(第1図)

舞鶴市での旧石器時代の遺跡の様子は明らかでなく、縄文時代に入って若狭湾岸地区にある浦入遺跡(注5)で前期から後期にかけての集落遺跡を確認している。この浦入遺跡では土石流などの影響による二次堆積ではあるが、縄文時代早期から前期初頭の遺物が層位的に確認されたほか、隠岐産の黒曜石や北陸産の蛇紋岩製の玦状耳飾りなどが出土している。また海浜部では前期末から中期初頭の土器とともに外洋に出たと思われる長大な丸木舟が出土している。由良川沿岸地区には縄文時代早期から後・晩期の土器とともに堅穴建物が検出した志高遺跡(注6)、後期の堅穴建物に伴う炉跡を検出した桑飼下遺跡などがあるが、舞鶴湾奥地区での遺跡の詳細は明らかでない。

弥生時代には由良川沿岸地区の志高遺跡などで前期中葉の土器が出土しているほか、中期には



第1図 調査地及び主要遺跡分布図(国土地理院1/50,000 舞鶴)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|-------------|
| 1. 東光寺跡 | 7. 高野由里城跡 | 13. 菖蒲谷口遺跡 | 19. 上安久遺跡 | 25. 正勝神社古墳群 |
| 2. 山崎古墳群 | 8. 七日市遺跡 | 14. 切山古墳 | 20. 勾ヶ崎遺跡 | 26. 天狗岩古墳群 |
| 3. 京田丸山古墳群 | 9. 今田遺跡 | 15. 田辺城跡 | 21. 三角古墳群 | 27. 喜多古墳群 |
| 4. 京田城跡 | 10. 万願寺古墳群 | 16. 倉谷遺跡 | 22. 喜多家奥古墳 | 28. 建部山城跡 |
| 5. 女布城跡 | 11. 万願寺城跡 | 17. 福来遺跡 | 23. 愛宕山城跡 | 29. 上殿古墳 |
| 6. 女布遺跡 | 12. 今田城跡 | 18. 上安久古墳群 | 24. 愛宕山北城跡 | 30. 今田下村城跡 |

堅穴建物群や方形周溝墓、船着き場を思わせる堤状の遺構が検出されている。この志高遺跡では本州南部以南でしか生息しないタカラガイ(キロイダワラ)を納めた弥生時代中期の土器が採取されている。若狭湾岸地区では前述の浦入遺跡で後期の堅穴建物4基を検出している。舞鶴湾奥地区の中の東舞鶴地域では菖蒲谷口遺跡(13)(弥生時代後期)、女布遺跡(6)(弥生時代中～後期)、行永遺跡などの存在が知られているが、行永遺跡では弥生時代中期後半の堅穴建物1基を確認しているほかにはその詳細は明らかでない。集落遺跡のほかの特記する遺跡として海岸線に近く丘陵裾(大字下安久小字勾ヶ崎)で発見された勾ヶ崎遺跡の袈裟襷紋銅鐸2個がある。

このように縄文・弥生時代での舞鶴湾奥地区での実態は明らかでないが、古墳時代以降、舞鶴湾奥域が栄えたかのように多くの古墳が点在する。

舞鶴市域での古墳数は450基程度で、そのうち横穴式石室を埋葬施設とする円墳が120基程度確認されており、その半数近くが若狭湾岸地区にある。舞鶴湾奥地区では京都府北部最古の首長墓の一つと位置づけられている切山古墳(14)が伊佐津川の右岸にある。切山古墳は古墳時代前期に築造された円墳で、組合式石棺を埋葬施設とし、鉄剣2振、鉄鍬5点、銅鍬1点、鈍1点などの金属製品が出土しており、棺外から出土した土師器は4世紀末と考えられている。須恵器出現以前の古墳時代中期の古墳の様子は明らかでないが、須恵器出現以後の後期には伊佐津川の両岸に10基未満の小規模古墳群が点在し、東光寺跡の立地する丘陵の北先端には山崎古墳群(2)6基、伊佐津川の対岸には京田丸山古墳群(3)5基・正勝神社古墳群(25)2基がある。今回の調査でも新たに東光寺古墳が検出されており、埋没された古墳が周辺部に点在している可能性が高くなった。古墳時代の集落遺跡では舞鶴湾に近い倉谷遺跡(16)・福来遺跡(17)・土安久遺跡(19)がある。

飛鳥・奈良時代には倉谷遺跡で堅穴建物2棟、掘立柱建物6棟があり、官衛的性格をおびた遺構を検出している。平安時代には若狭湾岸にある浦入遺跡では「笠百私印」の押印をもつ製塩土器支脚とともに多量の製塩土器が出土した浦入遺跡が知られているが、舞鶴湾奥地区での平安時代倉谷遺跡で多量の緑釉陶器とともに掘立柱建物9棟を検出している。

中世以降、舞鶴市域に多くの山城が造られるが、舞鶴湾奥域でも伊佐津川の両岸に点在しており、今回の東光寺跡周辺でも伊佐津川の左岸に京田城跡(4)・女布城跡(5)が、池内川の右岸に万願寺城跡(11)・今田城跡(12)・今田下村城跡(30)などがある。東光寺跡が立地する丘陵でも山城の存在を確認するために踏査したが山城は確認することはできなかった。

舞鶴市域は、中世後期以降一色氏が治めていたが、天正6(1578)年以後、織田信長の命により丹後国が平定され、天正8(1580)年に長岡藤孝によって宮津城が築かれ、天正末(1590)年頃には田辺城(15)の築城が完工したといわれている。

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦い以後は京極氏がこの地を統治し、以後藩主が変わるものの田辺城が城下町として栄えていく。なお、江戸時代の参勤交代では田辺城から京へ行き、そのから江戸へ向かったとされているが、前述のように東光寺跡の北方には「田邊大橋ヨリ一里」と刻まれた石碑が存在する。

3. 調査の概要

1) 調査の経過と方法

(1) 調査の経過

東光寺跡の調査は、丘陵斜面から平地部にかわる地点を対象として、平成28年5月26日より発掘調査を開始した。現地調査では東光寺跡の西側への広がりを確認するとともに、東光寺跡以前の遺構・遺物の有無を確認するために田畑部分に2か所のトレンチを設定した(第2図)。

1トレンチでは地表下1.7mでオリブ灰色の植物遺体を含む堆積土(5層)を確認し、5層以下の堆積土層上面で順次精査を進めたが、顕著な遺構・遺物が認められなかった。最終の掘削深は地表下2.2mで暗緑灰色礫層を確認し、それより下層は安全面を考慮して掘削作業を終了し、図化作業及び写真撮影による記録作業を行った。1トレンチの北に設定した2トレンチでは地表下1.0mで地山土と思われるにぶい黄橙色の礫層(17層)を確認し、その上面での精査を進めたが1トレンチと同様、遺構・遺物ともなく、図化作業及び写真撮影による記録作業を行った。その作業終了の後、トレンチの埋め戻し作業を行い、丘陵部に設定した3トレンチの調査に着手した。

3トレンチでは樹木伐採終了後に調査前の地形測量を行い、後述する平坦面と後世の開墾によって大きく削られたところの確認作業を行った。その後、基準杭の設定を行い、6月6日に重機による表土掘削を開始し、東光寺跡の遺構・遺物を確認するための調査を実施した。

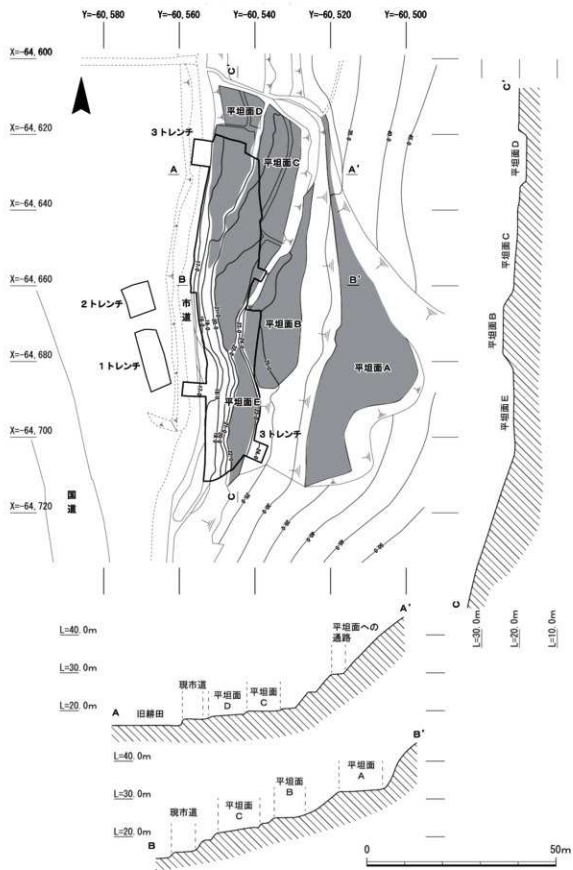
調査では小規模トレンチを設定して確認作業を進めたところ、中世包含層を確認するとともに古墳の石室と思われる石列(SX01)、中世遺物を含む石列(SX03)、古墳時代の土師器を含む堆積土、整地層と思われる硬く締まった堆積土を確認したことから、当初想定していた古代～中世の東光寺跡に関連した遺構のほか、古墳時代の古墳や集落跡の存在が想定できる状況であったため、関係機関と協議した上で、まずは古代から中世と思われる東光寺跡の全容を明らかにするための調査を実施し、その調査終了後に東光寺跡下層遺構の調査に着手することとなった。

東光寺跡に係る調査では、遺構・遺物が確認できたところを中心に発掘調査を行い、後述する平坦面Cで石列(SX03)と石列以前の整地層、整地層下層の暗渠状遺構(SD05)、平坦面下位の溝(SD35)とその上面の崩落石を含んだ堆積遺構(SX04)を確認し、平坦面Dでは柱穴群(SP07～29)を確認し、東光寺跡の様相が明らかとなった。

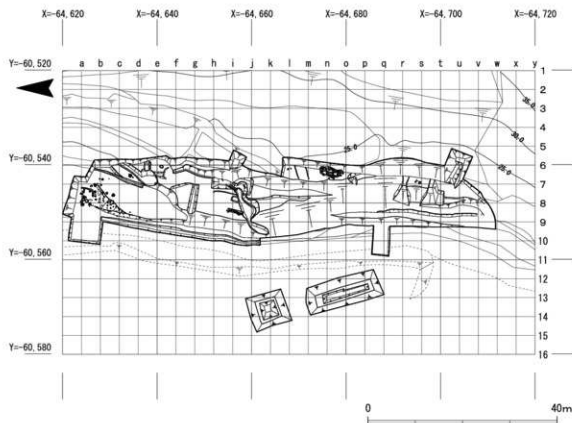
古代～中世段階の東光寺跡の状況がほぼ明らかになった平成28年8月25日に調査地全域を対象にして空中撮影及び図化作業を実施し、空中撮影後に東光寺跡下層遺構の調査に着手した。

東光寺跡下層遺構の調査としては平坦面Bで検出した古墳(東光寺古墳)の石室と墳丘、平坦面Eで確認した古墳時代中期の土器群の性格を明らかにするための調査を実施し、古墳の全容が明らかとなったことから平成28年10月8日に現地説明会を実施した。この現地説明会では地元京田区、七日市区を中心に83名の参加を得た。

現地調査終了後に平坦面Cで確認した整地層の時期を確認するため、順次整地層の掘削作業を行い、平坦面Eでの古墳時代中期の土器包含層の掘削作業、図化・写真撮影を行うとともに、関係機関の協議により東光寺古墳の石室の養生を行って平成28年11月2日に現地調査を終了した。



第2図 トレンチ配置図と調査前の地形図(1/1,000)



第3図 トレンチ配置図と地区割図(1/800)

(2) 調査の方法(第3図)

東光寺跡では水田部分で2か所のトレンチを、丘陵部では東西最大長22m、南北最大長87mの範囲を調査対象地として発掘調査を予定したため、調査対象地全体を覆う地区割を国土座標系(世界測地系)に基づいて設定した。すなわち地区を4m区画し、東西軸はX=-64,620より4m南をaラインとして西に向かって順次b・cラインとした。南北軸はY=-60,540を6ラインとして東に5・4・3・2・1とし、西へ7・8・9と表示し、地区名は南東隅の交点で表記した。

(3) 遺構番号について

検出した遺構は原則として通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付した。数字は2桁を基準に表記した。略記号は土坑：SK、溝：SD、柱穴：SP、不明土坑：SXで、SXと表記した中には調査段階の遺構略号を踏襲して古墳の石室、石列などを含んでいる。

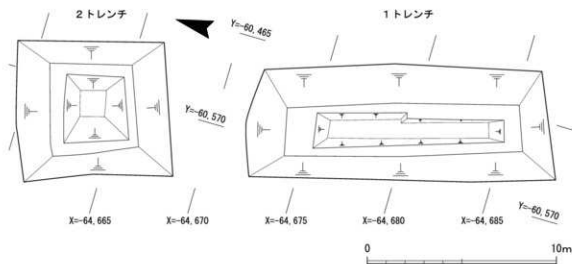
(4) 整理作業

平成28年11月2日の現地調査終了後、平成28・29年度の2か年にわたり、図面整理、遺物の洗浄・接合・接合、実測作業とともに、報告書作成のための整理作業を行った。

2) 検出遺構

(1) 1トレンチ(第4・5図)

1トレンチは2トレンチと同様、谷底平地の田畑部を対象として発掘調査を行ったもので、東西60m、南北160m、調査面積96㎡の東西トレンチである。調査前の地表面の標高は15.7mで、



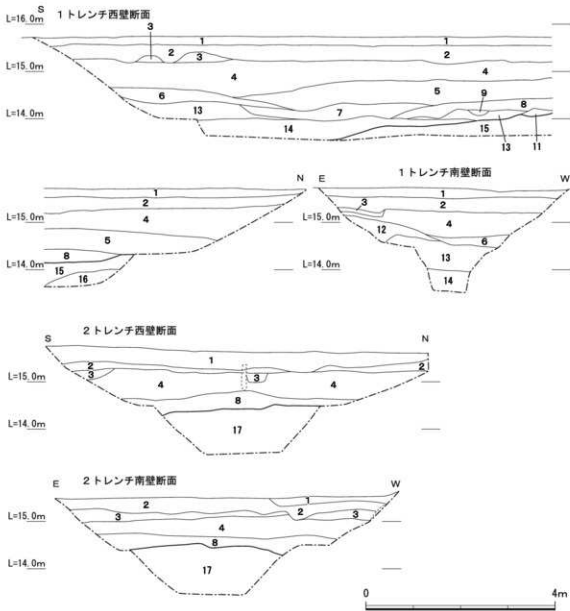
第4図 1・2トレンチ平面図(1/200)

トレンチ底部の標高は13.6mまでの深さ約2mまで掘削作業を進めた。調査では灰色極細粒砂の耕作土(1層)、灰色細粒砂の床土(2層)とその下層のオリーブ黒色シルト層(4層)とオリーブ灰色シルト層(5層)までを重機により慎重に掘削し、オリーブ灰色中粒砂層(7層)とオリーブ黒色細粒砂層(8層)を確認したことから人力による掘削・精査を行った。8層より下層のオリーブ黒色中粒砂層(13層)と黒褐色極細粒砂層(14層)で堅果類の種子、枝や木の葉が多量に含まれていることから植物遺体とともに土器などの遺物を確認するために慎重に精査を進めたが、土器の出土がなく杭跡なども検出されなかった。このことから13・14層の植物遺体を含む堆積層は窪地に溜まった澁みと判断し、丘陵部から流れ落ちた木の葉などが堆積したものである。13・14層の下層で暗緑灰色礫層(15層)、黄褐色礫層(16層)をトレンチ北半部で確認できたこと、さらに湧水が著しいことから安全面を考慮してトレンチ中央で標高13.6m(現地表下2.2m)まで深掘り(断ち割り)作業を行った後、掘削作業を終了し、図面及び写真による記録を行って調査を終了した。

(2) 2トレンチ(第4・5図)

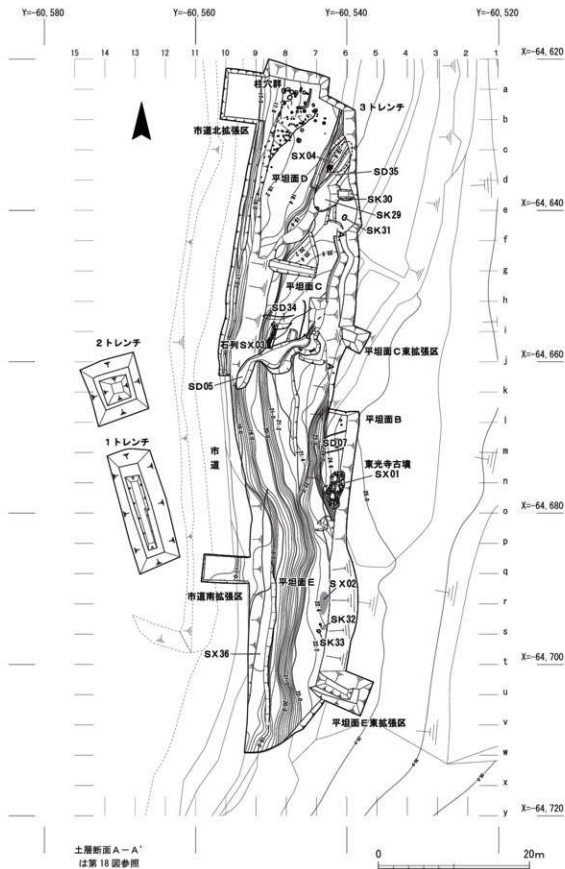
1トレンチに北端から北に4mの位置に設定した東西7.0m、南北8.0m、調査面積約56㎡のトレンチである。2トレンチでは耕作土(1層)、床土(2層)以下、50cm程度の厚さでオリーブ黒色シルト層(4層)・オリーブ黒色細粒砂層(8層)がほぼ水平に堆積しており、その下層には1トレンチで確認していた植物遺体を含む13層・14層がなく、地山と思われるにぶい黄橙色礫層(17層)を確認した。この8層及び17層の直上でも遺構・遺物の出土がなく、さらにその下層堆積層を確認するために標高13.5m(現地表下約2.0m)まで掘削作業を進めたが、1m以上の厚さで17層を確認したものの、堆積層の変化がなく掘削作業を終了した。掘削作業終了後、西壁・南壁で断面観察と図化及び写真撮影を終了し、1・2トレンチとも埋め戻し作業を行った。

以上のように、断面観察から2トレンチの地山面が標高14.4mあたりで地山となり、1トレンチの南側に向かって徐々に傾斜し、1トレンチ南半部では窪みあるいは谷状地形になっており、



- | | |
|----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|
| 1. 灰色 (7.5Y4/1) 極細粒砂
(褐色 (10YR4/6) の砂質土を多く含む) | 8. オリーブ黒色 (10Y3/2) 中粒砂混じり細粒砂
(オリーブ灰 (7.5Y4/2) 砂質土を多く含む) |
| 2. 灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂
(褐色 (10YR4/6) の砂質土を多く含む) | 9. オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト質泥じり粘土 |
| 3. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 極細粒砂
(褐色 (10YR4/6) の砂質土を多く含む) | 10. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質泥じり粘土 |
| 4. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 極細粒砂を含むシルト
(褐色 (10YR4/6) の砂質土を含む) | 11. オリーブ黒色 (10Y3/2) 細粒砂混じり中粒砂 |
| 5. オリーブ灰色 (10Y5/2) 極細粒砂混じりシルト
(褐色 (10YR4/6) の砂質土を含む) | 12. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂混じりシルト
(灰色 (7.5Y6/1) 粘土を少量含む) |
| 6. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト | 13. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 細粒砂混じり中粒砂 |
| 7. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂混じり中粒砂
(灰色 (7.5Y4/1) の粘土を少量含む) | 14. 黒褐色 (2.5Y3/1) 細粒砂混じり極細粒砂 |
| | 15. 暗緑灰色 (10G3/1) 礫 (地山) |
| | 16. 黄褐色 (10YR5/6) 礫 (地山) |
| | 17. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 中粒砂混じり礫 (地山) |

第5図 1・2トレンチ西壁・南壁土層断面図(1/80)



第6図 3トレンチ平面図(1/500)

その窪み部分が覆んだ状態であることが明らかになった。なお、1・2トレンチとも遺構・遺物の出土がなかった。

(3) 3トレンチ

①発掘調査に着手する前の地形観察

3トレンチは、標高25m付近の丘陵部から丘陵裾及び現在の市道部分(標高16m)を対象に設定したトレンチで、東西の最大長22m、南北の最大長87m、調査面積1,448㎡を測る南北に長いトレンチである。

3トレンチの掘削作業に先立って樹木伐採を行い、その後、調査前の地形測量を行った。また、周辺の地形を確認するために踏査を行った。その結果、調査地周辺には大きく4か所の広い平坦面があることを確認(第2図)し、丘陵上位部分から平坦面A・B・C・D・Eと仮称して各平坦面の地形観察を行った。

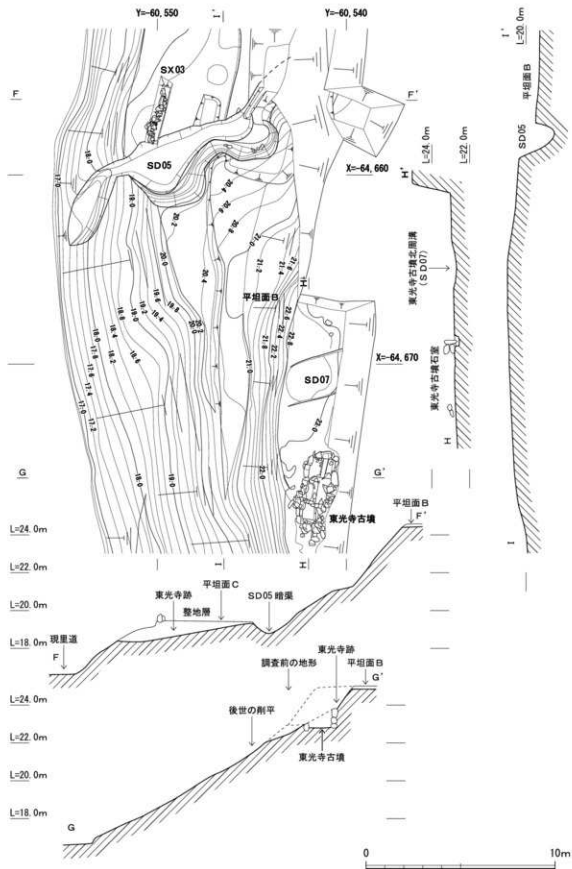
平坦面Aは標高30～35mで南北に長く半円形に近い平坦面である。平坦面Aの座標は $X = -64.710 \sim X = -64.630$ ・ $Y = -60.527 \sim Y = -60.500$ 付近で、平坦面の最大幅はqラインの延長部($X = -64.680$)付近で25mを測る。東西長は70m程度で北端には市道から平坦面Aに続く山道がある。平坦面qライン($X = -64.680$)の延長部で東側に張り出したか所には五輪塔や中世陶器の破片が散乱した状態していることを確認した。

平坦面B(第7図)は平坦面Aの北西方向で、標高32m付近の平坦面Aから7m程度低い位置にあり、標高25m前後を測る。平坦面Bの東西は2～7ライン、南北はc～qラインまでで東西は1ライン付近が幅広くなり約15mを測る。今回の調査対象地には平坦面Aは含まれず、平坦面Bは東端6ラインから東へ2mまでで、南北は1～pラインの限られた範囲になる。なお、この平坦面Bは発掘調査の結果、古墳を壊して西側に平坦面を広げていることが明らかとなった。

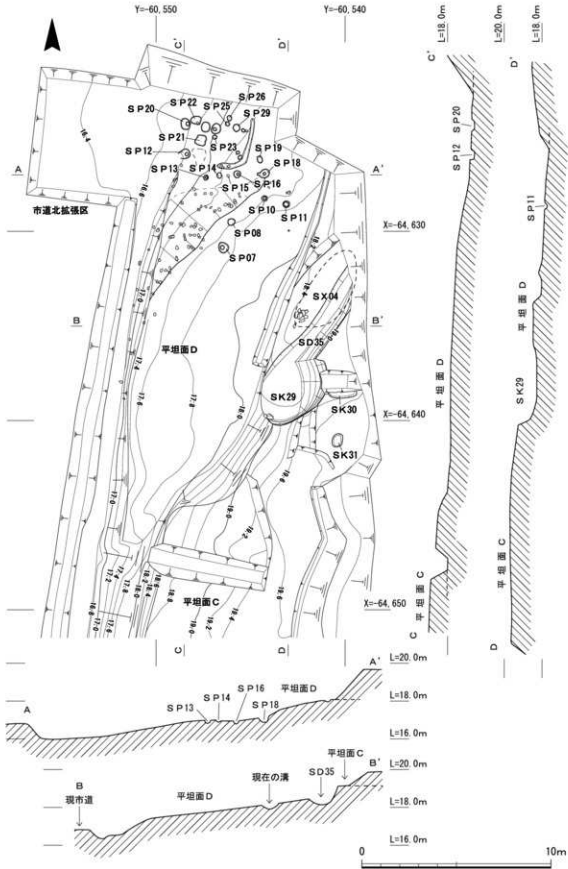
平坦面C(第7・8図)は、平坦面Bの北西方向にあり、東西は3～9ライン、南北は1ラインより以北でaラインよりもさらに10m北側までの東西10～15m・南北65mで、平坦面Bと同様、北側は調査対象地外になる。なお、平坦面Cの標高は20.0～23.0mで、東端の平坦面Bとの比高差は2m程度である。平坦面Cの北西部は近年の畑などの開墾によって地形が改変されており、後述するように東光寺跡の遺構面は大きく削り取られていることが明らかとなった。

平坦面D(第8図)は平坦面Cの北西方向で、平坦面Dの低位部にあり東西は5～9ライン・南北はa～qラインの東西37m・南北最大幅10m、標高約19.0～17.8mを測る。北端は近年の小屋設置のために盛り土されておりその状況は明らかでない。調査前には近年の開墾による段差が顕著であり、発掘調査でも平坦面Cの北西部と同様、標高の高い平坦面上部の遺構は削り取られた可能性が高く、平坦面Dの裾部で東光寺跡に伴う遺構を検出した。

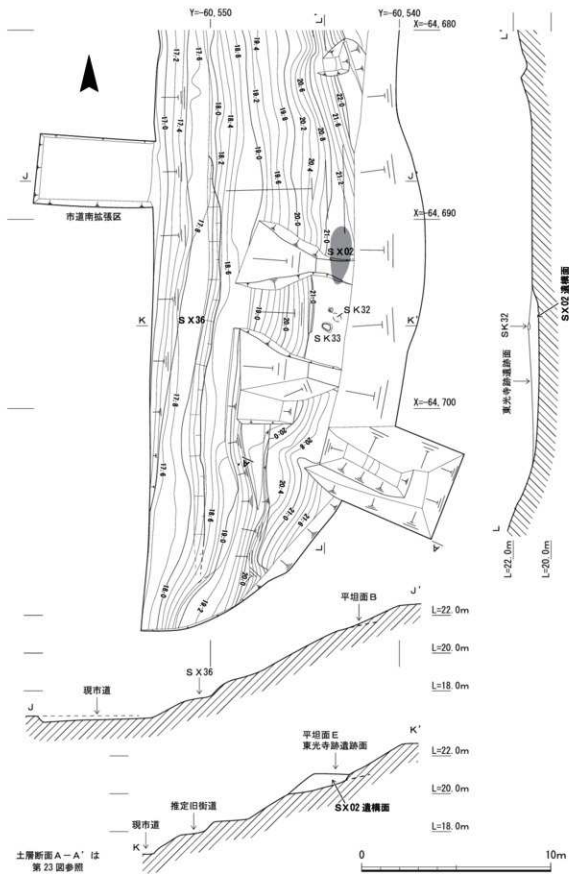
平坦面E(第9図)は平坦面Bの南西方向にあり、東西は6～8ライン・南北はm～wラインの南北に長い平坦面で、東西最大幅は6m、南北長は40m程度の半円形を呈している。平坦面Bとの比高差は1.5mで標高22.2～22.4mを測る。平坦面Eの西側、丘陵下位にも平坦面があるが、その平坦面は雑草などの植林であり、現代に近い時期に削平されたものであり、この平坦面では調査



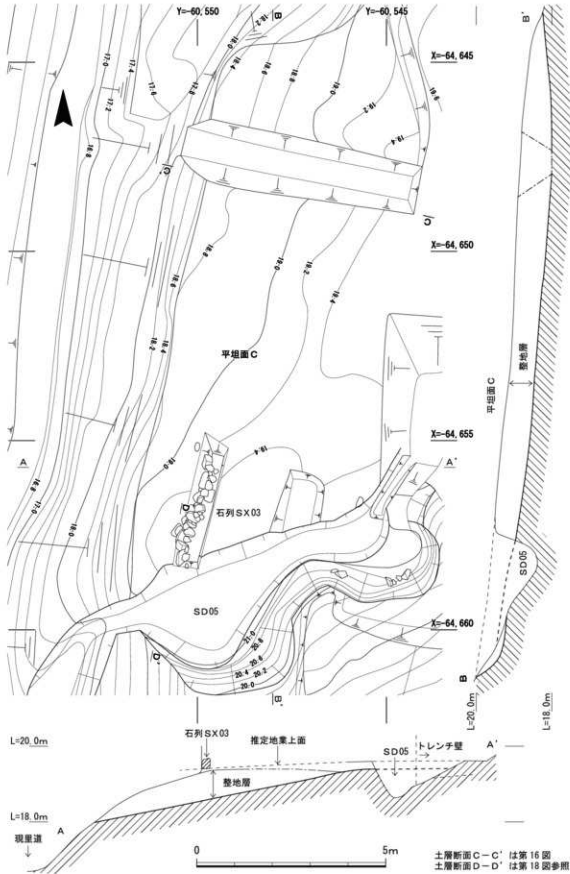
第7図 平坦面B・C 平・断面図(1/200)



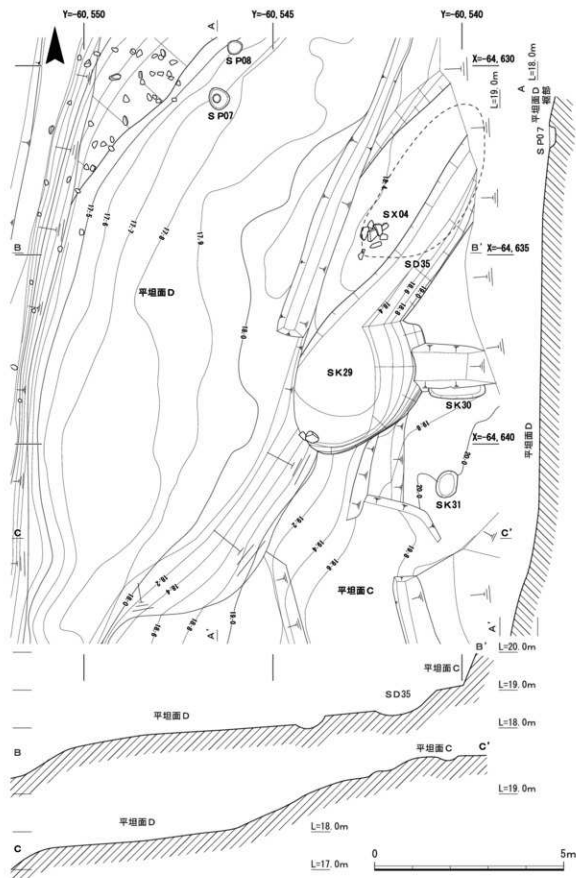
第8図 平坦面C・D 平・断面図(1/200)



第9図 平坦面E 平・断面図(1/200)



第10図 平壇面 C 平・断面図(1/100)



第11図 平坦面C・D 平・断面図(1/100)

前に地山が露出している状況が確認でき、東光寺跡に関連した平坦面ではないと認識して調査を実施した。

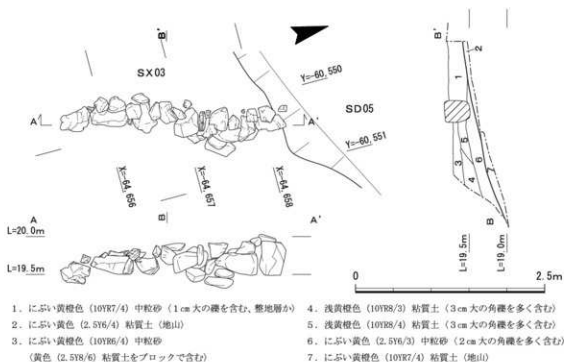
以上のように、現地掘削前の地形観察から丘陵上位に平坦面Aがあり、その北西側下位に平坦面B・C・Dがある。また、その南側下位に平坦面Eがあることを確認した。この平坦面は東光寺跡に伴う造成あるいは平坦面に建物の存在が想定されるため、各平坦面ごとに調査を進めた。なお、3トレンチでは市道にも一部トレンチを設定し、現状の市道下層の遺構の有無と土層堆積状況を確認した。

このため、本書の遺構の記述では座標・地区割による位置の表記とともに平坦面の位置を考慮しながら行うが、平坦面Bは東光寺古墳との関連から東光寺古墳の項で詳述する。

②平坦面C(d~k・5~9区)の遺構(第10・11図)

平坦面Cは平坦面Bの北西で標高18.7~19.9mにある東西10~15m、南北65mを測る平坦面であり、今回の調査対象地はその南半部に相当する。調査前の地形観察では畑地として開墾された後に竹林に変化したようで、わずかに畑の形状が確認できる程度であった。また8・9ラインより以西では標高18.0mあたりから比高差1.8mの段差をもつ崖面があり市道につながっている。

調査では遺構の有無を確認するために8i・j区で竹根の抜根を含めた表土掘削を進めたところ、表土直下で石材が散在している状況を確認したことから、調査区を広げて調査を進めた。その結果、散在していた石材周辺には石垣を思わせる石列(SX03)と地葉痕跡と思われる整地層、整地層に近似した埋土をもつ溝状遺構(SD05)を平坦面上部で検出し、平坦面の北東裾部で溝状遺構(SD35)とその上層で石材が散在した覆土(SX04)を、その南側で円形土坑(SK29)を検

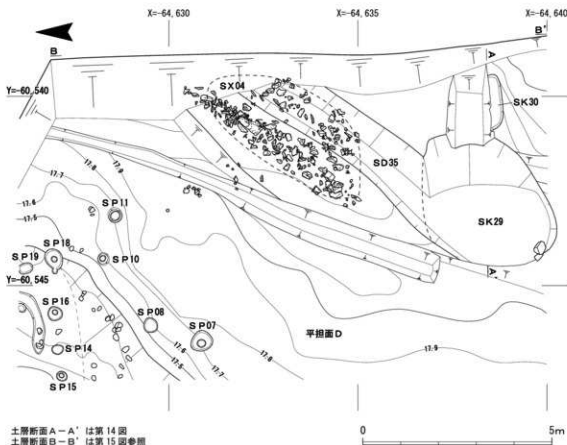


第12図 平坦面C SX03・SD05平面及び土層断面図(1/50)

出した。なお、整地層直上で精査を繰り返したが建物に伴う柱穴や礎石・栗石は確認できなかった。

石列 S X 03 (第12図) S i ・ j 区の平坦面上部から丘陵裾側にかかる傾斜変換点付近(標高20.0m前後)で検出した石列で、残存長3.0m、残存高0.5mを測り、主軸線はN15°Eをとる。S X 03は表土直下で検出されたもので、石列は現存する高さよりもさらに高く積み上げられていた可能性が高い。石列北端は後世の開墾により削り取られていた可能性が高く、南端は S D 05 の埋土(黄橙色粘質土)の上層にある整地層の上に基底石があることは確認できたが、S D 05を跨いでいたかどうかは明らかでない。

石列は西面(丘陵下位)を表面にしたようであり、石列の基底石は長さ60cm程度、幅30cm程度の石材(角礫)を長軸を水平にして並べ、その上面に20cm大の石材が据えられていた。東西方向(B-B')の土層堆積状況を見ると、石列は西側に傾斜するにぶい黄橙色粘質土の地山土(7層)の上層ににぶい黄色中粒砂(6層)がありその上面から据えられている。石列の背面(東側)には厚さ20cmの整地層と思われるにぶい黄橙色中粒砂(1層)があり、石列前面の西側には浅黄橙色粘質土(4・5層)が、その上層には中世遺物を含むにぶい黄橙色中粒砂(3層)が堆積している。3層は石列が壊された後に堆積した包含層で、包含層からは瓦質鍋(1)、陶質播鉢(2)、土師器細片等が出土した。



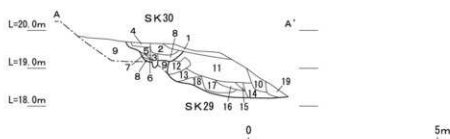
第13図 平坦面C SX 04ほか平面図(1/100)

土坑 S K 29 (第13・14図) 6 e 区で検出した直径4.0m、平坦面上部からの深さ1.1m、溝底の標高18.3mを測る円形土坑で、北にある S D 35 を切り、東にある S K 30 によって切られている。土坑の底部及び縁部分には地山に近似した明黄褐色粘質土などがあり、その上層には0.5m程度の厚さで灰褐色粘質土(11層)がある。S K 29からは土師器細片が出土した。

土坑 S K 30 (第14・15図) 平坦面 C 上部の北東端(5・6 e 区)で検出した土坑である。S K 30は表土直下の標高19.8mの地山(明黄褐色粘質土)直上で検出した遺構で、平坦面 C に盛られた整地層が及んでいないか、開墾によって整地層が削平されたか所にある。S K 30の北半部は平坦面 C の土層堆積状況を確認するために全面調査に先行して設けたサブトレンチによって確認し、遺構の北半部の状況は明らかでない。遺構の南半部の状況から東西1.5m、深さ0.6mを測る隅丸方形の掘形の可能性が高い。柱痕跡の直径は約20cmを測る。掘形埋土は主ににぶい黄橙色粘質土(4・8層)でその上層に褐色粘質土(3層)がある。なお、S K 30はその西側にある S K 29 の埋没後に掘られた遺構であるが、出土遺物はなく時期は不明である。

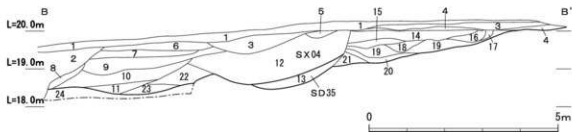
土坑 S K 31 (第11図) 土坑 S K 30 の南 2 m、5 f 区で検出した楕円形土坑で東西0.5m、南北0.7m、深さ0.05mを測る。当初は S K 30 と対となる遺構と期待したが、柱痕跡がなく検出遺構面から底部までの深さも浅いことから S K 30 とは対にならない遺構と判断した。埋土内からの出土遺物はなかった。

不明遺構 S X 04 (第13・15図) S D 35 の上面で 6 c・d 区の東西約2.0m、南北約5.0mの広範囲にわたって人頭大の角礫が散乱した状態で出土した。東壁の土層断面観察ではその堆積層は最大厚0.95mの12層(褐色中粒砂)で標高20.0mの14層(にぶい黄橙色粘質土)を切って掘られており、



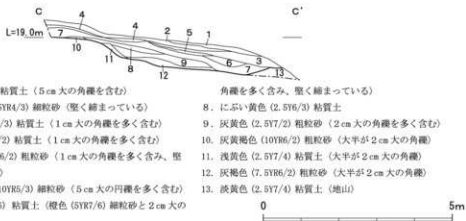
1. にぶい褐色 (7.5YR8/2) 粘質土 (1cm 大の角礫を多く含む)
2. 淡黄色 (2.5YR/4) 粘質土 (にぶい褐色 (7.5YR8/2) 粘質土を少量ブロックで含む)
3. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土
4. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土 (0.5cm 大の礫を少量含む)
5. にぶい黄橙色 (10YR8/4) 粘質土
6. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 中粒砂 (大半が 1cm 大の角礫)
7. 明黄褐色 (10YR7/6) 中粒砂 (にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂を含む)
8. 明黄褐色 (10YR7/6) 中粒砂 (灰褐色 (7.5YR5/2) 細粒砂を含む)
9. 褐灰色 (7.5YR5/1) 細粒砂 (1cm 大の礫を多く含む)
10. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細粒砂 (1cm 大の礫を少量含む)
11. 灰褐色 (7.5Y4/2) 粘質土 (2cm 大の角礫を多く含む)
12. 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土
13. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 (1cm 大の礫を含む)
14. 灰黄色 (7.5Y6/2) 細粒砂 (明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土を含む)
15. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中粒砂
16. 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂
17. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗粒砂 (明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土がブロック状にあり、1cm 大の角礫を含む)
18. 黄橙色 (7.5YR7/8) 粘質土 (S K 29 埋土)
19. 明黄褐色 (10YR7/8) 粘質土 (地山)

第14図 平坦面 C 東西土層(S K 29・S K 30)土層断面図(1/100)



- | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 表土 2. 褐灰色 (7.5YR4/1) 粗粒砂 現在に近い堆積土 3. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 中粒砂 (1cm 大の角礫を多く含む) 4. 黄褐色 (7.5YR7/8) 粘質土 5. 灰褐色 (7.5YR6/2) 粗粒砂 (1cm 大の角礫を含む) 6. 灰白色 (10YR7/1) 細粒砂 7. 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂 (黄色 (2.5Y7/8) の細かい礫を含む、客土) 8. 褐灰色 (10YR6/1) 粗粒砂 (黄褐色 (10YR7/8) で1cm 大の礫を多く含む) 9. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粗粒砂 (黄色 (2.5Y7/8) の細かい礫を含む) 10. 灰褐色 (10YR5/2) 粘質土 (1cm 大の角礫を多く含む) 11. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘質土 12. 褐色 (7.5Y4/3) 中粒砂 (S X 04 埋土) | <ol style="list-style-type: none"> 13. 黄褐色 (7.5YR7/8) 粘質土 (S D 35 埋土) 14. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 粘質土 (1cm 大の角礫を多く含む) 15. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗粒砂 (1cm 大の角礫を含む) 16. 褐色 (7.5YR6/6) 粘質土で灰褐色 (7.5YR5/2) (粘質土を含む) 17. 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土 (にぶい褐色 (7.5Y5/3) 粘質土を含む) 18. 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土 (灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土を含む) 19. 黄褐色 (10YR8/6) 粘質土 (2cm 大の角礫を含む) 20. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質土 (1cm 大の角礫を含む) 21. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘質土 (2cm 大の角礫を含む) 22. 淡黄色 (2.5Y7/3) 粘質土 (1cm 大の角礫を多く含む) 23. 灰黄色 (2.5Y7/3) 粘質土 (1cm 大の角礫を多く含む) 24. 明褐色 (10YR7/6) 粘質土 (2cm 大の角礫を含む、地山) |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第15図 平坦面C 東壁土層(S X 04 · S D 35)土層断面図(1/100)



- | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰白色 (5Y7/1) 粘質土 (5cm 大の角礫を含む) 2. にぶい赤褐色 (5YR4/3) 細粒砂 (堅く締まっている) 3. 暗赤褐色 (5YR3/3) 粘質土 (1cm 大の角礫を多く含む) 4. 暗赤褐色 (5YR3/2) 粘質土 (1cm 大の角礫を多く含む) 5. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗粒砂 (1cm 大の角礫を多く含む、堅く締まっている) 6. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂 (5cm 大の角礫を多く含む) 7. 黄褐色 (10YR8/6) 粘質土 (褐色 (5YR7/6) 細粒砂と2cm 大の角礫を多く含む、堅く締まっている) | <ol style="list-style-type: none"> 8. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土 9. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粗粒砂 (2cm 大の角礫を多く含む) 10. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗粒砂 (大半が2cm 大の角礫) 11. 淡黄色 (2.5Y7/4) 粘質土 (大半が2cm 大の角礫) 12. 灰褐色 (7.5YR6/2) 粗粒砂 (大半が2cm 大の角礫) 13. 淡黄色 (2.5Y7/4) 粘質土 (地山) |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

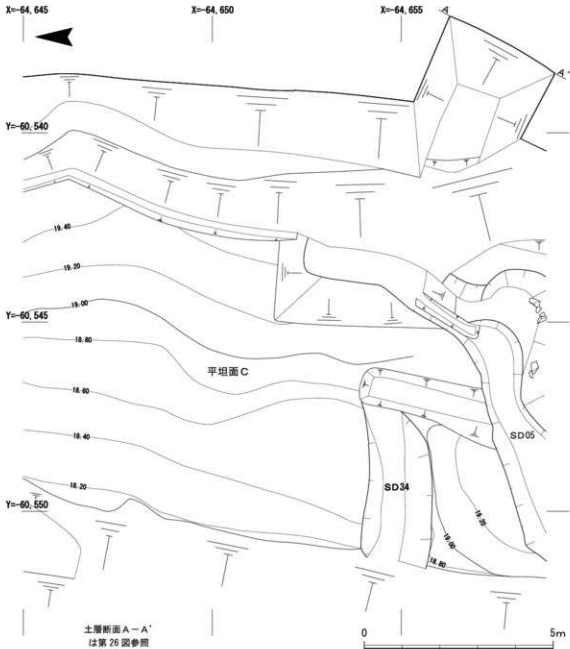
第16図 平坦面C 整地層東西土層断面図(1/100)

S D 35の埋没後、期間において堆積したものと思われる。埋土からは石材に混じって五輪塔の一部(地輪S 1・S 2、その他S 3)が出土した。また、埋土内から16世紀後半の瓦質摺鉢や輸入白磁片、土師器皿が出土した。

溝状遺構 S D 35 (第13・15図) S D 35は6・e～e区で、平坦面Cの裾部に掘り込まれた北東方向から南西方向に延びる溝状遺構で主軸をN35°Eにとる。北東端は調査対象地外となり南西端は6e区のS K 29によって切られている。S D 35は石材を多く含み、褐色中粒砂を埋土とするS X 04を除去した段階で検出したもので、検出長8.0m、上面幅0.8m、深さ0.06mを測る。溝底の標高は18.3～18.4mで東北から南西に向かって傾斜している。

整地層(第16図) 整地層は表土直下で検出した堆積層である。精査中はツルハシや手バチなどの発掘用具では用具を跳ね返すような締まった堆積層であり、当初は表土直下であることから現在に近い時期の堆積層で、開墾に伴って重量のある機材で踏み固められた堆積層と認識を誤った堆積層であった。この締まった整地層の下層で東光寺跡に関連する遺構があると判断し、gラインで東西方向に深さ0.6~0.7mまで断ち割り作業を行った結果、地山を検出するとともに、7層の黄橙色粘質土と8層のいぶ黄色粘質土を挟んで、その上層に細・粗粒砂(5・6層)、粘質土(3・4層)、細粒砂(2層)があり、7・8層の下層には、粗粒砂(9・10・12層)、粘質土(11層)と大きくは6層の堆積土があることから、建物造成に先立つ整地層であると判断した。

整地層は平坦面Cのみで確認でき、その北端はfライン付近で標高19.7m以下、東端は標高



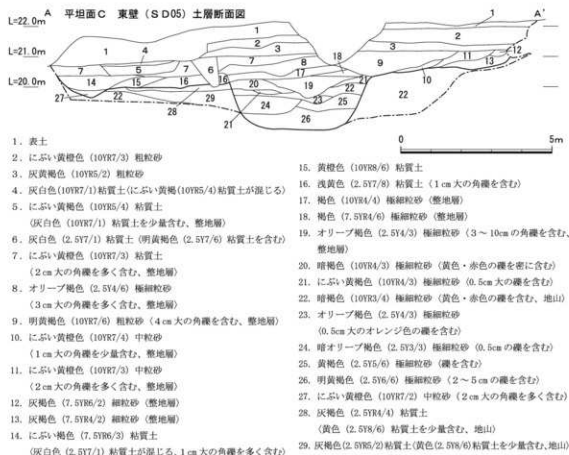
第17図 平坦面C 整地層除去後の平面図(1/100)

20.6mで南端はS D05まではあるが、それより南では確認できなかった。整地層の各層の厚さは0.15m程度で12層に細分でき、中間層に黄橙色粘質土(7層)を挟んでいる。中間層(7層)の下層には灰黄・灰黄褐色の粗粒砂で2cm大の角礫を多量に含む堆積土が0.1m程度の厚さであり、中間層の上層は暗赤褐色粘質土(3・4層)で、1cm大の角礫を含む堆積土が0.15~0.2m程度の厚さで堆積している。なお、この整地層は淡黄色粘質土(13層)の地山直上にある。

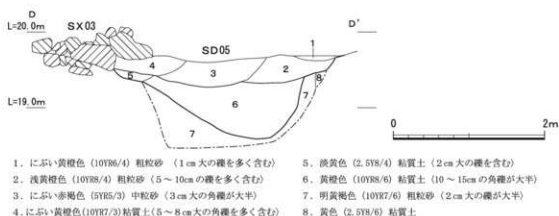
表土を重機によって除去した後、整地層直上で精査を繰り返したが、S X03のほかには建物に関連した柱穴や礎石あるいは根石などは検出できなかった。また、整地層を慎重に除去したが整地層には遺物の出土はなかった。なお、S X03の南側で確認した埋土(第19図)ではS D05の上層に0.3~0.35cmの厚さで1~4層の整地層が堆積している。

溝状遺構 S D05 (第10・18・19図) S D05は6~9・h~k区で検出した丘陵部(東側)から丘陵裾(西側)へと向かって逆「S」字状に曲折して掘り込まれた溝状遺構で、検出長15m、上面幅0.8~4.1m、検出面からの深さ1.2~1.7m、溝底の標高は東側で18.9m、西側裾部で17.3mを測る。

トレンチ東壁(第18図)での埋土は、にぶい黄橙色粘質土(7層)、オリブ褐色極細粒砂(8・19層)、褐色極細粒砂(17・18層)が地業に伴う整地層で、厚さ0.7~1.4m程度あり、その下層は1.0~1.5mの厚さで8層にわたって暗褐色(20・22層)、にぶい黄褐色(21層)、オリブ褐色(23層)、



第18図 平坦面C 東壁土層断面図(1/125)



第19図 平坦面C SD05南北土層断面図(1/50)

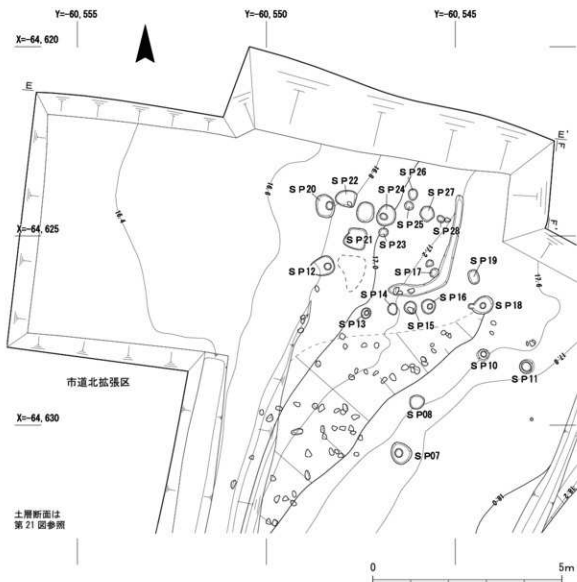
暗オリーブ褐色(24層)、黄褐色(25層)、明黄褐色(26層)の極細粒砂が堆積している。また、溝幅がもっとも狭くなるSX03の南延長部(第19図D-D')での断面観察では東壁と同様、厚さ0.7mの整地層(1~4層)があり、その下層で拳~人頭大の円礫とともに2cm大の礫を含む淡黄色粘質土(5層)と、10~15cmの角礫を多く含む黄褐色粘質土(6層)が堆積している。

SD05の埋土掘削段階では東側からの湧水が著しいことや、埋土の上層に整地層があり、その下層に円礫・角礫を含む堆積土があることから、東光寺跡に関連した暗渠の可能性が高い遺構である。SD05の埋土掘削段階で遺物の検出に努めたが確認できなかった。

溝状遺構SD34(第17図) 東光寺跡に伴う地業と思われる整地層を除去した面で、iライン近くにおいて整地層除去後の傾斜角5°の地山直上で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長4.0m、上面幅1.7m、下面幅0.5m、深さ0.6mを測る。整地層と同様、SD34からの出土遺物はなく時期は不明である。

③平坦面D(a~g・6~9)の遺構(第11・13・20・21図)

平坦面Dは平坦面Cの北西方向で、調査前の地形測量では標高18.4mあたりで確認した平坦面である。この平坦面は西側3分の2程度(標高17.5~18.0m)までが後世の開墾によって削平を受けており、調査区東端の6・7・a~c区あたりが後世の削平を受けることなく、東光寺跡関連の遺構が残っていると想定された地点である。6~8・a区の3トレンチ北壁の土層堆積状況(第21図)は1層(腐植土を含む表土)・2層(灰白色細粒砂)・3層(にぶい黄褐色細粒砂)は近代以降現代に近い時期の堆積層で、4層(暗灰黄色粗粒砂)は植林に伴う樹木の根張りで、11層(灰褐色粗粒砂)と14層(にぶい黄褐色粗粒砂)は土師器皿・黒色土器を含む包含層である。11層と14層の間には柱穴あるいは土坑の可能性のある堆積層(12・13層)を確認したことから11層を除去して14層直上で精査を進めたところ、6b・c区で柱穴(SP10・11)を検出したものの、SP11・12の西側(下位)にある柱穴群では14層がなくなる傾向にあった。そのため柱穴群は、14層直上あるいは14層を除去した19層(にぶい橙色粘質土)直上から掘り込まれたものであるかどうかを明確にすることができなかった。

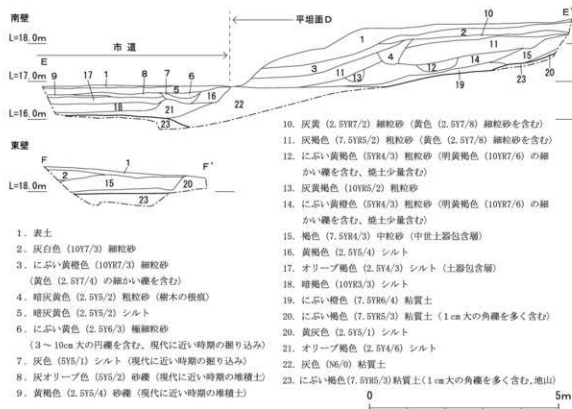


第20図 平坦面D 裾部の柱穴群及び市道北拡張区平面図(1/100)

柱穴跡群(第20図) 平坦面Dの上部北東の一画と裾部の6~8・a~c区の東西6.5m、南北8.0mの範囲に集中して付表1のとおり20基の柱穴を検出した。柱穴は中世遺物を含むにぶい黄橙色粗粒砂(第21図14層)の直上で検出し、それを除去した面で掘り込まれた可能性がある。各柱穴は直径(あるいは一辺)40~50cm前後の掘形で、柱当たりの直径が15~20cmを測るもの(SP12・16・18・20・24)と直径20~30cm前後で、柱当たりが確認できなかったものに分かれる。前者の柱当たりを有する柱穴群を中心に建物跡を想定して精査を進めたが、柱配置や柱列の位置からは掘立柱建物としてまとまるものはなかった。小規模な小屋掛け程度の建物が存在した可能性がある。なお、掘形内から出土した遺物は、SP14から出土した平安時代前期の須恵器杯B1点のみである。

④平坦面E(p~w・5~10区)の遺構(第22~24図)

平坦面Bの南8m(6~8・r~q区)で、調査前の地形観察では東西6m、南北40mの平坦面



第21図 3トレンチ北壁及び平坦面D裾部東壁土層断面図(1/100)

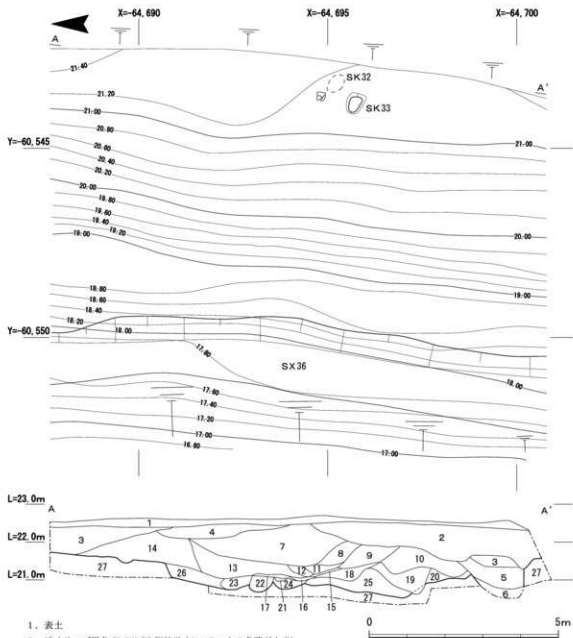
を確認した。この平坦面の上部からが調査対象地であるが、大木が2本立っていることから安全面を考慮して6ライン上(標高23.7m)からトレンチ掘削を行った。その結果、7ラインから東に1mあたり(標高21.2m)で東西幅2m程度の平坦面と焼土坑、その下層で土師器片を検出した。

なお、この平坦面の西側は7ラインあたりから20°の傾斜角で落ち込んでいる。

検出遺構は平坦面で焼土坑(S K32・33)のほか、ほぼ同一面で散在した古墳時代の土師器片の出土するか所(S X02)を検出した。なお、平坦面Eの南側(5・6、u・v区)で平坦面東側の状況を

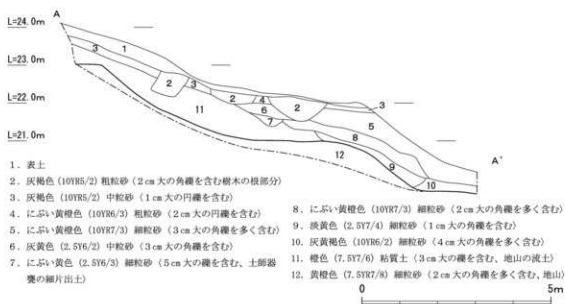
付表1 柱穴群規模一覧

遺構名	地点名	形状	規模(単位 cm)			出土遺物
			掘形	柱当たり	深さ	
S P 07	平坦面上部	円形	直径55	直径20	35	なし
S P 08	平坦面上部	円形	直径40	／	45	なし
S P 09	斜面部	円形	直径40	／	20	なし
S P 10	平坦面上部	円形	直径40	／	20	なし
S P 11	平坦面上部	円形	直径25	／	15	なし
S P 12	平坦面下	隅丸方形	東西60×南北45	直径20	30	なし
S P 13	平坦面下	円形	直径25	直径15	25	なし
S P 14	平坦面下	円形	直径25	／	22	須恵器杯口
S P 15	平坦面下	円形	直径50	／	30	なし
S P 16	平坦面下	円形	直径40	直径15	40	なし
S P 17	平坦面下	円形	直径20	／	20	なし
S P 18	平坦面下	円形	直径55	直径15	30	なし
S P 19	平坦面下	隅丸方形	東西30×南北35	／	21	なし
S P 20	平坦面下	隅丸方形	東西50×南北60	直径20	28	なし
S P 21	平坦面下	隅丸方形	東西55×南北55	／	30	なし
S P 22	平坦面下	隅丸方形	東西50×南北45	／	17	なし
S P 23	平坦面下	円形	直径25	／	10	なし
S P 24	平坦面下	円形	直径50	直径20	19	なし
S P 25	平坦面下	円形	直径20	／	10	なし
S P 26	平坦面下	円形	直径25	／	24	なし
S P 27	平坦面下	円形	直径40	／	28	なし
S P 28	平坦面下	円形	直径18	／	28	なし
S P 29	平坦面下	隅丸方形	東西45×南北52	／	10	なし



1. 表土
2. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粗粒砂 (1~3cm大の角礫が大平)
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂 (1~3cm大の角礫を多く含む)
4. 黄褐色 (2.5Y5/6) 極細粒砂 (3cm大の角礫を少量含む)
5. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細粒砂
6. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 細粒砂
7. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細粒砂 (1~5cmの角礫を含む)
8. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 粗粒砂 (2cm大の礫を多く含む)
9. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 中粒砂
10. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 極細粒砂 (0.5~1cm大の円礫を少量含む)
11. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗粒砂
12. 明黄褐色 (10YR7/6) 中粒砂 (焼土を含む)
13. 浅灰色 (2.5Y7/4) 中粒砂
14. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細粒砂 (2~5cmの角礫を多く含む)
15. 褐灰色 (7.5YR6/1) 中粒砂 (浅黄褐色 (10YR8/4) 土をブロックで含む)
16. 褐色 (2.5YR6/8) 細粒砂 (焼土)
17. 褐灰色 (7.5YR6/1) 中粒砂
18. 灰褐色 (7.5YR6/2) 中粒砂
19. にぶい褐色 (7.5YR6/3) 粗粒砂
20. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 極細粒砂
21. 浅黄色 (2.5Y8/4) 中粒砂 (S X02の埋土)
22. にぶい褐色 (7.5YR6/3) 細粒砂 (S X02の埋土)
23. 褐色 (7.5YR6/6) 細粒砂 (S X02の埋土)
24. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 中粒砂 (S X02の埋土)
25. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗粒砂 (S X02の埋土)
26. 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂 (S X02の埋土)
27. 黄褐色 (10YR7/8) 粘質土 (地山)

第22図 平坦面E 平面図及び東壁土層断面図(1/100)



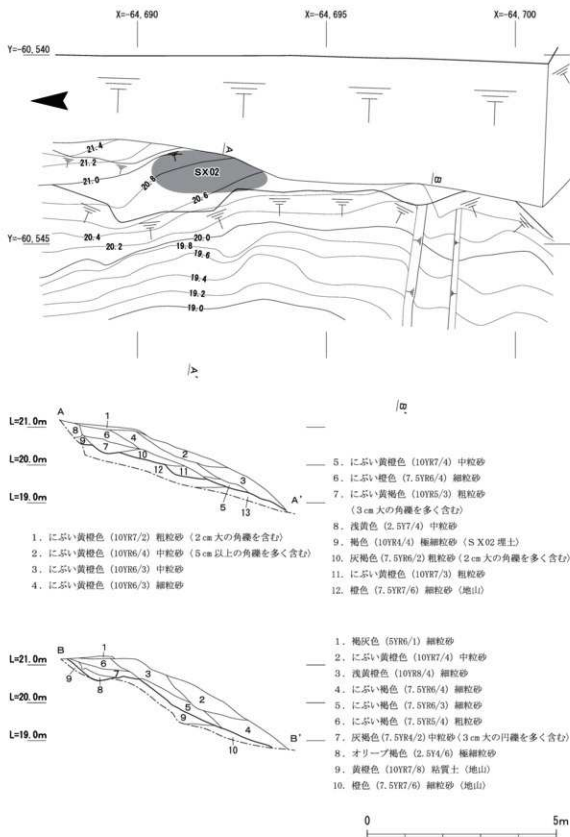
第23図 平坦面E 東拡張区南壁土層断面図(1/100)

確認するために調査区を拡張して調査を進めたが、6 s・t 区で検出したような遺構はなく、さらにその南側の 6～9・v・w 区でも表土直下で地山土となり遺構・遺物はなかった。

平坦面E (p～t 区)の東壁土層堆積状況(第22図)は、厚さ0.1～0.2mの腐植土(1層:表土)と樹木植林による攪乱(2・3層)があり、東壁の南端で検出した3・5・6層を埋土とする落ち込みも樹木の根による攪乱である。攪乱に切り込まれたように、丘陵部上位から流れ込んだと思われる黄褐色極細粒砂(4層)、黄褐色極細粒砂(7層)、にぶい黄褐色粗粒砂(8層)がある。このうち7層で中世土師器の細片が1点出土している。7層の下層にも上部から流れ込んだと思われる堆積層(9～14層)がある。灰黄褐色粗粒砂(11層)・明黄褐色中粒砂(12層)・浅黄色中粒砂(13層)を除去した段階で焼土層(16層)を確認した。焼土層は均一に広くあるものではなく、SK32・33のような直径30cm程度の限られた範囲にあるものと思われる。16層と、17層(褐灰色中粒砂)下層では、東西の長さ約7.0m、深さ0.3m程度で、古墳時代の土師器片を含む褐色あるいは黄褐色の粗～細粒砂層を埋土とする堆積層(22～26層)があり、その堆積層を除去すると黄褐色粘質土(27層)の地山の落ち込みとなる。

平坦面Eの東拡張区(5U・V区)の南壁断面(第23図)では、地山の流土と思われる橙色粘質土(11層)が、0.9mと厚く堆積しており、その上層には0.2m程度の厚さで1cm大の円礫を含んだ灰褐色中粒砂(3層)、灰黄色中粒砂(6層)、にぶい黄褐色細粒砂(8層)が堆積している。またその上層には表土(1層)と樹木の痕跡と思われる掘り込み(2層)がある。

平坦面Eでは南北方向の東壁断面と同時にrラインとその南約0.9mで東西方向の畦を設定して丘陵斜面部での土層断面観察を行った(第24図)。その断面観察によると東から西に20°程度傾斜しており、A-A'の5層(にぶい黄褐色中粒砂)・10層(灰褐色粗粒砂)・11層(にぶい黄褐色粗粒砂)は中世以前の堆積層、6層(にぶい橙色細粒砂)・7層(にぶい黄褐色粗粒砂)・8層(黄褐



第24図 平坦面E 下層遺構平面図及び東西土層断面図(1/100)

色極細粒砂)は中世堆積層である。1～4層は丘陵上位からの流れ込みによる堆積層と思われる。B-B'では6・7・8層が中世堆積層で、その上層の1～5層は丘陵上位から流れ込んだ堆積層である。

土坑 S K 32 (第22図) S K 32は6 s区で検出した楕円形土坑で長軸0.6m、短軸0.4mを測る。S K 30の検出面で土坑の焼土を確認したものの掘り込みは確認できず、焼土周辺から土師器片が出土した。

土坑 S K 33 (第22図) S K 32の南西35cmで検出した楕円形土坑である。S K 32と同様、楕円形土坑で長軸0.45m、短軸0.3mで焼土のみを確認した。焼土直上及びその周辺から土師器片が出土した。

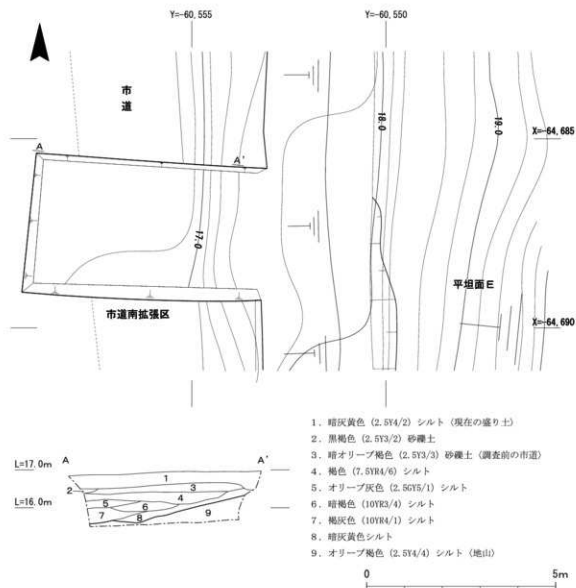
不明遺構 S X 02 (第24図) 6・q～t区でS K 32・33の下面(標高21.4m)で古墳時代の土師器が10点程度散布された状況であり、精査とともに東壁での断面観察を行った(第23図)。その結果、東壁寄りでは南北長約6.0m、深さ0.3m程度の地山の掘り込みは確認できたものの、その西側では中世以降に削平されたようで堆積土は徐々に薄くなり、東壁から1m西ではなくなっていた。S X 02は土器の出土状況、東側断面の掘り込み状況から古墳時代の竪穴建物を想定して精査を進めたが、調査範囲が狭くさらに西側が中世以降に大きく削平されていて残存状態も悪く、さらに竪穴建物の床面と思われる平坦面では周壁溝や柱穴も存在しないことから竪穴建物と断定できなかった。

不明遺構 S X 36 (第9図) 8 r～v区で通路状の平坦面を検出した。この通路状平坦面は、標高18.4m前後で比高差0.4mの段差があり、標高17.8～18.0mで幅1.0mの水平面を形成している。なお、この平坦面はqラインより北側は不明瞭となっている。この平坦面上層は表土が堆積しており、平坦面直上で路面を示すような敷石や側溝、堆積層もなく近代以降の植林・開墾に伴って成形されたものかどうかとも断定できないが、一里塚の延長部にあることから近世以降の街道に関わる遺構の可能性がある。

⑤ 3 トレンチ西拡張区(市道直下)の遺構(第6図)

3 トレンチ北端(9 a・b区)と南端(9・10、q・r区)で、市道を横断するようにトレンチを設定して、現市道に遡る道(街道)が存在したかどうかを確認するための調査である。

市道北拡張区(9 a・b区) 市道北端に設定した東西4.0m、南北7.0mの拡張トレンチであるが、現市道の下層において江戸時代の道と想定できるような遺構は検出できなかった。北壁の土層堆積状況(第21図)からは、幾度となく現市道整備に伴う改作が行われたことがうかがえる。1・5～7層は現市道の改作に伴う堆積層で、その下層の8層(灰オリーブ色砂礫層)・9層(黄褐色砂礫層)も市道の改作に伴うもので、地表下0.15mまでは現在に近い時期の堆積層である。その下層の17層(オリーブ褐色シルト層)は東側で見つかった11層(灰褐色粗粒砂)に相当し、古墳時代の混入品と思われる須恵器壺(22)のほか、平安時代の須恵器杯B(21)、土師器杯あるいは碗の底部(23・24)が出土した。17層の精査とともに17層を除去した段階でも精査を繰り返したが柱穴等は検出できなかった。さらに下層の18層(暗褐色シルト)、21層(オリーブ褐色シルト)では遺物の出



第25図 市道南拡張区 平面図及び北壁土層断面図(1/100)

土はなく、その下層で23層(にぶい褐色粘質土)の地山を検出した。

市道南拡張区(9・10、q・r区) 市道の南端に設定した東西6.3m、南北3.5mの拡張トレンチである。市道北拡張区と同様、現市道の下層で江戸時代の道に伴う路面の有無と丘陵部から1トレンチに繋がる地形を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、丘陵部から徐々に傾斜する地山面を検出したものの、現市道に遡る時期の道路面は確認できなかった。北壁の土層堆積状況(第25図)によると、1～3層は現在に市道の改作に伴う堆積層で、その下層の褐色系シルト層(4～7層)は丘陵上位から流れてきた堆積層で遺物の出土がなく、8層の暗灰黄色シルト層で須志器・土師器の細片が出土した。8層の下はオリーブ褐色シルト層の地山である。

⑥平坦面Bの遺構

平坦面Bは今回の調査対象地内の最高位にあたり、平坦面Bの土層堆積状況を確認するために

設けた 5 j 区の調査区と平坦面上部の幅 3m の範囲と法面を中心にした 6・7、1～p 区の調査区に分かれる。

a. 5 j 区(平坦面C東拡張区)の調査

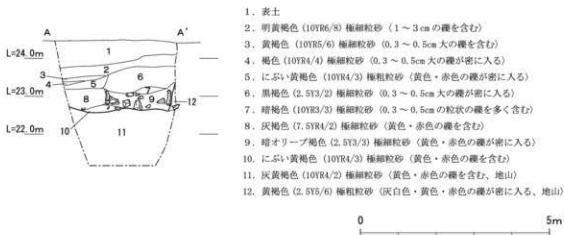
5 j 区では平坦面Bから平坦面Cにかかる東西 2m、南北 3m の調査区を設定した。この地点は調査対象地の東端近くに相当し、平坦面Bの成形範囲とその土層堆積状況を確認するための調査である。調査の結果、平坦面西端は後世に大きく削り取られていて遺構は検出できず、東壁断面で石材を含む掘り込みを検出した(第26図)。

東壁の土層堆積状況は地表(標高22.6m)下約1.8mで灰黄褐色極細粒砂(11層)の地山を確認し、その上層に一辺が0.4m程度の大きさの石材を含むにぶい暗オリーブ褐色極細粒砂(9層)がある。9層の厚さは約0.4mで石材が10点程度あり、南あるいは調査地外の東側に広がるもの、安全面を考慮して調査区の拡張を控えた。9層の散在した石材は横穴式石室の石材の可能性もあるが明瞭に積み上げている、あるいは各石材が面を揃えているという状況ではなかった。9層の上層には標高24.0m前後までに黒褐色極細粒砂(6層)が厚さ0.5mで、その上層の2層が厚さ0.2mで堆積しており、6・7、1～p区(第29図)の2・3層と同様、平坦面Bを形成するための盛り土と判断した。

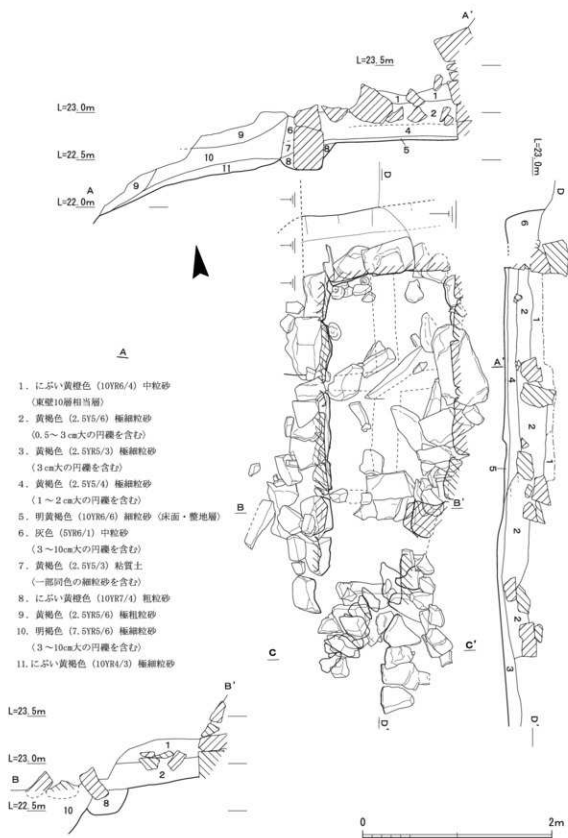
b. 6・7、1～p区(東光寺古墳)の調査

重機により竹根の抜根作業とともに表土を除去して掘り作業を進めたところ、地表下約1.0mで石材を検出し、人力による精査を行った。石材の散布範囲は東西 2m、南北 5m でその多くが東壁に食い込んだ状況であった。検出した石材を残して覆土・埋土を除去したところ石材が直線的に組まれていることを確認し、さらに組まれた石材の内側を一部掘り進めると古墳時代後期の須臾器が出土したことから、古墳時代の横穴式石室であることが判明した。この段階で古墳の調査を一時中断し、古墳時代以降の東光寺跡の調査を先行させることを優先させ、石室を覆っている包含層の除去と東壁の観察を行った(第29図)。

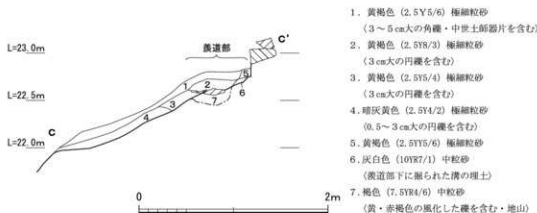
古墳を覆う包含層は東壁から西へ 3m(7ライン)の範囲で、その西側は比高差 5m で傾斜角 25



第26図 平坦面C東拡張区 東壁土層断面図(1/100)



第27図 東光寺古墳 石室上層の石材散布状況及び床面上層の土層断面図(1/40)



第28図 東光寺古墳 床面上層の土層断面図(1/40)

~30°の傾斜面があり、後世に大きく削り取られていることが明らかとなった。

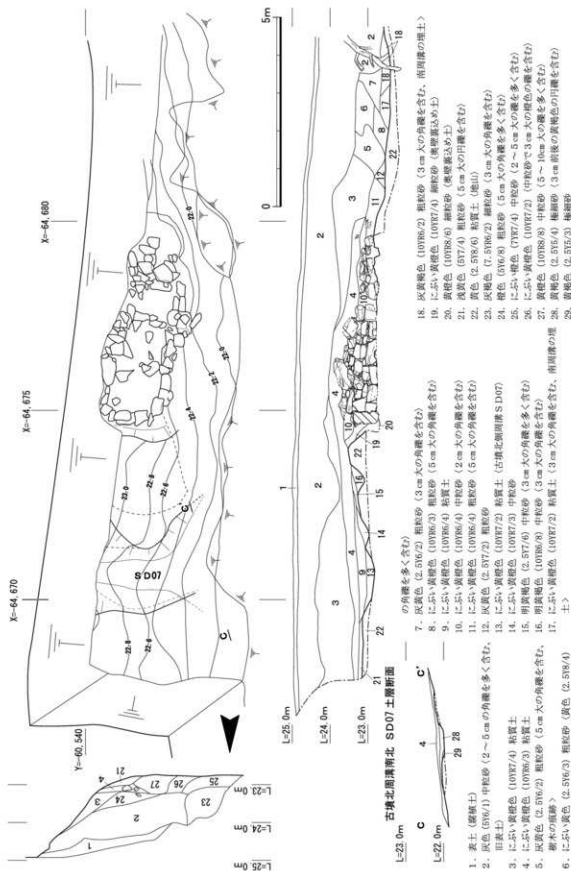
平坦面B東壁の堆積状況(第29図) 平坦面Bは地表面が標高25m前後であり厚さ10cm前後の腐植土(1層)がある。何か所かに植林あるいは自然木の根が深く張出している攪乱の堆積土がある。腐植土下にはトレンチ北東隅では0.2m前後で南に向かって1m前後、西に向かって0.5m前後の厚さで2~5cmの角礫を含む灰色中粒砂(2層)があり、その下層(3層)には厚さ0.5~1.0mのふい黄橙色(10YR7/4)粘質土がある。2層からは出土遺物がなくその堆積時期は明らかでないが、堆積土に角礫を多く含むことから丘陵上位(東側)にある地山土を移動させて平坦面を形成した堆積土と考えられ、その下層の3層とともに平坦面Bを形成するための埋土と思われる。3層の下にあるふい黄橙色(10YR6/3)粘質土(4層)は3層の堆積土に近似しており、東光寺古墳の石室を覆うように厚さ0.2m程度堆積している。4層は平坦面を形成するために古墳の墳丘及び石室の大半を壊した際の堆積土であり、東壁の9~12層、北壁の24~26層も同様の性格をもった堆積層と思われ、これらの堆積層からは15世紀後半段階の土師器・陶器・輸入磁器(青磁・白磁)の細片が出土した。

(4)東光寺古墳 S X01

東光寺古墳は東光寺跡の造営に際して壊された古墳である。今回の調査では、横穴式石室を埋葬施設とする古墳(東光寺古墳)1基を平坦面B地区の調査区内で確認したが、平坦面Cの東拡張区(5j区)の東壁(第26図)でも古墳の石材と思われるものを確認しており、周辺には数基の古墳があったと考えられる。

①石室上面の検出状況(第27・28図)

ふい黄橙色(10YR6/3)粘質土(第29図4層)を除去した段階で、古墳の石室の石材が散乱した状態で検出した。石材は2点が長さ1m程度の天井石の可能性が大振りのものがあるが、大半が0.4m大の石材であり奥壁・両側壁に使用した石材と思われる。散乱した石材の多くは石室内に転落あるいは廃棄されたかのような状態であり、石室内の埋土観察(A-A'、B-B')では後述する玄室床面から厚さ0.1m前後の黄褐色(2.5Y5/4)極細粒砂(4層)が石室崩落以前の水平



第29図 東光寺古墳墳頂正及び東園土層断面図(1/100)

堆積層で、その上層のふい黄褐色(10YR6/4)中粒砂(1層)・黄褐色(2.5Y5/6)極細粒砂(2層)・黄褐色(2.5YR5/3)極細粒砂(3層)には中世陶磁器を含むことから、1～3層は石室解体後の堆積土と考えられる。なお、3層は玄室南端から羨道部分に堆積しており、羨道部の床面は中世段階に削平されたものと思われる。

石室を横断する形で設定した畦の3東西土層(A-A')観察では、右(東側)側壁の基底石を残して中世包含層と思われる黄褐色(2.5YR5/6)極粗粒砂(9層)・明褐色(7.5YR5/6)極細粒砂(10層)・ふい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂(11層)が0.5mの厚さで堆積しており、玄室の基底石を残して中世段階に壊されていることが明らかとなった。玄室左(東側)側石は右(西側)側石に比べて残存状態は良く、基底石を含めて5石程度の高さまでが壊されずに残っていた。玄門部の右側石(B-B')は床面から垂直にはなく上位に向かって広がっており面を揃えていないことから、基底石は抜き取られていないが、外側に動かされていた可能性が高い。羨道部右側壁(C-C')も玄門部分と同様、残存しているものでも中世段階に動かされた可能性が高い。

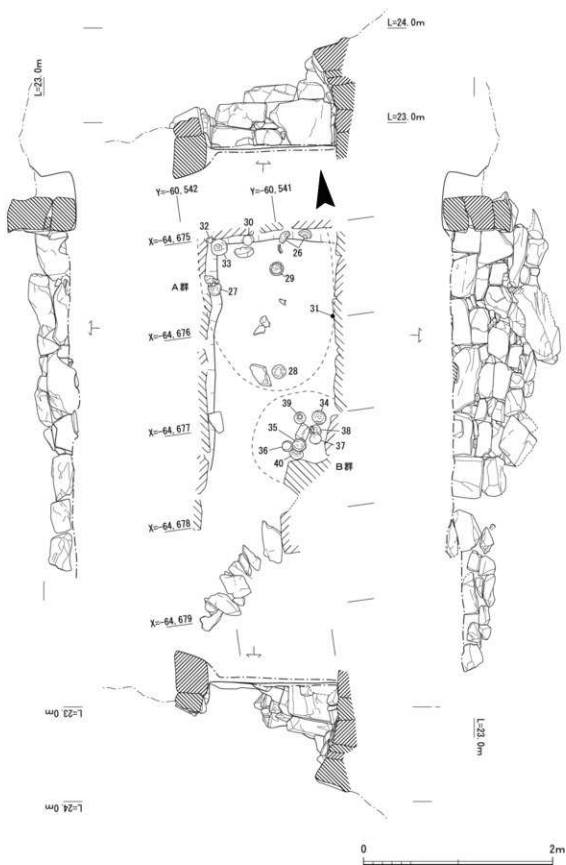
②墳丘(第29図)

今回の調査では石室を挟んで東側が調査対象地外であり、石室及び墳丘の西半部が調査対象地となる。前述したように、古墳の大半は中世段階に平坦面Bを成形するために大きく削り取られていた。

トレンチ東壁の9層から出土遺物はなかったものの、同様の性格を持つと考えられる堆積層から15世紀後半の遺物が出土していることから、9層は中世段階の堆積層と思われ、その下層のふい黄褐色(10YR7/3)中粒砂(14層)・明黄褐色(2.5Y7/6)中粒砂(15層)・明黄褐色(10YR6/8)中粒砂(16層)は古墳の墳丘に伴う堆積土と思われる。石室奥壁から北へ3.3mの位置(6m区)にふい黄褐色(10YR7/2)粘質土(13層)を埋土として土師器・須恵器碎片を含む北周溝と考えられる落ち込み(SD07)がある。この落ち込みはトレンチ東壁から西へ2.5mまでは確認できたが東壁から西へ向かうに従って浅くなり途切れるもので、東壁での掘り込みの上面幅1.8m、深さ0.2mを測り、断面が浅い「U」字形を呈している。SD07は石室奥壁に対して平行ではなく弧を描くように掘り込まれていることから方墳ではなく円墳の可能性が高いと考えられる。石室を挟んだ南側(6p・q区)は中世包含層(5～8、11・12層)及び近世以降の植林による樹木の根痕により墳丘の大半が削り取られており墳丘は確認できなかった。このため古墳の南周溝は平面では確認できなかったが、東壁断面では6q地区でふい黄褐色粘質土(17層)と灰黄褐色粗粒砂(18層)があり、古墳の南周溝の埋土の可能性が高いと考えられる。このことから、東光寺古墳は墳丘の北側の一部が遺存し、東壁の埋土の観察から溝の心々距離で測ると13.5m前後を有する円墳であったと考えられる。

③埋葬施設(第30図)

東光寺古墳の埋葬施設は横穴式石室であり、石室内には天井石の可能性も考えられる長さ1.0m、厚さ0.6m程度の石材を含む多くの崩落石が残存していた。これらの石材は東光寺跡の平坦面Bの造成に際して壊されて石室内に廃棄されたかのような状態であり、廃棄あるいは動かされ



第30図 東光寺古墳 石室及び石室内遺物出土状況図(1/40)

た状態の石材を取り除いていくと基底石を含む石材を確認した。その形状から東光寺古墳は、南開口の横穴式石室であり、玄室部分は奥壁から開口部を向いて左側(東側)が広がる左片袖の石室であることが明らかとなった。ただ、石室の遺存状態は悪く右側壁は基底部のみで、左側壁でも最大5石程度が遺存しているだけであった。遺存していた石材の状況から、石室の規模は全長4.4m、玄室長2.5m、玄室幅1.3~1.4m、羨道部長2.2m、羨道部幅0.85mを測り、石室の軸はN 8° Eをとる。

a. 玄室部

奥壁 玄室奥壁の基底部は大きくは3石で構成されており、奥壁の東側は最大長0.65m、高さ0.5m前後の大形石材を使用し、奥壁西側は2石を積み上げて東側石材に相当する高さに調整している。基底石は長さ0.5m、高さ0.24mの長方形石材で、その上に長さ0.5m、高さ0.28mの長方形石材を使用しその間に0.2m前後の石材を詰め込んでいる。三石目の石材は東側基底石と西側2段目の石材に架かるように長さ0.56m、高さ0.18mの長方形の石材を横位に据えている。

左側壁 奥壁から羨道部を向いて左側の左側壁は右側壁に比べて遺存状態は良く、玄室床面から最大高1.15mまで残存していた。左側壁の石材は石室床面から1.0mまでの高さで石室内内側に約0.2mせり出した状態にある。このせり出しは床面から天井部へ向かっての持ち送りと思われるが、大形石材のその出が顕著であり、かつ各石材が規則的にせり出していないことから土圧によって微妙に動いた可能性が高い。

左側壁の基底石は長さ0.4~0.55m、高さ0.3~0.4mの石材で、石材を基底石の上面の高さに揃うように横位に据えている。基底石の上の2石目の石材は長さ0.35m、高さ0.15~0.2mを横位に据えることを基調にし、その間に小形石材を詰め込んでいる。基底石上面から上方へ1mあたりでは長さ0.9m、幅0.4mの石材を最大にして長さ0.3~0.65m、高さ0.15~0.35mの石材を横位を基調にして据えている。左側壁は奥壁から南へ約2.35mで一辺0.35m前後、長さ0.4m以上の石材を立てて袖石に使用しており、左側壁から袖石までの出は0.45mを測る。

右側壁 右側壁は遺存状態が悪く基底石とその上部の一石程度が残っているのみであった。右側壁の基底石は長さ0.4~0.75m、高さ0.2~0.35mの石材を横位に据え、基底石と同規模の石材と0.2m前後の石材を使用している。基底石は据え付け溝を掘り込んだ後に石材を据えていることまでは確認できたが、石室の現状保存の方針が決定したために上面のみの確認にとどめ、その深さまでは確認できていない。

玄室床面 玄室床面は玄室床面の標高は22.7m、床面積3.5㎡を測り、わずかに傾斜する地山面に明黄褐色細粒砂(第27図5層)を入れて水平に敷設するとともに石室据え付け溝を埋めている。当初は敷設土に含まれる礫を玄室床面に敷かれた礫と考えたが、礫が均等でなくまばらであることから礫敷きではないと判断した。床面直上には数か所で角礫があり棺台の可能性を検討したが、角礫は均等な配置ではなくその上面も平坦ではないため棺台と断定するまでには至らなかった。

玄室床面出土遺物 玄室床面からは須恵器・土師器のほか鉄製品(刀子1点)が出土した。土器は奥壁に接して分布する一群(A群)と左袖部に分布する一群(B群)があり、玄室中央にも須恵器

杯身1点が出土した(第30図)。

A群は土師器壺1点のほか、須恵器小型短頸壺1点(32)・須恵器長頸壺1点(33)・須恵器杯身2点(28・29)・須恵器杯蓋3点(26・27・31)である。須恵器長頸壺(33)は奥壁と右側壁のコーナー部分に正位の状態であり、その北西奥に須恵器小型短頸壺(32)が奥壁と右側壁の間に挟まった状態で出土した。なお、小型短頸壺とセットとなる須恵器小型蓋(31)は玄室床面からは0.15m前後高く、奥壁から1.3mの位置で左側壁に接して出土した。

須恵器杯身(29)は奥壁から0.4mの玄室中央ライン上で出土した。須恵器杯身(28)は、同じく玄室中央ライン上で奥壁から1.5mの位置で出土した。須恵器杯蓋(26)は奥壁に接して左側壁から0.3mの位置で、須恵器杯蓋(27)は右側壁に接して奥壁から0.5mの位置で出土した。なお、玄室中央の須恵器杯身(28)の西0.2mには、長さ0.3m前後の平石がある。

棺を想定できる鉄釘や人骨の出土は認められなかったが土器の配置から奥壁西半部で奥壁から1.5m程度の範囲に遺体を据えた可能性も考えられる。

B群は左袖部に東西0.5m、南北0.5mの範囲に集中して出土した。土師器長頸壺1点(37)、須恵器短頸壺2点(39・40)、須恵器杯身3点(35・36・38)、須恵器杯蓋1点(34)で一辺0.15m前後の平石を中心にある。土師器長頸壺(37)は倒位の状態であり、その北西0.2mで須恵器脚付き短頸壺(39)が、南西0.25mで須恵器短頸壺(40)があり、須恵器短頸壺(40)の上に杯身2点(35・36)が、土師器長頸壺(37)の北側で左側壁に近接して須恵器杯身(38)と須恵器杯蓋(34)がある。また、これらの土器を除去した段階で、土師器長頸壺の直下で鉄製品(刀子)が出土した。

A群・B群の土師器壺・須恵器短頸壺内には土が充填されており、土器内に遺物・植物遺体があるかどうかを確認するために水洗いしたもの、肉眼観察では遺物・植物遺体とも確認できなかった。

b. 羨道部

羨道部側壁 羨道部は玄室部以上に中世以降の攪乱が大きく及んでおり、床面の一部を確認するとともに両側壁の基底部の一部を確認したのみである。左側壁は大半が東壁に食い込んだ状態であり、さらに遺存状態も悪く袖石から南の一石が基底石として残っている程度で、その南側の石材は中世段階に移動していた可能性が高い。右側壁は基底石と思われる石材が3石程度残っていたが、それぞれの石の石室側の面が床面に対して直立するような状況ではなく、床面から上方(西側上方)に広がった状態である。この右側壁の状況が本来の状況を反映しているものと仮定すると天井石を有しない解放型の羨道部となるが、現状ではその可能性は低いと考えており、羨道部の南側壁の基底石は中世以降の攪乱、土圧により基底石が上方に広がったと考えている。

羨道部床面 羨道部床面はわずかに残っている程度であり、遺物も出土しなかった。ただ、残存する羨道部床面の標高は22.9mであり、玄室床面の標高22.7mとは比高差0.2mで、羨道部が玄室床面よりも高い状況である。

羨道部下層遺構 削平された羨道部床面の下層で8石の石材を検出した。この石材は左袖石の北端から南へ0.7mの位置から南西方向に弧を描くように配されており、北端の石材は羨道部基

底石の下にもぐりこんでいる。各石材は一辺0.2m前後、厚さ0.1m程度のもので、現状保存のために一石を除去した段階で確認したところ、上面幅0.45m、深さ最大0.2mで断面「U」字形の溝状遺構(第28図6層)を検出した。この溝状遺構は羨道部に設けられた排水溝とその上面に敷かれた蓋石と思われるが、羨道部東側壁の基底石を除去していないため、蓋石が左側壁からさらに延びるものかどうかは不明である。なお、羨道部で排水溝は確認できたものの玄室部での排水施設はない。また、石室主軸に平行するように排水溝が存在する例が多いが、東光寺古墳では山側に向かって排水溝が設けられている。これは現地調査段階でも降雨の翌日でも山からの水が側壁の間を伝って流れている状況であり、丘陵上位からの雨水を集水するために造られたものである可能性が高い。

3) 出土遺物

(1) 東光寺跡出土遺物

東光寺跡の調査では整理箱にして6箱の遺物が出土しており、内訳は土器類・鉄器類・石器類で、土器類は東光寺古墳石室から整理箱で2箱程度、東光寺跡関連遺物として2箱程度、東光寺跡に関連した石塔(五輪塔)が2箱程度である。なお、出土遺物の詳細は付表2の土器観察表で記し、主な概要を記述する。

① 平坦面B 出土遺物(第31図10～12・16・17)

東光寺古墳石室から出土した土器類・鉄器は別項目で記述し、東光寺跡に関連した遺物の概略を記す。

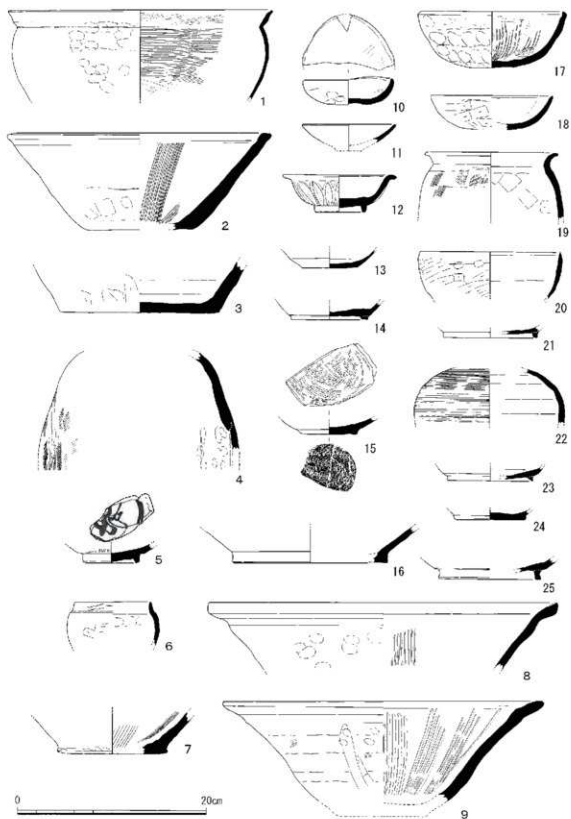
平坦面Bでは検出遺構で記述したように古墳を壊して平坦面Bを成形しており、古墳石室崩落土とともに石室の右側壁から古墳の西側の堆積した包含層から出土した。包含層出土遺物には土師器皿、輸入磁器(白磁・青磁)、瓦質播鉢などがある。

土師器皿(10)は、歪みによるものなのか、敢えて円形を避けて楕円形に仕上げたものかどうかは定かではない皿である。やや上げ底気味の底部から碗状に立ち上がるもので器壁は厚く0.7cmを測る。口縁端部は上方に尖り気味におさめる。白磁皿(11)は、細片であり器壁の厚さは0.3cmを測る。内外面とも無文である。底部の形状は不明であるが、白磁皿V2類と考えられる^(B1)。青磁皿(12)は、体部外面に蓮弁文様を施した高台付きの皿で、内面見込み部には花卉を表現した文様があるが、厚い釉薬によってその文様が不明瞭になっている。龍泉窯の製品と思われる形態の特徴から横田・森田型式編年の皿Ⅲ-4類^(B1)で13世紀後半以降の製品である。土師器底部(16)は、平底の底部片で鉢底部の可能性もある。瓦質播鉢(17)は瓦質土器で内側に播鉢状の条痕を不規則に配置したもので、碗形の器形でありながらも播鉢として使用しているものである。

10～12・17は平坦面Bの造成時期を示す資料と思われる。

② 平坦面C 出土遺物

平坦面Cでは、石列S X 03の覆土、S D 35の埋没後に再堆積した石材群に混在して出土したものがあり、S D 05や整地層などからの出土遺物はなかった。また整地層精査中からも遺物は出土していない。



第31図 東光寺跡出土土器実測図

石列 S X03 上層出土遺物(第31図1～3)

瓦質鍋(1)は、体部上半部より最大径がある半球形の体部で、「く」の字形に屈曲する頸部から斜め上方に短く延びる口縁部に続くもので、口縁部と頸部外面の境は肥厚して段状を呈している。受け口状口縁の退化したものである。陶器播鉢(2)は、越前あるいは信楽焼の播鉢で、底部は平底で口縁部内面に退化したような沈線が巡り、内面に均等に条痕を配していることから15世紀末以降と思われる。陶器甕(3)は底部片で体部及び口縁部が欠損しており時期決定の資料を欠く。

不明遺構 S X04 出土遺物(第31図5～9・第32図S1～S3)

青磁碗(5)は、削り出しによる低い高台である。中国青花の染付で、外面に鎬が認められる。瓦質短頸壺(6)は、肩部の張らない卵形の体部で、口頸部は短く直立する。瓦質播鉢(7～9)は瓦質あるいは陶質播鉢で焼成が甘いと思われるものである。8・9は斜め上方に延びる体部から、口縁部は屈曲気味に長く広がる。内面には等間隔に条痕を配している。石材とともに五輪塔の一部が3点出土した。S1は、基礎(地輪)と思われるもので、二面の一部が平滑面が確認できるが、他の二面は欠損している。平滑面の一面(表面)には梵字一字が刻まれている。S2は地輪で下面は地面に埋め込むために平滑面を成形していない。表面には四行の刻印があり、年号(□文カ 甲午)、氏名(憲叟)、戒名(□範禪定門)、月日(□月三日)とある。甲午で文の年号があり、出土遺物の年代から天文三年(1534年)に造られた五輪塔の可能性が高い。S4は団形の水輪と思われ、梵字が一字刻まれている。

石列 S X03の崩壊後に再堆積した覆土(上層)から遺物(1～3)、S X04(5～9)は、東光寺跡が廃絶した時期を表す資料と考えられる。

平坦面 D 出土遺物(第31図13～15)

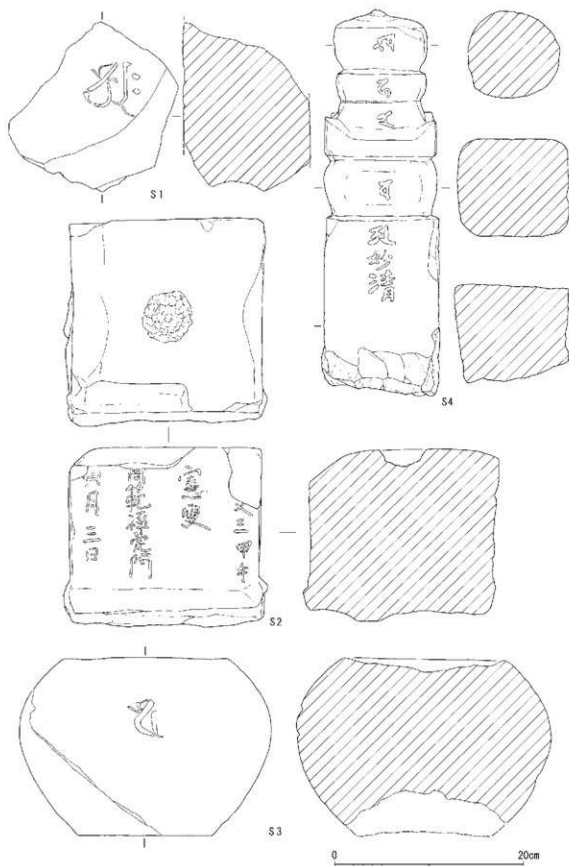
平坦面Dでは柱穴群のうちS P14の掘形から須恵器細片が出土したが、図示できる資料ではなかった。ただ、平坦面Dの柱穴群の遺構検出中に土師器片・黒色土器碗の細片が出土した。土師器(13)は碗あるいは杯の底部片で、平底を呈する。須恵器(14)は、杯あるいは碗の底部片で、底部と体部の境に低い退化した高台を貼り付けている。黒色土器碗(15)は、平底の底部から斜め方向に立ち上がる体部へ続くもので、底部外面は糸切りにより切り離している。内面はていねいにヘラミガキ調整している。平坦面Dの柱穴群上層の包含層では、11世紀後半の遺物が出土しており、出土遺物から東光寺跡が11世紀後半(平安時代中期)に開設された可能性がうかがえる。

市道北拡張区出土遺物(第31図21～24)

市道に設けたトレンチで、市道下層(第22図17層)から出土した。須恵器底部片(21)は杯Bあるいは碗の底部片で、低い高台を貼り付けている。須恵器壺(22)は古墳時代の壺で、外面にはていねいなカキメを施している。土師器碗(23・24)はいずれも底部片で断面三角形の低い高台を貼り付けているもの(23)と平高台(24)がある。

平坦面 E 出土遺物(第31図4・18～20)

平坦面Eでは上層で焼土を含む土坑(S K32・33)を、下層で土師器片を含む落ち込み(S X02)



第32図 東光寺跡出土五輪塔実測図

を確認した。上層の焼土周辺から土師器碗(18)が出土した。土師器碗(18)は内湾気味に浅く立ち上がる体部で、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部外面はヘラケズリ調整を施し、奈良時代のものである。土師器碗(20)は深い碗状を呈し、口縁部は短く尖り気味におさめるもので、東壁の精査中に13層から出土した。土師器甕(19)は、地山直上で土器片が散在した状態で出土したものである。甕あるいは壺の体部片がほとんどで、唯一図示できた資料である。なで肩の体部で、外湾気味に短く立ち上がる口縁部に続く。古墳時代中期までの資料と思われる。須恵器横瓶(4)は、古墳時代の楕円形を呈する横瓶の体部上半の破片で、北に隣接する東光寺古墳から流れ落ちた遺物の可能性がある。

平坦面Eでは下層で須恵器出現以前の土師器甕が、その上層では奈良時代の可能性がある土師器が出土したが、いずれも細片資料である。

3 トレンチ表土出土遺物(第31図25・第32図S4)

25は須恵器杯Bあるいは碗の底部片で、やや高めの高台を貼り付けている。重機による表土掘削中に出土した。S4は、市道に露出していた、16世紀^(R17)と思われる一石五輪塔で、高さ40.8cmを測る。地輪部分には梵字のほか、「妙清」と刻まれている。

(2) 東光寺古墳出土遺物

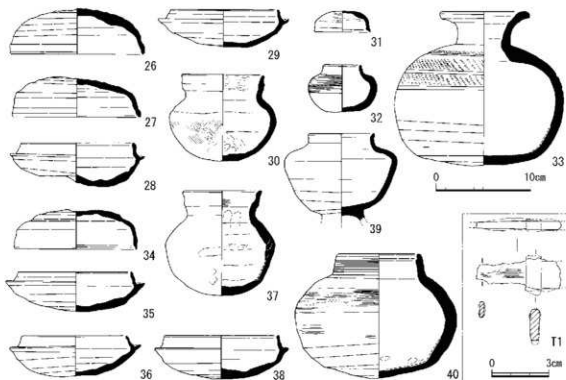
東光寺古墳では石室内から須恵器13点、土師器2点、鉄器1点が出土した。検出遺構で記述したように、玄室床面から出土した遺物は奥壁近くで見つかったA群と左片袖部分で集中して見つかったB群がある。

① A群出土遺物(第33図26~33)

須恵器杯蓋(26・27)は口径13.5~14.0cmを測り、天井部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリ調整を施している。須恵器杯身(28・29)は口径11.3~11.8cm、器高4.0~4.2cmを測り、立ち上がり高は1.5~1.7cmで直立あるいは斜め方向に立ち上がる。杯部外面の1/2程度の範囲にヘラケズリ調整を施す。なお、28は奥壁ではなく玄室中央に1点のみ出土しているが、ここではA群として扱った。須恵器短頸壺(32)は奥壁と右側壁の間に挟まった状態で出土したもので、器高5.0cmの小型壺である。須恵器小型壺蓋(31)はA群の床面ではなく、床面から15cm上方の崩落土から出土した資料であるが、32とセットをなす蓋である。須恵器広口壺(33)は扁球形の体部で上半部にはいねいな沈線文と列点文を加飾している。土師器長頸壺(30)は扁球形の体部で口縁部は外湾気味に立ち上がる。

② B群出土遺物(第33図34~40)

須恵器杯蓋(34)は口径13.0cmを測り、天井部外面の1/2程度の範囲にヘラケズリを施している。口縁部内面には不明瞭な沈線が巡る。須恵器杯身(35・36・38)は口径11.5~12.0cm、器高4.2~4.6cmを測り、杯部外面の1/2の範囲にヘラケズリ調整を施す。杯部の立ち上がり高は1.2~1.4cmで38では内側に不明瞭な沈線が認められる。脚付き壺(39)は、肩部の張った体部から直立気味に短く立ち上がる口頸部へ続くもので、体部下には脚部が付くが脚部の大半は欠損している。短頸壺(40)は扁球形の体部で短く内傾気味に立ち上がる口頸部となる。口縁部内側には沈線状の段が



第33図 東光寺古墳出土土物実測図

一段設けられている。土師器長頸壺(37)は球形の体部で複合口縁形の口頸部へ続くものである。

石室内出土の壺には土が充填されており、慎重に水洗いしたものの土器内からは植物遺体を含めて何も出土しなかった。

③鉄製品(第33図T1) 鉄製刀子(T1)は、石室床面で、土器B群を除去した段階で検出した。刃部・茎部が欠損しており、残存長4.5cmを測る。茎部には木質が残っている。

4. 総括

1) 東光寺跡について

東光寺跡の調査では3か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。1・2トレンチでは顕著な遺構・遺物は検出できなかったものの、堆積土の大半が細粒砂とシルト層であり、その間には植物遺体を含むオリブ黒色のシルトの堆積層があり、現在水田として使用されているか所がかつては湿地帯であることが明らかとなった。この湿地帯は東光寺跡が立地するか所で東・西の丘陵が狭まる狭隘な箇所であり、近接して流れる伊佐津川の川岸に近い湿地帯であるとともに東の丘陵側の湧水によって常時耐水した状況であることが明らかとなった。

3トレンチの丘陵部側では、調査前の踏査によって4か所の平坦面を確認しており、最高位の標高30m前後の測る平坦面Aがもっとも広く、下位にある標高25mの平坦面Bへと続き、今回の主な調査対象地である平坦面C・Dへと続く階段状地形を確認している。そのうち、平坦面Bは古墳を壊して平坦面を形成しており、古墳解体時に混入した土器類から平坦面Bは15世紀後半段階には平坦面を形成していることが明らかとなった。平坦面Cでは後世の削平、現代の田畑の開

壁によって大きく削り取られており、建物跡は検出できなかったが、建物の地盤である厚い整地層を確認するとともに、整地層の上層でわずかに石列(SX03)を検出した。この石列の覆土からは16世紀後半段階の土器類が出土しており、仮にあったかもしれない建物と石列は16世紀後半段階に壊されている可能性が高くなった。平坦面Cの北東端では平坦面Cの裾に掘られた溝とともにその上面に石材が多量に散在しており、平坦面Cに造られた石列が壊された可能性が考えられ、SX03と同様、その石材に混じって16世紀後半の土器類とともに「天文三年」(1534年)と記された可能性が高い五輪塔の一部(地輪)も出土している。

整地層の下層では山からの流水・湧水を制御するための暗渠があり、建物造成のための地業がていねいに行われていることが明らかとなった。

平坦面Dの一部とその裾部では柱穴を20数か所確認し、柱穴の配列を検討したものの建物跡としてまとまるか所は認められなかったが、裾部に建物跡が存在していた可能性が高くなった。なお、各柱穴からはSP14を除いて遺物は出土しなかったが、その土器細片の特徴から12世紀段階の須恵器と考えられる。また柱穴群の上層にある包含層からは黒色土器・土師器皿・須恵器片が出土している。いずれも12世紀段階の資料であり、平坦面Bの造成以前の時期を示すものである。

東光寺跡の発掘調査から明らかになった状況は、平坦面を数か所成りして建物が存在していた可能性が高く、その成り時期は15世紀後半以降で、それ以前に丘陵裾部に12世紀段階の建物群が存在していた可能性が考えられる。

地名の残る「東光寺」から寺跡と断定できる資料はないが、丘陵斜面を利用して遺跡が存在することが明らかとなった。出土遺物から見たその時期はいずれも中世段階で、古代に遡る資料を含んでいる。中世段階の丘陵を利用した遺跡には城館・寺院・山城・古墓などがある。そのうち、山城は防御を目的とした遺構であり、土塁・堀切・切岸などがあるが今回の調査では確認できず、また古墓を思わせる遺構も出土しなかった。出土遺物では播鉢・輸入磁器などの土器類のほかに五輪塔が3点出土している。また踏査では平坦面Aでも五輪塔を確認している。この五輪塔は山城・城館での出土例も多く、五輪塔をもって寺院跡とは考え難い資料でもある。

これらのことから地名として「東光寺」とあるものの寺院として断定できる資料はなく、今後、周辺部の平坦面の状況を確認した上で遺跡の性格は明らかになるものと思われる。なお、調査地に近接する七日市には大永5(1525)年創建と加佐郡誌に記されている「西光寺」が建立されているが、西光寺の南延長部に今回の調査地がある。

2) 東光寺古墳について

東光寺古墳(SX01)は東光寺跡に伴う平坦面Bの造成に伴って壊された推定直径135mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設としている。ただ、平坦面造成によって大きく壊されており墳丘規模と高さ、石室の天井までの高さなど大半の内容は不明であり、石室の床面と基底部石材が残存している程度であった。

東光寺古墳の石室は南開口で東側に張り出しをもつ左片袖の石室で玄室長2.5m、幅1.3~1.4mと小規模なものである。古墳の基部は標高20m前後の斜面地に立地していたようで、調査地内で

は古墳1基であるが、その北12mの平坦面C東拡張区の東壁土層断面で古墳石室の石材と思われる所があり、東光寺古墳のみの単独墳、あるいは2～数基程度の古墳が存在する程度であったと思われる。

石室内床面の出土状況から土器はA群とB群に分けることができ、その土器の配置状況から左片袖部分に片づけられた状態のB群が先行し、新たに追葬された段階にA群の土器を置いた可能性が高い。

A・B群の土器、特に杯身・杯蓋の特徴を見ると立ち上がり高さや傾斜角度、受け部の出、天井部(あるいは底部)のケズリの及んでいる範囲などから大差はなく、一型式の範疇に納まる形態・技法であり、陶邑編年のTK10型式(6世紀前半)の特徴を備えている。ただ、B群の須恵器杯身の口縁部内側にわずかににぶい沈線が巡る資料(35・38)があるが、杯蓋では口縁部から天井部にかけて弧状に立ち上がるものと口縁部と天井の間に変化をつけているもの(34)がある。

3)舞鶴市(湾岸奥地区西舞鶴)の横穴式石室

舞鶴市には450基の古墳が確認されており、そのうち横穴式石室を埋葬施設としているものが120基程度ある。

西舞鶴域は伊佐津川流域とその河口部である舞鶴湾の海浜部に古墳が分布しており、50基程度の古墳が存在するともいわれている。この地域の古墳は古墳時代前期に直葬で組合式石棺を埋葬施設とし、鉄剣・鉄鏃・銅鏃などが出土した切山古墳、後期に入って無袖式の石室を埋葬施設とする白杉古墳、上殿古墳(今田)、天狗岩古墳(引土)などが知られているが切山古墳を除いて発掘調査例はなかった。近年では海浜部の字喜多の喜多家奥古墳⁽³⁹⁾・字下安久で三角古墳⁽⁴⁰⁾の調査が行われた。喜多家奥古墳は直径12mの円墳で、全長6m前後の右片袖の横穴式石室で支室長3.45m、幅1.7mを測り、東光寺古墳に後続するTK43～TK217型式の須恵器とともに直刀・刀子・鉄鏃のほか、鏡・鞍・飾金具・帯金具などの馬具、ガラス小玉・管玉・霰玉・切子玉などの多彩な副葬品が出土している。

その中で今回新たに検出した東光寺古墳は石室の形態(左片袖)から無袖式石室に先行する古墳であると考えられる。なお、若狭湾岸地域で発掘調査が実施された浦入西2号墳⁽⁴¹⁾は須恵器の型式からはほぼ同時期の遺物を出土しているものの堅穴系横口式石室とされており、東光寺古墳とは系譜を異にする同時期の古墳か、あるいは東光寺古墳に先行する時期の古墳と思われる。

浦入西2号墳・喜多家奥古墳・三角古墳が若狭湾岸あるいは舞鶴湾に面した海浜部に立地するのに対して、東光寺古墳は湾岸域から奥深く入り込んだ舞鶴市でも南側の境界域にある。地形でも先述したように伊佐津川が山間部を抜け、平野部に入る狭隘な地形にあり、前者の古墳が外交・塩・漁撈を中心とした集団の墓に対して東光寺古墳は若狭湾(あるいは舞鶴湾)から丹波国・畿内への交通の要衝の地に築かれたものと考えられる。

(石井清司)

- 注1 『舞鶴市遺跡地図』（『舞鶴市文化財調査報告』第15集 舞鶴市教育委員会）1990
- 注2 小川高「近世の郷土第2章江戸時代の郷土第7節交通の発達（一）陸上交通」（舞鶴市市史編さん委員会編『舞鶴市史通史編（上）』）1993
田辺藩主の参勤交代には七日市から真倉まで山崎渡り所があり、伊佐津川を渡ったことが知られており、今回の調査地が参勤交代の街道としてしようされたかどうかは定かでない。また一里塚も豊臣秀吉の一里制以後、近世交通制度の基礎として設置されたが、東光寺跡に近接してある一里塚のいつの時代に建てられたものかは不明である。
- 注3 坂根清之「郷土の自然環境二地形、（三）地形区分と地形誌」（舞鶴市市史編さん委員会編『舞鶴市史通史編（上）』）1993
- 注4 注2に同じ
- 注5 吉岡博之・松本達也ほか『京都府舞鶴市浦入遺跡群発掘調査報告書遺構編』（『舞鶴市文化財調査報告』第33集 舞鶴市教育委員会）2001
松本達也・吉岡博之ほか『京都府舞鶴市浦入遺跡群発掘調査報告書遺物編』（『舞鶴市文化財調査報告』第35冊 舞鶴市教育委員会）2002
田代弘・筒井崇史ほか『浦入遺跡群』（『京都府遺跡調査報告書』第29冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2001
- 注6 肥後弘幸・三好博喜ほか『志高遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第12冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1989
- 注7 高野陽子・田代弘「弥生中期の交易拠点における遠隔地地域間交流の一例－舞鶴市志高遺跡にみるキログラカを納めた「双耳壺」の評価－」（『京都府埋蔵文化財情報』第116号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2011
- 注8 吉岡博之『京都府舞鶴市行水遺跡発掘調査概報』（『舞鶴市文化財調査報告』第18集 舞鶴市教育委員会）1991
- 注9 梅原末治・赤松俊秀「最近発掘記事第六舞鶴市発見の銅鐸」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第二十冊 京都府）1940
- 注10 舞鶴市市民文化環境部文化財保護課松本達也氏のご教示による。
- 注11 岡崎研一「三角古墳群発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概要』第109冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2003
- 注12 松本達也『倉谷遺跡第2次発掘調査調査報告書』（『舞鶴市文化財調査報告書』第23集 舞鶴市教育委員会）1994
- 注13 京都府教育庁指導部文化財保護課記念物（『京都府中世城館調査報告書』第1冊－丹後編－ 京都府教育委員会）2012
- 注14 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」（中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社）1995
- 注15 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」（九州歴史資料館研究論集）4 九州歴史資料館）1978
- 注16 京都府丹後資料館森島康雄氏の御教示による
- 注17 横田明「一石五輪塔群の到達点と課題」（『龍谷大学考古学論集1』 龍谷大学考古学論集刊行会）2005
- 注18 松本達也『京都府舞鶴市喜多家奥古墳発掘調査概要報告書』（『舞鶴市文化財調査報告』第25集 舞鶴市教育委員会）1995
- 注19 伊野近富「三角古墳群第2次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概要』第115冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2005
- 注20 増田孝彦「浦入遺跡群平成8年度発掘調査概要（2）浦入西古墳群」（『京都府遺跡調査概要』第80冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1998

付表2 東光寺跡・東光寺古墳 土器観察表

(凡例)

- ・口径欄の記号 () : 復元径
- ・器高欄の記号 () : 残存高
- ・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
- ・- : 該当部位なし

報告番号	種類	器種	出土地点	法量 (単位は cm)			残存率	胎土	色調	焼成	形態・技法上の特徴
				口径	器高	底径					
1	瓦質土器	鍋	S X 03 上層	28.0	(9.5)	-	2/12	密	褐色 75Y6/1	良好	口縁部内面及び体部内面に横方向のハケ、体部外面にエビオサエ圧痕が残る。体部外面にスス付着。
2	陶器	椀鉢	S X 03 上層	26.0	10.3	11.0	2/12	密	褐色 10YR4/4 に ぶい・褐色 75YR7/4	良好	破面・雲葉模様の襷鉢で、高台をもたない平底の底部。体部斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁部は水平気味に面を持ちながらやや丸みをもっており、口縁部内面には不明瞭な沈線状の段がめぐる。
3	陶器	甕	S X 03 上層	-	(5.5)	17.0	4/12	密	灰色 N4/0 ～灰白色 75Y7/1	良好	平底の底部から斜め上方へ直線的に延びる体部。
4	須恵器	楕瓶	S X 02 精査中	-	/	-	/	密	灰色 N6/1	堅緻	口縁部及び体部下半部は欠損。ロコウ成形でひきあげ、頂部を粘土で充填している。体部外面は8条/1.9cm程度の浅い条痕のカキメを施す。その下にタキ痕を残す。
5	青磁	碗	S X 04	-	(2.1)	5.2	6/12	密	素地：灰白色 10YR8/2 釉薬：明淡 灰緑色	良好	高台部内面は黒基調に塗付されている。内底面には二重の繩線と中央に花模様を描く。外面には顔が認められる。中国青花染付。
6	瓦質土器	短頸甕	S X 04	8.0	(4.8)	-	2/12	やや粗	暗灰色 N3/0	軟	体部下半は欠損。卵形の体部で口縁部は直立気味に立ち上がる。体部外面に横方向のヘラズリを施す。
7	瓦質土器	椀鉢	S X 04	-	(4.6)	11.9	3/12	密	外面：灰白色 N8/0、断面 面：灰色 N5/0	やや軟	細片で底部の一部のみ。内面の条痕は8条/2.2cmで、破片のため条数は不明。
8	瓦質土器	椀鉢	S X 04	-	(7.2)	36.8	1/12	やや密	暗灰色 3/0	軟	細片で口縁部の一部のみ。内面の条痕の単位は不明。体部と口縁部の境に明確な沈線がある。
9	陶器	椀鉢	S X 04 上層崩落土中	34.0	(10.6)	-	4/12	やや粗	褐色 10YR5/1・ にぶい・黄褐色 10YR7/3	不良	底部は欠損しているが平底と思われる。底部からやや曲折しながら斜め上方に立ち上がり、口縁部は屈折して長く斜め方向に延びる。口縁部内面には体部との境に明確な段を有する。体部内面には5条を単位とする条痕が均等に配されている。体部内面下半部には襷りが明瞭に残る。体部外面は横方向のハケの後、ていねいにナデ消している。陶器と思われるが、焼成が甘く瓦質土器のような仕上げになっている。
10	土師器	皿	平地面B 石室西側斜面 包含層	92～ 100	3.0	3.5	6/12	密	褐色 75YR7/6	良好	土師器と思われるが、円形ではなく楕円形を呈している。内面に粗いハケが残る。
11	白磁	皿	平地面B 石室西側斜面 包含層	(10.0)	(2.0)	-	2/12	密	灰白色 25Y8/2	良好	底部及び体部下半は欠損、体部上から口縁部へは内湾気味に立ち上がる。
12	青磁	皿	平地面B 石室西側斜面 包含層	12.0	4.0	5.4	4/12	密	胎土：明赤 褐色 5YR5-6 釉薬：明 オリーブ灰 褐色 2.5GY7/1	良好	高台高7mmの輪高台から内湾気味に立ち上がる体部を呈し、口縁部は水平気味に長く延び、口縁部はわずかに垂下する。体部外面は蓮弁文様を施し、内面見込み部には花卉を表現した文様があるが、厚い釉薬によって不明瞭である。
13	土師器	杯/椀	平地面D精査中	-	(2.0)	6.0	4/12	やや粗	褐色 75YR7/6	やや軟	平底の底部片。摩滅により調整観察不可。
14	須恵器	杯/椀	平地面D精査中	-	(1.85)	10.0	8/12	堅緻	灰色 N5/0	良好	底部と体部の屈曲部に接して低い高台を貼り付けている。
15	黒色土器	碗	平地面D精査中	-	(1.8)	6.0	7/12	密	外面にぶい 黄褐色 10YR7/2、 内面：黒色 N2/0	良好	内面に密なミガキがある。底部外面は糸切り痕が残る平底、内黒釉。

報告 番号	種類	器種	出土地点	法量 (単位は cm)			残存率	胎土	色調	焼成	形態・技法上の特徴
				口径	器高	底径					
16	土師器	鉢か	平埴面B 石室西側斜面 包含層	-	(3.9)	16.1	1/12	やや粗	外面：浅 黄褐色 75YR8/4、 内面：橙色 25Y7/6	軟	細片のため器形・時期とも不明。
17	瓦質土 器	深鉢	平埴面B 石室西側斜面 包含層	(15.0)	6.0	5.0	2/12	やや軟	黄灰色 25Y4/1	良好	平底気味の底部から内湾気味に深く立ち 上がる体部から口縁部へ続き、口縁部 外面は内傾する面を持つ。口縁部内面は 内側につまみあげている。体部内面には 4条を単位とする条痕があり、深鉢とし ての用途が考えられる。
18	土師器	碗	S X 02 上層	(12.8)	(3.6)	/	1/12	粗	明赤褐色 25YR5/6	良好	平底気味の底部から内湾気味に深く立ち 上がる体部から口縁部へ続き、口縁部 外面は尖り気味におさまる。体部外面に 粗い横方向のヘラケズリが残る。内・外 面とも一部スガが付着。
19	土師器	甕	S X 02	(14.0)	(7.3)	-	3/12	密	にぶい褐色 75YR5/4	良好	下半部は欠損。なで肩の体部から外湾す る口頸部へ続き、口縁部は丸みをもっ ておさまる。体部外縁は縦方向のハケ。 内面下半部はケズリ、上半はナデ。
20	土師器	碗	S X 02 上層	(14.8)	(5.1)	-	3/12	やや粗	外面：橙色 5YR6/6、断 面：にぶ い赤褐色 5YR4/4	良好	体部下半が欠損。上半部は深い碗状を呈 し、口縁部は直立気味に立ち上がる。体 部外面に斜め方向の粗いヘラケズリ調整 を残す。
21	埴土器	杯/碗	市道北沢強区	-	(1.1)	10.0	3/12	堅緻	灰色 N5/5	良好	底部片で長方形の高台を貼り付けている。 口縁部及び体部下半部欠損、外面に12 条/1.5cm 程度のカキメをいはいに施 す。
22	埴土器	盃	市道北沢強区	-	(5.8)	-	2/12	密	灰色 N6/0	堅緻	
23	土師器	碗	市道北沢強区	-	(1.4)	(8.9)	1/12	やや粗	褐色 25YR6/6	軟	丸みをもつ体部片で、底部は断面三角形 の低い高台を貼り付けている。
24	土師器	碗	市道北沢強区	-	(1.1)	7.6	4/12	やや粗	褐色 25YR6/6	軟	平底で、やや突出気味で円盤状の底部。
25	埴土器	碗	3トレンチ南 層重機掘削中	-	(1.9)	(10.6)	2/12	堅緻	外面：灰白 色 N7/0 断面：に ぶい褐色 75YR6/3	堅緻	やや高めで、踏ん張ったような高台を貼 り付ける。
26	埴土器	杯蓋	東光寺古墳石 室内	14.0	4.8	-	完形	密	外面：灰白 色 25Y8/1 内面：青灰 色 5B6/1	良好	轆は不明瞭。天井部外面の1/3程度まで ケズリを施す。【A群】
27	埴土器	杯蓋	東光寺古墳石 室内	13.5	4.2	-	完形	やや粗	灰白色 N6/1	良好	轆は不明瞭。口縁部内面に不明瞭な沈線 がめぐる。天井部外面の1/3程度までケ ズリを施す。【A群】
28	埴土器	杯身	東光寺古墳石 室内	11.8	4.2	/	完形	密	暗青灰色 5BP4/1	良好	立ち上がり高は1.5cmで湾曲気味に立ち 上がる。受け部の出は0.5cmでやや上方 にめぐる。底部外面の1/3程度までケズ リを施す。後け直みが著しい。【A群】
29	埴土器	杯身	東光寺古墳石 室内	11.3	4.0	/	完形	やや粗	外面：青灰色 5PB2/1、内 面：青黒色 5PB2/1	良好	立ち上がり高1.7cmで内側に曲折気味に 立ち上がる。受け部の出は0.5cmで斜め 上に湾曲気味に立ち上がる。底部外面の 1/2程度までケズリを施す。【A群】
30	土師器	長頸盃	東光寺古墳石 室内	8.5	9.2	/	完形	やや粗	明赤色 5YR5/8	良好	頸部は直立気味に立ち上がり、やや曲折 したのに直立気味に立ち上がる。胴部 外面は縦あるいは斜め方向のハケ、口縁 部外面はヨコナデ、口縁部内面はハケ後 ヨコナデ。【A群】
31	埴土器	小型壺 蓋	東光寺古墳石 室内	5.8	2.2	/	完形	密	外面：黄灰 色 25Y5/1 オリーブ黒 7.5Y3/1	良好	轆は不明瞭。口縁部内側に沈線がめぐる。 天井部外面にカキメ状の条痕が残る。【A 群】
32	埴土器	小型短 頸盃	東光寺古墳石 室内	4.0	5.0	3.0	完形	密	外面：灰 色 N6/0 内 面：黄灰色 25Y6/2	良好	楕球形の体部で、口縁部は内湾気味に鋭 く立ち上がる。体部外面上半部に横方向 のカキメをいはいに施す。【A群】
33	埴土器	広口壺	東光寺古墳石 室内	9.5	16.3	/	完形	密	黄灰色 25Y6/1	良好	楕球形の体部で口頸部は斜め方向に延び る頸部から口縁部は頸部から段をもって 強く外反する。胴部上半部に3条の沈線 とその間に斜め方向の列点をめぐらせる。 胴部下半部は横方向のケズリ。蓋・口縁 部は直立気味に立ち上がる長い頸部から 外反する口縁部へ続き、内外面はいい いなナデ。【A群】

報告番号	種類	器種	出土地点	流量 (単位は cm)			残存率	胎土	色調	焼成	形態・技法上の特徴
				口径	器高	底径					
34	須恵器	杯蓋	東光寺古墳石室内	13.0	4.2	/	完形	やや粗	灰色 N6-1	良好	縁は不明瞭。口縁端部は尖り気味で内面に不明瞭な沈線がめぐる。天井部の1/2の範囲にケズリを施す。【B群】
35	須恵器	杯身	東光寺古墳石室内	12.0	4.2	/	完形	密	灰色 N6-1	良好	立ち上がり高14cmで内側に斜め方向で直線的に立ち上がる。受け部の出は8mm。杯部下平部にケズリを施す。【B群】
36	須恵器	杯身	東光寺古墳石室内	11.5	4.2	/	完形	密	灰色 N6-1	良好	立ち上がり高12cmで内側に斜め方向にやや湾曲して立ち上がる。受け部の出は7mm。杯部外面の1/2の範囲にケズリを施す。【B群】
37	土師器	兵頭壺	東光寺古墳石室内	8.2	11.1	/	完形	やや粗	暗赤褐色 5YR5-8	良好	球形の体部で直立気味に立ち上がる。胴部からわずかに曲折して口縁部へ続き、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部外面は斜め方向のハケが認められるものも不明瞭。口縁部は内面に横方向のハケ後ヨコナデし、外面はヨコナデを施す。【B群】
38	須恵器	杯身	東光寺古墳石室内	12.0	4.6	/	完形	密	黄灰色 2.5Y6-1	良好	立ち上がり高13cmで内傾気味に直線的に立ち上がる。受け部の出は6mmで断面三角形を呈する。杯部外面の1/2の範囲にケズリを施す。【A群で立ち上がり部の一部が出すもの大半がB群】
39	須恵器	脚付き壺	東光寺古墳石室内	7.0	(9.5)	/	脚部を離れて完形	密	外面：灰白色 N7-0、内面：5Y6-1	良好	胴部上部の肩の張りが強。口縁端部は反気味に短く立ち上がる。胴部下縁に1cm幅程度の範囲にケズリを施す。埋葬時に脚部を欠いて使用した可能性が考えられる。【B群】
40	須恵器	短頸壺	東光寺古墳石室内	8.7	13.2	/	完形	密	灰色 N6-0	良好	扁球形の体部で、胴・口縁部は内傾気味で直線的に立ち上がる。口縁部内面には段状の比喩が1条ある。体部の上半部と口縁部外面に横方向のいいなカキメを施す。【B群】

付表3 東光寺跡 石造物(五輪塔)観察表

報告番号	種類	出土地点	流量 (単位は cm)			石材	形態の特徴ほか
			高さ	幅	厚さ		
S 1	基礎 (地輪) か	S X 04	(179)	(146)	133	砂岩	方形と思われる。表・裏の二面の一部がわずかに残る。表面には天鼓雷音如来を表す梵字を刻印している。
S 2	基礎 (地輪)	S X 04	(189)	21.6	21.6	砂岩	方形で上部には直径5cm、深さ1.8cmの円形打ち欠けがあり、凹みから各辺にむかって礎石として再利用されたような掘り面がある。下部は高さ35cm程度までは、地面に埋め込むために粗い成形のみで仕上げられており、その上位は平滑に仕上げている。表面には右より「□文三 甲午 應聖、□龍神定門、□月三日」と刻印されている。
S 3	塔身 (水輪)	S X 04	188	(25.6)	269	砂岩	団形で上下は地輪・水輪を重ねるために平坦面を成形している。表面にはハの梵字が刻印されている。
S 4	一石五輪塔	市道表土	408	12.2	106	砂岩か	宝珠・講花・笠・塔身・基礎を一石で刻んだもので、基礎の下部には45cm程度の高さまでは粗い打ち欠きのみで、地面に掘り込まれていたものと思われる。基礎下部以外は平滑で、上から各部位ごとに梵字が刻まれており、基礎部分には梵字のほかは「妙清」とある。

付表4 東光寺古墳 鉄器観察表

報告番号	種類	出土地点	流量 (単位は cm)			形態の特徴ほか
			長さ	幅	厚さ	
T 1	刀子	東光寺古墳石室内	刃部：20 基部：25	刃部：24 基部：10	刃部：0.7 基部：0.5	刃部と基部の先端が欠損。基部には木質が残る。

3. 平成28年度伏見城跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都府保健環境研究所及び京都市衛生環境研究所新築(合築)工事に伴い、京都府健康福祉部の依頼を受けて実施した。調査地は、京都市伏見区村上町に所在し、発掘調査は現存する旧伏見診療所と京都府保健環境研究所間の空閑地に2か所のトレンチを設定して実施した。

京都府保健環境研究所敷地内では、京都府教育委員会が1977年の伏見診療所建設に伴って発掘調査を実施しており、調査トレンチ南側から江戸時代後期の木製品を含む湿地状の堆積を検出している。今回の発掘調査では、湿地状地形が調査対象地全域に及ぶのか、伏見城跡の遺構が残っているのかどうかを明らかにする目的があった。

本報告書では国土座標の世界測地系を用い、標高は東京湾平均海面を基準とした。

発掘調査に際しては地元周防町町内会、村上町町内会、西大手町町内会及び、京都市文化市民局文化財保護課、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の方々のご協力を得た。また、整理報告時の木簡解説及び関係資料収集に関して、岡山大学図書館、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター、岡山大学倉知克直氏、向日市文化資料館玉城玲子氏、京都大学防災研究所加納靖之氏のご指導、ご協力を得た。併せて記してお礼申し上げたい。

なお、調査に係る経費は、全額京都府が負担した。

〔調査体制等〕

平成28年度調査

現地調査責任者	調査課長	森 正
調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 主査	岡崎研一
	同 調査第3係調査員	竹村亮仁
調査場所	京都府京都市伏見区村上町395他	
調査期間	平成28年9月27日～12月15日	
調査面積	400㎡	

平成29年度整理作業

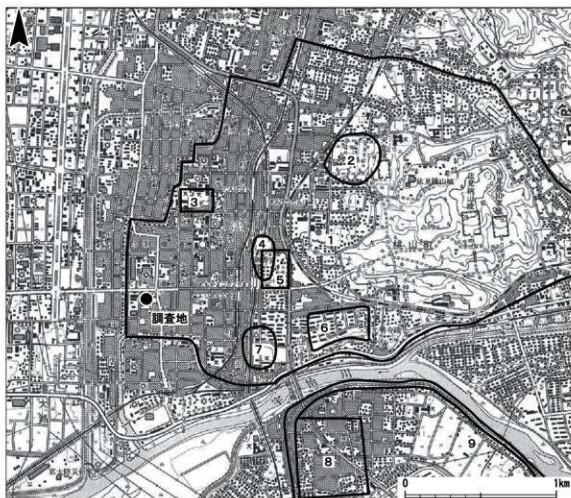
整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長	中川和哉
	同 副主査	岡崎研一

2. 位置と環境（第1図）

京都市伏見区は京都盆地の東縁部にあり、大阪層群から構成される桃山丘陵を挟み東西に低地部が広がる。調査地は桃山丘陵西側の氾濫平野に立地している。伏見区の南部には淀川水系の支流である宇治川が流れ、伏見はかつて大阪から京都までの水上交通の起点地であった。

調査地周辺では、桃陵遺跡で縄文時代晩期の土器が出土しており、最も古い時期の遺跡である。同じく桃陵遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓も検出されている。古墳時代の遺跡には須恵器や形象埴輪などが出土した桃山古墳群、後期の堅穴建物が検出されている福島太夫遺跡がある。奈良時代には板橋庵寺や御幸宮庵寺などが造営されたが、具体像は明らかになっていない。伏見の地は平安時代には貴族が狩りを行ったり、別荘地として利用され、院政期には白河上皇により鳥羽離宮が営まれた。

伏見において土地が大きく改変されたのは豊臣秀吉による伏見城築城である。伏見城跡は城下町を含めた東西3km・南北2kmを測る、広範囲な遺跡である。伏見城と呼ばれる遺跡は、その歴史などから豊臣秀吉の隠居屋敷である豊臣期指月屋敷(1592～1594)、豊臣頼誕生により本格



第1図 調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 京都東南部)

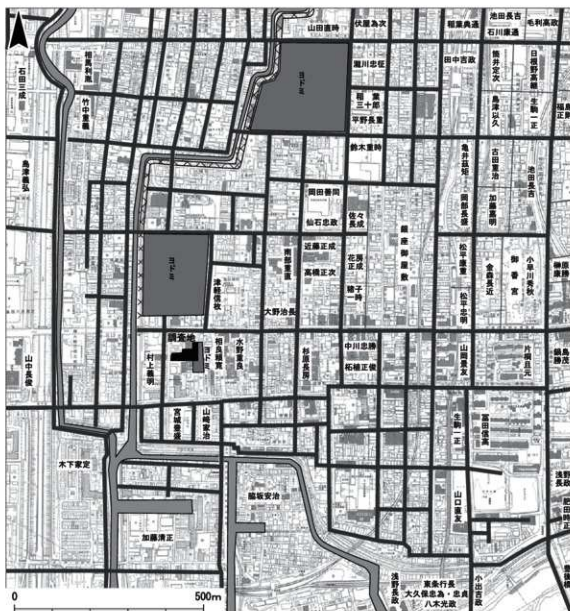
1. 伏見城跡
2. 桃山古墳群
3. 板橋遺跡
4. 金森出雲遺跡
5. 御幸宮庵寺
6. 指月城跡
7. 桃陵遺跡
8. 向島城跡
9. 太閤堤

的な城郭に建て替えた豊臣期指月城(1594～1596)、慶長伏見大地震(1596)による建物倒壊に伴って木幡山上に本丸を築いた豊臣期木幡山城(1596～1600)、関ヶ原の乱の前哨戦である伏見城の戦いで焼失した城を再建した徳川期木幡山城(1600～1623)の四時期に分けることができる。

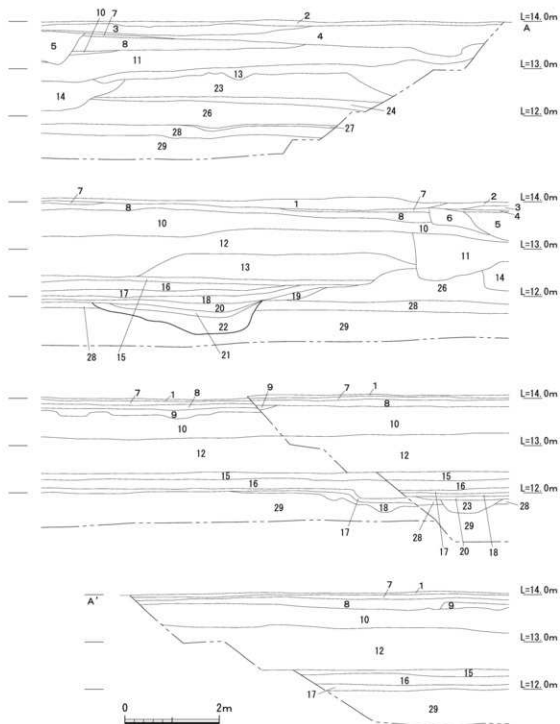
伏見城跡の南を流れる宇治川は、豊臣期の指月城築造時に堤(国史跡太閤堤)などを築き、大阪城までの水路として整備された。

伏見は1623年の伏見城廃城以後も、京都の商品流通を支える港湾都市として存続し、西国大名たちの屋敷は残されて国元と京都・江戸との連絡の中継地として利用された。また、1620年には廃城に先立ち江戸幕府によって伏見奉行所が設置された。

調査地は、伏見城跡の西端にあたり、西側には外堀が巡っている。伏見城に関しては多くの絵



第2図 第4期伏見城(徳川期木幡山城)城下町推定復原図
(日本史研究会「豊臣秀吉と京都-聚楽第・御土居と伏見城-」 図書出版文理閣 2001)



- | | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------------|--------------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 土 (整地土) | 10. 灰白色 (2.5Y 8/1) 極細粒砂 | 20. 灰白色 (5Y 7/1) 粗砂 |
| 2. 褐灰色 (10YR 6/1) 土 (整地土) | 11. オリーブ黒色 (5Y 3/2) 細粒砂
(レンガ・コンクリート含む) | 21. にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 粗砂 |
| 3. 明黄褐色 (10YR 7/6) 土
(礫多く含む・整地土) | 12. 石炭ガラ | 22. 黄灰色 (2.5Y 3/1) 粗砂 |
| 4. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 土 | 13. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 細粒砂 | 23. 黄灰色 (2.5Y 3/1) 粗砂 |
| 5. 攪乱 | 14. 褐灰色 (10YR 4/1) 細粒砂 | 24. 灰白色 (7.5YR 8/1) 極細粒砂 |
| 6. 攪乱 | 15. 褐灰色 (10YR 4/1) 粗砂 | 25. 灰白色 (10YR 7/1) 細粒砂 |
| 7. アスファルト | 16. 灰白色 (10YR 8/1) 粗砂 | 26. 赤黄色 (2.5Y 8/3) 粗砂 |
| 8. 明黄褐色 (10YR 7/6) 土
(礫多く含む・整地土) | 17. 褐灰色 (10YR 5/1) 粗砂 | 27. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 土 |
| 9. 灰白色 (10YR 7/1) 細粒砂 (整地土) | 18. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粗砂 | 28. 褐灰色 (10YR 6/1) 細粒砂 |
| | 19. 黄灰色 (2.5Y 6/1) 粘質土 (小石含む) | 29. 灰白色 (10YR 7/1) 細粒砂 |

第3図 第1トレンチ南壁断面図

図が現存しており、豊臣期の大名屋敷などが記載されているが、同時代資料は存在しない。役職名が豊臣期には拝命していないものや、江戸時代の屋敷との混同が確認できる。江戸時代資料である元禄 2 (1689) 年刊行の『京羽二重織留』第六巻「城州伏見大概」によると、調査地のある村上町東側には、松平伊予守(岡山池田藩)の屋敷があったと記載されている。

3. 調査概要

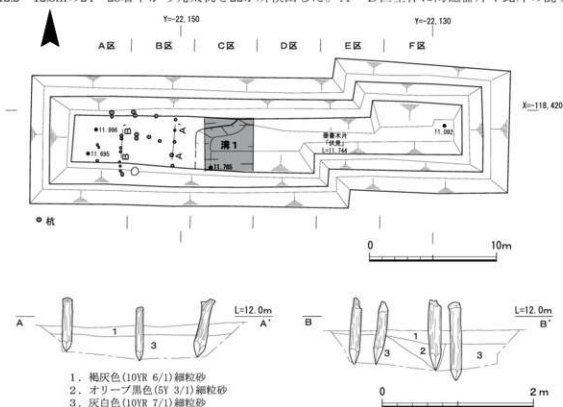
発掘調査は、対象地内に東西方向(第1トレンチ)と南北方向(第2トレンチ)に長いトレンチを「L」字状になるように設定することから始めた。調査地は盛り土が厚く堆積し掘削土量が多いため、第1トレンチの発掘調査を先行して実施し、埋戻し後に第2トレンチの調査へ移行した。トレンチは、幅10m×長さ38mと細長かったため、長辺を5mごとに区画し、遺物取り上げ用のグリッドを設定した。第1トレンチは西から第2トレンチは南から北へ、続けてアルファベットで表記した。

なお、伏見城にかかわる遺構は、第1トレンチ、第2トレンチともに検出できなかった。

1) 第1トレンチ

a. 層序

整地土、アスファルト、コンクリート、石炭ガラなど(1~12層)が、0.9~1.8mと厚く堆積しており、これらを重機によって掘削した。その下は、近・現代のゴミを含まない砂の堆積に変化したことから、人力掘削によって精査を繰り返し掘り下げた。トレンチ西側のA・B区では標高12.2~12.3mの24・25層中から丸太杭を22か所検出した。A・B区全体に陶磁器片や瓦片の混じ



第4図 第1トレンチ平面図・杭列断面図

淡黄色粗砂層(26層)が厚いところで約40cmあり、C区へ行くに従い地層の上面が低くなり消滅する。その下には、褐色細粒砂(28層)が水平にはほぼ同じ高さでD区まで存在する。さらにその下には灰白色細粒砂層(29層)が調査区全体で確認できる。26層東側の窪んだ部分に15～20層の水平層が充填されており、15～18・20層はトレンチ端まで続く。これらの窪んだ部分に堆積した層を除去すると21・22層からなる溝1を検出した。

標高約10.5mまで人力で調査したが、軟弱な地盤と湧水のため人力による掘削が危険と判断し、C区を重機によって部分的に深く掘り下げて遺構の有無を確認した。標高約10.5mで粘土層にかわるが、安定面を検出するには至らなかった。

b. 検出遺構

このトレンチ西部のA・B区から22本の杭からなる木製杭群と南北方向に掘られた溝1を検出した。

木製杭群 杭は1本あるいは2本対で検出した。本体部分は未加工で、表皮だけがはがされていた。杭は、先端が尖るようにいくつかの面を持ち加工されていた。杭の大きさは比較的そろっており直径約20cm、残存長60～100cmを測る。杭群の中には第5図で示したA-A'、B-B'のように南北方向に並ぶものもある。杭群は、26層から発見されることから、26層堆積後の遺構と考えられる。

杭列東側約3mから23層上面は落ち込み、標高約11.8mまで下がる。この内側にあたるC区以東は、約60cmの厚さで水平堆積が認められ、粘土がブロック状に混じり、樹皮や枝状のものが多量に混入するなど、人為的な整地との可能性が指摘できる。地層断面を見ると、26層が西側で高まった面を形成し、杭群が護岸しているとも考えられるが、26層東側の落ちが後世に削平された可能性もあり確定できない。後述するように幕末以後の地層である可能性が高い。

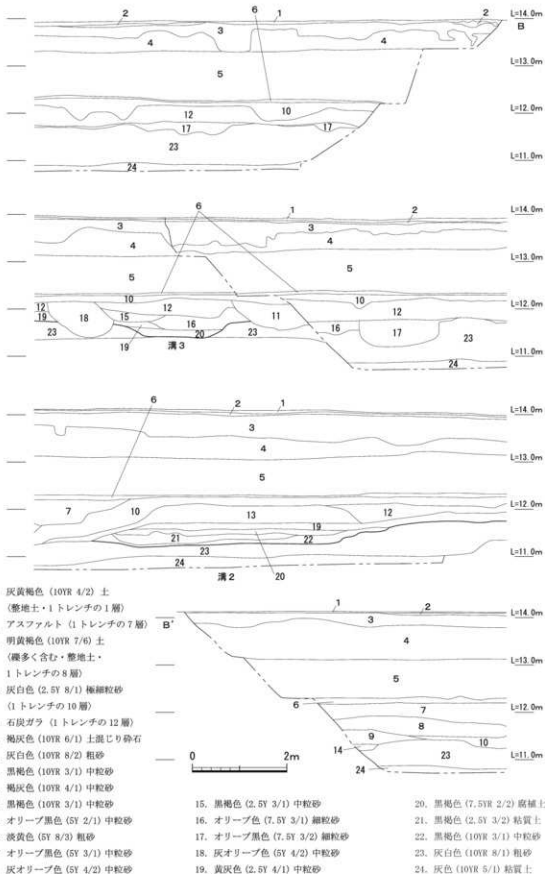
溝1 整地土と考えられる15～20層を外し、28層を切り込んだ状態で溝1を検出した。検出した標高は約11.8mで、幅3.6m、深さ0.8mを測る。埋土は、にぶい黄橙色粗砂(21層)、黄灰色粗砂(22層)である。

2) 第2 トレンチ

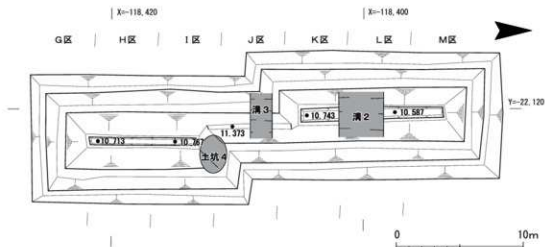
a. 層序

第1トレンチと同様、整地土、アスファルト、コンクリート、石炭ガラ(1～6層)などが約1.8mと厚く堆積しており、これらを重機によって掘削した。その下は、近現代のゴミを含まない砂を主体とする堆積層に変化したことから、人力掘削に切り替え掘り下げた。

第1トレンチとは近接しているがその層相が異なっている部分がある。6層と第1トレンチの15層は同じ標高で検出でき、上面が水平で明治期以降に盛り土として再利用された石炭ガラ層と接することから盛り土開始時の地表の可能性が有る。石炭ガラの最下面層の標高は両トレンチともに12.3～12.4mである。第1トレンチでは碎石が含まれている6層相当層は確認できない。10・12・17層は、それぞれ第1トレンチの15・16・17層に対応するものと考えられる。23層は、砂の粒度が異なるが層の厚さや標高から、第1トレンチ29層に対応するものと考えられる。23層



第5図 第2トレンチ東横断面図



第6図 第2トレンチ平面図

を切り込んで20～22層からなる溝2及び25層からなる溝3が確認できた。両方の溝ともに腐植質の堆積が見られることから、滞水していたことがわかる。

標高約10.7mまで人力による調査を行ったが、これ以上の人力掘削は壁面崩落の危険があるため中止した。K・L区で重機を用い下層の確認を行った。標高10.8mで粘質土にかわり、以下0.5mごとに砂層との互層になる。標高約9.0mまで掘り下げたが、安定面は検出できなかった。出土遺物はなく湧水が激しくなり、調査を終えた。

b. 検出遺構

第1トレンチから続く整地層と考えられる地層やK・L区で東西方向の溝2条を検出した。湧水が激しかったため平面では検出できなかったが、K・L区の東壁と西壁から落ち込みを検出したことから溝とした。北の溝を溝2とし、南の溝を溝3とした。

溝2 23層を掘り込んだ東西方向の溝である。素掘りの溝で幅6.2m、深さ0.3mを測る。埋土は、黒褐色腐植土(20層)、黒褐色粘質土(21層)、黒褐色中粒砂(22層)である。近世陶磁器、木製品などが出土している。

溝3 23層を掘り込んだ東西方向の溝である。素掘りの溝で幅2.2m、深さ0.2mを測る。埋土は、黒褐色腐植土(25層)である。近世陶磁器などが出土している。

土坑4 オリーブ黒色細粒砂(17層)を埋土とする不定形の土坑で、立ち上がりは断面でみられるほどはっきりしなかった。内部からは木質や江戸時代後半期の遺物が出土した。

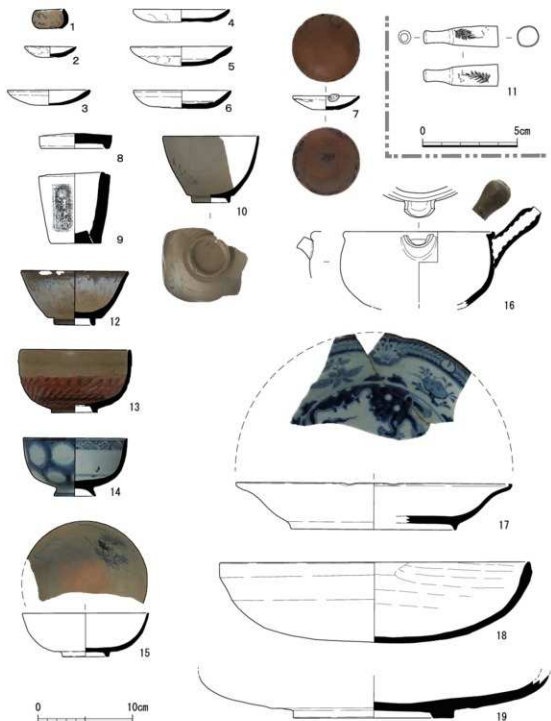
4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、近世陶磁器・漆器・木簡・木製品など、主に近世の遺物が出土した。土師器・近世陶磁器類の法量などの詳細は、出土遺物観察表を参照していただきたい。出土した遺物は整理箱5箱である。また、検出層が砂層で、埋土も砂層であったため、腐植質を含む溝以外の遺構の検出が困難であったことから、遺物混入の可能性は排除できない。

土師器・近世陶磁器類(1～3・5～17・19)、墨書木製品(46)、漆器椀(48)、青銅製品(11)は、

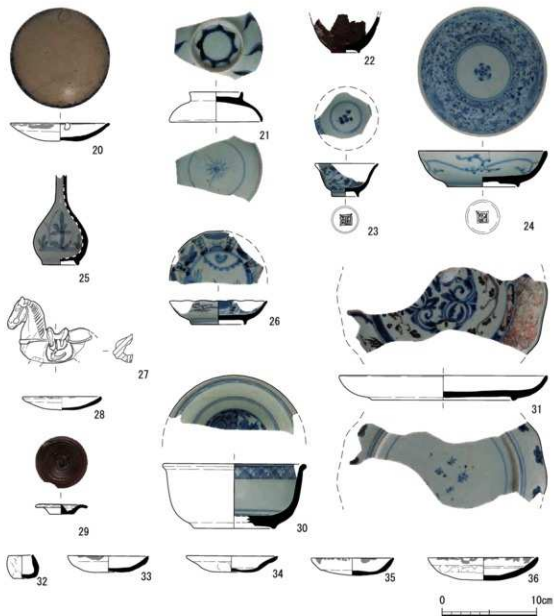
整地跡と考えられる第1トレンチ15～17層、第2トレンチ10・12・17層から出土した。土師器・近世陶磁器類(4・10)は第1トレンチ26層出土の遺物である。土師器・近世陶磁器類(20～27)は第2トレンチヨドミ出土遺物である。土師器・近世陶磁器類(28～31)、木簡(38～44)、漆器碗(37・47・49・50)である。土師器(32～36)は第1トレンチ29層、第2トレンチ23層出土遺物である。

1は土師器の小容器で、「つぼつば」と呼ばれるものである。外面に「の□」の墨書がある。2～6は土師器皿である。5・6は内面に沈線が巡っており、17世紀頃のものと思われる。4は



第7図 出土遺物実測図(1)

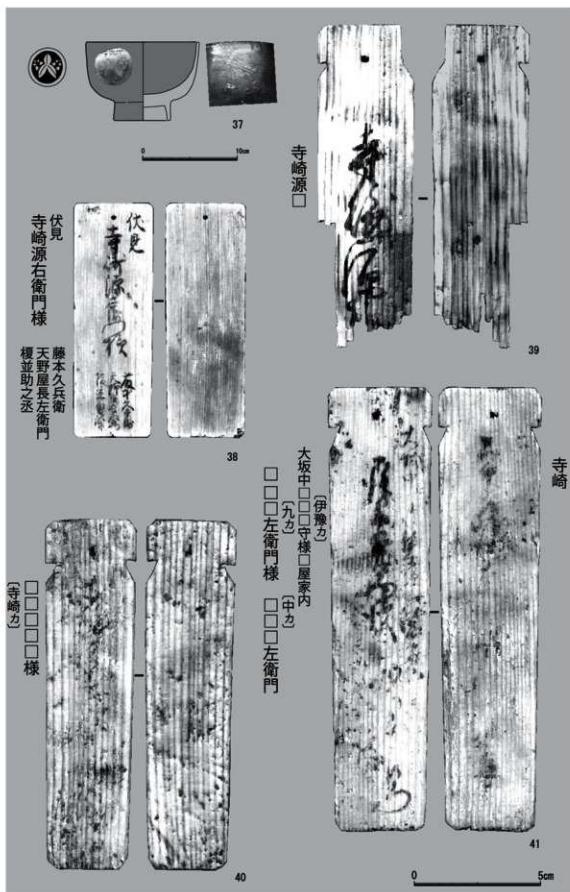
中世の土師器皿の可能性もある。7は京都信楽系の陶器燈明皿である。内面口縁部に陶土を菊花形に型整形した灯芯受けを貼り付ける。8・9は土師器塩壺で、8は蓋、9は身である。身の外面には「泉湊伊織」の印銘がある。18世紀中頃のものか。10は京都信楽系の陶器向付である。円形に成形した器を四方から窺ませて角型に成形する。外面に若松文を描く。高台畳付以外は施釉し、高台内に「瀬□□〔之助カ〕」の印銘がある。18世紀後半以降の製品とみられる。11は煙管の吸い口で、真鍮製である。2面に草花文を彫刻する。12は萩焼系と考えられる陶器椀で、透明釉上に白濁釉を施す。高台際を平坦に削る。18世紀末～19世紀にかけての製品と考えられる。13は美濃瀬戸系の陶器椀で、外面下半に櫛状の工具で連続刺突文を施す。18世紀後半以降の製品とみられる。14は肥前磁器(伊万里)染付椀で、外面に雪輪文を描く。腰の張った椀形で、高台は撥状に開く。18世紀後半以降の製品とみられる。15は京焼系の陶器椀で、内面には鉄軸で草花文を



第8図 出土遺物実測図(2)

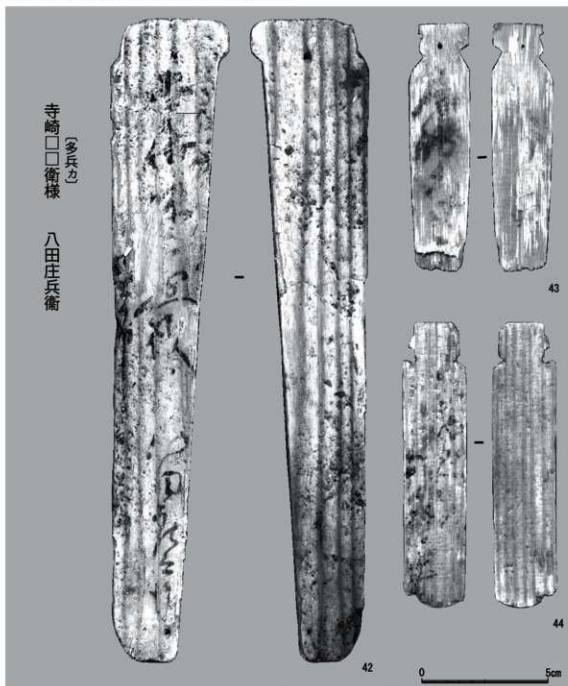
描き、葉文を上絵付する。16は京都信楽系の陶器片口把手付鍋で、いわゆる「行平」である。18世紀後半以降の製品とみられる。17は肥前磁器染付皿で、口縁部は輪花形で、端部に鉄軸(口紅)を施す。折縁皿的な形状で、見込みには龍を描いているものとみられる。焼継の痕跡が残る。17世紀末から18世紀前半頃にかけての製品とみられる。18は土師器焙烙で、18世紀頃のものともみられる。19は美濃瀬戸系の陶器鉢で、大形のものである。18世紀後半頃の製品とみられる。20は京都信楽系の陶器燈皿である。内面口縁部に陶土を菊花形に型整形した灯芯受けを貼り付ける。21は肥前磁器染付椀蓋で、広東椀に伴うものとみられる。外面には捺文、内面中央には榮螺文を描く。18世紀末～19世紀の製品とみられる。22は漆塗土師器椀である。外面には花文を彫り、内外面ともに朱漆を施す。外面の彫文の地の部分や葉脈などの彫り込んだ部分には黒漆を塗布する。23は中国清代の青花磁器椀で、小形のものである。外面に花唐草文を描き、高台内に角銘をもつ。宇治市万福寺松陰堂庫裡解体修理に伴う発掘調査の出土遺物に類例がある。18世紀後半頃のものとみられる。24は肥前磁器染付皿で、内側面から見込みにかけて花唐草文を描く。見込みには手描きの五弁花文を描く。高台は蛇ノ目凹形で、高台内中央に渦「福」銘がある。18世紀中～後半頃の製品とみられる。25は肥前磁器染付徳利で、体部に若松文を描く。小形のもので、いわゆる「御神酒徳利」である。18世紀末～19世紀の製品とみられる。26は肥前磁器染付皿で、口縁部は輪花形である。内側面の文様は、中国製青花磁器の芙蓉手皿に倣っており、見込みには三日月文などを描く。17世紀後半頃の製品とみられる。27は土師質の馬形で、伏見人形とみられる。28は土師器皿である。29は京都信楽系と考えられる陶器蓋で、急須などの小形品に伴うものとみられる。30は肥前磁器染付青磁鉢で、外面に青磁釉を施し、内面は染付で施文する。高台は蛇ノ目凹形で、18世紀後半頃の製品とみられる。31は肥前磁器色絵皿で、輪花形の口縁部をもつ大皿である。見込み中央に唐花文を染付し、その周囲に紫色顔料などで唐草状の樹文を上絵付する。内側面には赤色顔料で細かい格子文を上絵付する。高台内中央に「大明成化年製」銘をもつ。銘の周辺に1+4個のハリ痕が残る。18世紀中～後半頃の製品とみられる。32は土師器の小形容器「つぼつぼ」である。33～36は土師器皿である。36は内面に沈線が巡っており、17世紀以降のものともみられる。

木簡 38は2トレンチ溝2の黒褐色粘質土から出土した。木簡は幅3.1cm、長さ9.2cm、厚さ0.6cmを測る。表面上段に「伏見 寺崎源右衛門様」、下段に「藤本久兵衛・天野屋長左衛門・榎並助之丞」の名前が記載されていた。裏面には墨書はなかった。39は2トレンチ溝2の黒褐色粘質土から出土した。木簡は、幅3.8cm、残存長12.8cm、厚さ0.3cmを測る。表面には「寺崎源」と記載されていることから、38と同じ名前が記されたと考えられる。裏面に墨書は認められなかった。40は2トレンチ溝2の黒褐色粘質土から出土した。木簡は幅4.0cm、長さ17.5cm、厚さ0.05cmを測る。墨痕が認められるが判読できなかった。41は2トレンチ溝2の黒褐色粘質土から出土した。木簡は、幅3.6cm、長さ14.8cm、厚さ0.7cmを測る。墨痕の残りが悪いが、向かって左側の面には「大坂中□□□(伊豫カ)守棟□□屋家内」改行「□□□(九カ)左衛門様 □(中カ)□□左衛門」、向かって右面には「寺崎□□□□□」とあり差出人の名は判別できなかった。42は2トレンチ溝2の黒褐色粘質土から出土した。木簡は、幅4.2cm、長さ25.5cm、厚さ0.5cm

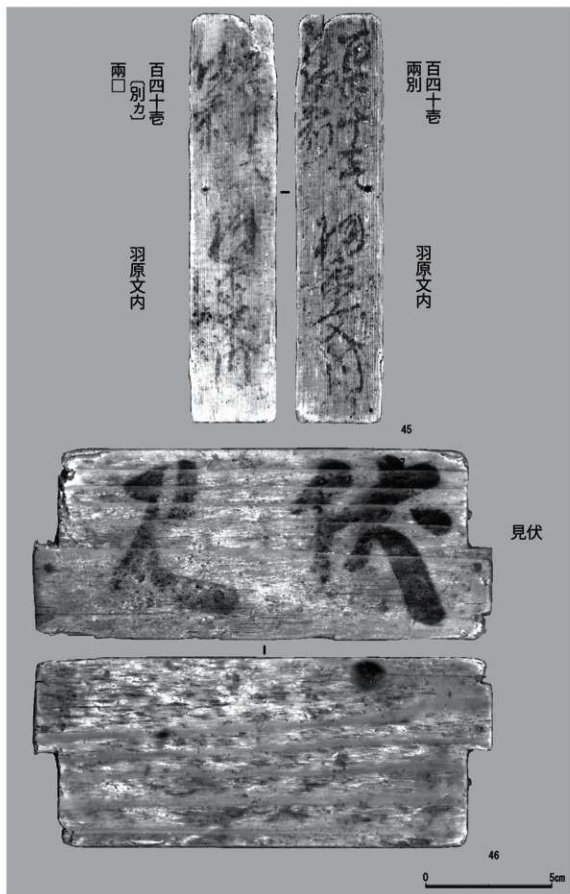


第9図 出土木製品赤外線写真と積文(1)

を測る。表面に墨書「寺崎□□〔多兵カ〕衛様 八田庄兵衛」と認められた。43は2トレンチ溝2の黒褐色中粒砂から出土した。木簡は、幅2.4cm、長さ9.7cm、厚さ0.3cmを測る。表面に墨書が認められたが、判読できなかった。44は2トレンチ溝2の黒褐色粘質土から出土した。木簡は幅2.5cm、長さ11.3cm、厚さ0.3cmを測る。表面に墨書が認められたが、判読できなかった。45は溝2から出土した木簡で、幅3.4cm、長さ16.2cm、厚さ0.2cmを測る。表裏面に「百四十巻 兩別 羽原文内」と書かれていた。46は1トレンチの17層から出土した拵の側板で、「伏見」と左から右に書かれていた。側板は幅7.5cm、長さ18.0cm、厚さ0.9cmを測り厚さ0.9cmで、升を復原すると、1.215ℓで1升の約2/3にあたる。



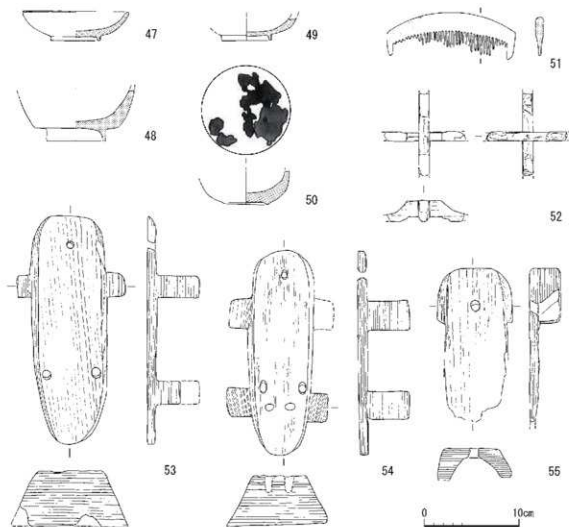
第10図 出土木製品赤外線写真と釈文(2)



第11図 出土木製品赤外線写真と釈文(3)

漆器 漆器碗 5 点が出土した。37はトレンチ溝 2 の黒褐色腐植土から出土した。体外外面は黒漆の塗られた後、沢渦紋が 3 か所に描かれる。口径12.0cm、器高8.0cm、高台径6.4cm、高台高1.6cmを測る。内面は黒漆塗った後に朱漆黒漆を施している。発掘調査地に隣接して新宮藩水野家の屋敷があったことが絵図に描かれており、沢渦紋は水野家の家紋でもあり、新宮藩水野家関連する遺物と考えられる。47は 2 トレンチ溝 2 の黒褐色粘質土から出土した器高の低い碗である。口径11.6m、器高3.2cm、高台径4.8cm、高台高0.4cmを測る。内外面に、黒漆を施す。48は 1 トレンチ17層から出土した。口縁部が欠損しており、高台径6.0cm、高台高1.5cmを測る。内外面黒漆を施す。49は 2 トレンチ溝 2 の黒褐色粘質土から出土した高台の低い碗である。底部のみので、外面は黒漆を、内面は朱漆を施す。50は 2 トレンチ溝 2 から出土した丸みを帯びた碗である。底部外面をわずかに削り出す。外面に黒漆が塗られ、内面は黒漆の後朱漆を塗り重ねる。

木製品 51は土坑 4 出土の櫛である。長さ13.6cm、厚さ0.8cm、中央部での幅4.8cmを測る。歯の数は、一部欠損しているものの37本である。52は土坑 4 出土の不明木製品である。脚部と思われるがどのように使用されたかは不明である。加工した部材を柄で直交するように差し込み、



第12図 出土木製品実測図

付表1 出土遺物観察表

報告 番号	器種	器形	トレンチ	法量 (cm)			残存率	胎土	露胎部色調	生産地
				口径	器高	底径				
1	土師器	つぼつぼ	2 トレンチ	3.0	2.1	2.4	5/12	密	灰白色 10YR8/2	—
2	土師器	皿	1 トレンチ	5.5	1.2	—	完形	密	灰白色 2.5Y8/2	—
3	土師器	皿	1 トレンチ	8.6	1.6	—	11/12	密	浅黄褐色 10YR8/3	—
4	土師器	皿	1 トレンチ	10.1	1.3	—	9/12	やや密	灰白色 2.5Y8/2	—
5	土師器	皿	1 トレンチ	10.6	2.1	—	4/12	密	にぶい橙色 7.5YR7/4	—
6	土師器	皿	2 トレンチ	10.2	1.9	—	11/12	やや密	にぶい黄褐色 10YR7/2	—
7	陶器	皿	2 トレンチ	6.9	1.5	—	完形	密	にぶい褐色 7.5YR5/4	京都信楽系
8	土師器	蓋	2 トレンチ	7.1	1.6	—	完形	密	にぶい橙色 7.5YR7/4	—
9	土師器	壺壺	2 トレンチ	5.5	7.5	5.2	完形	密	明赤褐色 5YR5/6	—
10	陶器	向付	1 トレンチ	9.8	7.1	3.8	3/12	密	灰白色 7.5Y7/1	京都信楽系
11	青銅製品	煙管	2 トレンチ	長4.0	径1.1	—	—	—	真鍮製	—
12	陶器	椀	2 トレンチ	11.2	5.8	4.2	6/12	密	黄灰色 2.5Y6/1	萩焼系
13	陶器	椀	1 トレンチ	11.4	6.7	4.9	7/12	密	灰黄褐色 10YR6/2	美濃瀬戸系
14	磁器	椀	1 トレンチ	11.0	6.2	4.4	6/12	精良	灰白色 N8/0	肥前系
15	陶器	椀	1 トレンチ	13.2	4.6	4.8	6/12	密	灰白色 10YR7/1	京焼系
16	陶器	罎	2 トレンチ	15.6	—	—	9/12	密	黒色 N1.5/0	京都信楽系
17	磁器	皿	2 トレンチ	29.0	4.9	17.3	2/12	精良	灰白色 10Y8/0	肥前系
18	土師器	焙烙	1 トレンチ	32.5	8.6	—	9/12	密	赤褐色 5YR4/6	—
19	陶器	鉢	2 トレンチ	—	—	16.5	3/12	密	灰白色 2.5Y8/2	美濃瀬戸系
20	陶器	皿	2 トレンチ	10.4	1.9	—	完形	密	灰黄色 2.5Y7/2	京都信楽系
21	磁器	椀蓋	2 トレンチ	9.6	3.2	—	7/12	精良	明緑灰色 7.5GY8/1	肥前系
22	漆塗土師器	椀	2 トレンチ	—	—	3.0	6/12	密	にぶい黄褐色 10YR7/3	—
23	磁器	椀	2 トレンチ	6.6	3.5	2.8	8/12	精良	明緑灰色 7.5GY8/1	輸入陶磁器
24	磁器	皿	2 トレンチ	13.4	3.8	7.5	完形	精良	白色 N9/0	肥前系
25	磁器	徳利	2 トレンチ	—	—	3.8	10/12	精良	灰白色 N 7/0	肥前系
26	磁器	皿	2 トレンチ	10.4	2.5	5.6	6/12	精良	灰白色 10Y8/1	肥前系
27	土師器	土馬	2 トレンチ	—	—	—	10/12	密	明褐色 7.5YR7/2	伏見焼系
28	土師器	皿	2 トレンチ	8.2	1.4	—	7/12	密	にぶい褐色 7.5YR5/3	—
29	陶器	蓋	2 トレンチ	5.6	1.1	—	11/12	密	灰褐色 5YR5/2	京都信楽系
30	磁器	鉢	2 トレンチ	14.8	6.8	8.6	4/12	精良	白色 N9/0	肥前系
31	磁器	皿	2 トレンチ	20.8	3.0	15.1	5/12	精良	灰白色 N8/0	肥前系
32	土師器	つぼつぼ	1 トレンチ	2.7	2.5	1.5	11/12	密	浅黄褐色 10YR8/3	—
33	土師器	皿	2 トレンチ	8.5	1.8	—	11/12	粗	浅黄褐色 7.5YR8/3	—
34	土師器	皿	2 トレンチ	9.6	1.7	—	8/12	やや密	灰白色 10YR8/2	—
35	土師器	皿	1 トレンチ	8.7	1.9	—	11/12	やや粗	にぶい黄褐色 10YR7/3	—
36	土師器	皿	1 トレンチ	11.6	2.4	—	11/12	やや粗	浅黄色 2.5Y7/3	—

木製の目釘で止めている。加工した部材は、幅2.4cm、長さ8.8cm、厚さ0.8cmを測る。53～55は、下駄である。53は溝2出土の下駄で、台部は長さ24.0cm、幅8.0cm、厚さ1.0cmを測る。歯は2枚で、台形を呈する。接地面の長さ推定12.4cm、厚さ2.2cm、高さ5.6cmを測る。54は溝2出土の下駄で、台部は長さ21.6cm、幅6.8cm、厚さ1.0cmを測る。歯は、2枚で台形を呈する。接地面の長さ推定10.8cm、厚さ3.0cm、高さ5.2cmを測る。後歯は、台部に木製の目釘2本で止めている。修理した痕跡と考える。55は逆「U」字形の歯を持つ下駄である。台部は残存長16.0cm、幅6.4cm、厚さ1.0cmを測る。歯は、長さ5.6cm、幅8.0cm、高さ2.4cmを測る。「U」字形に接地するように削り出す。

(岡崎研一・中川和哉)

5. 考 察

1) 出土木簡について

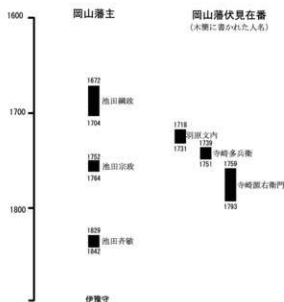
溝 2 から出土した木簡は 8 点 (38~45) である。木簡のほとんどが荷札と考えられ、6 点 (39~44) が木簡頭部付近の両側に縄かけ用の切り込みが確認できる。残り 2 点は長方形の平面形を持つ木簡である。また両側の切り込みの間や頭部中央にひも穴または釘穴と考えられる穿孔のあるものが 6 点 (38~43) ある。44 は切り込みや穿孔がないため荷物などに固定することができないため荷札木簡以外の用途があるものと考えられる。

38 は木簡の右上に場所、上部中央に大きく宛先が描かれており、その下に送り主が連名で記載されている。宛先は伏見の寺崎源右衛門である。寺崎源右衛門は岡山藩士で、伏見在番として宝暦 9 (1759) 年から寛政 5 (1793) 年まで伏見に滞在し、その後 70 石の禄高の加増を得て京都留守居として転出する。送り主は藤本久兵衛、天野屋長左衛門、榎並助之丞である。『文化増補 京羽二重』によれば藤本久兵衛、天野屋長左衛門はいずれも京都の衣棚丸太町上ルに在住した出入り商人である。天野屋長左衛門は岡山大学が所蔵する池田家文庫資料番号 C8-117 の『撰政様御二方様御姫様宛贈物目録』の注記に「贈物調達者天野屋長左衛門より三谷小左衛門宛」と書かれており贈答品の調達を担った商人であることがわかる。榎並助之丞は池田家文庫資料番号 D3-3062-(1)・(2)・(3) の『由緒覚』や『家名相続のため御銀拝借二付口上書』を書き記しているとともに、『文化増補 京羽二重』に京都の中立売室町西へ入に居住する鳥取藩の出入り商人として記載されている。

39 は向かって左側の面には寺崎源とあり上記の岡山藩伏見在番の寺崎源右衛門と考えられる。40 は墨痕が薄いため字の詳細がわからないが字形から寺崎の可能性はある。

また、41 の向かって右側の面も寺崎□□□□とある。左側の面には場所として大坂の地名があるその下は大名の名前があると考えられ伊豫守の可能性はあるが、寺崎姓のものが伏見在番になった時期に岡山藩主で伊豫守になった藩主には池田宗政がいる。また、この木簡が伏見出土であることから、他所から持ってこられたことを考えると、大阪に送られた木簡が再利用されて伏見に戻ってきたと考えられる。

42 は場所の部分は判別できないが宛先は寺崎□□衛様とあり送り主は八田庄兵衛である。八田庄兵衛は 1692~1755 年の生涯を過ごした岡山藩士である。伏見在番になった寺崎姓の人物は 2 名おり、八田庄兵衛と生きていた時期が重なるのは寺崎多兵衛であることか



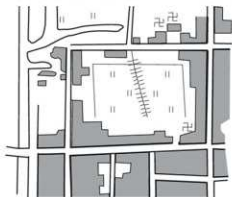
第13図 役職在籍年及び氏名藩主については、藩主在职期間を示す

ら、寺崎の伏見在番の元文4(1739)年～宝暦元(1751)年に使用された木簡と考えられる。ちなみにこの期間の八田庄兵衛は大目付、先手物頭を歴任しており、寺崎多兵衛より禄高が高い。45は表裏に同じ文字が書かれており、上段に百四十巻と兩別が2行書きされている。その下には羽原文内と書かれている。羽原文内は享保3(1718)～享保16(1731)年に伏見在番についている。この木簡だけが形状が異なっているため性格が不明であるが、人名が送り主であるならば伏見に木簡が残されていることは矛盾するが、羽原は宝永7(1710)～享保3(1718)年に大坂定目付についている。大坂定目付、伏見在番、京都留守居は常に情報を交換しながら助け合い職務を行っていたことから、大坂定目付からの木簡である可能性も指摘できる。

これらの木簡は、文献に見られる岡山藩の伏見における活動を具体的に示す貴重な資料と考えられる。

2) 発掘調査地点の土地利用変遷

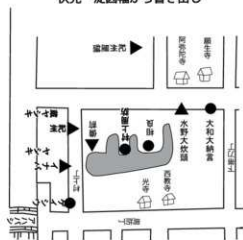
発掘調査地点は、京都市伏見区村上町に所在するが、村上町は調査地西側の南北道路で東側と



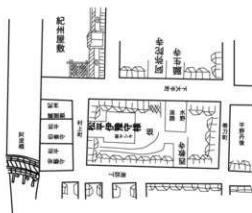
(1) 京阪地方仮製式萬分壹地形図
伏見・淀図幅から書き出し



(2) 伏見御城郭井屋敷取乃図
(旧伏見桃山城蔵 1788年)



(3) 伏見の図
(京都市立伏見図書館蔵、制作年不明)



(4) 山城国紀伊郡伏見国切絵図
(岡山大学付属図書館蔵、制作年不明)

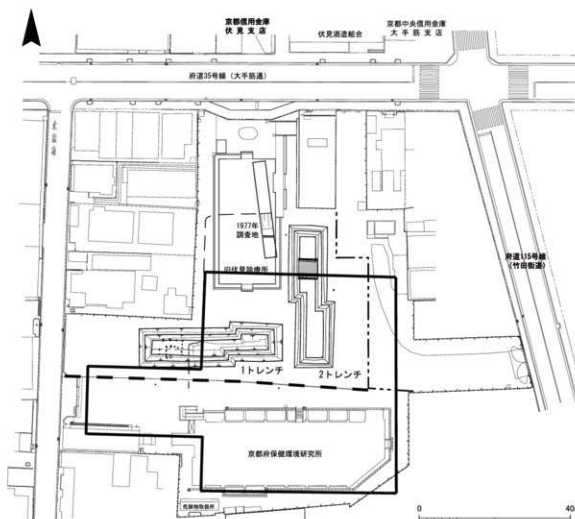
第14図 調査地周辺地図及び絵図

西側に区分される。元禄 2 (1689) 年に出された『京羽二重織留』巻六において「松平 伊豫守殿 屋敷 村上町がわ 留守居 梶田喜八郎」と記述されている。松平伊豫守は松平姓をもらった岡山藩池田家であり、調査対象地内にその屋敷があったことがわかる。村上町西側角には松平安藝守(広島藩浅野家)の屋敷、阿波橋村上町西側には松平相模守(鳥取藩池田家)の屋敷があり、調査対象地の北側には水野土佐守(新宮藩水野家)の屋敷があったこともわかる。池田家伏見屋敷跡と推定できる調査地点の変遷について古絵図や文献を頼りに考えてみたい。

調査地のある伏見に関する江戸時代の絵図は多数あるが、^(図 2)秀吉時代の伏見城やその中の大名屋敷について書かれたものと、江戸時代の様子を描いた絵図に大別できる。

前者については、同時代に描かれたものではなく、図幅ごとに大名の名前が異なっていたり、江戸時代の大名や秀吉が伏見城を築いた時期に亡くなっている人物が描かれているなど問題点が多く存在している。

本稿では図幅の検討をするのが本題ではないため、調査地周辺に限り図幅の検討を行いたい。調査地周辺を描いた地図には第14図に示したように南北に長いヨドミが表現されるもの(Aタイプ: 2)、東西方向に長い池状の表現があるもの(Bタイプ: 3)、ヨドミや池状の表現がないも



第15図 岡山藩伏見屋敷推定復原図(1/1,000)

の(Cタイプ:4)の3系統の図が存在する。

Aタイプには伏見古城并古町図(神戸市立博物館蔵南コレクション:寛文元(1661)年写)、伏見古城御城絵図(中井忠重蔵:宝永7(1735)~享保20(1735)年)、伏見御城都并屋敷取之絵図(旧伏見桃山城蔵:1788年写)、伏見古御城(鍋島報効会蔵:文政6(1823)年)、伏見桃山之古図(高山市東等寺冬任文庫蔵:安政5(1858)年写)、伏見桃山御殿御城之画図(神戸市立博物館蔵南コレクション:年代不明)がある。いずれも湿地を方形に描いたもので、大手筋を挟み北側には江戸時代の紀州藩伏見屋敷敷地全体に広がる大きな湿地が描かれている。

Bタイプには往古御在城之屋敷并田地之分(御香宮蔵:文化5(1808)年写)、伏見の図(京都大学付属図書館蔵:年代不明)、往古御在城(御香宮蔵:年代不明)がある。これらの図は南北方向に長い池状のものが書かれたもので、図示した伏見の図が最も詳細に池が描かれている。また、江戸時代以前と以後を記号で分けるといった特徴があり、Aタイプでみられる混同が調査地周辺ではない。

Cタイプには山城国紀伊郡伏見国切絵図(岡山大学付属図書館蔵:年代不明)がある。この絵図は岡山藩が持っていたもので、村上町の西側、東側の区画に紙が貼られ、新たに書き入れられている。屋敷地の形状は図で示した伏見御城都并屋敷取之絵図と同じであるが渚が描かれている部分に畑と書かれており渚がなくなっていることがわかる。

Aタイプは主に伏見城があった時代の大名屋敷を示したものであり、江戸時代に地図として利用したものではない。Bタイプは江戸時代の制作時においては土地案内としての機能も有している。Cタイプは江戸時代の地図として製作されたものである。

絵図に描かれている湿地状の表現が虚構でないのであれば、AとBには年代差があると考えられる。現存する絵図ではAタイプのほうが制作年代が古い、通りに面した町屋が敷地を取り囲んでいる景観や、岡山藩伏見屋敷と同じ土地区画が描かれていることなどから、伏見城廃城前の地形を反映しているか不明である。Bタイプは池が船入りか屋敷地を分ける堀状に描かれている。村上町は伏見城外堀に面しており、宇治川、淀川に通じ瀬戸内海に至ることができる浜地と呼ばれる水運の便が良い場所である。

岡山藩伏見屋敷の在番が初めて任命されたのが宝暦元(1673)年で、梶田喜八郎が任命されている。この記録は「京羽二重織留」とも一致し、これ以後に伏見屋敷が作られたと考えられる。岡山藩主池田家は豊臣期及び徳川期の伏見城下に屋敷があったが、当時の池田家の当主は池田輝政・利隆で52万石の大大名であったことから、伏見屋敷より大きな敷地を持っていたと考えられ、絵図でみられるような町家に取り囲まれることもなかったものと想定でき、池のようなものが存在する余白地は存在しない。こうしたことからこの場所には、伏見における岡山藩の施設が藩主が在中する屋敷の役割を変えて、新たな場所に規模を縮小して作られたものと考えられる。

発掘調査の所見では、Bタイプにみられる堀状の池は検出することはできなかった。岡山藩に残された元禄13(1700)年の袋に入った「伏見屋敷絵図」には伏見屋敷敷地及び建物の寸法が書かれている。第14図はその敷地を寸法に合わせて復原したものを調査地周辺地図に重ね合わせたものであるが、池のようなものが介在する余白地は存在しない。

Aタイプにみられる方形の湿地状地形は、調査区外に当たる可能性もあるが確認できなかった。また、今回検出してきた最下層の遺物が17世紀前半の遺物を含んでいることから、江戸時代以後には、Bタイプにみられる状況は確認できない。地図に虚構がないのであれば、Aタイプは江戸時代の地形を記載した地図に伏見城のあった時期の大名屋敷などを記載したもの、Bタイプは17世紀前半以前の地形を反映した絵図として解釈することもできる。

伏見屋敷は文久3(1863)年まで在番が置かれており幕末まで存続した。幕末から明治にかけての状況は明らかではないが、明治22年の地図では水田に代わっている。地図を詳細にみると、水田に北側から小道が入っておりその両側にケバ線が描かれていることから、路面より1段低くなっていたことが読み取れる。また、伏見屋敷の地割もなく水田と化している。

伏見屋敷は図面によると石垣で囲まれており、その石垣の上端部とすそ部の張り出しが約1m前後であった。石垣が約60度の角度を持っているならば1.7m、70°で2.7mの高さを持つことになる。屋敷は通りに向かって入口を持っていたので、前記の比高差が絵図に書かれている畑と路面にあったものと考えられる。

発掘調査では石垣やその石材などは検出できなかったことから、幕末から明治期に完全に取壊し、路面より低い地盤まで土地を改変したものと考えられる。発掘調査の知見から1トレンチ西側でみられる、高まり部分を幕末以前の地層、その東側にある整地状の地層は幕末以後に伏見屋敷を壊して造成した農耕地に関連する地層と位置付けられる。また、溝は石垣の石が抜かれた屋敷地周辺の溝が取り残されたものと想定できる。

(中川和哉)

6. まとめ

今回の発掘調査の目的の1つである豊臣秀吉や徳川家康の伏見城に関する遺構は検出することができなかった。また、1977年の発掘調査で確認した沼状地形の広がりも確認することができなかった。

発掘調査地内の明確な遺構は、第1トレンチ溝1と第2トレンチ溝2などわずかであるが、溝2からは岡山藩に関連する氏名が書かれた木簡が出土している。考察でも述べたように、発掘調査地には岡山藩の伏見屋敷があったことが文献でわかっている。岡山藩の池田家文書の中には、元禄13(1700)年の年号が入った袋に入った屋敷の見取り図があり、伏見屋敷の規模を正確に知ることができる。江戸時代の絵図の情報や現在の地図の情報をもとに屋敷地の外形を重ねると、調査トレンチは岡山藩伏見屋敷の位置にあり、溝1・2は屋敷周囲の溝である可能性が指摘できる。今回の発掘調査の所見は、これまで多く存在している伏見城関連の絵図に用いられた2系統の地図の前後関係を考える上の貴重な資料を提供した。

発掘調査で得た知見から、岡山藩伏見屋敷の遺構は、1863年以降、明治22年までの間に削平され後に整地され、農地になる。この変革の時期は明らかではないが、1986年の鳥羽伏見の戦いの際、屋敷近くまで火災が広がっていたことが「城州伏見其外所々出火之図」(東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書蔵)でうかがうことができ、その際の類焼が契機になった可能

性が指摘できるが、出土遺物の中には火災を証明する焼けた土器・瓦、炭、焼土などは確認できなかった。

西国大名は参勤交代の際、朝廷のある京都を経由することを許されていなかったことから、江戸時代に伏見に設けられた屋敷は、参勤交代の経由地として西国諸藩にとって必要な拠点としての役割があった。一方、京都藩邸は贈答用の高級品の購入や、所司代や公家・朝廷との折衝、豪商からの借入などが仕事であつた。^(注3)

今回の調査で出土した木簡では京都藩邸ではなく、京都の商人が直接伏見藩邸に品物を収めていた実態が明らかになった。当時の伏見が港町で荷物運搬の起点としてふさわしい場所であつたことがわかる。

調査においては、遺構の残りが非常に悪かつたが、江戸時代の西国大名の活動形態を示す貴重な資料と関連絵図を検証することのできる土地利用の変遷を明らかにすることができた。

(中川和哉・岡崎研一)

注1 日本史研究会『豊臣秀吉と京都—聚楽第・御土居と伏見城—』図書出版文理閣 2001

注2 堀内明博ほか『伏見の古絵図』伏見城研究会 2011、平方幸雄「伏見城跡」(『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1989

注3 浅井良亮「京都留守居研究覚書—藩邸・御用・禄家—」(『佛教学大学院紀要 文学研究科編』第44号) 2016

<参考文献>

倉地克直「『奉公書』の世界—八田庄兵衛の場合—」(『岡山大学付属図書館報』No.8) 1989

新修京都叢書刊行会編「京羽二重」(『新修京都叢書』第2 株式会社臨川書店) 1969

伏見町役場(復刻)「京都府伏見町誌」(『京都府郷土誌叢刊第二冊』株式会社臨川書店) 1984

岡山大学付属図書館「平成27年度企画展 池田家文庫絵図展 京都と岡山藩」 2015

4. 平成28・29年度北大塚古墳・大塚遺跡 発掘調査報告

1. はじめに

北大塚古墳・大塚遺跡は、井手町の東側丘陵頂部に位置している。両遺跡の範囲に、京都府教育委員会が新設特別支援学校(井手地区)建設計画地造成工事を計画したことから、平成28・29年度の2か年にかけて調査を実施した。

北大塚古墳はこれまでに発掘調査が実施されたことがなく、今回の発掘調査が初めての調査となる。調査の結果、横穴式石室墳4基を確認した。また大塚遺跡は遺物散布地として遺跡地図に登録されており、井手町教育委員会が平成27年度に実施した調査では、遺物の出土は見たものの、遺構は検出されていない。出土遺物は近代以降のものが大半で、古墳等に関連するものは出土していない。今回の調査においても、大塚遺跡範囲内に10か所のトレンチを設けて調査を実施したが、一部包含層を確認しただけで、遺構は確認できず、出土遺物についても近世以降のものが中心であった。

平成28年度の調査は、古墳や遺構・遺物の有無を確認することを目的とし、開発対象地の範囲で17か所の小規模調査を実施した。大塚遺跡では顕著な遺構・遺物は確認できなかったが、北大塚古墳で3基の古墳を確認した。

平成29年度には、平成28年度に確認した北大塚古墳で3基の調査を実施するとともに、周辺地にトレンチを設けて古墳の有無を確認したところ、新たに1基の横穴式石室を検出し、4基以上の古墳で構成する群集墳であることが判明した。

現地調査にあたっては京都府教育委員会、井手町教育委員会をはじめ、各関係機関のご指導・ご協力をいただいた。また、地元自治会や近隣住民の方々には発掘調査へのご理解とご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、調査にかかる経費は、全額、京都府教育委員会が負担した。

平成28年度現地調査体制

現地調査責任者	調査課長	森 正
現地調査担当者	調査課 課長補佐兼調査第3係長	岩松 保
同	調査員	竹村 亮仁
調査場所	京都府綴喜郡井手町井手大塚他	
調査期間	平成28年7月21日～10月28日 平成29年1月5日～1月31日	
調査面積	1,357㎡	

平成29年度現地調査体制

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課	参事調査第3係長事務取扱 岩松 保
同	副主査	増田 孝彦
	調査員	竹村 亮仁
	調査員	武本 典子
調査場所	京都府綴喜郡井手町井手大塚他	
調査期間	平成29年4月5日～5月30日	
調査面積	1,848㎡	

2. 地理と環境

1) 地理的環境

井手町は京都府の南部に位置しており、周囲は城陽市、京田辺市、木津川市、宇治田原町、和東町、精華町と接している。井手町の町域の標高は海拔21～474mを測り、河岸段丘、扇状地、沖積地などから構成されている。井手町の西側には木津川が北流しており、木津川によって形成された沖積地となっている。木津川東側は南北に連なる山塊があり、基盤岩盤は山城花崗岩である。山並みからは木津川の支流である玉川、南谷川、青谷川、渋谷川が東から西に向かって流れ込んでおり、扇状地が広範囲に形成されている。

今回の調査地は標高81～87m付近に位置している。調査地は木津川の東側の河岸段丘の段丘面上に位置し、北大塚古墳は段丘面上の微高地の上に位置している。周辺には、高位段丘堆積物である礫層(砂及びシルト挟む)が分布している。この堆積は更新世時の木津川本流によって形成された段丘面と考えられる。丘陵の南側には中位段丘堆積物が分布しており、これらも木津川本流によって形成された段丘面と考えられる。地質図を見ると、玉川によって運ばれた堆積物も分布しており、これによって木津川の流が現在の位置に移動したものと考えられる。また、玉川や才田川などによって堆積物が流出したか所では基盤面の露出や接触変成岩が分布している。^(註1)

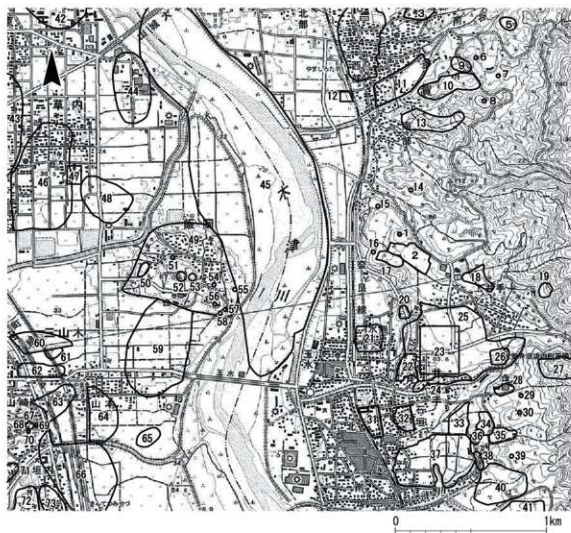
2) 歴史的環境

井手町の発掘調査例は少なく、縄文時代、弥生時代については不明な点が多い。

縄文時代の遺跡としては、梅原末治により、北大塚古墳が位置する丘陵の北東斜面で石楯・石匙が採取されたことが紹介されている。^(註2) また奈良大学考古学研究会の踏査時でも石器片が採取されている。^(註3) また散布地として登録される鳥体遺跡周辺から縄文土器(船元Ⅱ式)や石鏃が採集されている。船元Ⅱ式は縄文時代中期でも早い段階と比定されている。

弥生時代の遺物として鳥体遺跡から畿内第Ⅲ様式、第Ⅴ様式の甕形土器や壺形土器などが、南開遺跡からは畿内第Ⅴ様式の壺形土器の底部が採取されている。^(註4)

古墳時代前・中期では、井手町周辺には椿井大塚山古墳や飯岡古墳群、久津川車塚古墳群など



- | | | | |
|-----------------------|---------------|--------------------------|-----------------|
| 1. 北大塚古墳 | 19. 玉津岡神社裏古墳群 | 38. 上赤田遺跡 | 56. 金泥山古墳 |
| 2. 大塚遺跡 | 20. 山縁古墳群 | 39. 南大塚古墳 | 57. 飯岡1号横穴(塚穴) |
| 3. 菟五郎谷遺跡 | 21. 水無遺跡 | 40. 鳥体遺跡 | 58. 飯岡2号横穴(塚穴) |
| 4. 多賀遺跡 | 22. 西高月遺跡 | 41. 柏谷遺跡 | 59. 古原敷遺跡 |
| 5. 清水奥古墳群
(西島山古墳群) | 23. 井手寺跡 | 42. 東神屋遺跡 | 60. 田中東遺跡 |
| 6. 天王山古墳 | 24. 高月古墳群 | 43. 大切遺跡 | 61. 東角田遺跡 |
| 7. 山神古墳 | 25. 榎ノ木遺跡 | 44. 橋折遺跡 | 62. 二又遺跡 |
| 8. 上堂東古墳 | 26. 石橋瓦原跡群 | 45. 大將軍遺跡 | 63. 三山木遺跡 |
| 9. 高神社古墳群 | 27. 井手城跡 | 46. 南畑内遺跡 | 64. 直田遺跡 |
| 10. 天王山古墳群 | 28. 弥勒古墳群 | 47. 草路城跡(草内城跡) | 65. 浅藤遺跡 |
| 11. 判ノ地遺跡 | 29. 北岡遺跡 | 48. 宮ノ後遺跡 | 66. 宮ノ下遺跡 |
| 12. 磯ノ木遺跡 | 30. 南岡北遺跡 | 49. 飯岡遺跡 | 67. 山崎遺跡 |
| 13. 上堂古墳群 | 31. 野神遺跡 | 50. 飯岡車塚古墳 | 68. 山崎2号墳(八王子塚) |
| 14. 奥才田古墳 | 32. 宮ノ本遺跡 | 51. 弥陀山古墳(石塚) | 69. 山崎1号墳 |
| 15. 平山古墳 | 33. 塚本遺跡 | 52. ゴロゴロ山古墳
(茶臼塚・釈迦山) | 70. 山崎3号墳(権現塚) |
| 16. 尾ノ山古墳 | 34. 岡田遺跡 | 53. 葉師山古墳(高塚) | 71. 芝山遺跡 |
| 17. 尾ノ山遺跡 | 35. 南岡遺跡 | 54. 飯岡東原古墳 | 72. 三山木庵寺 |
| 18. 上井手遺跡 | 36. 岡田池北架跡 | 55. 十塚古墳(トブカ) | 73. 佐牙畑内遺跡 |
| | 37. 榎田遺跡 | | |

第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

が築造されている。しかし、井手町内には前期から中期の古墳は確認されていない。『井手町史』によれば、調査地と同じ丘陵に位置する大塚古墳(北大塚古墳と表記されることもある)で人物埴輪、鞍形埴輪などの埴輪片が拾われており、古墳時代中期から後期の古墳であるとされている。なお採取された埴輪片は梅原末治によって報告され、現在、東京国立博物館に人物埴輪を除き所蔵されている。古墳時代後期の古墳として平山古墳がある。平山古墳は北大塚古墳が位置する丘陵の先端に位置し、木津川を望む立地である。すでに消失してしまっているが、奥壁付近で4段の積み石が残存しており、玄室内からは土師質の亀甲形陶棺が出土している。陶棺は歌姫タイプと呼ばれる、府内でも最古相に位置付けられる陶棺である。また副葬品として納められた須恵器はTK10並行期に属するものが主体である⁽⁸⁶⁾。このほか、高月古墳群、山緑古墳群などが同じ丘陵に分布しており、小規模な群集墳が点在している。

奈良時代には、橘氏の氏寺と考えられている井手寺が建立される。これまでの調査から石敷きや礎石、溝などを検出し、寺域が約240m四方であることが推定されている。大正年間に梅原によって調査が行われ、平城京、恭仁京と同一型式の瓦が出土している⁽⁸⁷⁾。石橋瓦窯跡は、大安寺に瓦を供給していた瓦窯であり、これまでの調査で3基以上の窯の存在が確認されている⁽⁸⁸⁾。『大安寺伽藍縁起并流記資料帳』に記載のある棚倉瓦屋に位置づけられている。

中世には、栢ノ木遺跡で掘立柱建物跡を検出している。12~14世紀ごろの遺物が多く出土している。下層の遺物として石橋瓦窯跡から出土する瓦と類似した平瓦が出土している。

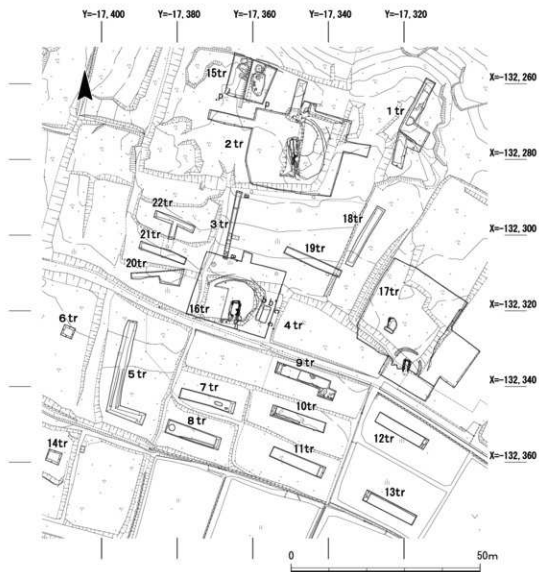
3. 調査の経緯

平成28年度の調査では、新設特別支援学校建設計画画内に含まれる北大塚古墳、大塚遺跡の2遺跡の調査を実施した。北大塚古墳では、明治・大正年間に報告が行われている。調査対象範囲は約10,000㎡であるが、京都府教育委員会と協議の上、900㎡の小規模調査を行い、その後、必要所を拡張し、面的調査を実施することとなった。北大塚古墳は、遺跡地図では単独墳として示されており、面的に把握されていないが、概ね対象地のほぼ中央の東西方向に農道が通っており、この農道より南側が大塚遺跡の範囲となるので、農道の北側を便宜上、北大塚古墳に関する調査区とした。

1) 過去の記録

明治・大正年間に濱田耕作、梅原末治によって北大塚古墳について報告されている。1901年の『東京人類学雑誌』に濱田が、北大塚古墳から採集された埴輪片について報告するとともに、その位置について掲載している。報告には「北大塚古墳は井手村の東方丘陵の上にありて、現今高さ凡そ三間周圍二三十間ばかりを残存するのみにして、墳上には埴輪圓筒の破片散在せり、(中略)此の古墳は現存部より東方に延長せる車塚形式の墳墓の後圓部にあらざる手を疑ひぬ」としている。このように、北大塚古墳は高さ約5.5m、周囲36~54mを測る墳丘が残存し、墳丘には埴輪片が散在しており、地形の観察より東に前方部がつく、前方後円墳であった可能性が指摘されている。

次いで大正年間は梅原末治は、『京都府史跡名勝調査報告』において、北大塚古墳につい



第2図 北大塚古墳・大塚遺跡調査トレンチ配置図(1/800)

て詳細な報告している。⁰³¹⁰⁹「遺跡ノ臺地ノ西北端ニ近キ隆起セル丘ノ上ニアリ、西方、木津川ヲ距テ、飯ノ岡ト相對シマコトニ好位置ヲ占ム丘ハ東西ニ長キ瓢形ヲナセルヲ以テ遠望セバ車塚ノ如キ外形ヲ呈スルモ、實地ニ就イテ驗スルニ、丘上ニハ數個ノ隆起アリ、中央部ハ東西ニ十數間ヲ距テ、相對セル二個ノ圓丘ヲ主トシ」と報告し、濱田の報告のように一見すると東西に長い前方後円墳と認められるが、細かく見ると複数か所の隆起が分布しているのが認められ、前方後円墳と考えられる古墳は20~30mを隔てて2つの円墳が相對しているとしている。これらの円墳については、「中央ニアル兩丘ノ西側ノモノハ、數年前其ノ表面ニ露出セシ石材ヲ採掘セムトシテ偶然石室ヲ發見シ、其ノ横穴式ナルヲ確メタリト云ヒ、(中略)其ノ東方ノ封土ハ削平セラレタル頂部ト思ハル、邊ニ大石ノ露出アリテ、同種ノ石室ノ存在ヲ示ス」と、破壊された横穴式石室墳であると推定している。さらに、「兩者ノ中間ノ北ニ偏在セル大石ノ露出部マタヤ、高く、コ、ニ幅荷ヲ祀レル址アリ」と報告しており、兩者の中間の北には石材が露出する隆起があり、ここには幅荷が祀られているが、これも古墳と考えられるとしている。これ以外にも、「東丘ノ東南ニ續ケル

丘ノ一部ニハ埴輪筒ノ散在セル墳丘存セリ、「此ノ丘ノ南麓ニ接セル傾斜地ニテ同ジ南面ノ横穴式石室ヲ発見セシガ破壊シ終レリト云フ」と、丘陵の頂部以外にも、少なくとも2基程度の横穴式石室墳が認められると報告されている。

2) 今回の調査

調査地は竹藪に覆われており、竹伐採を7月21日から開始し、随時トレンチを設定し、調査を行った。梅原の大正12年の報告によると、北大塚古墳が所在する丘陵上に古墳とおぼしき複数の隆起が認められ、周辺には破壊された石室墳が複数基分布していたようである。その後、箭栽培のため土入れが盛んに行われており、梅原が報告した地形が遺存しているのかどうかも窺い知れなかった。また、京都府遺跡地図に記載されている北大塚古墳の地点は、小さな祠が祀られて平坦面となっていた。地元教育委員会の担当者によるとこの地点に古墳が所在しているかどうかは不確かであるとのことであり、しかも丘陵上には複数の高まりが認められたことから、まず、現状で認められる東西の高まりに1・2トレンチを設定し、西側の丘陵頂部から南に下る斜面に3・4トレンチを設けて、古墳の検出に努めた。2トレンチでは、古墳の墓壇の掘形を検出したため、8月24日より2トレンチを拡張し、墓壇検出作業及び墳丘の確認作業を開始した。併せて、遺跡地図に記載されている地点に設けられていた祠の移設をまっ、この地点に15トレンチを設定し、9月26日から調査を開始した。

一方、大塚遺跡の範囲全域には、5～14トレンチを設定し遺構の検出に努めたが、顕著な遺構・遺物が認められなかった。10月28日に大塚古墳の調査を終了するとともに、北大塚古墳の調査を一時中断し、関係機関と今後の調査について協議を行った。

平成29年1月5日から北大塚古墳の調査を再開した。梅原の報告によると、北大塚古墳の南側と南東側に古墳が分布している可能性が指摘されていることから、新たに、2トレンチの南側に16トレンチを、南東部分の高まりに17トレンチを設けて、古墳の有無を確認することとした。16トレンチでは、石室の石材が散乱している状況を確認し、新たに古墳1基の存在を認めた。17トレンチの重機掘削を実施したところ、約17mの高まりは、すべて現代の箭栽培に伴う盛り土であることが判明した。最終的には旧表土より石室の残欠を検出した。

平成29年度の調査では4月5日から開始した。2・16・17トレンチで確認した3基の古墳の調査範囲を拡張し、新たに17トレンチで小石室の残欠を確認した。併せて周囲の未調査部分に古墳が埋没していないかを確認するために、18～22トレンチを設定し調査を実施した。5月20日に現地説明会を行い、111名の方に参加いただいた。現地説明会后、図面作成や石室石材の除去を行い、

5月30日に調査を終了した。古墳番号については井手町教育委員会と協議の上、検出した順番に古墳番号を付与することとした(付表1)。

付表1 北大塚古墳群 番号対照表

トレンチ番号	遺構名	古墳番号	備 考
2トレンチ	SX01	1号墳	平成28年度調査で確認
16トレンチ	SX01	2号墳	平成28年度調査で確認
17トレンチ	SX01	3号墳	平成28年度調査で確認
17トレンチ	SX02	4号墳	平成29年度調査で確認

4. 平成 28 年度の調査

1) 調査の概要

平成28年度の調査では、北大塚古墳、大塚遺跡の調査を実施した。北大塚古墳は、遺跡地図には単独墳として記載されており、今回調査の15トレンチの地点に示されているが、その位置が不確かであることや複数の古墳の存在が指摘されていること、丘陵尾根部や斜面地に小規模な調査区を設けて、古墳の有無を確認することとした。北大塚古墳の調査区の現状は苜栽培のための竹藪で、各所に地形の起伏が認められた。これらが古墳であるのか、竹藪の土入れに伴う盛り土であるのか、現地形の観察では不明であった。そのため、古墳状の盛り上がりが認められる地点を中心に調査トレンチを設定した。

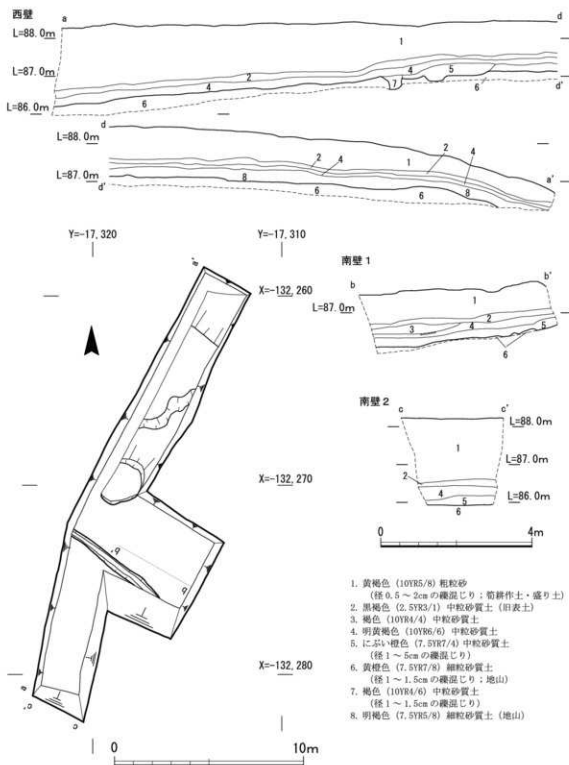
当初1～4トレンチを設定し調査を行ったところ、2トレンチで古墳の残欠を認めたため、2トレンチの周囲を拡張するとともに、新たに15～17トレンチを設定し、新たな古墳の有無を調査した。北大塚古墳の範囲では合計7か所のトレンチを設けた。

大塚遺跡では、5～14トレンチの10か所の小規模な調査区を工事対象地全域に配置し、遺構・遺物の有無を確認した。

2) 北大塚古墳の調査

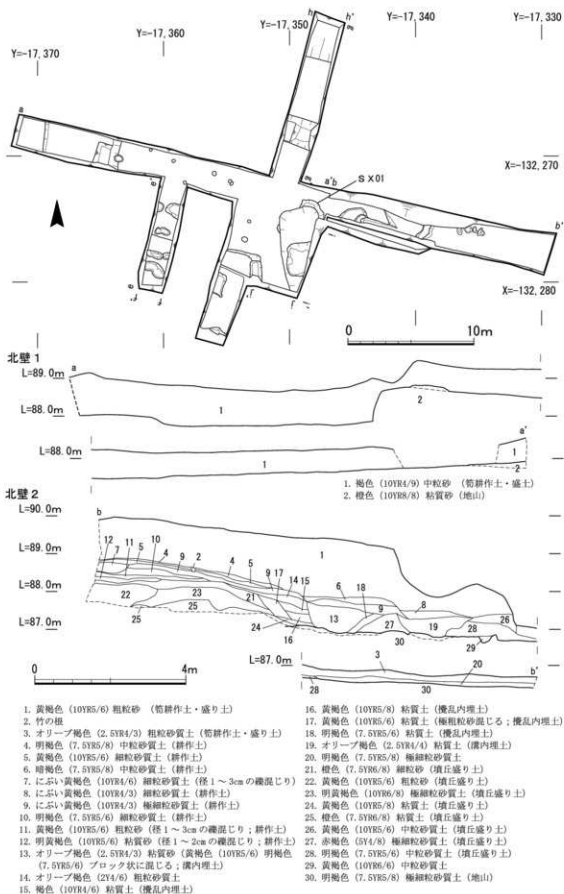
1 トレンチ 対象地内の北東部に設けた調査区で「ト」の字形を呈する。調査着手時に、15m×6mの範囲にわたって高さ約1mのマウンド状の盛り上がり認められたため、墳丘の有無を確認する目的で南北方向に調査区を設定した。調査の結果、現地表面から2.1m下で地山の砂層(8層)を確認した。現地表から旧表土付近までの約1.6mは、苜の栽培のための土入れのための盛り土であり、現地形で認められたマウンドは墳丘ではないことが判明した。しかし、地山上には第4層の中粒砂質土の堆積が認められ、墳丘盛り土の残欠の可能性が認められたため、中央部を東側に拡張した。拡張区の第4層中に土師器片が集中して出土したため、南側に拡張し、平面的に遺構の有無を調査した。これらの土師器片は破片となって散乱していたが、完形に近い土器が土圧によって破砕した状況ではなかった。平面的に遺構の検出に努めたが、明確な掘形や土質の変化は認められず、遺構は確認できなかった。遺物が出土した範囲には落ち込みが認められたが、明確な掘り込みは認められなかった。このことと1トレンチの中のこの地点のみで遺物が出土したことから、竹藪の盛り土に伴い、他所から運び込まれたものと推測される。土器の器形は、長胴甕(第13図-1)と円筒形土製品(第13図-2)である。

2 トレンチ 1トレンチの東に設けた調査区である。現地形は、1トレンチ同様に最大で2mの隆起が認められ、西半が大きく削られ、比高1m程度の南北の崖面となっていた。当初、崖面を断ち割る形で東西の調査区を設定して調査を行ったところ、崖面下の地山上で方形に巡るこぶし大の円礫を含む土色の変化を2.8m×6.8mの範囲で確認し、土坑S X01とした。当初、旧表土直下から掘り込まれていたため、現代の攪乱とも認識していたが、深さ0.6mを掘削したところで0.4m×0.2mの石を検出し、破壊された横穴式石室の可能性が想定された。そのため、現地形の崖面下に沿って南北方向の調査区を拡張したところ、南北に長い6.4m×3.2mの土坑を検出し



第3図 1 トレンチ実測図(1/200, 1/100)

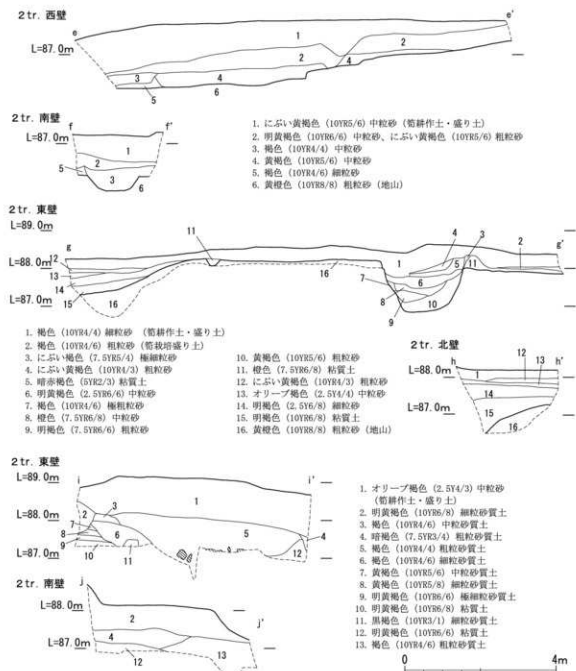
た。土坑内には人頭大の石材、須恵器片を含んでおり、底面近くで石材の抜き取り痕跡や耳環が出土したことから、石室の残欠であることが判明した。古墳の存在が確認されたことから、東西方向の調査トレンチを延長するとともに、周囲に南北方向の調査区設定し、埋没している古墳の有無を確認した。



第4図 2トレンチ実測図(1/300, 1/100)

これらの調査区では遺構の検出は認められず、基本的に地山面まで竹の耕作土が何層にもわたって堆積していることから、竹藪の土入れに伴い、墳丘や旧表土は大きく削平を受けているものと推察される。唯一、東西方向に設定した調査区(北壁2b-b')当初に観察できたマウンド状の崖面の土層の観察では、地表下1.5mで黄褐色系の堆積層(第21~28層)が分布しており、墳丘の盛り土と判断した。詳細については、5節の平成29年度調査で報告を行う。

3 トレンチ 2トレンチの南の丘陵斜面に設けた18.2m×1.4mの調査区である。2トレンチの西側同様、2層の竹の栽培による耕作土下には、にぶい褐色粗粒砂(3層)、黄褐色粗粒砂(4層)、褐色中粒砂(5層)、黄褐色粘質土(6層)、7層の地山が堆積している。4・5層の堆積は部分的

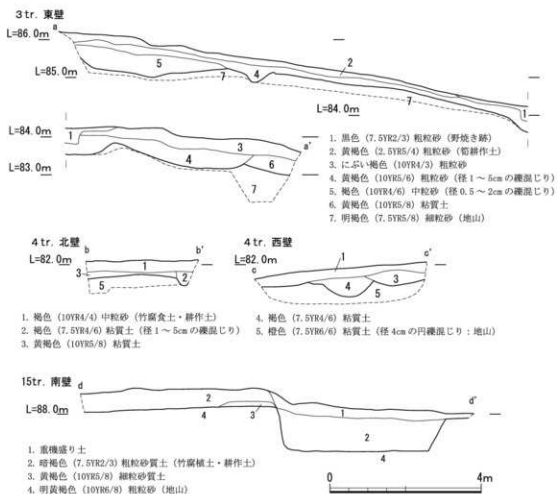


第5図 2トレンチ土層図(1/100)

にしか堆積しておらず、東壁中央部で2・4層の直下で地山が分布している部分が本来の堆積層序を示すものと判断される。子細に見ると、5層や4層の下面で平坦な面が認められることから、緩傾斜面を平坦に造成したものと判断される。2トレンチなどでは耕作に伴う溝群を検出しており、この想定を裏付けるものである。遺物の出土は無く、顕著な遺構の検出も認められなかった。

4トレンチ 大塚遺跡との境付近に設けた4.8m×3.0mの調査区である。調査の結果、耕作土の下に2層の褐色粘質土、3層の黄褐色粘質土などの堆積が認められるだけで、遺構・遺物は確認できなかった。当初は、顕著な遺構・遺物の出土が無く、周辺には遺構・遺物が無いものと想定したが、平成29年度の2号墳の調査により、最終的に16トレンチの範囲に含まれた。4トレンチは2号墳の東側裾部にあたり、結果的に3・4層は墳丘の盛り土であったことが判明した。

15トレンチ 調査着手時点では祠が祀られており、遺跡地図に古墳の位置として示されている地点である。2トレンチで古墳の存在が確認されたため、祠の移設を待って設けた調査区である。過去の報告では、稲荷の下に古墳があると指摘されているが、この祠がその稲荷であるとは確認できていない。現状の地形は、周囲と同じくフラットな状況であり、北側・西側は約1mの崖面となっている。祠跡を中心に、西側の崖面下までの掘削を行った。調査区は9.6m×9.2mで

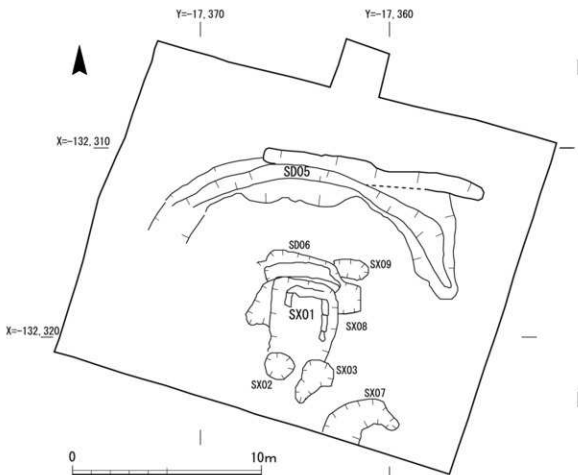


第6図 3・4・15トレンチ土層図(1/100)

ある。調査の結果、現地表面直下で地山を検出し、一部地山を深く掘り込んだ不整形の土坑を確認した。この土坑は堆積状況から現代以降に掘り込まれた攪乱であると考えられる。遺物は出土していない。

16トレンチ 2トレンチの南に設けた調査区である。当初は東に位置する4トレンチと別の調査区であったが、16トレンチで石室の残欠を確認したことから、周囲を拡げて調査を行った。調査の結果、4・16トレンチは重複する調査区となった。

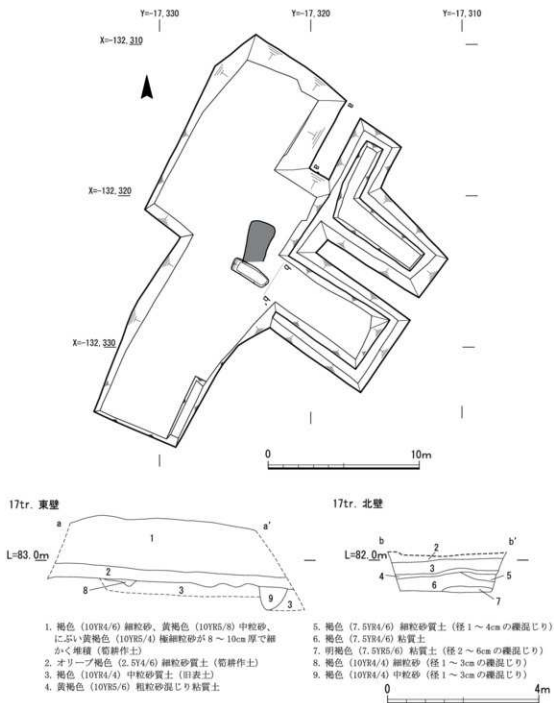
梅原の報告では、北大塚古墳の南側斜面に古墳が存在したとあることから、2トレンチで確認した古墳が北大塚古墳であるとの確証は得られなかったが、南側に古墳が存在することが疑われたために設定した調査区である。現地形としては、若干の地表面の盛り上がりが認められた。重機により、表土掘削を行うと、現地表面から約0.1mの深さで、長辺1mの石材1石が露出した。周辺の精査を行うと、石材が複数認められたことから石室石材であることが判明した。古墳の規模を確認するために、4トレンチと重複する形ではあるが、調査区の再設定を行い、古墳の全貌の確認に努めた。その結果、露出した石材の北側4.7mで周溝と考えられるSD05を確認した。また、石室上面では多量の割石や土師器が出土したことから、12世紀頃の遺構が重複していることが判明した(SX01)。精査を繰り返したところ、SX01に切り勝つ形で土坑や溝を検出した(S



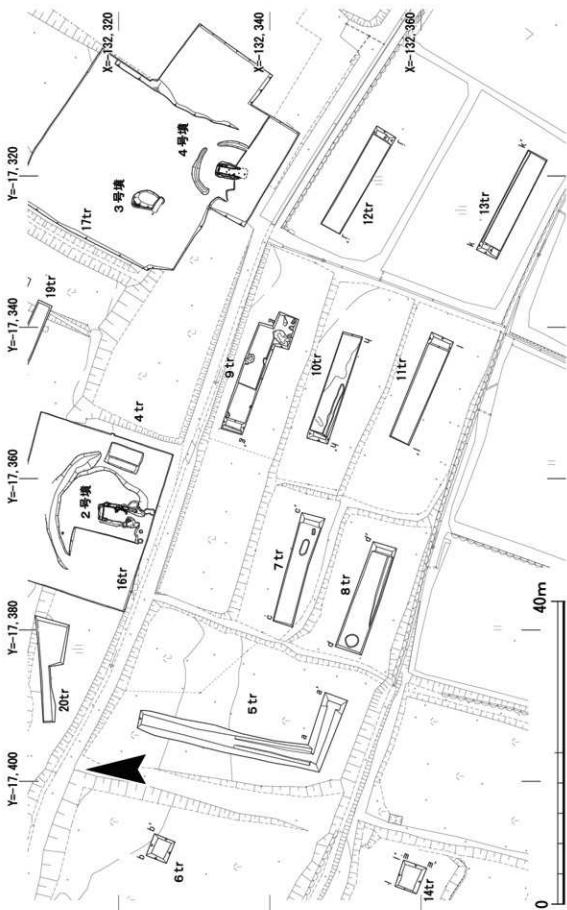
第7図 16トレンチ実測図(1/200)

X02・03・07～09, S D06)。これらの土坑は石室の石材を抜き取った坑と判断され、現代のものとの判断された。詳細については5節の平成29年度調査で報告する。

17トレンチ 梅原の報告では、北大塚古墳の南東尾根筋上にも古墳があると記されていることから、2トレンチの南東側に設定したトレンチである。現地形では南北22.2m、東西18.2m、高さ1.7mの方墳状のマウンドが認められた。南側では標高83m、北側では標高81mを測る。調査着手時には竹林の造成土と判断したが、2トレンチで横穴式石室墳を確認したことから、古墳の盛り土の可能性があると判断された。



第8図 17トレンチ実測図(1/250, L/100)



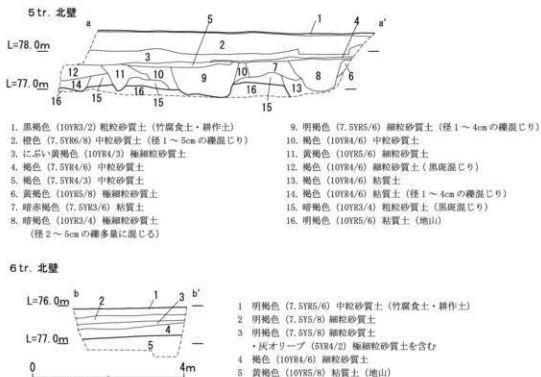
第9図 大塚遺跡調査トレンチ配置図(1/500)

調査の結果、基本的に上位1.7mは盛り土であり、細かな水平の堆積層が認められたことから、筒栽培に伴う盛り土と判断された。盛り土下には旧表土(第3層)があり、東・西側の田畑とはほぼ同じ標高である。以上のことから、現地形の隆起は古墳に伴うものでない結論した。旧表土下には第6・7層が堆積しており、7層上面で、須恵器片と人頭大の石材が出土した。石材は動かされていたが、周辺を掘げたところ原位置を保つと思われる石材2石が認められた。石室内に相当する部分の掘削を行ったところ、耳環が出土したことから横穴式石室の残欠であることが確定した。詳細については、5節の平成29年度調査で報告する。

3) 大塚遺跡の調査

5 トレンチ 北から南に向けて下るように、段々に畑が造成されており、これらの畑を横断してL字状に設定した調査区である。南北方向には、北端で元地表面から0.65m下で、南端では現地表面から1.7mの深さで地山を確認した。地山は北から南に向けて下る傾斜面となっており、地山上に厚く盛り土を行い、畑を造成していることが判明した。一方、東側の7・8トレンチは、5トレンチの南辺部より1.5m程度高い位置で地山を確認していることから、7・8トレンチは丘陵の張り出し上に位置し、5トレンチは谷地形を埋めているものと推定された。土層観察から土の入れ替えによる土坑状の掘り込み(5層)が地山まで及んでいることが判明した。遺構・遺物は確認できなかった。

6 トレンチ 5トレンチの西側に設けた30m×3.1mの調査区である。現地表面から1.3mまで掘削したところ地山を確認した。1～4層はすべて畑を造成するための土と判断され、土の入れ替えにより包含層や遺構は削平されていることを推定した。遺構・遺物は確認できなかった。



第10図 5・6トレンチ土層図(1/100:土層位置は第9図参照)

7トレンチ 5トレンチの東側に設けた15.0m×3.0mの調査区である。現地表面から0.2m下で地山を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。地山直上の1・3・5層は新旧の耕作土と判断され、地山直上まで畑の土の入れ替えて削平されているものと判断される。

8トレンチ 7トレンチの南に設けた調査区で、15.0m×3.0mの調査区である。堆積状況は7トレンチと同様である。地山面は東から西に向かって傾斜している。調査区の西側では現代の野壺を検出している。遺構・遺物は確認できなかった。

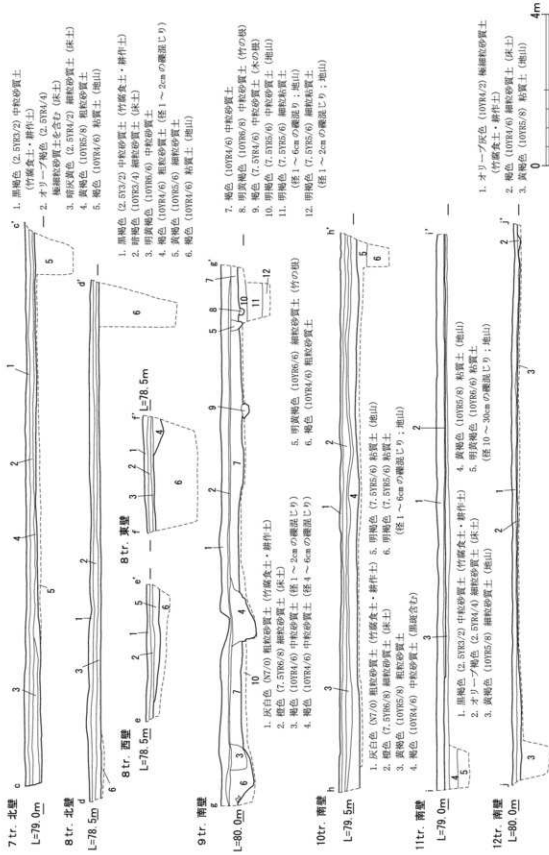
9トレンチ 7トレンチの北東に設けた調査区である。大塚遺跡の範囲ではもっとも高所に位置している。当初、15.0m×3.0mのトレンチを設定して調査を行った。土層の堆積状況は、竹藪・畑耕作土の表土(1層)下に床土(2層)があり、7層の褐色中粒砂質土が0.2~0.35cm厚で堆積している。この下の10層以下は、固く締まった土質の状況と遺物を含まないことから地山と判断した。7層はやや締まりがないが、遺物の出土がないことから地山である可能性がある。トレンチの南東隅では、須臾器高杯(第13図-3)が6層中から出土した。土層観察の結果、7層を切り込んで3・6層、4層などの落ち込みを確認した。土質は均質な砂礫で7層との違いはわずかである。特に6層は遺物を含むことから遺構である可能性が認められたため、調査区の南東を4.4m×3.0m拡張して平面的な精査を行ったが、明確な掘形は認められなかった。埋土の状態や形状が不整形であることから風倒木の痕跡と判断した。

10トレンチ 9トレンチの南に設けた調査区である。15.0m×3.0mのトレンチである。土層の堆積状況は、竹藪・畑耕作土の表土(1層)下に床土(2層)があり、3層の黄褐色粗粒砂質土、4層の褐色中粒砂質土が堆積している。4層からは磨耗した土師質の土器が出土した。時期は不明である。4層を除去した地山(5層：明褐色粘質土)上では、東西方向の溝状の土色の違いを東西方向に確認した。深さは最大で0.2mであり、底面が凸凹で、掘形のラインも不明瞭であることから、人為的なものではなく、窪地状の自然地形に堆積した土に遺物が混じり込んだものと考えられる。

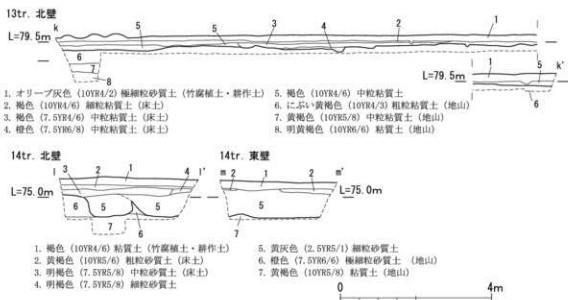
11トレンチ 10トレンチの南に設けた15.0m×3.0mの調査区である。耕作土(1層)の下に床土と判断する2層が薄く堆積しており、その下で地山である3層の黄褐色細粒砂質土を検出した。地山を断り割ると粘質土の4・5層が堆積しており、5層中には人頭大の円礫を含んでいた。北側の10トレンチで確認した遺物包含層は確認できなかったが、床土直下で地山を検出したことから、現代の田畑を造る際に削平されたものと判断される。

12トレンチ 9トレンチの東側に設けた15.0m×3.0mの調査区である。耕作土(1層)、床土(2層)の下に地山を検出した。遺構・遺物は確認できなかった。地山(黄褐色粘質土)が床土直下に広がっていることから、田畑を成形する際に土壌は大きく削られたものと判断される。

13トレンチ 12トレンチの南側に設けた15.0m×3.0mの調査区である。耕作土(1層)は竹の高植を含むもので、その堆積の下に、床土と判断される5~15cmの厚さの2・3層が堆積していた。4層は部分的な堆積であるが、床土の一種と判断される。5層の褐色中粒粘質土は地山である6層の上で検出したもので、東端と西半部で堆積しているのを確認した。5層が確認できな



第111図 7~12トレンチ土層図(1/100；土層位置は第9図参照)



第12図 13・14トレンチ土層図(1/100:土層位置は第9図参照)

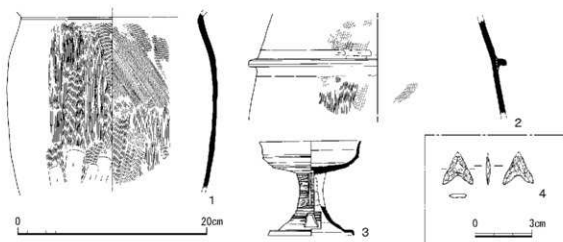
い部分は田畑の造成のために削り取られたものと判断され、若干の高まり(尾根筋)が南北に分布していたものと復原される。また11トレンチ同様に地山面下には人頭大の円礫を含む粘質土が堆積していた。遺物は4層の耕作土から石鏃(第13図-4)が出土している。

14トレンチ 対象地の南西側に設けた4.0m×3.1mのトレンチで、もっとも低い地点に位置する。耕作土(1層)の下に客土(2・3層)が認められ、4層も客土の一種と判断される。その下で地山である6層の橙色極細粒砂質土を検出した。幅1m、深さ60cm程度、長さ2.7m以上の土坑状の土色の違いを確認した(5層)。これらは重複して形成されているようである。確認はないが、畑作の栽培品種に応じた土壌の入れ替えのための坑と判断される。5トレンチでも同様の土坑を確認している。

出土遺物

2・16・17トレンチから出土した遺物はすべて平成29年度報告に詳細を記す。これら以外に、平成28年度調査において出土した遺物で、図化可能なものは4点である。

1は土師質の長胴甕である。頸部から胴部にかけてが残存している。頸部の推定直径は19.2cm、胴部の推定直径は22cmを測る。内外面にはハケ目調整が認められる。2は煙突形土製品と考えられる。3は須恵器高杯である。口縁部は外上方へ開く。杯胴部から底部には2条の沈線がめぐる。脚部にはハケによる調整が全体に認められる。2方2段透かしが認められる。上段は長方形透かし、下方は台形に近い長方形透かしである。脚部内面には回転痕、絞りの痕跡が認められる。TK43型式並行期である。4は無茎の石鏃である。基部にしっかりとした持ちが認められる。



第13図 平成28年度調査 出土遺物実測図(1/4、1/2)

5. 平成29年度調査

1) 2トレンチ

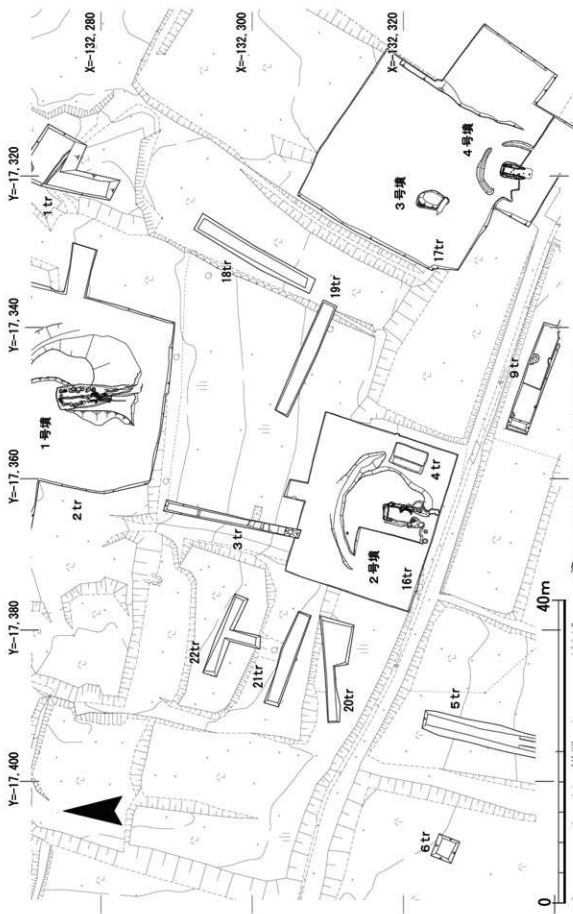
(1) 調査区の概要

2トレンチは調査範囲の北部に位置する調査区である。調査着手時は竹林に覆われており、本来の地形は明らかではなかった。2トレンチのほぼ中央部の東西で標高差が約1.5m認められ、崖状に土取りが行われている状況であった。平成28年度の調査では、古墳の有無を確認するために、断面を断ち割る形で東西の設定し、調査を実施した。調査の結果、トレンチ西側は、現代の耕作に伴う土取りや土入れにより黄褐色粗粒砂の地山面まで削平を受けているのに対して、トレンチ中央から東寄り、現地形で認められた崖面下のあたりで、地山面を掘り込んだ石室の掘形を確認した。その後、石室の残存状況を確認するために、トレンチを東西・南北に拡張し、平面の土色の変化を確認した。また掘形東側の一段高くなっているか所に断ち割りを行い、2.8mの墳丘が残存していることを確認した。平成29年度の調査では、確認した掘形、墳丘から規模を想定し、面的に拡張する形で、古墳の調査を行った。

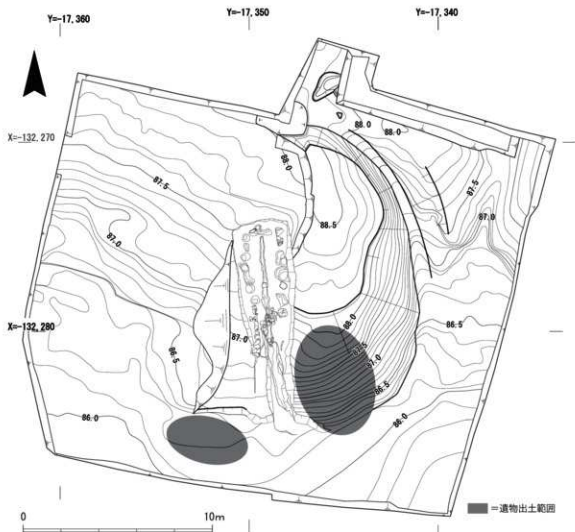
(2) 1号墳

位置 2トレンチ東から中央付近で検出した横穴式石室を内部主体とする古墳である。石室内の石材の多くは抜き取られており、玄室内は床面まで失われている状況であった。石室内の標高は86.6mを測る。

墳丘 筒栽培に伴う土の入れ替えにより、西側は削平を受けており残存していない。墳丘の北東側で弧状を呈する周溝を検出した。北側では地山を掘削することで周溝をめぐらせ、墳丘を区画したようである。南東側では、攪乱が多く及んでおり、溝の有無を確認することができなかったが、墳丘の裾部は地山を削り出すことで基底部をなしている。西側の墳丘は失われているため、墳丘規模は復原で、南北16.4m、東西12m以上の南北に長い楕円形を呈する円墳と考えられる。墳丘の残存高は最大で2.8mであるが、基底部の標高は、北側で87.8m、南側で86.1mで、比高1.7mの斜面地に立地している。墳丘の土層観察から、8～13層の上面の高さが揃っており、このよ



第14図 北大塚古墳群 古墳配置図(1/500)

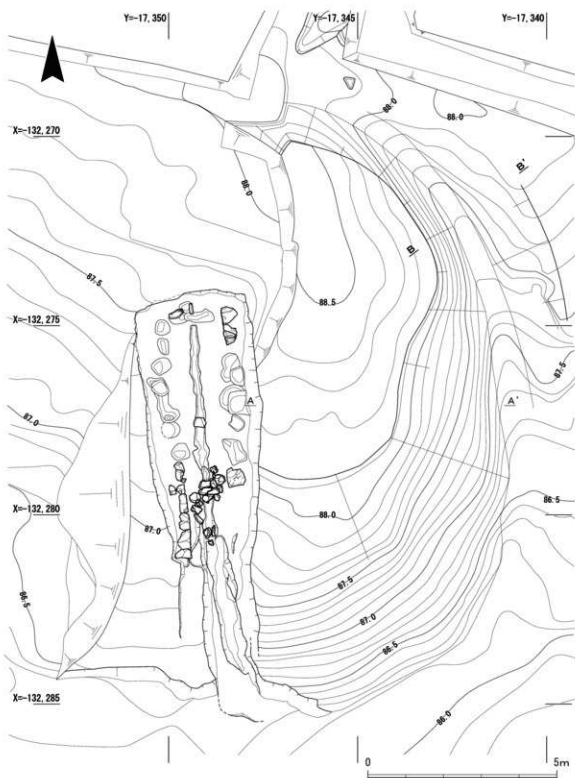


第15図 北大塚1号墳 平面実測図(1/200)

り下が第1次墳丘と考えられる(第17図A-A')。ただ石室石材を抜き取る際の土坑が石材の裏込を破壊しており、裏込土と墳丘盛り土の関係は不明である。

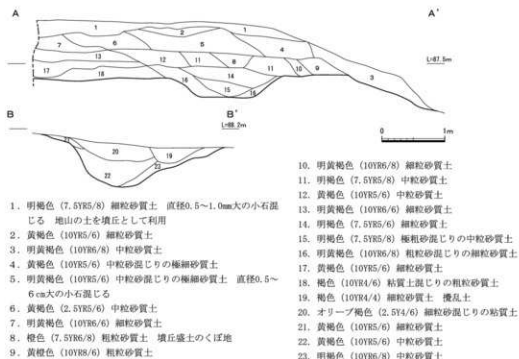
周溝 石室北東側で検出した。幅2.8m、深さ0.7mで掘られている。外側の掘形が墳丘の1/2程度しか確認できなかった。墳丘背面から東側に向かって掘削深度が上がっていることから、斜面地に合わせて周溝をめぐらせていたと考えられ、古墳前面まで溝がめぐっていない可能性も考えられる。西側では攪乱により、まったく確認することができなかったが、本来は溝がめぐっていたものと考えられる。

石室 1号墳の内部主体は、南に開口する横穴式石室である。石室は石材が抜き取られ、天井石、奥壁など多くが失われていた。残存していた石材は、玄室左側壁の基底石2石、羨道右側壁の5石のみであった。墓壁の規模は長さ6.1m、墓道部幅1.1m、羨道部幅1.2m、石室部幅1.85mを測る。奥壁石材は失われており、詳細な構造は不明であるが、石材の抜き取りの痕跡を確認した。抜き取痕跡から石室の床面は長さ3.4m、幅1.4mと考えられる。左側壁の基底石の残存状況や抜き取痕跡から、墓壁の掘形から0.7mの位置に奥壁石材が設置されていたと推定できる。側壁の状



第16図 北大塚1号墳 墳丘・石室実測図(1/100)

況は悪く、右側壁は1石も残存しておらず、左側壁の基底石が2石残存する程度であった。石材の抜取行為は床面まで及んでおり、明確な埋界面や埋界面を形成する整地土は確認できなかった。抜取痕跡と残存状況から約0.3mの袖があったものと考えられ、両袖式石室と推定される。石室内の攪乱内からは須恵器片、耳環が出土している。玄門付近には閉塞石と考えられる石材が残存していた。人頭大の石材を用いており、南北1.0m、東西0.8mの範囲で検出した。本来は残存し



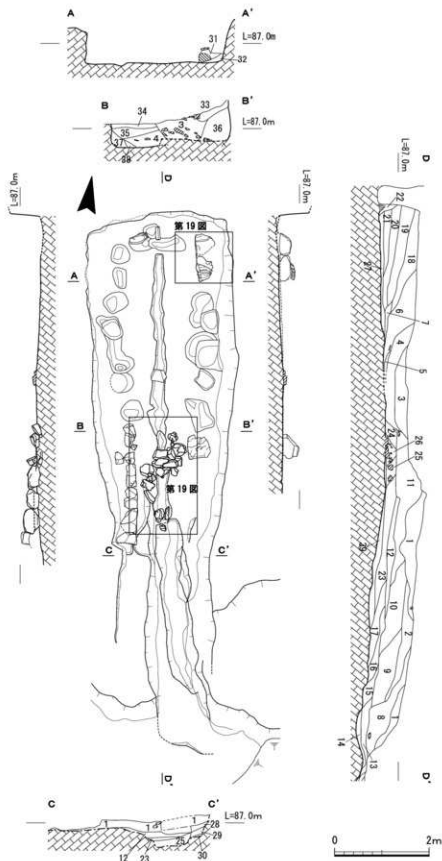
第17図 北大塚1号墳 墳丘・周溝土層実測図(1/60・土層位置は第16図参照)

ている高さ以上に設置されていたものが石材採取行為の際に上部の石材が持ち出されたものと考えられる。石材下から炭化した木片が出土している。

羨道は奥壁から4.4mの位置から構築され、長さ3.14m、幅0.92mを測る。石材の残存状況は右側壁の基底石が5石残る程度、左側壁の石材は1石のみ残存している。右側壁に使用された石材で最も大きい石材は長軸0.48m、短軸0.32m、厚さ0.21mを測る。羨門付近から須恵器杯、耳環が出土しているが、石材を抜き取った攪乱土中の出土である。土層断面の観察では、墓壇内の埋土のほとんどは攪乱による堆積であると判断されるが、部分的に整地面及び閉塞に伴うと考えられる層を確認した。床面整地土は、墓道から閉塞石の下に確認できる黄褐色中粒砂混じりの粘質土(39層)で厚さ0.15m程度で敷かれており、羨道と墓道の高さ、玄門付近の高さと合わせるような堆積である。閉塞石に伴う堆積は黄褐色中粒砂である(26層)。攪乱により一部しか確認できないが、厚さ0.2m程度である。整地土の直上に堆積していることから初葬に伴うものと考えられる。

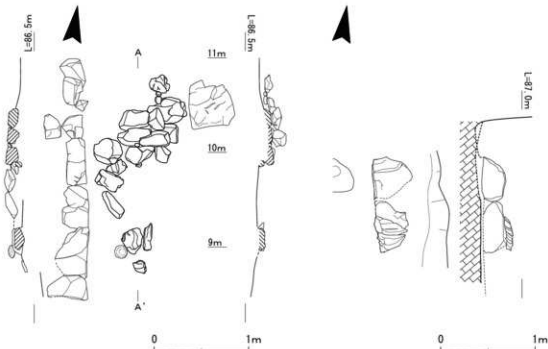
墓道は、長さ8.4m、幅1.14mを測る。堆積状況は、羨道部同様に攪乱土が多く堆積しており、古墳に伴うものは整地土と考えられる中粒砂質土(39層)のみである。玄門付近は攪乱によりかなり削平を受けているが、墓壇掘形から延びる墓道を検出しており、その形状から墓道は羨門から東に曲がる形状を有していたものと考えられる。

石室全体に関連するものとして排水溝が奥壁から羨門付近にかけて1条配されている。排水溝は長さ5.7m、幅0.37mを測る。溝内は中粒砂層が堆積している。堆積土中には礫は含まれない。また、玄室内の溝直上で石材が1石認められるが、平坦面が上を向いていないため、原位置は保っていないものと考えられる。墓道には排水溝はつながらず、排水溝の埋土とは異なる細粒砂が堆積していた。



第18図 北大塚1号墳 石室実測図(1/80)

1. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質土 耕作土
2. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂質土
3. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質土 直径 2～20cm 大の礫混じる
4. 褐色 (10YR4/4) 中粒砂質土 直径 2～3cm 大の礫混じる
5. 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
6. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂質土 直径 3～10cm 大の礫混じる
7. 褐色 (10YR4/6) 極細粒砂質土
8. 明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂質土 直径 2～10cm 大の礫混じる
9. 黄褐色 (10YR5/6) 粗粒砂質土
10. 明褐色 (7.5YR5/8) 中粒砂質土
11. 黄褐色 (10YR7/8) 中粒砂質土
12. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂混じりの粘質土
13. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂質土
14. 褐色 (7.5YR4/6) 粗粒砂質土 直径～2cm 大の礫混じる
15. 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
16. 褐色 (10YR4/6) 極細粒砂質土
17. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂質土
18. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂質土 直径 5～20cm 大の礫混じる
19. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂質土 若干粘質あり
20. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂質土
21. 明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂質土
22. 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土
23. 黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂質土
24. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂質土
25. 褐色 (7.5YR6/8) 中粒砂混じりの粘質土
26. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂質土 直径 4～10cm 大の礫混じる
閉塞の残骸か
27. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂質土 直径 5～20cm 大の礫混じる
28. 明黄褐色 (10YR6/8) 中粒砂質土
29. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂混じりの粘質土
30. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂質土
31. 明黄褐色 (10YR6/8) 粗粒砂質土
32. 黄褐色 (10YR5/8) 粗粒砂質土
33. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂質土
34. 明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂質土
35. 明褐色 (7.5YR5/6) 粗粒砂質土
36. 褐色 (10YR4/6) 粗粒砂質土
37. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂質土 (粘質土が若干混じる) 墓込め土
38. 褐色 (10YR4/6) 粘質土
39. 黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂質土



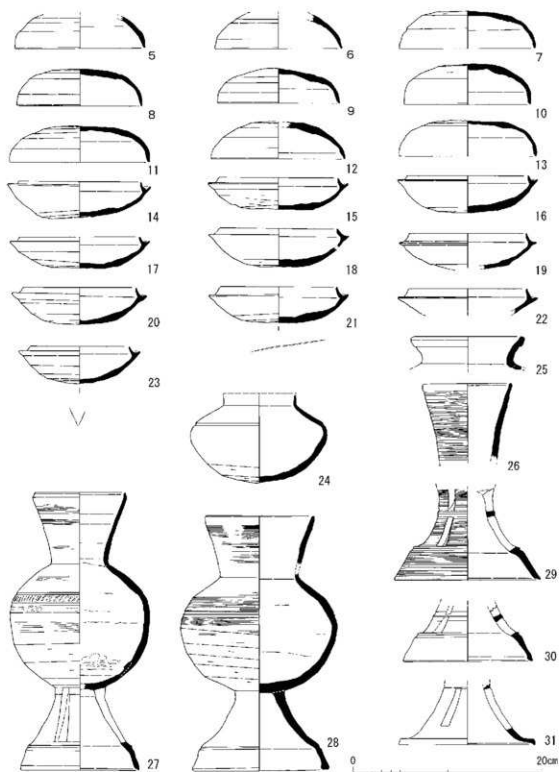
第19図 北大塚1号墳 石室閉塞石・左側壁実測図(1/40)

遺物は石室南東側の墳丘斜面を中心に出土している(第15図)。石室石材の抜き取り時に投棄された堆積土中から出土しており、石室内に埋葬時の原位置を保ったままのものは出土しなかった。

(3) 出土遺物

2号墳に関係する遺物の多くは、石室外で投棄されたような形で出土し、羨道東側の墳丘斜面地を中心に出土している。出土遺物は須恵器蓋杯、高杯、壺、脚付長頸壺、金属製品などがある。

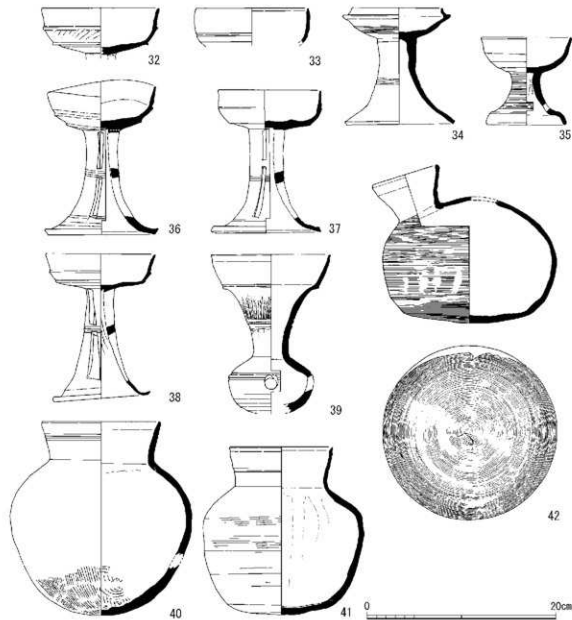
5～13は須恵器杯蓋である。5は明確な稜は失われている。調整は回転ナデ、回転ケズリで仕



第20図 北大塚1号墳 出土遺物実測図1 (1/4)

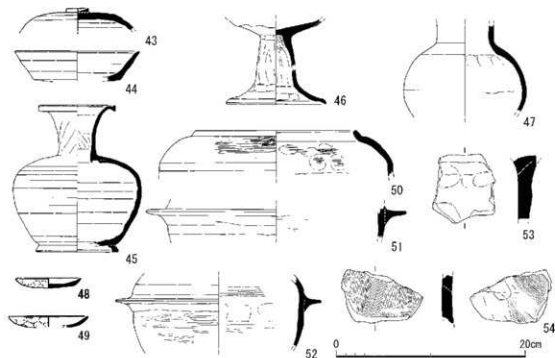
上げる。6は胎土に黒色粒が認められる。天井部と口縁部の境付近に浅くはみが認められる。このくぼみを境に調整に違いが認められ、天井部は回転ケズリ、口縁部は回転ナデで仕上げる。7は胎土に黒色粒が認められる。口縁部はナデ、天井部はヘラケズリにより仕上げる。内面天井部には不定方向のナデが認められる。8は胎土に黒色粒が認められる。焼成が甘く、摩耗が著し

い。天井部と口縁部の境付近に浅いくぼみが認められる。このくぼみを境に調整に違いが認められ、天井部は回転ケズリ、口縁部は回転ナデで仕上げる。9は天井部を粗いヘラケズリで仕上げる。口縁部外面から内面にかけてはナデによる調整が認められる。出土した蓋杯の中で最も小さい。明確な稜は失われている。10は天井部をヘラケズリで仕上げる。口縁部外面から内面にかけてはナデによる調整が認められる。11は焼成が甘く、灰白色を呈している。胎土は粗い。天井部はケズリにより調整している。口縁部は丸くおさめる。破片は石室内外から出土している。12は天井部をヘラケズリにより仕上げる。一部灰かぶりが認められる。口縁端部は若干開く。13は天井部をヘラケズリにより調整している。口縁内外面はナデで仕上げる。ケズリ、ナデの境は浅いくぼみが認められる。14～23は須恵器杯である。14は底部外面をヘラケズリにより仕上げる。15は全体に薄く自然釉がかぶる。底部内面にはナデ調整痕がよく残る。16は焼成が甘く、灰白色を



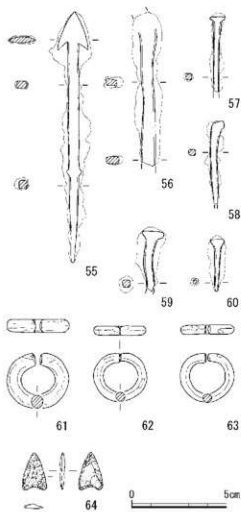
第21図 北大塚1号墳 出土遺物実測図2 (1/4)

呈している。胎土は粗い。ヘラケズリ・ナデにより仕上げる。17は焼成が甘く、灰白色を呈している。胎土は粗い。ヘラケズリ、ナデにより仕上げる。18は全体に黒色粒が認められ、19は須恵器杯である。口径12.3cm、高さ3.8cmを測る。底部はヘラケズリにより仕上げ、ナデ調整との境に浅いくぼみが認められる。20は黒色粒が認められる。受け部が分厚い。底部全体をヘラケズリにより仕上げる。21は胎土に0.2~0.5cmの粗い砂が混じる。底部外面には一条のヘラガキが施されている。22は焼成が甘く、灰白色を呈している。胎土は粗い。23はほかの杯に比べ小ぶり、体部が深い。底部外面にV字状のヘラガキが施される。24は短頸壺である。頸部径7.7cm、胴部径14.6cmを測る。肩部に沈線が認められる。また底部はヘラケズリにより調整する。底部は丸底である。口縁部は若干外湾する。口縁内面には焼成時に別の壺を重ね合わせたのか、色調の変化が認められる。25は壺の口縁である。口径13.2cmを測る。口縁部は肥厚している。壺部内面には円心状タキが認められる。26は脚付長頸壺の口縁から頸部である。口径9.2cm、残存長8.6cmを測る。29と同一個体である。29は脚部で台部径15.3cm、底部径9.6cmを測る。1cmあたり8~9条のカキメがめぐる。二段三方に長方形透かしが施される。透かし間には2条の浅い沈線がめぐる。脚部を裾部の境に稜を設け、両者を隔てる。27は脚付長頸壺である。頸部径6.0cm、高さ29.4cm、底部径12.4cmを測る。回転ナデのちカキメ(6条/9mm)を施している。また胴部には刻み目文(6条/9mm)が施され、浅い沈線により区画される。脚部はナデ調整で仕上げ、一段三方に長方形透かしを施す。脚部と裾部の境に稜を設け、両者を隔て、裾部は29に比べて内向きである。28は脚付長頸壺である。頸部径8.4cm、高さ21.1cm、脚部径14.4cmを測る。27に比べて、寸胴な印象を持つ。調整技法は27に類似しているが、体部にカキメによる調整で、刻み目文等は認められない。また脚部の透かしもない。30は長頸壺脚部である。残存高6.0cm、脚部13.5cmを



第22図 北大塚1号墳 出土遺物実測図3(1/4)

測る。脚部のみの残存のため、器形が不明であるが、脚付壺と考えられる。二段三方透かしが施されていたものと推察される。27・28と同様なサイズの脚付壺と考えられる。31は脚部である。残存高6.5cm、脚部径14.3cmを測る。器種は、長頸壺または高杯と考えられる。32は無蓋高杯杯部である。口径12.2cmを測る。胴部に櫛描き列点文が施される。脚部は欠損しているが、3方向の長方形透かしを有していたものと考えられる。33は無蓋高杯杯部である。全体に黒色を呈している。胴部には1条の沈線がめぐる。若干内湾する。34は有蓋高杯である。口径9.4cm、高さ12.4cmを測る。ナデ、カキメにより調整している。脚部は太く、透かしは穿孔しない。35は口径9.4cm、高さ9.3cmを測る。杯部はナデにより仕上げる。脚部はカキメ調整を施す。また4方向に円形透かしを穿孔する。36~38は無蓋高杯である。3点ともに焼け歪みが著しい。調整等は類似しており、杯部には稜は認められるが、文様はない。脚部には2段2方透かしが穿孔される。透かしの間、裾部には浅い沈線が施される。37は全体に黒色で、胎土が粗い。38は全体に自然釉がかぶる。39は甗である。頸部に縦方向のヘラ描きが施される。ヘラ描きののちに2条の浅い沈線を施す。体部中位の穿孔は直径1.5cmである。肩部と体部の境には1条の沈線がめぐる。40・41は広口壺である。40は口縁部に2条の沈線を施す。焼成時の焼き彫れが著しい。壺底部には外面にはタタキ、内面には同心円のあて具痕が認められる。41は口縁部に1条の沈線をめぐらせ、体部中央には粗いカキメを施す。タタキは認められない。内外面全体に自然釉がかぶり、内面では自然釉が下方にむけて溶け出す様相が見て取れる。42は平瓶である。体部外面の全体に1.6cm幅に11~12条のカキメが施される。底部にはカキメ工具の痕跡が認められる。ボタン状装飾の貼り付けはなされていない。充填は体部上面の直径5.4cmで行っている。43は須恵器杯蓋である。やや扁平な形状を呈すると考えられる。擬宝珠状のつまみを有している。口縁部が欠損しているが、天井部との境に稜が認められる。古墳時代に属すると考えられるが、ほかの杯蓋とは時期が異なるものであろう。44は須恵器杯Bである。内面に黒色粒が認められる。45は須恵器長頸壺である。飛鳥時代の遺物である。口頸部は短めであり、口縁端部が外側に開く。46は土師器高杯である。脚部は粗雑なナデで仕上げる。47は土師器壺である。体下部を欠損している。摩耗が著しいため、調整は不明瞭であるが、一部ヨコナデの痕跡が認められる。48・49は土師器皿である。48は口縁部に焼けた痕跡



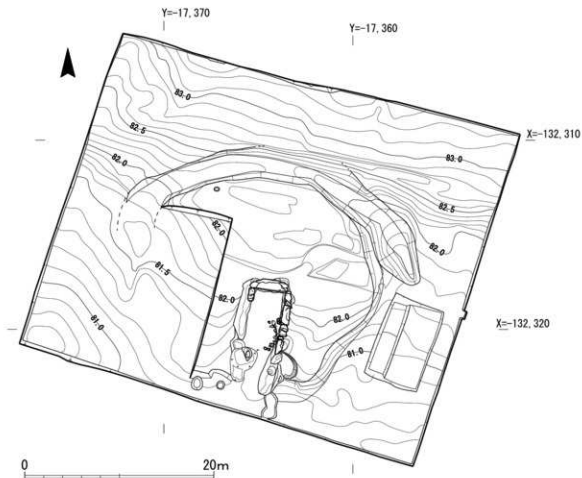
第23図 北大塚1号墳 出土遺物実測図4 (1/2)

が認められることから灯明皿として利用されたものである。50～52は土師器羽釜である。鎌倉時代以降の遺物であろう。53・54は不明土製品である。54は粘土紐の痕跡が認められることや不定方向のハケメから長胴甕の可能性が考えられる。55は鉄鎌である。鎌身部は腸袂三角形で平造である。頸部断面は長方形を呈し、棘状閃を設ける。56は槍砲か。57～60は鉄釘である。61～63は耳環である。すべて中実耳環である。61は銅芯の鍍金あるいは箔貼する耳環である。1号墳出土耳環で最も重いものである。全体に錆が認められるものの、金が一部残存している。62・63は対になる銀環である。61に比べて細い銅芯に銀あるいは箔貼する耳環である。X線透過により62の銅芯の左下部にくぼみが認められた。また、63の端面でシワ状の痕跡が認められた。64は石鎌である。無茎の鎌で基部に挟入が認められる。

2) 16トレンチ

(1) 調査区の概要

16トレンチは、2トレンチの南に設けた調査区である。平成28年度調査の4トレンチと重複している。現地形では、調査区の西側は竹藪の造成土であった。墳丘の上面はほぼフラットな状態に削平を受けており、石室も削平を受けていた。なお、南側は農道が敷設され削平を受けている。残存していた範囲でも西では地山と墳丘の判断を誤り、削平してしまった。

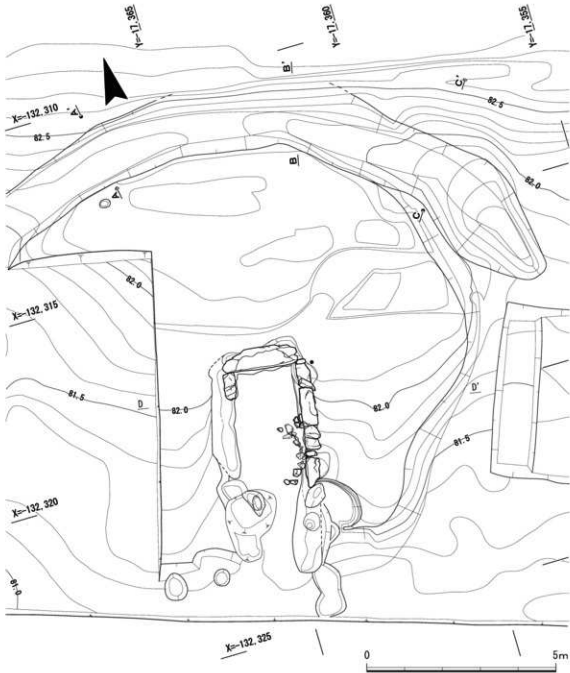


第24図 北大塚2号墳 平面実測図(1/200)

(2) 2号墳

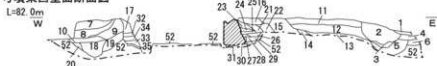
位置 16トレンチ中央で確認した横穴式石室を内部主体とする円墳である。墳丘南から西側は攪乱が地山まで及んでおり、盛り土を確認することはできなかった。石室の背面には馬蹄形の溝がめぐり、丘陵と古墳を分離している。標高は82m前後を測る。

墳丘 南から西にかけては、一部残存する程度であったが、北から東側では、地山から0.4mの盛り土を確認した。石室に向かって盛り上がる9、14~17、22~24層(盛り土A)、水平に堆積する11・12層(盛り土B)が認められる。旧表土などは確認できない。盛り土Aは石材を設置し、基盤面の高さまで裏込土を詰めたのち、版築している状況と考えられる。その後に盛り土Bを配

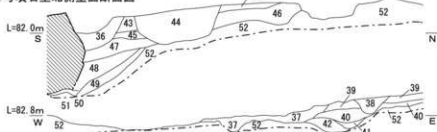


第25図 北大塚2号墳 墳丘・石室実測図(1/100)

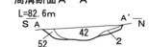
2号墳東西壁面断面図



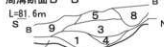
2号墳石室北側壁面断面図



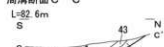
周溝断面A-A'



周溝断面B-B'

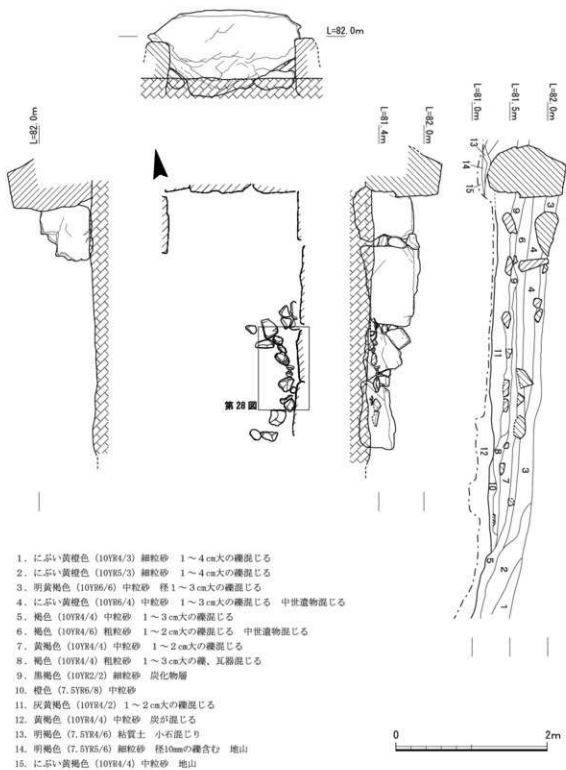


周溝断面C-C'

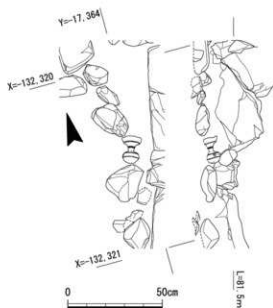


1. 褐色 (10YR4/4) 中粒砂質土
2. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂混じりの粘質土 直径 0.5 ~ 2cm 大の礫含む
3. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂混じりの粘質土 直径 0.5 ~ 2cm 大の礫含む 褐灰色 (10YR5/1) が底に混じる
4. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂質土 現代の耕作土
5. 褐色 (7.5YR4/6) 極細粒砂混じりの細粒砂質土
6. 暗褐灰色 (10YR3/4) 粗粒砂質土
7. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂質土 直径 0.2 ~ 6cm 大の礫が密に混じる
8. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂質土
9. 褐色 (10YR4/4) 粘質土混じりの中粒砂質土
10. 明褐色 (10YR6/8) 中粒砂質土
11. 褐色 (7.5YR4/6) 細粒砂質土
12. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂質土
13. 明褐色 (7.5YR5/0) 粘質土
14. 黄褐色 (10YR5/6) 極細粒砂質土
15. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂質土 直径 0.5 ~ 3cm 大の礫含む
16. 明黄褐色 (10YR3/6) 細粒砂質土
17. 褐色 (10YR4/4) 粘質土
18. 褐色 (10YR4/6) 粘質土混じり粗粒砂質土
19. 褐色 (10YR4/6) 粘質土混じり中粒砂質土
20. 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
21. 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
22. 橙色 (7.5YR6/8) 細粒砂質土
23. 橙色 (10YR6/8) 細粒砂質土 直径 0.2 ~ 2cm 大の円礫含む
24. 明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂質土
25. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂質土
26. 黄褐色 (10YR5/6) 粗粒砂質土
27. 橙色 (7.5YR6/6) 細粒砂質土
28. 明褐色 (7.5YR5/8) 中粒砂質土 裏込め土
29. 赤褐色 (10YR4/6) 細粒砂質土 裏込め土
30. 明褐色 (7.5YR5/6) 細粒砂質土
31. 明褐色 (7.5YR5/8) 粗粒砂混じりの粘質土 石材敷地土
32. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂質土
33. 明褐色 (7.5YR5/8) 細粒砂質土
34. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂質土
35. 褐色 (10YR4/6) 粗粒砂混じり細粒砂質土
36. 明褐色 (7.5YR5/8) 粗粒砂質土
37. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂質土 直径 5 ~ 40mm の礫含む
38. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂質土 直径 10 ~ 50mm の礫含む
39. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂質土 直径 10 ~ 30mm の礫含む
40. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂質土
41. 褐色 (10YR4/6) 中粒砂質土 直径 5 ~ 10mm の礫含む
42. 褐色 (10YR4/6) 中粒砂質土 直径 10 ~ 50mm の礫含む
43. 明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂質土 褐灰色 (7.5YR5/1) が底に混じる 墳丘盛土
44. 明褐色 (7.5YR5/8) 中粒砂質土 直径 0.2 ~ 3cm 大の礫混じる 墳丘内陪渠
45. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂質土 第1次墳丘
46. 明黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂質土
47. 褐色 (10YR4/6) 粘質土混じり中粒砂質土 第1次墳丘
48. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂質土
49. 褐色 (10YR4/6) 粘質土
50. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細粒砂質土
51. 明褐色 (7.5YR5/6) 細粒砂質土
52. 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土混じりの粗粒砂質土

第26図 北大塚2号墳 墳丘土層図(1/100)



第27図 北大塚2号墳 石室実測図(1/50)



第28図 北大塚2号墳 遺物出土状況図(1/20)

構築されている。近現代の石材採取や中世以降の再利用により、石室は玄室部の基底石を残し、破壊されていた。石室の規模は長さ3.4m、石室幅1.7m、羨道幅0.8mを測る。奥壁には長軸2.1m、短軸0.64mの石材と小振りな石材が基底石として据え置かれている。左側壁では基底石が4石残存している。最も大きな石材は長軸1.4m、短軸0.38mを測る。石材の設置については布掘状に掘削した後に小石材を調整石として入れ込み、奥壁の巨大な石を設置している。石材下からは整地土及び炭を確認した。

奥壁側2石は墓壇底部から約0.5mの高さに合わせる形で設置されている。基底石2石は目地が通っており、2段目の石材に関しても奥壁基底石に目地を合わせて積まれていたものと考えられる。石材は、布掘状の掘削の後に高さの調整を目的とした整地土を敷いた上に設置している。石材と石材の間に小石材を配して安定させているようにも見えるが、上部石材が失われているためか、かませは緩く、容易に外れてしまう状態であった。

石室内は再利用による石室内を整理したため、床面は消失している。唯一、石室左側壁に沿って1.6m×0.5mの範囲で床面が遺存しているものと考えられる(第28図)。ここでは墓壇底から0.12mの高さで腿が完形で出土しており、明確な整地面とは確認できなかったが、再利用時に持ち出された副葬品が残存していたものと考えられ、本来の埋葬面が遺存していると判断する。奥壁から約3.4m付近が玄門と考えられる。玄門付近から羨道と推定する地点にかけては左右ともに石材の採取痕跡が認められる。また、右側壁の石材抜き取りの痕跡が玄室に比べて内側に位置していることから、この地点に仕切石があったものと考えられる。平面プランは石片袖式石室であったものと考えられる。なお、調査地南には農道と用水側溝が埋設されていることから、古墳に関連する遺構はすでに消失しているものと考えられる。

している。盛り土Bが盛り土A全体を覆っていたかは上部が失われているため、不明である。堆積状況から石室を構築しながら墳丘構築を行っていたものと考えられる。

周溝 古墳の背面・東西で確認した。幅1.8m、深さ0.6mで地山を掘削しており、18.5mにわたって検出した。溝上面に現代の区画溝が東西に掘削されている。周溝は全周せずに、馬蹄形にめぐっていたものと考えられる。西端は削平により確認できないが、東端を確認している。埋土は41・42層が認められる。1～5cm大の礫を多く含み、須恵器片が少量出土している。

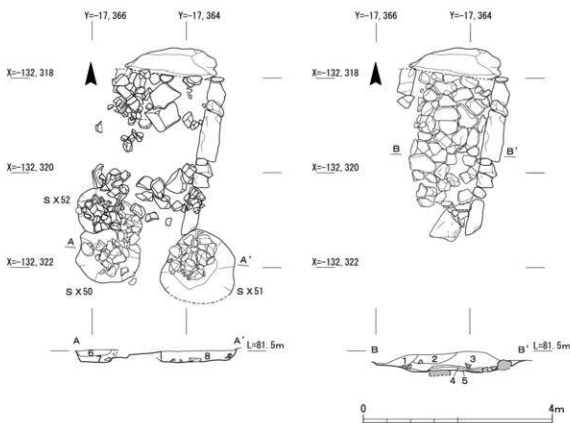
石室 2号墳の内部主体は南に開口する横穴式石室である。石室は北から20度西に振る形で

(3) 古墳時代以降の遺構

石室に重なる形で石材の採取坑がある。平成28年度調査時には、石室周辺で多数の擾乱状の土坑を検出したが、掘削作業を実施したところ、以下の土坑に集約した。

明瞭な掘形を有するものとして、石材採取坑 S X 01、S X 50、S X 51、S X 52がある。S X 01は石室全体に及ぶもので、その下面で S X 50～52を検出した。S X 01はほぼ石材の割石だけが混じるのに対して、S X 50～52には石材のほか後述の石室の再利用遺構 S X 53を破壊した際の焼土・炭化物が多く混じり、飛鳥～中世の土器片もわずかに含まれるものである。このことから、S X 50～52は S X 53に後出することは明らかである。さらに、S X 50～52は地山まで深く掘られており、石材を直接抜き取った坑と判断されるのに対して、S X 01は破砕された石材のみが集積されており、明らかに様相が異なる。これら上下の坑が、異なった時期に破壊された痕跡なのか、石材を抜き取った直後の窪地に破砕した石を破棄するという一連の行為の結果なのか、遺物の出土が無く、決め手に欠ける。本報告では別個の時期の採取痕として記述したい。

そのほか、掘形は認められないが、右側壁周辺の破壊石材の分布に5か所のまとまりが認めら



1. にぶい黄褐色 (10YR4/4) 中粒砂
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂 径1～3cm大の礫混じる
3. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 中粒砂 1～3cm大の礫混じる
中世遺物混じる
4. 褐色 (10YR4/6) 粗粒砂 1～2cm大の礫混じる 中世遺物混じる
5. 黒褐色 (10YR2/2) 細粒砂 炭化物屑
6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質土
7. 明褐色 (7.5YR5/6) 細粒砂質土 15～25cm大程度に破壊された石材混じる
8. 褐色 (10YR4/6) 極細砂質土 15～25cm大程度に破壊された石材混じる

第29図 北大塚2号墳 石材採取及び石室再利用(1/80)

れ、このまとまりの一つ一つが石材の破壊に伴う単位とすると、石室石材は最低5石から構築されていたものと考えられる。石材の残存状況は右側壁中央付近の石材はほぼ持ち出され、周囲には割られた石材が残存している。

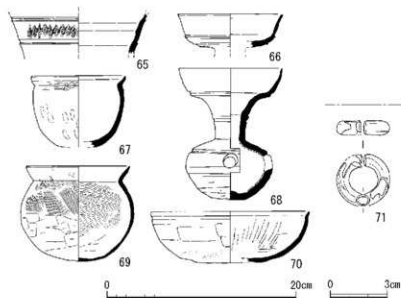
石材採取坑 S X 01 S X 50～52に後出する採取坑で、2号墳玄室上面全体に認められる痕跡である。この坑の埋土を除去すると、S X 50～52の輪郭や石室石材が認められるものである。部分的にはあるが、右側壁部分では玄室上面から石材を設置土坑の底面まで及んでいる。S X 50～52と重複するため平面規模は判然としないが、深さ0.4mを測る。内部には0.2～0.6m程度の大きさの割石が隙間なく入り込んでいた。石材が人力で運べる程度の大きさに割られた際に、廃棄された石と判断される。石材の遺存状況から、右側壁から破壊行為が行われ、左側壁の中央付近の石材のみが運び出されたものと考えられる。

石材採取坑 S X 50 羨道右側壁石材の採取に係わる痕跡である。幅1.3m、深さ0.26mを測る。土坑内からは飛鳥時代の土器器杯Cと丸底壺が出土している。古墳の副葬品が紛れ込んだものかどうかは不明である。

石材採取坑 S X 51 羨道左側壁の石材を抜き取る際の土坑である。幅1.4m、深さ0.24mを測る。土坑の位置から羨道と玄室の境にあたと考えられる。

石材採取坑 S X 52 S X 50の北側で掘形が重複する形で認められた石材採取坑である。幅1.46mを測る。土坑位置からは軸部が設置されていたか所と考えられる。S X 51によって抜き取られた石材と対になる右側壁の玄室、羨道の境となる石材が置かれていたものと考えられる。

再利用遺構 S X 53 玄室内全面に及ぶ再利用の痕跡である。土層観察によると、12世紀末から13世紀初頭にかけての土器器皿、瓦器碗を包含する炭化層が厚さ0.12mで堆積しており、その直下に人頭大の円礫が敷かれている(第29図右)。この円礫は上面で認められる破砕された石材とは異なり、角は摩耗していることから石室石材を加工したり利用したりしたものではないと考え



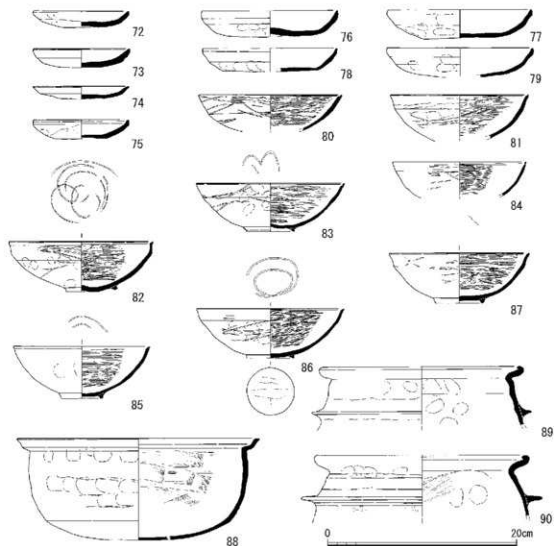
第30図 北大塚2号墳 出土遺物実測図1 (1/2、1/4)

られる。円礫の下層には小石混りの中粒砂(11層)が堆積しており、この層は石室内のみに堆積するもので、再利用に伴うものと考えられる。炭化層の上位にはにぶい黄褐色中粒砂層が厚さ0.36mで堆積している。この堆積は崩落土と考えられ、この土を切る形で石材採取痕跡が認められることから、石室としての空間を保った状態で再利用された

ものと考えられる。炭化層については、石材に被熱の痕跡が認められないことや炭化物が細粒砂のように微小であり、小片が認められなかったことから、石室外で炭化したものを、土器片とともに石室内に敷き置いたものと考えられる。出土する遺物は、生活雑器として用いられるような土師器皿、瓦器碗や被熱してススが附着する土鍋などがある。石室を再利用した目的については、葬送儀礼や廃棄土坑などが想定できるが、確証はない。

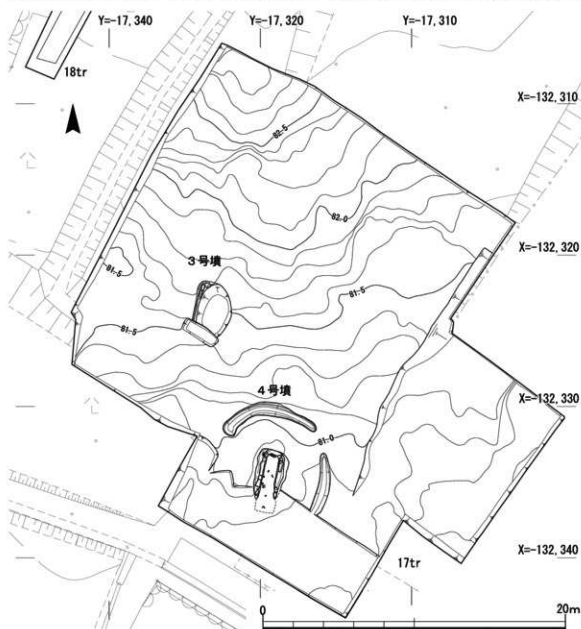
(4) 出土遺物

65は須恵器壺の頸部と考えられる。2号墳の周溝から出土している。浅い沈線により区画された中に10条の波状文が施される。66は高杯杯部である。杯底部は2条の稜が認められる。稜間には文様は認められない。68は須恵器甕である。石室内から出土した遺物である。1号墳の甕に比べて頸部は短く、柳描きも認められないが、口縁部の開き方が類似することから、同時期のもの捉えてよいだろう。透かし孔の直径は1.8cmを測る。底部は扁平に仕上げる。67・69は土師器の壺である。67は摩耗が著しく、全体の調整が不明瞭であるが、口縁部に床横方向のハケメ調整が認



第31図 北大塚2号墳 出土遺物実測図2(1/4)

められる。69は内面、外面上面にハケメ調整が認められる。70は土師器杯Cである。内面に放射状の暗文が認められる。口縁部は外に開く。飛鳥I並行期の土師器杯Cと考えられる。71は耳環である。石室内からの出土である。中空の耳環である。鍍金による整形と考えられる。また端面の観察から薄板技法により、端面を閉じている。72~90は再利用面の出土遺物である。72~79は土師器皿である。72~75は概ね口径10cmの土師器皿である。手づくねによるものである。指押さえの痕跡が一部に認められる。76~79は土師器皿である。77は底部がへそ皿のような形状をしている。いずれも口縁端部を丸くおさめる。外面底部には指押さえが認められる。80~87は瓦器椀である。いずれも横方向のミガキが内面に認められる。底部まで復元できる82・83、85~87には底部に暗文が施されている。86の底部外面にはヘラ記号が認められる。いずれも大和型の瓦器椀である。88は土師器質の鍋である。外面全体にススが附着し、内面底部にもススの附着が認められる。ま



第32図 北大塚3・4号墳 配置図(1/250)

た内面は細かなハケ調整を施す。89・90は土師質の羽釜である。いずれも粘土紐の痕跡が観察できる。内外面にハケ目調整が施されている。

3) 17トレンチ

(1) 調査区の概要

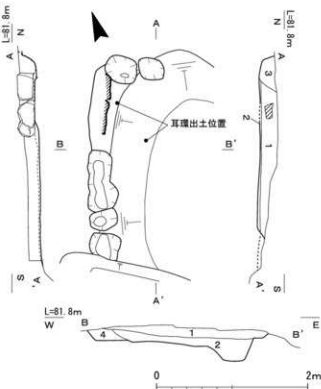
2トレンチの南東に位置する調査区である。調査着手前には高まりが全体にみとめられ全体が竹林に覆われていた。トレンチ内は畑、竹栽培と異なると土地利用をしていたため、高低差が1.7m程度が認められた。調査の結果、1.7m近い高まりはすべて竹栽培に伴う盛り土であった。盛り土を除去すると地山である褐色中粒砂質土を検出した。本来の地形は2トレンチ付近を頂部にした傾斜地と考えられる。

(2) 3号墳

位置 調査区西側で検出した横穴式石室を内部主体とした古墳である。後世の削平により、地山まで削平をうけており、周溝など古墳に関連する遺構は失われているため、墳形を復原することはできない。

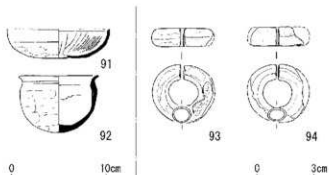
墳丘 周囲に観察用あぜを残し精査・観察を繰り返したが、墳丘盛り土の痕跡は認められなかった。竹栽培の造成土の入れ替えのため墳丘は尽く削平を受けており、全く遺存していないものと判断される。

石室 右側壁奥壁側の基底石2石と右側壁の石材据付穴と考えられる土坑が残存していた。石室東側を中心に石室全体に攪乱が及んでおり、残りが悪い。石室内は攪乱による堆積土である明褐色粗粒砂が認められ、この土中から土師器、耳環2点出土した。この攪乱は石材抜取行為に伴うものと考えられる。堆積の状況から、右側壁に伴う抜取行為は石室床面を完全に消失させるまでに至ったようである。石室の北東にかけて墓壙の一部が遺存していることから南東方向から抜



1. 褐色 (10YR4/4) 極細砂 直径3～2mmの礫含む
2. 明褐色 (7.5YR5/6) 極細砂 直径10～50mmの礫含む
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂
4. 褐色 (10YR4/6) 極細砂

第33図 北大塚3号墳 石室実測図(1/50)



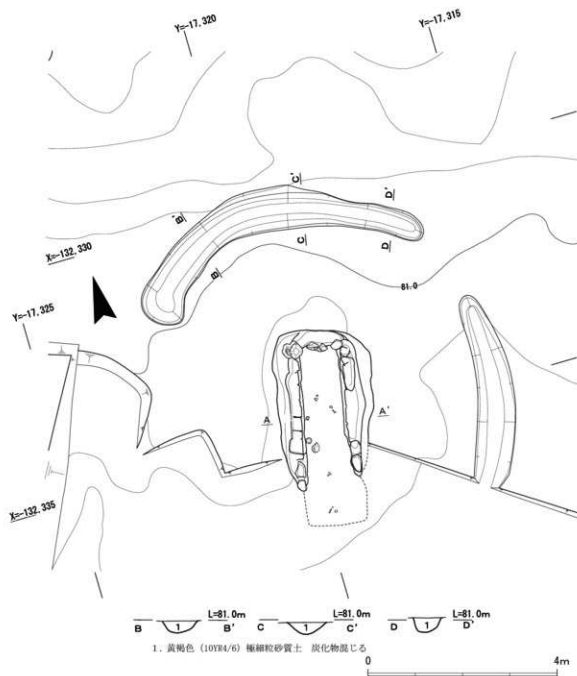
第34図 北大塚3号墳 出土遺物実測図(1/2, 1/4)

取を行ったものと考えられる。残存している石材は、長辺0.34m、短辺0.14mを測る。残存する石材の高さが概ねそろっていることから、目地を合わせるような形で設置していると考えられる。石材の据付坑は地山を掘削する形で掘られ、幅0.32mの布掘り状を呈している。

全体像については不明確であるが、石材の大きさや立地から考えると南東方向130mで検出した4号墳と同様の規模の古墳であると考えられる。

(3) 3号墳出土遺物

91は土師器杯Cである。飛鳥I並行期のものと考えられる。70に比べて小ぶりである。ナデ調整の後、放射状のミガキを施す。口縁部には浅い沈線が認められる。92は土師器壺である。外

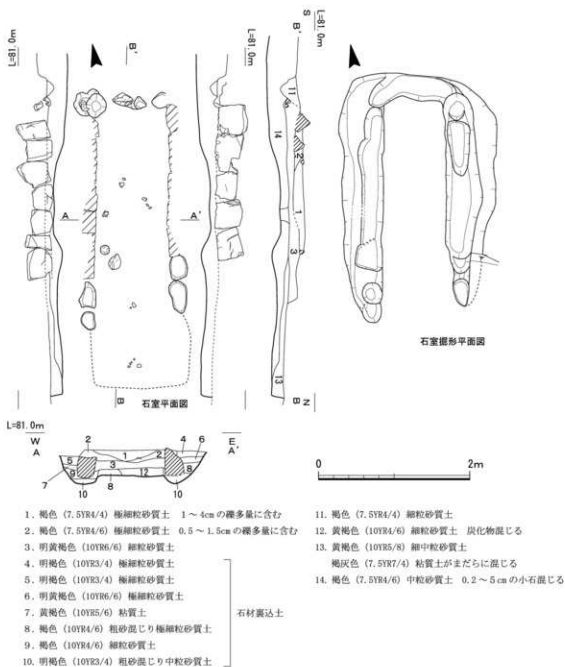


第35図 北大塚4号墳 平面実測図(1/80)

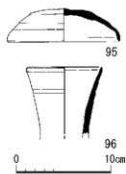
面には荒いケズリを施す。胎土には赤褐色の細砂が含まれる。67・69と胎土はよく似ている。93・94は中空の金環である。大きさが類似していることからセット関係だろう。いずれも端面は平坦である。銅板の厚みは0.05～0.1cmである。内面には緑青が一部すじ状に確認でき、銅板の接合部と考えられる。端面の観察等から薄板技法と考えられる。なお、94の耳環の断面形状は93に比べて楕円形を呈している。

(4) 4号墳

位置 調査区南側で検出した横穴式石室を内部主体とした円墳である。石室内の標高は81.6mを測る。隣接する3号墳とは標高差0.93mを測り、石室間の距離は約13mである。石室は北に對



第36図 北大塚4号墳 石室実測図(1/50)



第37図 北大塚4号墳
出土遺物実測図(1/4)

して10°東に振る。

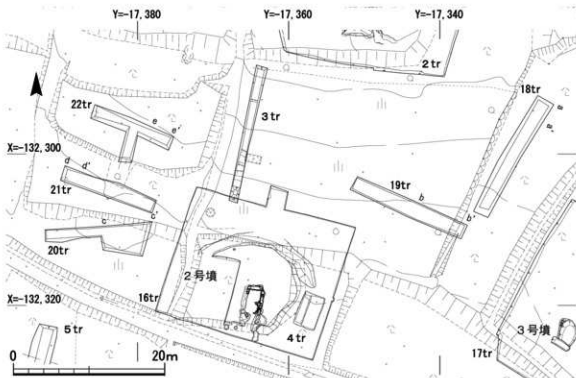
墳丘 墳丘は削平により残存していない。周溝から復元する墳丘規模は直径6.9mである。

周溝 石室背面及び東側で検出した。幅0.8～0.9m、深さ0.17～0.32mを測る。石室北東側で周溝は一旦途切れる。東側周溝の南端は削平により残存していなかった。西側周溝の検出状態から、全周していなかったものと考えられる。

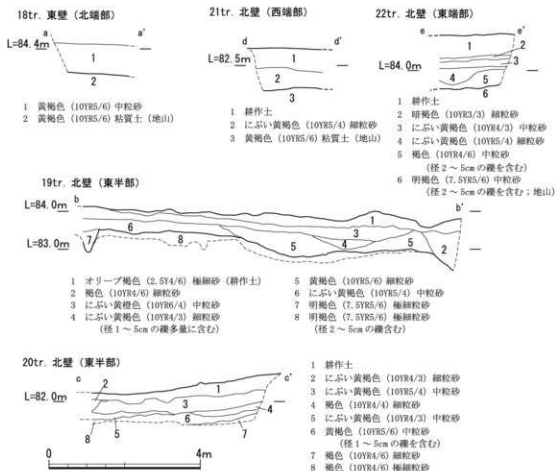
石室 4号墳の内部主体は南に開口する無袖の横穴式石室である。残存状況はあまりよくないが、両側壁の基底石が玄室から羨道にかけて残存しており、奥壁石材は完全に失われている。利用された石材は長辺0.3m、短辺0.15m程度である。長辺を横にした状態で石材を設置している。右側壁奥壁側から6石目の石材が長辺を縦にしていることから、石室と羨道との境を意識しているものと考えられる。左側壁が高さ80.9mで石材の上面がほぼ水平に揃うことから、目地を通してあるものと考えられる。石材据付穴は布掘り状に掘削されている。

(5) 4号墳出土遺物

95は須恵器杯である。羨道部付近で出土した。製作技法は杯蓋のようであるが、天井がヘラ切りによる痕跡が残る。内面はにぶい橙色を呈する。96は須恵器壺の口縁部である。残存状況が悪く、器形の推察は困難ある。



第38図 18～22トレンチ配置図(1/500)



第39図 18～22トレンチ土層実測図(1/100)

4) 小規模調査

平成29年度の調査において、4基の横穴式石室墳を確認したことから、さらに古墳が遺存していないかを確認するために、1・2号墳の周囲に18～22トレンチを設けて、調査を行った。

18トレンチは2号墳と3号墳の間に設定した17.0m×2.0mのトレンチで、現状では西側に比高0.9mの崖面が認められた。2号墳では墳丘の東半が崖面となって削られながらも遺存していたため、崖面下に石室が残存している可能性が想定された。調査の結果、竹藪の土入れがトレンチ全面にわたって表土下0.8mに堆積しており、その下で黄褐色粘質土の地山を認めた。遺物の出土はなかった。黄褐色中粒砂が墳丘土の可能性も認められたため、南西側に19トレンチを設定し、その可否を検討した。

19トレンチは、18トレンチの西側の一段高い平坦地に設定した調査区である。8層が地山と判断され、その上位に細粒砂・中粒砂を中心とした堆積が認められた。これらは砂礫を主体とする軟質な堆積層であり、2号墳で認められた墳丘土と土質が異なることや、遺物の出土も認められなかったため、古墳は分布していないものと判断した。

20～21トレンチは2号墳の西側に設定した調査区で、現状では段状に成形されており、古墳の墳丘が埋まっている可能性が認められた。それぞれの平坦面に調査区を設定した。20トレンチが14.2m×1.4mのトレンチで、東側の最も高い部分に墳丘・石室が遺存している可能性があったた

め、6m×4.2mの台形状に広げた。21トレンチは13m×2.2mのトレンチである。22トレンチは12m×1.8mの東西方向の調査区で、中央部を南側に4.2m×1.7mに拡張し、墳丘が遺存していないかを確認した。これらのトレンチを掘削・調査しても、地表の耕作土の下に細粒砂・中粒砂が水平に堆積しており、土質が砂を主体であることや遺物の出土が無いこと、石室構築のための巨礫の検出も認められず、古墳の兆候は認められなかった。小規模調査の範囲においては古墳が残存していないと判断された。

6. 北大塚古墳群の検討

北大塚古墳は、今回の調査において、群集墳であることが確認できた。調査では4基の古墳を確認したが、辺は筍栽培や畑の土の入れ替え、造成のため、かなり削平を受けていることから、すでに破壊されてしまった古墳があった可能性は否定できない。

今回の調査では、石室構造や墳丘規模、立地の違いなど多くの成果をあげることができた。それらについて以下にまとめを行いたい。

(1) 石室形態から見る築造順位

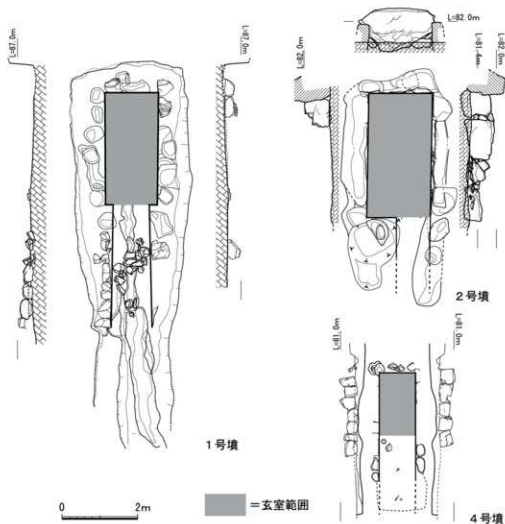
確認した古墳はこれまで述べたように4基である。その石室形態を見ると、1号墳は両袖式石室、2号墳は右片袖式石室、3・4号墳は無袖式石室である。すべて破壊行為が及んでおり、基底石が残存する程度で、持ち送りなどの石室の上部構造は不明である。

各古墳の石室の状況について再度整理すると、1号墳は羨道部の右側壁の基底石が残る。使用されている石材は、長辺0.53m、短辺0.33mの人頭大のものである。基底石の石材上面が概ね86.8mの高さに揃う。石材の抜き取り痕の状況から奥行3.4m、幅1.4mの玄室が設けられていたと考えられる。羨道部は長さ3.0m、幅1.08mと考えられる。玄室と羨道を区画する両袖部の幅は0.6m程度である。このことからそれぞれの袖部は0.3m程度の長さであったと推定される。石室の推定床面積は4.76㎡である。

2号墳では奥壁、右側壁1石、左側壁4石が残存する。使用されている石材の材質はホルンフェルスと考えられる。奥壁石材は長辺1.9m、短辺0.6m、高さ1.1mの巨石が使用されている。石室内面はある程度加工しているようであるが、背面は切り出した状態であると考えられる。右側壁石材は長辺0.7m、短辺0.39m、高さ0.67mの石材を使用している。左側壁で最大の石材は長辺1.0m、短辺0.41m、高さ0.7mの石材が使用されている。これら基底石の石材は概ね84.9mに高さ

付表2 北大塚古墳群石室規模等一覧

古墳番号 古墳名	墳形 (規模・m)	玄室 形態	玄室長 (m)	玄室幅 (m)	羨道長 (m)	羨道幅 (m)	玄室 長・幅比	玄室 羨道比	玄室 面積(㎡)	型式
1号墳	円(16)	両袖	3.4	1.4	3.14	0.92	2.4	1.1	4.76	TK 209
2号墳	円(16)	右片袖	3.3	1.7	1.2+	0.8+	1.9	1.7	5.61	TK 209- 飛鳥1
4号墳	円(7.4)	無袖	1.67	0.96	1.17+	0.96	1.7	1.4	1.60	飛鳥1
平山古墳	円(20)	-	3.3+	1.8	-	-	1.8	-	5.94	TK 10 新段階並行期



第40図 北大塚古墳群石室比較図

さで描えられている。側壁を構成する石材の間にはこぶし程度の石を挟み込んでいるが、簡単に抜けてしまう。玄室の推定規模は奥行3.3m、幅1.7mと考えられる。羨道は長さ2.0m以上、幅0.8mと考えられる。奥壁を中心に墳丘が構築されたと仮定した場合、現在の推定長が限度であろう。石室の推定床面積は5.61㎡である。

4号墳では両側壁の基底石が12石残存していた。石材は長辺0.3m、短辺0.15m、高さ0.4mの石材が用いられている。石材の上面は概ね80.9mに揃えている。石室の規模からは上部にはほぼ同じ大きさの石材が積み上げられていたと考えられる。また右側壁の奥壁から6石目の石材がほかの石材に比べて0.15m程度小さく、ここが石室と羨道として意識したか所と考えられる。この推測を基に復元すると、玄室規模は、長さ1.67m、幅0.96m、羨道幅0.96m、羨道長1.17m以上と考えられる。この数値から床面積を推定すると、1.6㎡となる。

石室形態についてまとめる。1号墳は両袖式石室を採用し、玄室と羨道の長さがほぼ1:1と同じ比率を示し、羨道を伸ばす意識が認められる。また玄室長と幅の比率は2.4:1と長方形プランとなる。2号墳では、右片袖式石室を採用しており、羨道は墓道に比べて1m以上短く、また玄室長と幅の比が2:1と示す。この比率は典型的な畿内型石室のものに類似している。4号

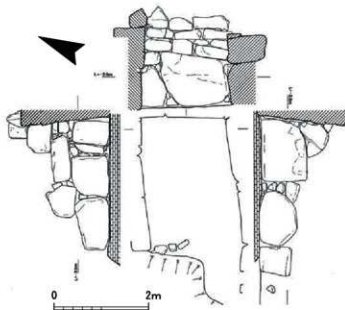
墳では無袖式石室を採用しており、石室内における各所は簡略化している。これらのことを石室編年に合わせて考えると、2号墳が最も早く築造され、次いで、1号墳、4号墳と造墓活動が行われたものと考えられる。⁽⁸¹¹⁾

2) 立地からみる築造順位

北大塚古墳群は、標高81～87m付近の丘陵上に立地している。それぞれの古墳の立地と環境について子細に見ると、丘陵は1号墳が最高所にあり、そこから南側によって2号墳が、南東方向によって3・4号墳が造られている。1号墳は4基の中でもっとも高所に位置しており、石室床面の標高は86.6mを測る。墳丘上の最高所(残存地点)では標高88.3mとなる。2号墳は、石室床面の標高81.4m、墳丘上(残存地点)では82.0m、古墳の北側背面では82.4mを測る。3号墳の石室床面は標高81.5mにあり、4号墳では石室床面の標高80.7m、石室周囲の標高は80.8m前後を測る。1号墳の石室床面からの高低差は、2号墳では5.2m、3号墳では5.1m、4号墳では5.9mを測る。田畑や笹栽培の土入れのため本来の地形ははっきりとしないが、現状で判断する限り、1号墳が丘陵微高地のピークにあたり、2～4号墳の3基が築造された地点は丘陵尾根筋上の微高地の末端に当たるものと推察される。大塚遺跡の小規模調査では古墳の存在が認められず、2～4号墳より南側では造墓活動が行われていなかったと考えられる。先述したように石室の編年の流れからは、2号墳から造墓活動を開始したものと考えられる。2号墳が丘陵末端に位置し、その背面の丘陵頂部には1号墳が位置している。同じように丘陵のピークに向けて、新しい時期の古墳を築造する行為は、八尾市の高安千塚古墳群等でもみられる事例である。⁽⁸¹²⁾

3) 周辺古墳との関係

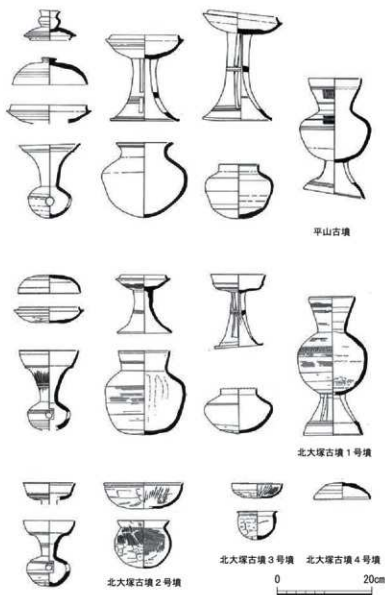
北大塚古墳群が位置する丘陵には、平山古墳、尾の山古墳が立地している。尾の山古墳の発掘



第41図 平山古墳石室実測図(井手町1987引用)

調査は一切行われておらず、詳細は不明である。平山古墳は、井手町教育委員会によって昭和62年に発掘調査が実施されている。調査成果によると、平山古墳は直径20m規模の円墳で、横穴式石室を主体とした古墳である。石室は墳丘の中心付近に配置されていたと報告されている。石室は西に開口していたようであるが、詳細な石室形態は不明である。石室の規模は、全長3.3m、奥壁幅1.8m測る。石材の残存状況は3から4段の石材が残っており(第41図)、石材は北大塚2号墳と同程度のものが使用さ

れていたようである。石室形態については、平面プランははっきりしないが、2号墳と同規模、またはそれよりも若干大きな片袖式石室であったと考えられる。石室規模比も破壊行為が及びながらも玄室長と幅の比率1.8:1を示すことから、ほぼ2:1の玄室を持ち合わせた畿内型の横穴式石室であったと考えられる。北大塚古墳と平山古墳との立地を比較すると、平山古墳は木津川を望む丘陵の先端に位置するのに対して、北大塚古墳は同じ丘陵にありながらも南東側の丘陵稜線上に位置している。両者の位置は約230m離れている。2つの古墳の間には、ほかに古墳は確認できていないが、造墓活動が継続されていれば、この間を埋めるよ



第42図 平山古墳・北大塚古墳出土須恵器

うに古墳が築造されていたものと考えられる。石室の開口方向については、北大塚古墳群では南向きに開口し、平山古墳では西向きに開口しているが、これは地形的な制約を受けているものと考えられる。

第42図に両古墳の主要出土土器を抽出した。細かく見てみると高杯は有蓋の2段透かしを持つ長脚のものである。透かしは長方形で、下段の透かしが短いものと上段はほぼ同じ大きさのものに大別できる。杯蓋はつまみがあり、全体に丸みをおびる。北大塚古墳ではつまみが消失したタイプの杯蓋が主体である。杯身は口径13~16cm程度で立ち上がりがしっかりとしている。甕は無紋で、北大塚古墳出土のものに比べて頸部が太い印象である。また、口縁部についても上方外側への開きが強い。出土する須恵器の器種は、蓋杯、高杯、甕、広口壺、台付長頸壺と主体的なものは平山古墳と北大塚1号墳と類似している。須恵器の時期についてであるが、若干ながら平山古墳が先行するものと考えられる。須恵器の編年から考えると平山古墳はTK10新段階並行

期にあたると思われる。⁽⁸¹³⁾北大塚1号墳はTK209型式並行期と考えられ、時期差が認められる。2～4号墳では副葬品の多くが失われているため、副葬品の違いの細部は不明である。

4) 被葬者像について

今回の調査により、当時の社会集団の中でどの階層の人物が埋葬されていたかを推察する資料はほとんど得られなかった。副葬品においては、鏡、馬具、玉などの出土は認められず、唯一1号墳で鉄鏃が1点出土しただけである。この鉄鏃の出土を根拠として、被葬者像を推察するならば、群集墳を築ける階層の中でも鉄鏃を所有する階層として、中位程度の集団であったと考えられる。また、墳丘規模から推察すると1・2号墳は直径15m級の円墳であり、円墳を築造しうる階層の中でも中位程度にあたるものと考えられる。

以上のように、出土遺物や墳丘形態、規模から推察すると、古墳の位置する丘陵周辺を治めていた小首長と関係する、被葬者集団が考えられるのではないだろうか。また近接する平山古墳では、陶棺、馬具、三輪玉が出土していることから、平山古墳の被葬者に次ぐ人物であると考えられる。

7. まとめ

大塚遺跡は遺物散布地として知られていたが、今回の調査においても、顕著な遺構は確認できず、少量の遺物が出土する程度であった。北大塚古墳はこれまで単独の円墳とされていたが、調査の結果、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期から飛鳥時代にかけて築造された最低4基から構成される群集墳であることが判明した。平山古墳と比較することで、井手町における後期、終末期古墳のあり方やその被葬者について一定の評価を与えることができたと考えている。また北大塚古墳群の中で石室型式や形態など、群集墳内における横穴式石室の変化を見ることのできる事例となった。北大塚古墳群は一つの集団(=家族)が連綿と造り続けた古墳群であり、丘陵の南側斜面に展開している点から、南方に存在したであろう集落を意識した集団であったと推定される。井手町周辺の後期、終末期古墳の状況はよくわかっておらず、今回の調査事例は井手町、ひいては南山城の古墳時代を考えるうえで重要な成果といえよう。

(竹村亮仁)

発掘調査、報告書執筆に際して、一瀬和夫、梅本康弘、小泉裕司、菱田哲郎他諸氏のご教授・ご協力を賜りました。ここに感謝申し上げます。

注1 井手町史編集委員会「井手町の自然と遺跡」『井手町史』第1集 1973

注2 梅原末治「井手発見の石器と兩大塚古墳」(『京都府史跡名勝調査会報告』第4冊 京都府) 1983

注3 奈良大学考古学研究会「文化財保護問題に関する一考察－京都府井手町における実状－」(『盾別』5号 奈良大学考古学研究会) 1979

注4 注3と同じ

注5 注2に同じ

注6 井手町教育委員会「平山古墳発掘調査概報」(『井手町文化財報告』第2集 井手町教育委員会) 1987

注7 梅原末治「井手寺址」(『京都府史跡名勝調査會報告』第4冊 京都府) 1923

注8 茨木敏仁「井手寺跡発掘調査報告書—2～10次(平成15年～23年度調査)—範囲確認調査に伴う発掘調査報告書」(『井手町文化財調査報告』第15集 井手町教育委員会) 2014

注9 濱田耕作「山城における原始時代の遺物移籍」(『東京人類学会雑誌』第182号 東京人類学会) 1901

注10 注2に同じ

注11 一瀬和夫「大王墓の横穴式石室採用と展開」(同「大王墓と前方後円墳」吉川弘文館) 2005

注12 花田勝広「高安千塚の基礎的研究」(『高安古墳群の基礎的研究』八尾市教育委員会) 2008

注13 注6に同じ

付表3 北大塚古墳・大塚遺跡 土器一覽

番号	トレンチ	種類	器種	古墳・遺跡・	地区・出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	胎土	色調	調整	備考
1	1tr	土師器	長胴壺	-	東松原区	22.3	18.2	-	-	やや密	褐色(7.5YR7/6)	ハケ(8-10条/cm)	
2	1tr	土製品	燻突形土製品	-	-	-	-	-	計測不可	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/4)	ナデ、主に粗いハケ(7条/1cm)、主に細かいハケ(11条/cm)	胎土に1mm以下の白い粒・半透明の粒(3mm程度)・雲母・黒い粒(多い)を含む
3	3tr	須恵器	高杯	-	SX01	10.5	100	90(脚径)	11/12	密	灰色(N7/0)	ナデ、カキメ(8-9条/6mm)	相対して2か所に通し孔
5	2tr	須恵器	杯蓋	1号墳	主体部	13.6	(3.5)	-	1/12	やや粗	灰色(N5/0)	ナデ	胎土に1mm以下の白い粒(多い)・茶色い粒(少し)を含む
6	2tr	須恵器	杯蓋	1号墳	南東側 投壇丘 盛り土	13.2	(3.7)	-	1/12	やや粗	灰白色(2.5Y7/1)	ナデ、ケズリ	胎土に0.5-2mmの白い粒・1mm以下の黒い粒・灰色の粒を含む
8	2tr	須恵器	杯蓋	1号墳	南西側 丘盛り土	13.1	3.9	-	3/12	やや粗	灰白色(2.5Y7/2)	ナデ、ケズリ	胎土に1mmの白い粒・半透明の粒・透明の粒・灰色の粒・黒い粒を含む。焼きが甘く器表の摩滅著しい
9	2tr	須恵器	杯蓋	1号墳	SX01 玄室内	9.4	3.7	-	9/12	密	灰白色(N7/0)	ナデ、ケズリ、ヘラ切り痕	
10	2tr	須恵器	杯蓋	-	壇丘盛り土	13.2	4.3	-	1/12 全体 9/12	粗	灰白色(N8/0)	ナデ、ケズリ、一方 向ナデ	
11	2tr	須恵器	杯蓋	1号墳	石室内 乱瓦	14.6	3.9	-	3/12	粗	灰白色(2.5Y8/1)	ナデ、ケズリ、一方 向ナデ	
12	2tr	須恵器	杯蓋	1号墳	SX01	14.0	4.0	-	1/12 15/12	やや粗	灰色(N6/0)	ナデ、ケズリ、ナデ のち一方向ナデ	
13	2tr	須恵器	杯蓋	-	壇丘盛り土	14.3	3.8	-	6/12	やや密	灰色(N6/0)	ナデ、ケズリ、ヘラ 切り痕あり、ナデの ち不定方向ナデ	
14	2tr	須恵器	杯身	-	SX01 壇丘	12.9	-	-	ほぼ完 形	密	灰白色(7.5Y7/1)	ナデ、回転ヘラケズ リ、未調整	
15	2tr	須恵器	杯身	-	壇丘盛り土	12.5 受け 部径 14.6	4.0	-	10/12	やや密	灰色(N6/0)	ナデ、ケズリ、ヘラ 切り痕、不定方向ナ デ	外面全体に薄く自然釉 がかかる
16	2tr	須恵器	杯身	1号墳	-	12.7	4.0	-	6/12	やや粗	灰白色(5Y7/1)	ナデ、ケズリ、ヘラ 切り痕、一方向ナデ	
17	2tr	須恵器	杯身	-	壇丘盛り土	12.6	3.4	-	11/12	やや粗	灰白色(2.5Y8/1)	ナデ、ケズリ、ヘラ 切り痕	
18	2tr	須恵器	杯身	-	SD33	12.3 受 部径 14.8	4.1	-	1/12	やや粗	灰色(N6/0)	ナデ、ケズリ、一方 向ナデ	他の器との溶着あり、 胎土に1mm程度の白・茶 (少し)・半透明・黒い 粒を含む
19	2tr	須恵器	杯身	-	SK01	12.3	3.8	-	9/12	密	灰色(N5/0)、 立ち上がり部 分から内面か けて灰白色 (N7/0)	ナデ、ヘラ切り痕	
20	2tr	須恵器	杯身	1号墳	閉塞石 付近	11.8	4.0	-	ほぼ完 存	密	灰色(N6/0)	ナデ、回転ヘラケズ リ、不定方向ナデ	
21	2tr	須恵器	杯身	-	壇丘盛り土	12.3	3.9	-	11/12	密	灰色(N6/0)	ナデ、回転ヘラケズ リ	ヘラ記号あり
22	2tr	須恵器	杯身	1号墳	SX01	12.4	(2.7)	-	1/12 2/12	密	灰白色(2.5Y7/1)	ナデ	胎土に1mm以下の白い 粒・0.5mm以下の黒っぽい 粒を含む

番号	トレンチ	種類	器種	古墳・遺構・遺物	地区・出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	色 調	調 整	備 考
23	2tr	須恵器	杯身	1号墳	南東側	104	4.0	-	8/12	密	外面：灰色 (N5/0) 断面：紫灰色 (5P6/1)	ナデ、ケズリ、一方向ナデ、不調整	ヘア記号あり
24	2tr	須恵器	短頸壺	1号墳	南東側 投土	頸部 径7.7	-	-	10/12	やや密	灰色 (N6/0)	ナデ、ケズリ	
25	2tr	須恵器	壺	-	-	132	(3.6)	-	口径 4/12	やや密	灰色 (N6/0)	ナデ、円心状タナキ	
26	2tr	須恵器	脚付 長頸壺 口縁	-	主体部	9.2	-	-	口径 5/12	密	外：暗灰色 (N3/0) 内：灰白色 (N7/0)	ナデ、カキメ (8~9条/cm)	
27	2tr	須恵器	脚付 長頸壺	-	-	頸部 径6.0	29.4	12.4	口径部 6/12 体部 10/12 台部 3/12	やや密	灰色 (N6/0)	ナデのちカキメ、ナデ、カキメ (6条/9mm)のちナデによるナデ削し、刻み目 (6条/9mm)、ナデのち細なカキメ (6条/9mm~7条/1.1cm)、ナデ	三方に透し孔
28	2tr	須恵器	脚付 長頸壺	1号墳	-	8.4	21.1	14.4	8/12	やや粗	灰色 (N5/0)	ケズリのちナデ、カキメ (9~10条/cm)	
29	2tr	須恵器	脚付 長頸壺 脚部	1号墳	-	台部 径 15.3	9.6	-	9/12	密	青灰色 (5B6/1)	ナデ	2段3か所透し孔
30	2tr	須恵器	長頸壺 脚部	1号墳	SX01	-	6.0	13.5 (脚 径)	9/12	密	灰色 (N5/0)	ナデ	外面灰かぶり
31	2tr	須恵器	脚部	1号墳	-	(6.5)	14.3 (脚 径)	7/12	密	密	灰色 (N5/0)	ナデ	透し(三方向)、胎土に0.5~3mmの白い粒・1mmの半透明の粒を含む、外面一部が黒っぽい
32	2tr	須恵器	高杯 杯部	1号墳	南東側 壇丘盛 り土	122	(5.1)	-	口径 3/12	やや粗	灰色 (N6/0)	ナデ、節描き列点文、不定方向ナデ、部分的に強いナデか	透し(三方向にあると思われる)、胎土に0.5~1mmの白い粒・黒い粒・2mmほどの白い粒・黒い粒混じる
33	2tr	須恵器	蓋	1号墳	南東側 壇丘盛 り土	117	(3.8)	-	口径 4/12	密	灰色 (N6/0)	ナデ、スス付着か、沈積	内外共にスス付着か、焼きむずみあり
34	2tr	須恵器	高杯	-	-	9.4	12.4	11.2 (脚 径)	11/12	密	外面：灰色 (N5/0) 断面：灰赤色 (10R6/2)	ナデ、カキメ痕 (7条/cm)、乾り痕、不定方向ナデ	
35	2tr	須恵器	高杯	-	主体部	9.4	9.3	8.0 (脚 径)	7/12	密	灰色 (N6/0)	ナデ、ケズリ、カキメ (7条/cm)	4か所透し孔
36	2tr	須恵器	高杯	1号墳	南東側 壇丘盛 り土	112	16.4	-	ほぼ完 存	密	灰色 (N6/0)		
37	2tr	須恵器	高杯	1号墳	南東側 壇丘盛 り土	108	15.0	11.6 (脚 径)	5/12	密	灰色 (N4/0)	ナデ、ケズリ、不定方向ナデ	
39	2tr	須恵器	壺	1号墳	壇丘盛 り土	12.4	16.7	-	口径残 存率 3/12 (全体 6/12)	密・ 精良	外面：暗灰色 (N3/0)、底部付近は灰色 (N4/0)、断面：灰赤色 (2.5R5/2)	ナデ、ケズリ	頸部は縦割を施したのちに二条の沈線を施す、透し孔、自然釉がかかる
38	2tr	須恵器	高杯	1号墳	南西東 側壇丘 盛り土	11.5	15.7	-	8/12	密	灰色 (N5/0)	ケズリ	1対の2段透かし、内面に乾り痕あり、全体に自然釉がかかり器表の荒れが目立つ

番号	トレンチ	種類	器種	古墳・遺構・土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	色調	調整	備考
40	2tr	須恵器	広口壺	1号墳	123	(20.5)	-	口縁残存率完存	粗	灰白色 (25Y7/1)～黄灰色 (25Y4/1)	ナデ、タタキ(8条2cm)、同心円のタタキ痕	
41	2tr	須恵器	広口壺	-	墳丘盛り土	108	178	-	6/12	密	灰白色 (N7/0)	ナデ、ケズリ、粗いカキメ(5条/cm)程度に灰がかかる
42	2tr	須恵器	平瓶	1号墳	紙張重機掘削	7.0	16.8	-	7/12底部完存	密	灰色 (N6/0)	ナデ、カキメ(8条/cm)
43	2tr	須恵器	杯蓋	-	西朝重機掘削	つまみ径24	24	-	計測不可	やや粗	灰色 (N5/0)	ナデ、ケズリ
44	2tr	須恵器	杯B	-	墳丘上盛り土	130	(32)	-	口縁2/12	やや粗	灰白色 (N7/0)	ナデ、ケズリ
45	2tr	須恵器	長頸壺	-	-	80	150	8.8	6/12	密	灰色 (N6/0)	ナデ、高台貼り付け、絞りのちナデ
46	2tr	土師器	高杯	-	-	脚径104	(90)	-	6/12	密	橙色 (25YR6/6)	ヨコナデ、ナデ、絞り痕、工具によるヨコナデ、杯上部との接合か
47	2tr	土師器	壺	1号墳	直道東側	頸部径6.1	(9.6)	-	計測不可	粗	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	ヨコナデ、摩耗著しく調整不明良
48	2tr	土師器	皿	-	南壁区殿境落ち込み	6.8	1.1	-	9/12	密	浅黄橙色 (10YR8/3)	ヨコナデ、ユビオサエのち軽いヨコナデ、一方向にナデ上げ、底部未調整(軽くナデている)
49	2tr	土師器	皿	1号墳	南東側精査中	8.3	1.2	-	3/12	密	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	一定方向にナデ上げ、ユビオサエ
50	2tr	土師器	羽釜 口縁部	-	南東側精査中	169	(49)	-	1/12	密	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	回転ナデ、指頭圧痕、ハケの痕跡(9～10条/cm)、粘土織ぎ目痕
51	2tr	土師器	羽釜	-	南東側精査中	脚部径30.5	(36)	-	1/12	密	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	摩滅著しい、ハケの痕跡か
52	2tr	土師器	羽釜	-	-	脚部径21.7	(7.5)	-	2/12	密	浅黄橙色 (7.5YR/8/3)	ヨコナデ、ユビオサエ、粗いハケのような工具痕 ミガキありか
65	16tr	須恵器	波瀬部	2号墳	SD05(周溝)	-	(4.4)	-	2/12	密	暗青灰色 (5B4/1)	ナデ、液状文(9～10条/cm)程度
66	16tr	須恵器	高杯杯部	2号墳	石室	110	(35)	-	4/12	極致	黄灰色 (Hue25Y5/1)	ナデ、ヘラケズリ、沈観
67	16tr	土師器	壺	2号墳	-	9.8	7.55	-	3/12	軟	明赤褐色 (2.5YR5/6)	ユビオサエ、ハケ
68	16tr	須恵器	瓶	2号墳	石室内	108	139	-	11/12	密	外面：暗灰色 (N3-0)、断面：灰赤色 (2.5R5-2)	ナデ、ケズリ
69	16tr	土師器	壺	SX50	石室内	108	10.1	-	7/12	やや密	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	細かいハケ(8本/12cm)、底部ケズリ
70	16tr	土師器	杯C	-	直道	166	5.4	-	口縁3/12	やや密	橙色 (7.5YR6/8)	ヨコナデ、放射状のミガキ
7	2tr	須恵器	杯蓋	1号墳	-	142	4.0	-	10/12	やや密	灰色 (N6/0)	ヨコナデのち不定方向ナデ、ヘラケズリ

番号	トレンチ	種類	器種	古墳・地区・出 遺横・土地地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	色 調	調 整	備 考	
72	16tr	土師器	皿	SX53	-	100	18	-	完存	密	浅黄棕色 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、一方向ナ デ、強いヨコナデ、 粘土織り目痕か	1mmの白い粒を少し含む
73	16tr	土師器	皿	SX53	-	102	20	-	6/12	密	棕色 (7.5YR7/6)	ヨコナデ、ナデ、エ ビオサエ、一方向ナ デ	
74	16tr	土師器	皿	SX53	-	100	14	-	9/12	やや 密	浅黄棕色 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、一方向ナ デ、ナデ上げ痕あり、 細かい指頭圧痕あり	0.5mm以下の砂粒を少し 含む
75	16tr	土師器	皿	SX53	-	100	20	-	8/12	密	棕色(5YR6)	ヨコナデ、ナデ、エ ビオサエ、一方向ナ デ	粘土痕あり
76	16tr	土師器	皿	SX53	南東区	142	2.75	-	5/12	密	にぶい棕色 (7.5YR7/3)	ヨコナデ、一方向ナ デ、エビオサエ、ナ デ痕	0.5mm以下の白い粒・赤 茶色の粒(少し)含む
77	16tr	土師器	皿	SX53	第7層	150	3.1	-	10/12	やや 密	明赤褐色 (2.5YR5/6)	ヨコナデ、ケズリ痕 跡、エビオサエ	1-3mmの白い粒・1mmの 赤茶色の粒・黒い粒を 含む
78	16tr	土師器	皿	SX53	南西区	140	2.5	-	3/12	やや 密	浅黄棕色 (7.5YR8/3)	ヨコナデ、エビオサ エ	1-2mmの半透明の粒・1 mm以下の白い粒・灰色 っぽい粒を含む
79	16tr	土師器	皿	SX53	南東区	153	3.1	-	4/12	やや 粗	棕色(5YR6)	ヨコナデ、エビオサ エ	0.5-1.5mmの赤茶色の粒 (多い)・1-3mmの白い 粒・1mm以下の透明の粒
80	16tr	瓦器	椀	SX53	第7層	150	3.9	-	口縁 9/12	密	灰色(N4/0)	ミガキ	胎土に0.5mm以下の白い 粒・薄茶色の粒(少し) 含む
81	16tr	瓦器	椀	SX53	-	152	5.4	-	7/12	密	灰色(N5/0)	ナデ後ミガキ、ミガ キ、貼り付け高台、 沈線	ハケらしきものが見込 みに見られる
82	16tr	瓦器	椀	SX53	-	162	5.1	-	6/12	密	灰色(N4/0)	ヨコナデ後ミガキ ナデ、ミガキ 指 頭圧痕多数あり、貼 り付け高台、沈線	焼き込みのため口徑に 渋染あり
83	16tr	瓦器	椀	SX53	南西区	140	3.6	-	1.5/12	密	灰白色(N7/0)	やや粗いミガキ	10YR8/2がかっている
84	16tr	瓦器	椀	SX53	第9層	154	5.3	-	2/12	密	灰色(N6/0)	ヨコナデ、やや密な ミガキ、高台貼り付 けに伴うナデ	細い縦割のような工具 痕
85	16tr	瓦器	椀	SX53	第8層	144	5.6	-	2/12	やや 密	灰色(N5/0)	粗雑な貼り付け高 台、ミガキ	器表の磨滅のため外面 のミガキは不明瞭、胎 土に0.5mm以下の白い 粒、灰色っぽい粒を少 し含む
86	16tr	瓦器	椀	SX53	第8層	145	4.7	-	口縁 3/12	密	灰白色(N7/0)	ヨコナデ後ミガキ	胎土に0.5mm以下の薄茶 色の粒を少し含む
87	16tr	瓦器	椀	SX53	第8層 (黒色土 皮層)	147	5.3	-	5/12	密	灰色(N6/0)	やや強めのヨコナ デ、ミガキ、高台貼 り付けに伴うナデ	
88	16tr	土師器	鍋	SX53	第8層	255	10.75	-	3/12	やや 密	灰白色 (10YR8/1)	ナデ、口縁部ヨコナ デ	全体にスス付着
89	16tr	土師器	羽釜	-	-	208	6.2	-	口縁 2/12	密	黄棕色 (7.5YR7/8)	ナデ、ナデ後エビオ サエ、指頭圧痕多数 ナデ、エビオサエ	
90	16tr	土師器	羽釜	-	-	221	6.5	-	口縁 2/12	密	棕色 (7.5YR7/6)	指頭圧痕、ハケの痕 跡か、工具によるナ デか	スス付着
91	18tr	土師器	杯C	3号墳	-	107	3.1	-	1/8	良好	棕色(5YR6)	内面：放射状ミガキ、 エビオサエ	
92	17tr	土師器	壺	3号墳	-	80	6	-	1/12	良好	棕色(5YR6)	ケズリ	
95	17tr	須恵器	杯	4号墳	-	117	4.5	-	完形	良好	青灰色(5 B6/1)	ナデ、天井部ケズリ	
96	17tr	須恵器	壺 口縁部	SX53	-	78	7.2	-	口縁 2/12	やや 粗	灰色(N5/0)	ナデ	焼きぶくれが見られる

付表4 北大塚古墳・大塚遺跡 鉄器一覧

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ(cm)A	幅(cm)B	重さ(g)	備考
55	有頭有茎 釵	2tr	1号墳左側壁 奥壁	132	205(釵身部) 655(頸部) 46(茎部)	166	釵身外形は三角形 断面形： 方形
56	槍鉾小	2tr	1号墳	8.1	0.9~1.6	20.0	
57	鉄釘	2tr	1号墳洗道入口前(墓道)	4.2	0.5~0.85	2.6	
58	鉄釘	2tr	1号墳南西部礎石	4.4	0.2~0.5	-	完存と思われる
59	鉄釘	2tr	1号墳	3.4	0.6~1.6	4.8	
60	鉄釘	2tr	1号墳	3.0	0.2~1.0	2.0	

付表5 北大塚古墳・大塚遺跡 耳環一覧

報告番号	種類	トレンチ名	出土古墳	中空or中実	幅(cm)A	長さ(cm)B	厚さ(cm)C	重さ(g)	材質	色	備考
61	銅地金貼耳環	2tr	1号墳溝道内	中実	3.3	2.9	0.7	21.1	銅・金貼	淡緑青	中実耳環
62	銅地銀貼耳環	2tr	1号墳墳丘上	中実	2.8	2.6	0.5	8.4	銅・銀貼	つや消し銀色 (変色)	銀環
63	銅地銀貼耳環	2tr	墳丘盛土礎石	中実	2.8	2.6	0.5	8.3	銅・銀貼	つや消し銀色 (変色)	銀環
71	銅地金貼耳環	16tr	2号墳石室内 炭化物層直下	中実	2.8	2.8	0.8	3.9	銅・金貼	金色	中実耳環
93	銅地金貼耳環	17tr	3号墳墓室内	中空	3.2	3.1	1.0×0.9	5.9	銅・金貼	金色	中空耳環
94	銅地金貼耳環	17tr	3号墳墓室内	中空	2.8	3.0	1.0	4.6	銅・金貼	金色	中空耳環

付表6 北大塚古墳・大塚遺跡 石器一覧

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質
4	石鏃	13tr	平面精査	(1.5)	1.6	0.2	0.3	サヌカイト
64	石鏃	2tr	墳丘盛土礎石	2.0	1.3	0.27	0.6	サヌカイト

5. 平成29年度金堀遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は一般国道163号精華拡幅事業に先立って実施した。発掘調査地点は京都府相楽郡精華町山田金堀に所在し、遺物散布地である金堀遺跡範囲内に含まれる。金堀遺跡では須恵器・土師器の破片が発見されているが、遺跡の時期等の特定はできていない。

発掘調査対象地は、現在の山田川の河道を挟み南北2か所に分かれ、両地点ともに調査前は耕作地として利用されていた。

発掘に際しては地元山田区、光が丘幼稚園、精華町教育委員会からご協力とご指導をいただいた。記してお礼申し上げたい。

なお、発掘調査に係る経費は全額国土交通省が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査課長 小池 寛

調査担当者 調査課課長補佐兼調査第2係長 中川和哉

同 副主査 竹原一彦

調査場所 京都府相楽郡精華町山田金堀

調査期間 平成29年4月20日～5月18日

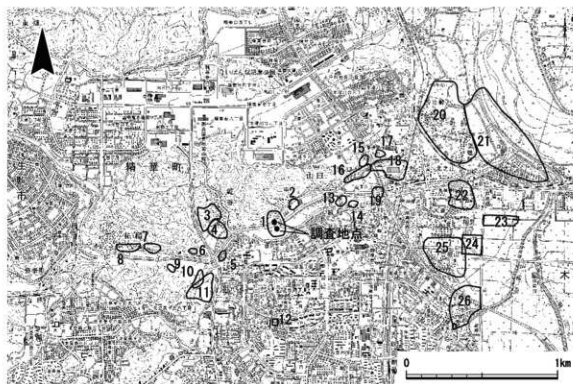
調査面積 110㎡

2. 位置と環境

発掘調査地である金堀遺跡は、木津川支流の山田川の両岸に広がる遺跡である。遺跡は氾濫原、段丘、丘陵斜面に展開する。現在の山田川の河道は、住宅開発に伴う浚渫工事によってその川底が低く掘削されているが、周辺の段丘崖の観察から本来は氾濫原の規模が大きな蛇行河川と推測できる。山田川は平安時代から鎌倉時代ごろまで相良川と呼ばれ、江戸時代には山田溪や三本松溪と呼ばれた。

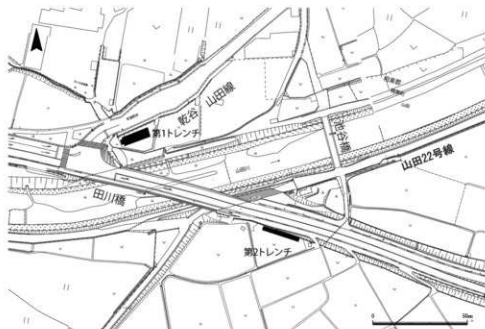
現在、山田川に沿って国道163号が通っているが、古来大坂街道と呼ばれ、大阪や三重方面に至る街道として賑わっていた。また、恭仁京があった時期には、難波宮と通じ中国地方に向かう山陽道の候補としても挙げられている。

山田川に沿って耳所遺跡、乾谷大崩遺跡、乾谷遺跡、石原遺跡、石榴川原遺跡、金堀遺跡といった遺物散布地が多く所在する。流域の最も古い遺跡は木津川市樋ノ口遺跡で、縄文時代の打製石鏃や石匙が出土している。乾谷遺跡では弥生時代の粘板岩製の磨製石包丁が採取されている。古墳時代の集落としては木津川市相楽遺跡があり、古墳時代前期の土師器がまとめて出土している。山田川流域の古墳については、終末期古墳である石のカラト古墳以外発見されていないが、樋ノ口遺跡では古墳時代後期の埴輪と勾玉が発見されており、周辺に後期古墳があった可能性が



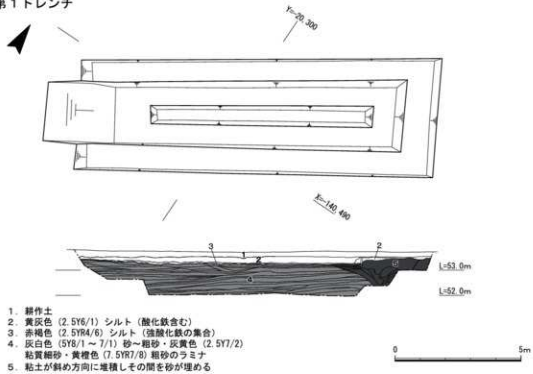
第1図 調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 奈良)

- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|------------|
| 1. 金堀遺跡 | 2. 平林遺跡 | 3. 乾谷城山城跡 | 4. 乾谷遺跡 |
| 5. 耳所遺跡 | 6. 乾谷大崩遺跡 | 7. 石原遺跡 | 8. 石榴川原遺跡 |
| 9. 得所瓦窯跡 | 10. 乾谷窯跡群 | 11. 大平遺跡 | 12. 石のカタ古墳 |
| 13. 相和遺跡 | 14. 下条遺跡 | 15. 新殿神社遺跡1 | 16. 上河原遺跡 |
| 17. 新蓮寺跡 | 18. 樋ノ口遺跡 | 19. 中島遺跡 | 20. 南福遺跡 |
| 21. 大福遺跡 | 22. 相楽遺跡 | 23. 鶴ノ町遺跡 | 24. ハヶ坪遺跡 |
| 25. 曾根山遺跡 | 26. 宮ノ口遺跡 | | |

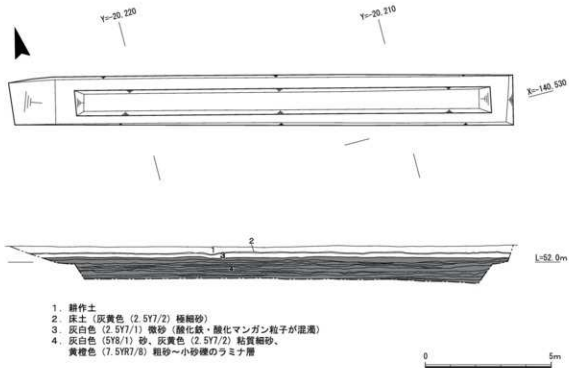


第2図 調査トレンチ配置図

第 1 トレンチ



第 2 トレンチ



第 3 図 金堀遺跡トレンチ平面図及び土層断面図

指摘できる。

奈良時代に入ると平城京に供給するため、乾谷窯跡群や得所瓦窯跡が造られる。また、樋ノ口遺跡では築地跡と奈良時代には貴重品であった施釉陶器が多く出土し、遺跡については『興福寺官務牒疏』に言う山田寺跡とする説や離宮説などが存在する。

平安時代から中世の間は、乾谷と柘榴は戌亥荘に含まれ、在地領主として柘榴氏、乾谷氏が登場する。乾谷城山城跡が乾氏の築いた城とされている。

3. 調査概要

発掘調査対象地内に2か所のトレンチを設け、北側を1トレンチ、南側を2トレンチとした。

1トレンチでは発掘調査地では掘削深度が深いことが予測され、北側を走る町道乾谷山田線の路肩損傷を防ぐため、道路側に鋼矢板による土止めを施し調査を実施した。

第1トレンチは長辺約15m、短辺約4.7m、面積70㎡の細長い調査区を町道に並行して設定した。

基本層序は耕作土の下には粘土層が水平に堆積し、その下には山田川本流が作ったラミナ構造を見せる堆積層が地表下2mまで堆積していた。この4層の砂礫層を削り込むように丘陵側から流れ込んだ小河川の氾濫を伴う堆積物が確認できる。

粘土層上面及び4層上面において精査作業を実施したが、遺構、遺物は検出することができなかった。

2トレンチは長辺約20m、短辺約2m、面積40㎡の細長い調査区を国道163号に並行して設定した。

基本層序は上から耕作土、床土、厚さ20cm前後で水平に堆積する砂層でその下では、山田川本流が作ったラミナ構造を見せる堆積層が地表下1.3mまで堆積していた。調査対象地が狭小であることから安全のため1.3m以上の掘削は行わなかった。3層上面及び4層上面で遺構検出作業を実施したが遺構、遺物を検出することができなかった。

4. まとめ

今回の発掘調査では遺構、遺物を検出することができなかった。2つのトレンチとも山田川本流起源の洪水堆積物が厚く堆積していることから、遺構は残っていないものと考えられる。現在の町道より北側に段丘面や丘陵地がある事から遺跡の中心は、河川の影響の少ない標高の高い部分に存在しているものと想定できる。

(中川和哉・竹原一彦)

参考文献

精華町史編纂委員会編『精華町史』本文編 1996

奥田裕之「山田川沿いの歴史と史跡」(『波布理曾能』第2号 精華町の自然と歴史を守る会) 1985

福山博章・村田和弘「平成26年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第165冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2016

6. 平成28年度天神山古墳群第2次発掘調査報告

1. はじめに

天神山古墳群は、木津川市木津天神山所在の通称「天神山丘陵」上に立地する古墳群である。今回の調査は、一般国道163号木津東バイパス建設事業に伴って国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会、京都府立山城郷土資料館のご指導、ご協力を得た。記して感謝いたします。また、調査期間中ならびに本報告に記載した国土座標は、世界測地系(第Ⅵ座標系)を使用した。なお、調査にかかる経費は、全国国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 主 任	福山博章
	同 調 査 員	藤井陽輔
調 査 場 所	京都府木津川市木津天神山	
調 査 期 間	平成28年8月1日～9月9日	
調 査 面 積	370㎡	

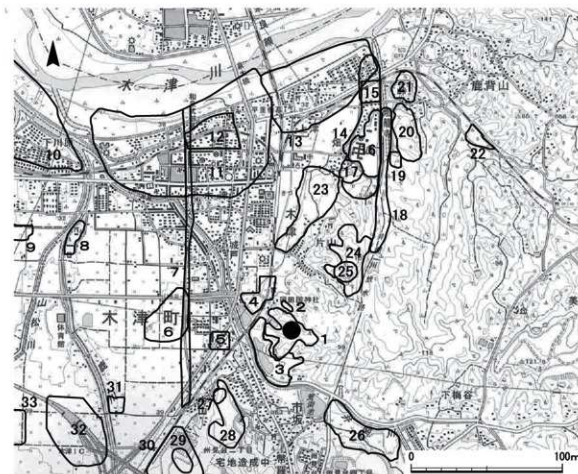
2. 周辺の地形と遺跡

天神山古墳群は前方後円墳とされる2基を含む、3号墳から11号墳の計9基の古墳から構成される。古墳群が所在する通称「天神山丘陵」は木津川支流の井間川の右岸に位置する最高所94.1mの丘陵である。天神山丘陵は、粘土と砂礫によって構成される大阪層群によって形成されている。特に大阪層群に含まれる良質な粘土は、瓦や土器の材料として古代から利用されてきた。また丘陵裾部には、式内社である岡田国神社が鎮座している。岡田国神社は江戸時代天神社として信仰を集め、丘陵はこの天神社にちなみ命名されている。

天神山古墳群が所在する天神山丘陵の周辺には、岡田国遺跡をはじめ、数多くの遺跡が所在することがこれまでの調査で判明している。天神山丘陵南麓の西南西に開く谷部には、国史跡である神雄寺跡や馬場南遺跡が所在する。

周辺で最も古い遺跡は岡田国遺跡で天神山丘陵裾部の神社境内からサヌカイト製の石器が出土している。旧石器時代から弥生時代に作られたものと考えられる。

馬場南遺跡では文廻池の東斜面地で、弥生時代中期後葉の方形周溝墓(天神山1号墓)1基を確



第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 奈良)

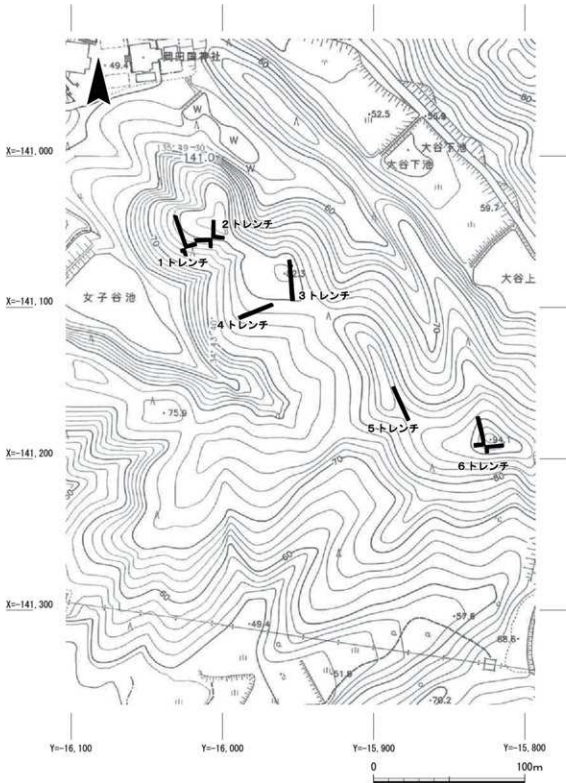
- | | | | |
|-----------|-------------|-------------------|----------------|
| 1. 天神山古墳群 | 2. 大谷窯跡 | 3. 史跡 神雄寺跡(馬場南遺跡) | 4. 岡田国遺跡 |
| 5. 奈良道遺跡 | 6. 八後遺跡 | 7. 作り道遺跡 | 8. 田中遺跡 |
| 9. 鶴ノ町遺跡 | 10. 吐師津遺跡 | 11. 木津遺跡 | 12. 木津平城跡 |
| 13. 上津遺跡 | 14. 燈籠寺遺跡 | 15. 燈籠寺廃寺 | 16. 内田山古墳群 |
| 17. 内田山遺跡 | 18. 釜ヶ谷遺跡 | 19. 菰池遺跡 | 20. 赤ヶ平遺跡 |
| 21. 白口遺跡 | 22. 鹿背山瓦窯跡群 | 23. 片山遺跡 | 24. 木津城山遺跡 |
| 25. 片山古墳群 | 26. 菩提遺跡 | 27. 西山古墳群 | 28. 西山遺跡(西山古墓) |
| 29. 瓦谷古墳群 | 30. 瓦谷遺跡 | 31. 古川遺跡 | 32. 弓田遺跡 |
| 33. 辰ヶ坪遺跡 | | | |

認したほか、弥生土器や石包丁などが出土している。生活をした住居などは現在のところ確認されていない。天神山丘陵北東の丘陵には、弥生時代後期前半の高地性集落である木津城山遺跡が所在する。30基を超える竪穴式住居が検出されたほか、墓域の存在も確認されている。

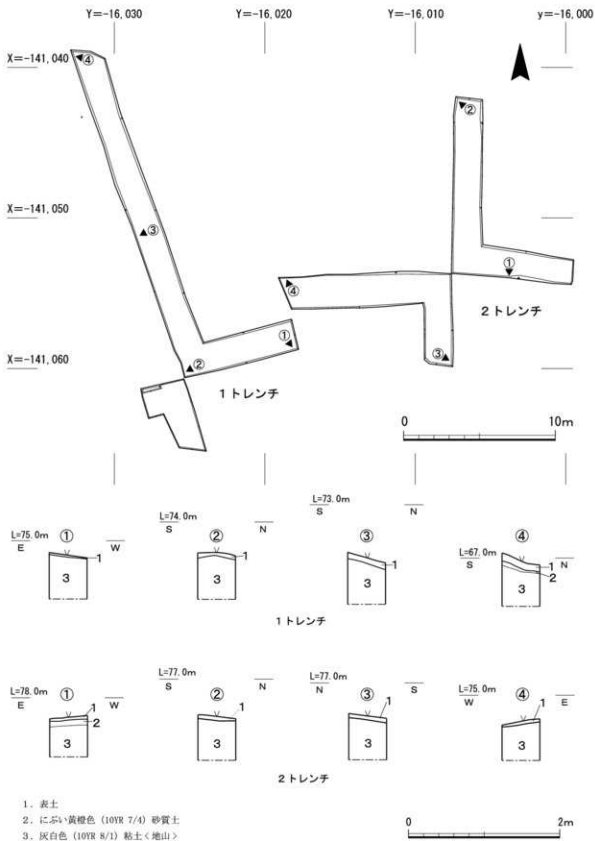
井開川の対岸の丘陵上には古墳時代中期の方墳である西山1号墳、2号墳、円墳の西山塚古墳が作られる。また、木津城山遺跡では、古墳時代後期に横穴式石室を持つ古墳が作られた。

天神山丘陵北西、岡田国神社南東の丘陵斜面には7世紀末から8世紀初頭頃の須恵器窯である大谷窯跡が所在する。遺跡周辺には鹿背山瓦窯跡群をはじめ平城宮に供給した瓦窯跡が点在するが天神山丘陵では大谷窯跡以外の窯跡は未発見である。

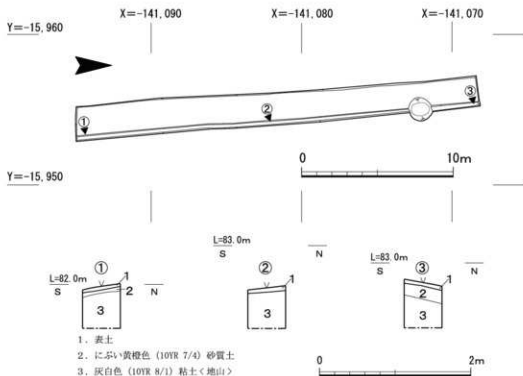
丘陵南側の裾部から斜面地にかけては奈良時代から平安時代の神雄寺跡があり、調査によって川跡や堤、掘立柱建物といった遺構が検出された。また、大量の土師器が川跡に廃棄された状態



第 2 図 天神山古墳群第 2 次調査 トレンチ配置図



第3図 1・2トレンチ平面図と1トレンチ土層柱状図



第 4 図 3 トレンチ平面図と土層柱状図

で検出されたほか、多くの遺物が出土した。木津川市教育委員会による発掘調査では、須弥壇や多重塔と推定される心礎をもつ礎石建物などが確認された。遺構や遺物の性格から、神雄寺跡は 8 世紀中葉に創建され、徐々に伽藍などが整備されるが、8 世紀末には中心施設が廃絶、一部存続した塔も 10 世紀前葉までには廃絶したと理解される。

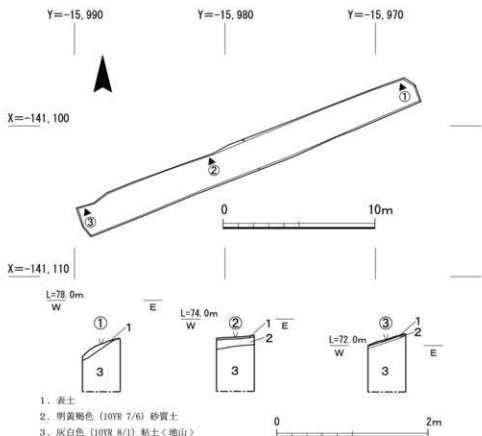
南隣の丘陵では鉄製の墓誌を伴う奈良時代から平安時代の墓である西山古墓がある。中世には木津城山遺跡の場所に木津城跡が築かれた。

以上のように、天神山古墳群が所在する丘陵には大谷窟跡や馬場南遺跡、神雄寺跡が営まれたことがこれまでの調査で明らかとなっている。さらに周辺には、木津城山遺跡や木津城などもみられ、天神山丘陵周辺の土地利用が古来より盛んであったことがわかる。

3. 既往の調査の成果

天神山丘陵周辺では、これまで関西文化学術研究都市の整備事業に伴う発掘調査が断続的におこなわれている。平成 9 年度には当センターにより天神山古墳群の北東に位置する木津城跡、木津城山遺跡、片山古墳群とともに天神山古墳群の第 1 次発掘調査が実施された。

第 1 次調査では周知の 1 号墳と 2 号墳、及び踏査により確認された古墳状の隆起に対して、古墳の正否の確認のためのトレンチを設定して発掘調査を実施した。調査の結果、1 号墳では自然地形が認められ、古墳でないことが判明した。2 号墳についても人為的な改変は認められるものの、埋葬施設や周濠が認められないことから古墳でないことが明らかになった。他の古墳状隆起に設定したトレンチでも自然地形を確認したが、一部で丘陵根尾の頂部から斜面方向に直交して



第5図 4トレンチ平面図と土層柱状図

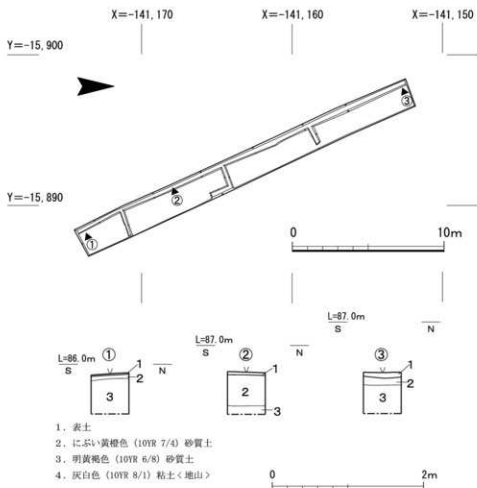
掘られた溝状の遺構、S X07とS X08を確認した。S X07では堆積土に焼土や炭が混じり、埋土下層からは弥生時代後期前葉の遺物が出土した。S X08では埋土上層から奈良時代の須恵器が出土した。

以上のように、天神山古墳群のうち1号墳と2号墳は発掘調査がおこなわれ、古墳ではないことが明らかとなっている。

4. 調査の概要

今回の調査では、京都府遺跡地図に天神山3号墳～7号墳として登録されている地点と平坦面にトレンチを6か所設定して調査を行った。トレンチ番号は西側から割り振った。現地調査は、すべて人力による掘削を行った。各トレンチについては測量及び写真による記録作業を行った。総調査面積は360㎡である。

1 トレンチ 天神山7号墳の確認を目的として設定したトレンチで、東西長28m、南北長11m、幅2m、面積は75㎡である。標高が高い地点から順に西側に向かって伸びる斜面、西側に眺望が広がる標高73.5mから74mを測る狭いテラス状の地形、北側に向かって伸びる斜面に位置するので、テラス状地形を基に十字形のトレンチを設定した。トレンチの標高は約66.8～74.9mで比高差は約8mである。表土の直下で2層及び3層上面で遺構精査したが、盛り土や溝などの遺構は確認できなかった。トレンチ西側で断ち割り調査を行ったが、土層の変化は確認できなかった。



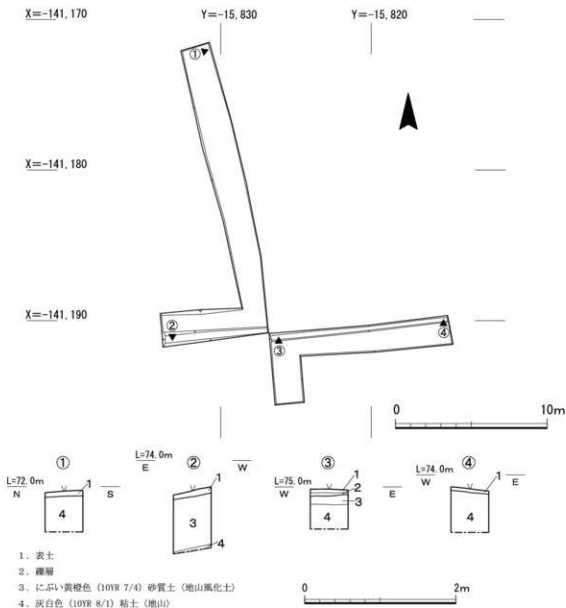
第 6 図 5 トレンチ平面図と土層柱状図

表土の直下で甕の破片(図 7-1)を含む須恵器片 3 点と土師器片 1 点が出土した。

2 トレンチ 天神山 6 号墳の確認を目的として設定したトレンチで、東西長 19.5m、南北長約 18m、幅 2m、面積は 63m²である。調査前の現地では高まりが認められた。高まりを中心として十字形にトレンチを設定した。調査の結果、表土の直下の 2 層上面で遺構精査したが、盛り土などの遺構は確認できず、調査前に確認した高まりは自然地形であると判断した。遺物も出土しなかった。

3 トレンチ 前方後円墳として登録される天神山 5 号墳の確認を目的として設定したトレンチである。長さ約 27.5m、幅 2m、面積は 58m²である。現地は標高 82.5m～83m に位置する南北に伸びる尾根稜線上の平坦面である。北側に平面円形の攪乱が認められた。表土の直下 2 層及び 3 層上面で遺構精査したが、遺構は確認できなかった。トレンチの東壁に沿って断ち割り調査を行ったが土層の変化はみられなかった。表土直下で須恵器片が 2 点、土師器片が 2 点、器種不明の土器が 1 点出土した。

4 トレンチ 天神山 4 号墳の確認を目的として設定したトレンチで、南西に伸びる舌状の尾根稜線上に位置し、一部で平坦面らしき状況が認められた。トレンチは長さ約 24m、幅約 2m、面積は 51m²、標高は 72.0m から 77.5m で比高差は 5.5m である。表土の直下の 2 層及び 3 層上面で遺

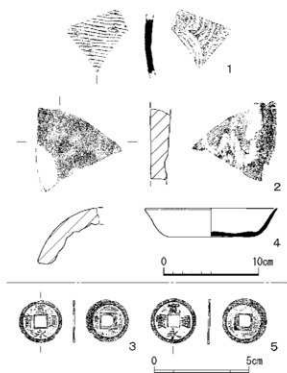


第7図 6トレンチ平面図と土層柱状図

構精査したが、盛り土などの遺構は確認できなかった。表土の直下で土師器片が1点、近世の丸瓦片が1点(図7-2)、寛永通宝(図7-3)が1点出土した。

5 トレンチ 南北に伸びる尾根稜線上の平坦面に設定したトレンチである。長さ約24m、幅約2m、面積は47㎡、標高は85.7m～86.5mである。表土の直下の2層で遺構は確認できなかった。トレンチの西壁とトレンチ中央部東西方向の3ヶ所で断ち割り調査を行ったが、土層の変化はみられなかった。遺物も出土しなかった。

6 トレンチ 前方後円墳として登録される天神山3号墳の確認を目的として設定したトレンチである。本調査では最も高い標高93.9mの頂上に位置し、現地地形は円形を呈する。円形の中心部分を基に十字形のトレンチを設定した。東西長約19m、南北長約24.5m、幅約2m、面積は約76㎡である。表土の直下の2層及び3層上面で遺構精査したが、盛り土などの遺構は確認できな



第 8 図 出土遺物実測図

れる。当て具痕の単位は段差になって遺存することから強く押し当てたものとみられる。2は4トレンチで出土した近世の丸瓦である。残存長8.7cm、厚さ2cmである。焼成は良好で、胎土はやや粗い。凸面には工具で割った後にナデを施す。凹面には木挽き痕がみられる。端部は面取りする。3は4トレンチで出土した新寛永通宝である。4は6トレンチで出土した須恵器杯身である。器高3cm、厚さ0.6cm、復元径13.8cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。底部から口縁端部が遺存する。体部はナデで調整する。体部と底部の境はさらに回転ヘラケズリを施す。底部はヘラキリである。5は6トレンチで出土した新寛永通宝である。

6. まとめ

本調査では天神山古墳群の確認を目的としたが、盛り土や周溝といった古墳にともなう遺構や、埴輪等の遺物は検出できなかった。したがって、天神山3号墳～7号墳は古墳でないことを確認した。第1次調査の際に検出された溝状の遺構等の、古墳時代以外の遺構も確認できなかった。遺物は、須恵器や土師器、瓦器、近世の瓦、寛永通宝が出土した。

遺構は確認できない一方で古代から近世の遺物が出土したことから、人々の活動をうかがうことができるが、その性格などについては不明である。また、土砂の流出などに伴い、遺構が消失した可能性も考えられる。

(福山博章・藤井陽輔)

った。トレンチの東西方向で断ち割り調査を行ったが、土層の変化はみられなかった。したがって、現地形の円形は自然地形であると判断した。表土直下で須恵器杯身(図7-4)1点を含む須恵器片が2点、土師器片が3点、瓦器片が1点、寛永通宝(図7-5)が1点出土した。

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、奈良時代から江戸時代の遺物が出土した。いずれも細片であり、図化できるものは少数である。

1は1トレンチで出土した須恵器の甕の体部である。焼成は良好で、胎土は密である。ゆるやかに内湾するが天地は不明である。残存長6cm、厚さ7cmである。外面は叩き目が明瞭に遺存する。表面には当て具痕がみら

参考文献

- 奥村清一郎・伊野近富「Ⅱ岡田国神社遺跡発掘調査概報」(「木津町埋蔵文化財調査報告書」第3集 木津町教育委員会) 1980
- 伊賀高弘・萩谷良太「(2)天神山古墳群」(「京都府遺跡調査概報」第85冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 筒井崇史「木津城山遺跡」(「京都府遺跡調査報告書」第32冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 竹原一彦「(2)馬場南遺跡」(「京都府遺跡調査報告集」第131冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 伊野近富・竹原一彦・筒井崇史・松尾史子「(1)馬場南遺跡」(「京都府遺跡調査報告集」第138冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 筒井崇史「(2)木津城山遺跡・木津城跡」(「京都府遺跡調査報告集」第138冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 大坪州一郎・赤田昌倫・田村朋美・藤井 整「神雄寺跡(馬場南遺跡)発掘調査報告書」(「木津川市埋蔵文化財調査報告書」第16集 木津川市教育委員会) 2014

圖 版



(1)調査区遠景(南西から)



(2)調査区遠景(南東から)

図版第2 月出遺跡



(1) 1トレンチ全景(東から)



(2) 1トレンチ全景(北西から)



(3) 1トレンチ西壁(東から)

(1) 2トレンチ全景(東から)



(2) 2トレンチ全景(南西から)



(3) 2トレンチ西壁(東から)



図版第4 月出遺跡



(1) 3トレンチ全景(西から)



(2) 3トレンチ全景(東から)



(3) 3トレンチ東横(西から)

(1) 4トレンチ全景(北西から)



(2) 4トレンチ全景(南から)



(3) 4トレンチ西壁(東から)





(1) 5 トレンチ全景(北西から)



(2) 5 トレンチ全景(南から)



(3) 5 トレンチ西壁(東から)

図版第1 東光寺跡

(1) 調査地遠景(南から)



(2) 調査地遠景(北から)



(3) 3トレンチ 完掘状況(西から)





(1) 3トレンチ 完掘状況遠景(南から)



(2) 3トレンチ 完掘状況(北西から)

(1) 1トレンチ 重機掘削状況
(南から)



(2) 1トレンチ 完掘状況(南から)



(3) 1トレンチ 西壁土層堆積状況
(東から)



図版第4 東光寺跡



(1) 2トレンチ 完掘状況(北から)



(2) 2トレンチ 西壁土層堆積状況
(東から)



(3) 3トレンチ 市道北拡張区完掘
状況(西から)

(1) 3トレンチ 南拡張区完掘状況
(西から)



(2) 3トレンチ 西拡張区北壁土層
堆積状況(南から)



(3) 市道表土での五輪塔出土状況
(西から)



図版第6 東光寺跡



(1) 3トレンチ 平坦面C 東光寺
跡遺構面の完掘状況(西から)



(2) 3トレンチ 平坦面C 整地層
除去後の完掘状況(西から)



(3) 3トレンチ 平坦面C 整地層
下の東西方向堆積状況(北から)

(1) 3トレンチ 平坦面C S X03
検出状況(南東から)



(2) 3トレンチ 平坦面C S X03
完掘状況(西から)



(3) 3トレンチ 平坦面C S X03・
S D05 完掘状況(北から)



図版第8 東光寺跡



(1) 3トレンチ 平坦面C SX03・SD05完掘状況(南西から)



(2) 3トレンチ 平坦面C SD05完掘状況(南東から)



(3) 3トレンチ 平坦面C SD05・5J区東壁土層堆積状況(西から)

(1) 3トレンチ 平坦面C SX04
崩落石検出状況(南西から)



(2) 3トレンチ 平坦面C SX04
崩落石検出状況(北西から)



(3) 3トレンチ 平坦面C SX04
地輪出土状況(北東から)





(1) 3トレンチ 平坦面D 柱穴群
検出状況(北西から)



(2) 3トレンチ 平坦面D 柱穴群
完掘状況(西から)



(3) 3トレンチ 平坦面C・D
裾部完掘状況(南西から)

(1) 3 トレンチ 平坦面E
東光寺跡面完掘状況(南西から)



(2) 3 トレンチ 平坦面E
下層遺構完掘状況(西から)



(3) 3 トレンチ 平坦面E S X02
遺物出土状況(西から)





(1) 東光寺古墳 石室全景(西から)



(2) 東光寺古墳 石室全景(南から)

(1) 東光寺古墳 石室上面検出状況
(南から)



(2) 東光寺古墳 石室床面上層の
東西畦積状況(北から)



(3) 東光寺古墳 石室内床面上層の
崩落石の状況(西から)





(1) 東光寺古墳 崩落石の除去後の
状況(西から)

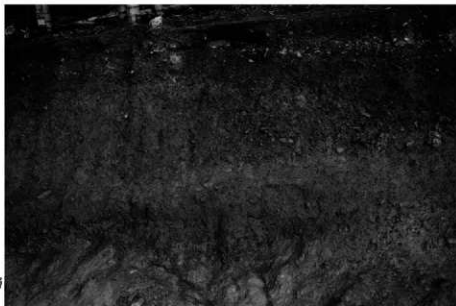


(2) 東光寺古墳 崩落石の除去後の
状況(北から)



(3) 東光寺古墳 左袖部の掘削状況
(北から)

(1) 東光寺古墳 北半部東壁の土層
堆積状況(西から)



(2) 東光寺古墳 南半部東壁の土層
堆積状況(西から)



(3) 東光寺古墳 奥壁の石材及び掘
形断面(西から)





(1) 東光寺古墳 石室床面直上の東西畦(南から)



(2) 東光寺古墳 石室床面直上の南北畦北半部(西から)



(3) 東光寺古墳 石室床面直上の南北畦南半部(西から)

(1) 東光寺古墳 玄室内奥壁
(A群)出土状況(南から)



(2) 東光寺古墳 石室内袖部(B群)
遺物出土状況(北西から)



(3) 東光寺古墳 石室内袖部(B群)
遺物出土状況(西から)





(1) 東光寺古墳 羨道部崩落石
除去後の状況(西から)



(2) 東光寺古墳 羨道部床面の排水
溝(南から)



(3) 東光寺古墳 石室東側の土層
堆積状況(南から)

(1) 東光寺古墳 玄室床面下面の
状況(南から)



(2) 東光寺古墳 玄室床面下面の
状況(西から)



(3) 東光寺古墳 羨道部床面下面の
状況(北西から)





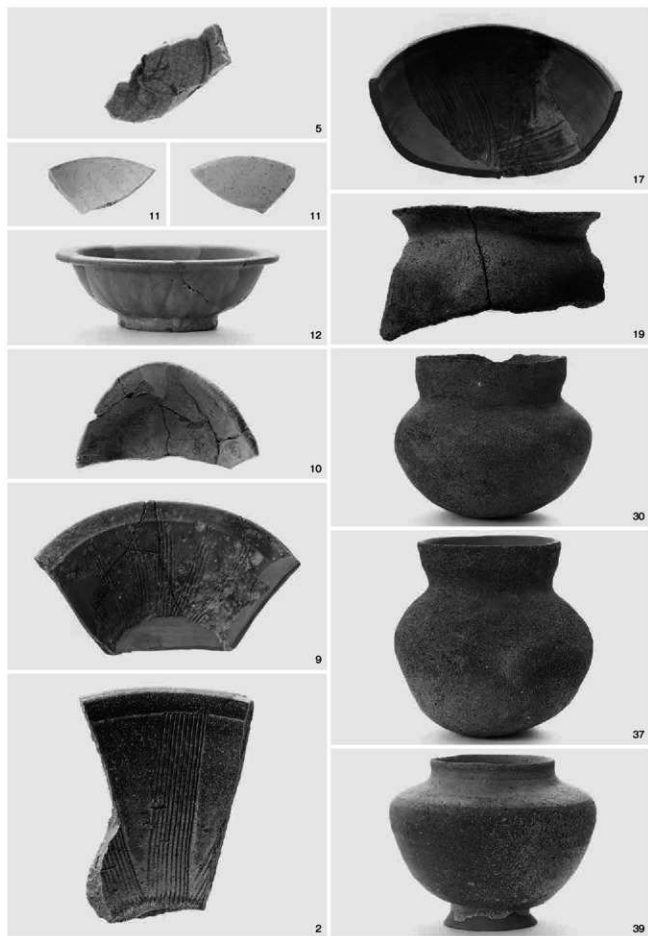
(1) 東光寺古墳 石室養生の作業
状況(西から)

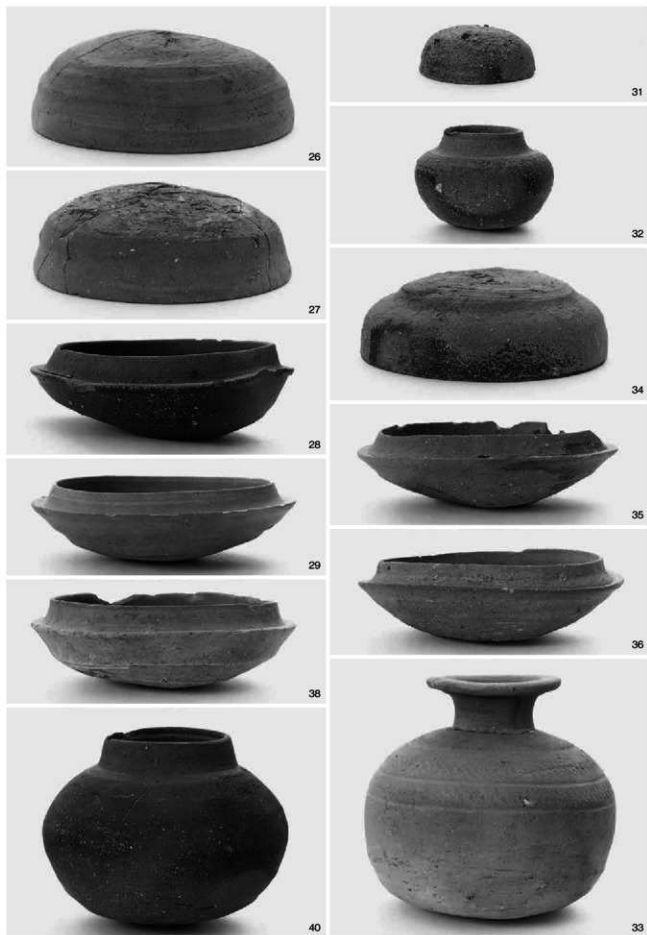


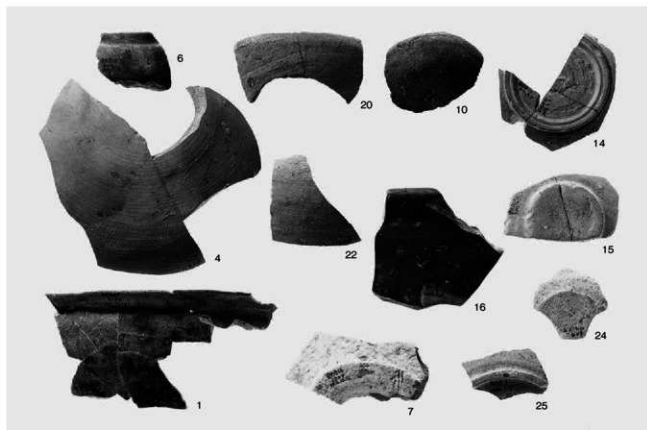
(2) 東光寺古墳 石室養生の状況
(南西から)



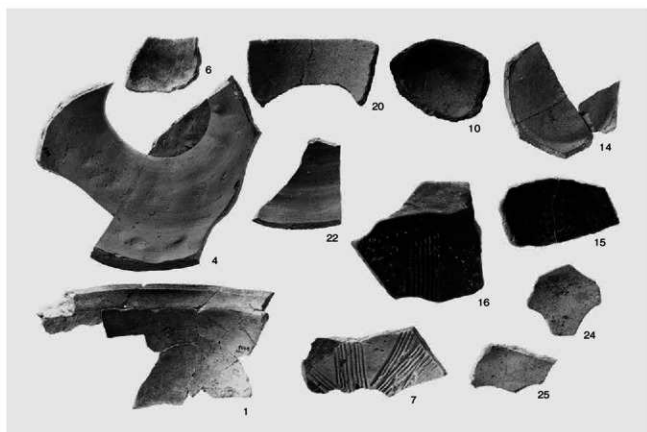
(3) 東光寺古墳 石室養生の状況
(北西から)



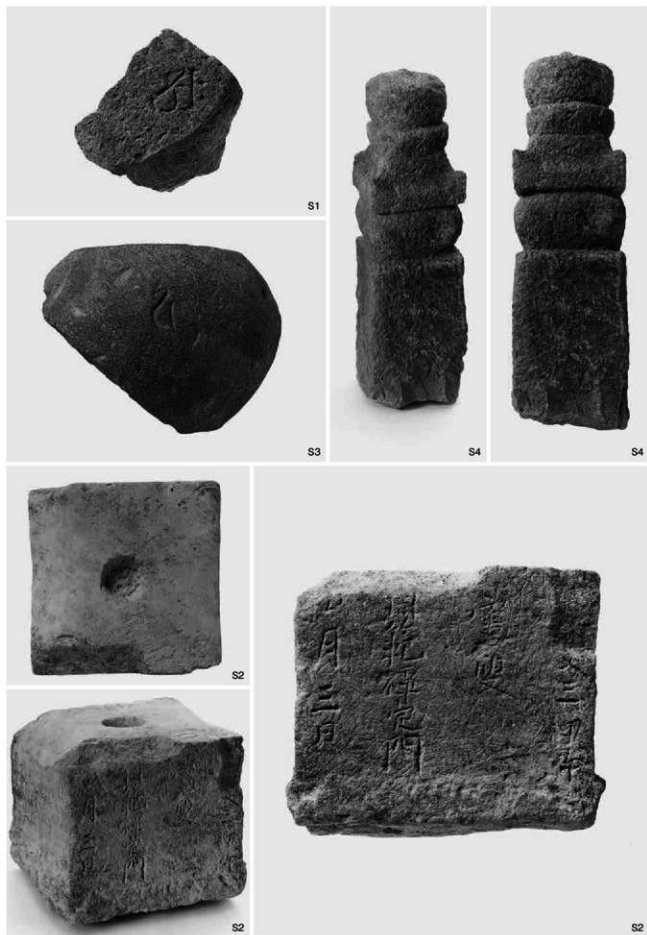




出土遺物 3 (外面)



出土遺物 3 (内面)



出土遺物 4

図版第1 伏見城跡



(1) 第1トレンチ全景(南東から)



(2) 第1トレンチ西部近景(北東から)

図版第2 伏見城跡



(1) 第1トレンチ近景(西から)



(2) 第1トレンチ全景(東から)



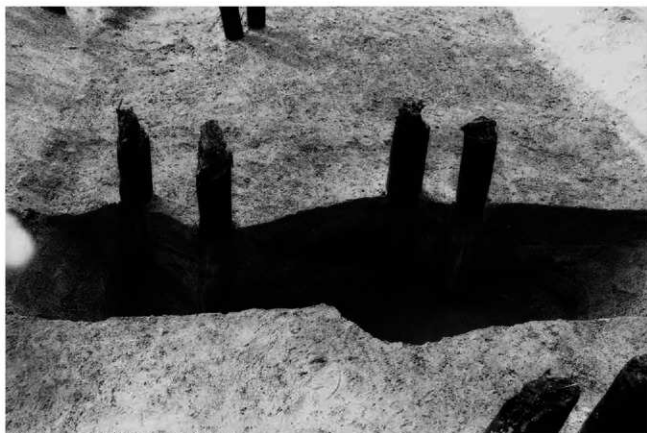
(1) 第1トレンチ西部近景(西から)



(2) 第1トレンチ杭列近景(西から)



(1) 第1トレンチ杭列近景(北から)



(2) 第1トレンチ杭列断ち割り断面(東から)

図版第5 伏見城跡



(1) 第1トレンチ杭列断ち割り断面(東から)



(2) 第1トレンチ遺物出土状況(南から)

図版第6 伏見城跡



(1) 第1トレンチ南壁断面(北東から)



(2) 第1トレンチ南壁断面(北東から)



(1) 第2トレンチ全景(北から)



(2) 第2トレンチ全景(南から)

図版第 8 伏見城跡



(1) 第2トレンチ東壁断面(西から)



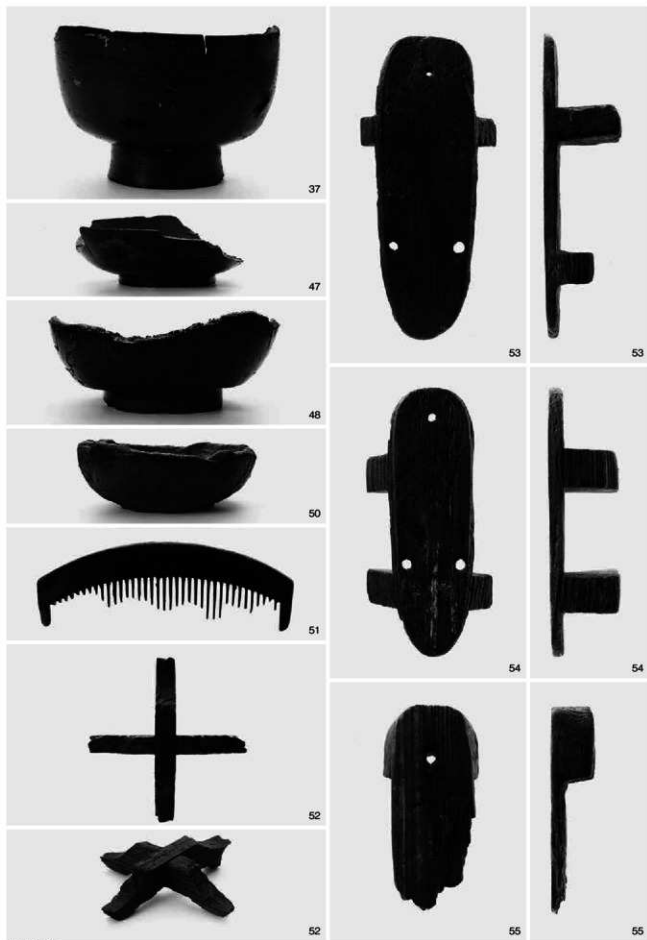
(2) 第2トレンチ東壁断面(南西から)



(1)土坑4 遺物出土状況(南から)



(2)第2トレンチ断ち割り状況(西から)



(1) 1トレンチ全景1(南から)



(2) 1トレンチ全景2(北から)



(3) 1トレンチ東側拡張前全景
(西から)





(1) 1トレンチ東側拡張後全景
(北西から)



(2) 1トレンチ東側拡張区包含層
断面(北から)



(3) 1トレンチ東側拡張区遺物
出土状況(北東から)

(1) 2トレンチ全景(北西から)



(2) 2トレンチ西部全景(北西から)



(3) 2トレンチ南部全景(西から)





(1) 2トレンチ北部全景(南から)



(2) 2トレンチ東部全景(東から)



(3) 2トレンチS X01検出状況
(北東から)

(1) 2トレンチSX01範囲確認状況
(北西から)



(2) 2トレンチSX01掘削状況
(北東から)



(3) 3トレンチ全景(南から)





(1) 4トレンチ全景(南から)



(2) 5トレンチ全景(南西から)



(3) 6トレンチ全景(南から)

(1) 7トレンチ全景(西から)



(2) 8トレンチ全景(東から)



(3) 9トレンチ全景(東から)





(1) 9トレンチ遺物出土状況遠景
(北西から)



(2) 9トレンチ遺物出土状況近景
(北から)



(3) 10トレンチ全景(西から)

(1) 11トレンチ全景(東から)



(2) 12トレンチ全景(西から)



(3) 13トレンチ全景(西から)





(1)14トレンチ全景(南から)



(2)15トレンチ全景(南西から)



(3)15トレンチ全景(南東から)



(1) 2トレンチ1号墳全景(南から)



(2) 2トレンチ1号墳石室全景(南から)



(1) 2 トレンチ 1 号墳墳丘残存状況(北西から)



(2) 2 トレンチ 1 号墳全景(南から)

(1) 2 トレンチ 1 号墳検出状況
(南から)



(2) 2 トレンチ 1 号墳羨道縦断面
(南東から)



(3) 2 トレンチ 2 号墳玄門部横断面
(南から)





(1) 2トレンチ1号墳羨道完掘状況
(南から)



(2) 2トレンチ1号墳羨道閉塞石
検出状況(南東から)



(3) 2トレンチ1号墳羨道側壁石材
残存状況(北東から)

(1) 2 トレンチ 1 号墳石室内横断面
(北から)



(2) 2 トレンチ 1 号墳石室全景
(南から)



(3) 2 トレンチ 1 号墳排水溝
完掘全景(南東から)





(1) 2トレンチ1号墳石材据付痕
完掘全景(北から)



(2) 2トレンチ1号墳墳丘断面
(南西から)



(3) 2トレンチ1号墳周溝断面
(南東から)



(1) 2 トレンチ 1 号墳石材投棄状況
(南西から)



(2) 2 トレンチ 1 号墳遺物出土状況
(北東から)



(3) 2 トレンチ S X31 遺物出土状況
(南から)



(1)16トレンチ2号墳石室全景(南から)



(2)16トレンチ2号墳墳丘断ち割り全景(南から)



(1)16トレンチ2号墳石室内断ち割り全景(南から)



(2)16トレンチ2号墳石材設置状況全景(南西から)



(1) 16トレンチ2号墳検出状況
全景(南から)



(2) 16トレンチ2号墳石室石材
抜取状況全景(南から)



(3) 16トレンチ2号墳石室内中世
再利用面検出状況(南から)

(1) 16トレンチ2号墳石室石材
抜取痕横断面(南西から)



(2) 16トレンチ2号墳石室石材
抜取痕北半横断面(東から)



(3) 16トレンチ2号墳石室石材
抜取痕南半横断面(西から)





(1) 16トレンチ2号墳石室内中世再利用面横断面(北から)



(2) 16トレンチ2号墳石室内中世再利用面縦断面全景(西から)



(3) 16トレンチ2号墳石室内中世再利用面縦断面北半検出状況(南東から)

(1) 16トレンチ2号墳石室内中世再利用面礫敷状況(南から)



(2) 16トレンチ石材採取坑 S K51 石材検出状況(南から)



(3) 16トレンチ2号墳石室内遺物出土状況遠景(南西から)





(1) 16トレンチ2号墳石室内
遺物出土状況近景(西から)



(2) 16トレンチ2号墳石室
完掘状況(南から)



(3) 16トレンチ2号墳石室石材
据付穴完掘状況(南から)

(1) 16トレンチ2号墳石室
北御墳丘断面(北西から)



(2) 16トレンチ2号墳石室
西御墳丘断面(南から)



(3) 16トレンチ2号墳石室
東御墳丘断面(南東から)





(1) 16トレンチ2号墳周溝
S D05断面(東から)



(2) 16トレンチ2号墳周溝
S D05断面(東から)



(3) 16トレンチ2号墳石材
除去状況全景(南から)

(1) 16トレンチ2号墳奥壁側壁
組合せ状況(南から)



(2) 16トレンチ2号墳奥壁右側壁組
合せ状況(南東から)



(3) 16トレンチ2号墳奥壁左側壁組
合せ状況(北東から)





(1) 16トレンチ2号墳右側壁
組合せ状況(西から)



(2) 16トレンチ2号墳奥壁
背面状況(北から)



(3) 16トレンチ2号墳右側壁
組合せ背面状況(東から)



(1)17トレンチ3号墳・4号墳立地状況(南東から)



(2)17トレンチ3号墳石室全景(南から)



(1)17トレンチ4号墳全景(南東から)



(2)17トレンチ4号墳全景(南東から)



(1)17トレンチ4号墳断ち割り状況全景(南東から)



(2)17トレンチ4号墳完掘全景(南東から)



(1) 17トレンチ着手前状況
(南西から)



(2) 17トレンチ3号墳検出状況
(南から)



(3) 17トレンチ3号墳掘削状況
(南から)

(1) 17トレンチ3号墳石室 S X01
石材残存状況(南東から)



(2) 17トレンチ3号墳石室 S X01
石材据付穴検出状況(南から)



(3) 17トレンチ3号墳遺物
出土状況(西から)





(1) 17トレンチ3号墳石室内攪乱
S X01断面(西から)



(2) 17トレンチ4号墳調査状況
(南東から)



(3) 17トレンチ4号墳石室内
セクション設置状況(南東から)

(1)17トレンチ4号墳石室 S X02
石室内南北セクション断面
(東から)



(2)17トレンチ4号墳石室 S X02
石室内完掘状況(南から)



(3)17トレンチ4号墳石室 S X02
石室内完掘状況(北西から)





(1) 17トレンチ4号墳周溝S D03断面B-B' (東から)



(2) 17トレンチ4号墳周溝S D03断面C-C' (東から)



(3) 17トレンチ4号墳周溝S D03断面D-D' (西から)

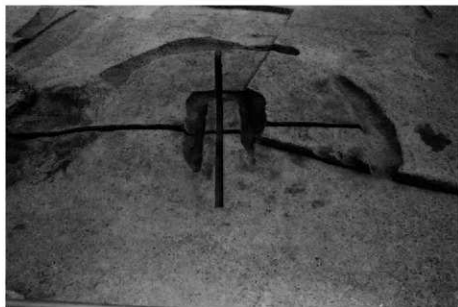
(1) 17トレンチ4号墳遺物
出土状況(北東から)



(2) 17トレンチ4号墳右側壁据付穴
内整地土検出状況(南東から)



(3) 17トレンチ4号墳完掘状況
(南東から)





(1)18トレンチ全景(南西から)



(2)19トレンチ全景(東から)



(3)20トレンチ全景(東から)

(1) 21トレンチ全景(東から)



(2) 22トレンチ全景(東から)



(3) 現地説明会風景







出土遺物 2



39



40



41



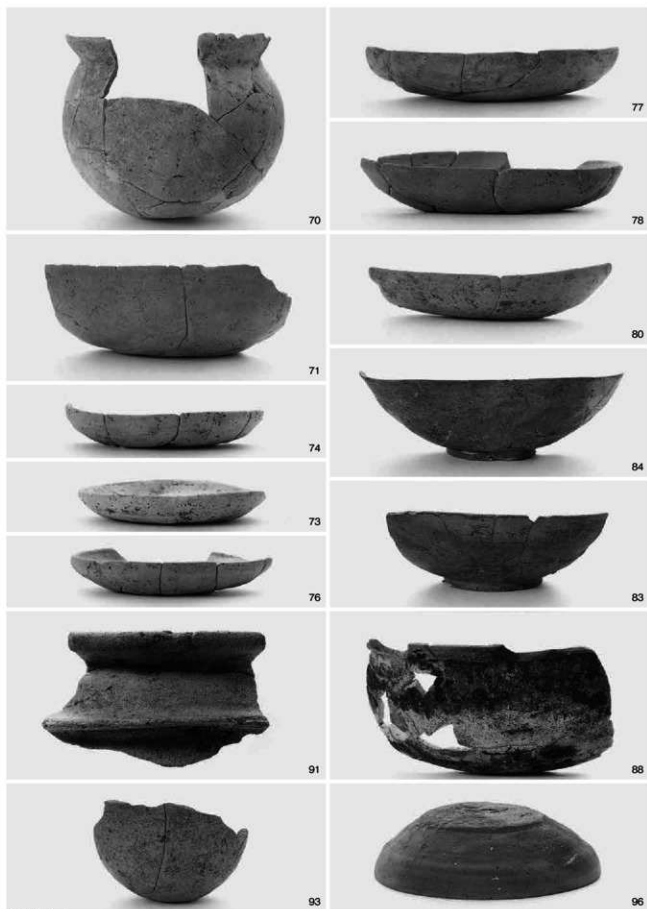
42

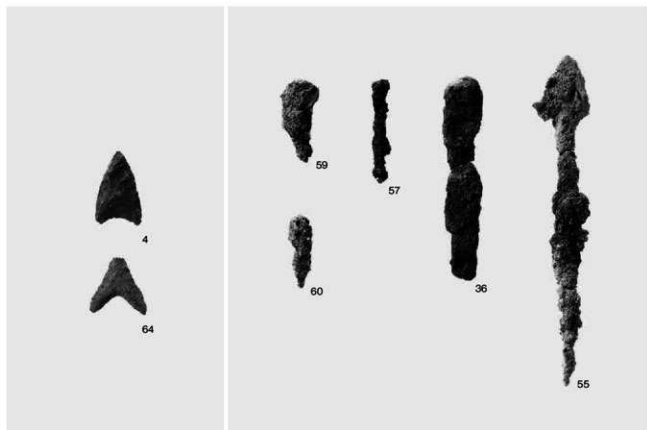


45

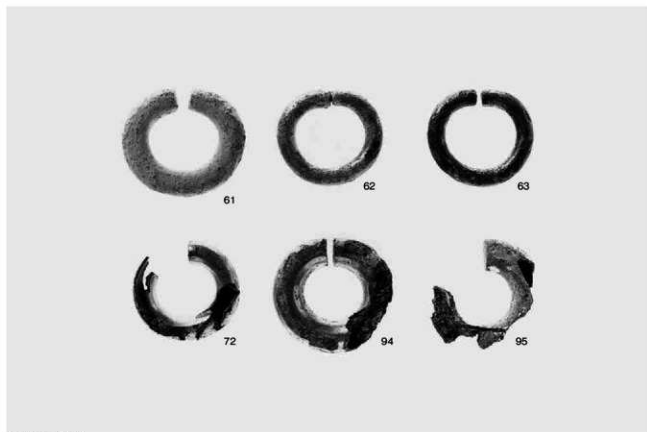


69





(1)出土遺物 5



(2)出土遺物 6

図版第1 金堀遺跡

(1) 調査前遠景(南から)



(2) 1トレンチ全景(南西から)



(3) 1トレンチ土層断面(南から)



図版第2 金堀遺跡



(1) 1 トレンチ深掘状況(東から)



(2) 2 トレンチ全景(西から)



(3) 2 トレンチ土層断面(南西から)

図版第1 天神山古墳群第2次

(1) 1トレンチ全景(北から)



(2) 1トレンチ全景(西から)



(3) 1トレンチ全景(北西から)



図版第2 天神山古墳群第2次



(1) 2トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ全景(西から)



(3) 2トレンチ全景(南から)

(1) 3トレンチ全景(南から)



(2) 3トレンチ全景(南から)



(3) 3トレンチ東壁断面(西から)



図版第4 天神山古墳群第2次



(1) 4トレンチ全景(東から)



(2) 4トレンチ全景(西から)



(3) 4トレンチ北横断面(南から)

(1) 5トレンチ全景(北から)



(2) 5トレンチ全景(南から)



(3) 5トレンチ西壁断面(東から)



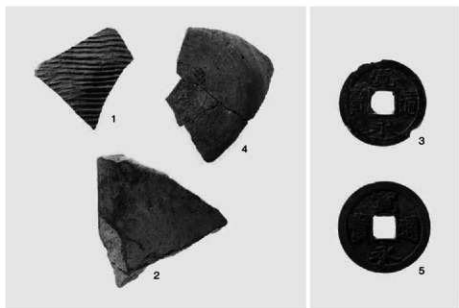
図版第6 天神山古墳群第2次



(1) 6トレンチ全景(北から)



(2) 6トレンチ全景(東から)



(3) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第175冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第175冊
編著者名	中川和哉・石井清司・竹原一彦・岡崎研一・福山博章・竹村亮仁
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番#3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2018年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡 番号				㎡		
つきでいせき 月出遺跡	きょうとふきょうたん ごしあみのちょう はまづめつきで 京都府京丹後市 網野町浜詰月出	26212	2192	35° 39' 17"	134° 57' 35"	20171017 ～ 20171222	500	道路建設
とうこうじあと 東光寺跡	きょうとふまいづる しあぎきょうだこあ ざとうこうじ 京都府舞鶴市宇 京田小字東光寺	26202	226	35° 24' 50"	135° 19' 58"	20160526 ～ 20161102	1,600	道路建設
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとふきょうと しふしみくむらかみ ちょう 京都府京都市伏 見区村上町	26109	1172	34° 55' 57"	135° 45' 27"	20160927 ～ 20161215	400	建物建設
きたおおつかこふん・ おおつかいせき 北大塚古墳・ 大塚遺跡	きょうとふきつづき ぐんいでちやういで おおつかほか 京都府綴喜郡井 手町井手大塚他	26343	8・ 36	34° 48' 27"	135° 48' 36"	20160721 ～ 20161028 20170105 ～ 20170131 20170405 ～ 20170530	1,357 1,848	建物建設
かなほりいせき 金堀遺跡	きょうとふせうらく ぐんせいからちやうや まだかなほり 京都府相楽郡精 華町山田金堀	26366	23	34° 44' 00"	135° 46' 42"	20170420 ～ 20170518	120	道路建設
てんじんやまこふんぐ んだいじ 天神山古墳群 第2次	きょうとふきつがわ しきづてんじんやま 京都府木津川市 木津天神山	26214	138	34° 43' 39"	135° 49' 32"	20160801 ～ 20160909	370	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
月出遺跡	遺物 散布地	不明	なし	なし	
東光寺遺跡	寺院跡 古墳	古墳～中世	横穴式石室・溝	須恵器・土師器・五輪塔	
伏見城跡	近世都市	江戸時代	溝・杭列	近世陶磁器・木製品・木簡	岡山藩 関連木簡の 出土
北大塚古墳	円墳	古墳時代後 期	古墳	須恵器・土師器・鉄器・金銅製品・瓦 器	
大塚遺跡	散布地			須恵器・土師器	
金堀遺跡	散布地				
天神山古墳群 1次	古墳群	奈良～近世	なし		

所収遺跡名	要 約
月出遺跡	古墳状の隆起に対して調査を実施したが、砂丘の起伏であることがわかった。また、平坦地のトレンチでは攪乱が深く及んでいることも判明した。
東光寺遺跡	地元の伝承で東光寺と呼ばれる寺院があったとされているが、人工的な雛壇状築盛やそれに伴う整地、暗渠を検出した。また、造成によって破壊された横穴式石室を主体部とする円墳を検出した。
伏見城跡	豊臣秀吉によって築かれた伏見城であるが、今回の発掘調査では江戸中期の溝などを検出した。絵図などから岡山藩伏見屋敷のあった場所で、溝からは岡山藩に関係する人名が記載された荷札木簡が発見されている。また、隣接して存在した新宮藩の家紋入り漆桶なども発見されている。
北大塚古墳・大塚遺跡	北大塚古墳は従来、その位置や内容についてはほとんど分かっていなかったが、調査の結果、4基の古墳を検出した。これらの古墳の墳丘や石室はほとんど破壊されていたが、部分的に石材が遺存しており、横穴式石室墳であることが判明した。過去の報告では、北大塚古墳の周辺には複数の古墳が存在したとされているが、北大塚古墳は少なくとも4基の古墳で構成される群集墳であることが判明した。大塚遺跡は散布地として知られており、過去の調査においては遺物の出土は見られるものの、遺構は確認されていない。今回の小規模調査の結果、少量の遺物は出土するが、顕著な遺構は確認できなかった。
金堀遺跡	遺物散布地として周知されている遺跡であるが、今回の発掘調査地では山田川本流の洪水堆積層を確認するにとどまった。
天神山古墳群 1次	前方後円墳を含む古墳群として周知されていたが、調査の結果すべて自然地形であることが判明した。ただ、丘陵尾根部から奈良時代の遺物が発見されていることから、丘陵部で人間の活動があったことがわかる。

京都府遺跡調査報告集 第175冊

平成30年3月30日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141